

IS～インフィニットス
トラトス～ Noblesse
Oblige

白姫彼方

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

IS・・・正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間の活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。その操縦者を育成する特殊機関IS学園に強制入学させられた織斑一夏。その一夏にもう一人の女の子の幼馴染がいたら？と言う妄想爆発の二次著作です。

原作の第五巻までは原作にそって進みます。

※以前二次ファンに投稿させて貰っていた物を少し手を加えて修正し移転作業中です。

10 / 3 追記：本編の移転が完了しました。

目次

設定集

オリキャラ設定 | 1

オリジナル I S 設定 | 8

I S 専用補給戦闘母艦レクイエムの設

定 | 40

第一巻

幼馴染との再会と | 43

幼馴染と模擬戦と | 56

幼馴染と後日談と | 69

幼馴染と転校生と暴走と | 81

幼馴染と後日談 2 と | 98

第二巻

幼馴染と転校生と | 107

幼馴染と私闘と | 119

幼馴染とトーナメントと | 129

美緒の怒り | 143

第三巻

美緒の過去そしてオリジナルの夢

160

義妹と買い物と | 165

幼馴染と苦悩の解決と告白と | 176

幼馴染と姉妹と非常線と | 189

幼馴染と海上での戦いと撃墜と

198

夢と第二形態移行と別れと | 206

幼馴染と後日談3と | 213

第四卷（原作キャラ強化の巻）

幼馴染と本宅と強化と | 218

幼馴染と本宅と強化とその2 | 229

美緒とアルテミスの解説と | 240

幼馴染と本宅と試験と | 243

幼馴染と晩餐会と | 255

幼馴染と本宅と強化その3 | 263

幼馴染の実家と楽しい時間と | 268

第五卷

幼馴染と生徒会長と | 279

幼馴染と生徒会長と試合と | 288

幼馴染とクラス会議と夢語りと | 288

294

幼馴染と学園祭と演劇と | 302

幼馴染と服従と第三形態移行 | 318

一夏と新しい名前と宣戦布告 | 333

オリジナルルート開戦編

オリジナル編プロローグ | 337

開戦直前 | 339

開戦 | 349

開戦終了 | 358

オリジナルルート大戦編

大戦プロローグ | 366

砂塵の毒蛇対白式改 | 368

対砂塵の毒蛇後 | 378

	残酷なる災厄、沈黙の西風戦の幕開け	388		終焉との対決、少女の最後	457
	対沈黙の西風、青の進化	395		少女の悲願、次世代移行	464
	対無からの帰還、憎悪の進化	401		終焉の終わり、手紙	472
	対月の女神、災厄の大蛇	408		大戦エピソード	480
	ほんの僅かな休息、そして新たな戦場	414		エンディング	482
	それから……				
421	ロンドンでの戦い、月下の再会				
	月下で開放される御魂と身体	430			
	少女の悲しみ、新たなる戦い	436			
	因縁の終わり、亡霊の最後	444			
	無からの帰還の終わり、黒幕	451			

設定集

オリキャラ設定

本名：せんじょういんみお千条院美緒

身長：156.4 cm

体重：不明

3サイズ：秘密☆

髪型：ハイロングストレート

髪の色：白銀

瞳の色：左目は深スカレット紅、右目は蒼ブルーの虹彩異色症ドアイから

左目は金色、右目は銀色に変化

趣味：料理、ウインドウショッピング、散歩、月見酒

特技：家事全般、並行思考マルチタスクを使用した事務

搭乗IS：IS偽名：パンツアーアイゼン、IS本名：カインホクキエツア

詳細データ：千条院家の長女として産まれる。

しかし3年前に事故に合い瀕死の重症を負ってしまふ

その際に記憶、人格をデータ化したコアを

『生命戦闘体』の右胸部乳房下に埋め込まれる。

そのコアは『生命戦闘体』本来の人格を上書きする作用を催す。その苦しみから美緒は中途半端に本来の美緒と融合してしまう。暴走時に一夏が人格と記憶のデータが入ったコアを破壊した為、元の人格に戻る。

『生命戦闘体』について：『遺伝子改造素体』に自己治癒用、身体能力強化用

独立生体型ハイパーセンサー等のナノマシンを

胎児の状態から搭載された生体兵器の事。

『遺伝子改造素体』について：元となる卵子、精子の遺伝情報を書き換え

身体能力を極限まであげ、並行思考を

標準で使える様にした戦闘用素体

本名：千条院美紗緒

身長：153.2cm

体重：不明

3サイズ：秘密☆

髪型：腰まで伸ばし、少し低い位置に縛ったポニーテール

髪の色：白金

瞳の色：左目は蒼^{ブルー}、右目は深紅^{スカーレット}

趣味：料理

特技：索敵

搭乗IS：ツヌグイ

詳細データ：美緒がVTシステムを研究している施設を破壊する際に奪取した

元『遺伝^{アドック}子強化素体^{アンスト}』であり。

現在は『準生命^{ハイ・アマテラス}戦闘体』で美緒の義妹。

性格は天真爛漫といった感じで人を疑うということを知らない

その性格は完成前の段階で鉄の子宮から出た為だと思われる。

本名：天道豪^{てんどうごう}

身長：189・6 cm

体重：85 kg

髪型：角刈り

髪の色：ダークブラウン

瞳の色：灰色

趣味：研究

特技：掃除、開発

詳細データ：千条院家研究班の班長であり、天才。

『カインホクキエツア』、『カインフィードバックヴオンデイン』、『ツヌグイ』、

『アルテミス』、『セレスティアル・ヴァーミリオン』、『ブルー・フォンタナ』、『シュヴァルツエア・シュネー・トライベン』等のISを開発する。

その巨体からは想像できないほどの情報処理をこなす。

性格は日常生活では豪快、仕事の中では繊細、

一度集中すると余程でない限り気付かない。

美緒や美紗緒を娘の様に思っている。

ちなみにだが妻子持ちで、息子一人、娘二人である。

本名(?)：千条院^{せんじょういん}白昼夢^{さくごめ}

身長：154.2 cm

体重：不明

3サイズ：不明

髪型：腰まで伸ばしたサイドテール

髪の色：白銀

瞳の色：不明

趣味：不明

特技：不明

搭乗IS：カインフィードバックヴオンデイン

詳細データ：『亡国機業』フアントム・タスクが千条院家から奪取した

『生命戦闘体』アマテラスのロストナンバー。

呼ぶ。

その戦闘能力は美緒と同等、先にロールアウトされた美緒を『お姉様』と本来であるなら千条院家の次女として生活するのだがその直前に奪取さ

れた為、

所属は『亡国機業』フアントム・タスクである。

『カインホクキエツア』の自爆に巻き込まれるが、後の戦争にも参加してい

る。
本名：言峰樹雄ことみねじゆうお

身長：185.9cm

体重：72kg

髪型：オールバック

髪の色：白髪

瞳の色：緑色

趣味：無し

特技：情報操作、白兵戦

詳細データ：千条院家の執事。

基本的には千条院家当主の補佐的位置にいるが、有事の際には情報を集めたり

当主を護衛することもある。

現在当主である美緒が『ファントム・タスク亡国機業』にいる為、美紗緒の補助に当たる。

本名：フィオナ・Eエーデル・グレイス

身長：159・2cm

体重：不明

3サイズ：不明

髪型：ショートカットボブ

髪の色：金髪

瞳の色：グレー

趣味：ぬいぐるみの収集

特技：オペレート、家事全般

詳細データ：千条院家専属のオペレーター。

変動する状況を的確に読み、指示やアドバイスを随時操縦者に伝達する。

オリジナルIS設定

IS偽名：パンツアーアイゼン

IS本名：カインホクキエツア

世代：第四世代

製作者：不明

搭乗者：千条院美緒

搭載コア数：2

待機状態：両手の黒いガントレット

カラーリング：装甲：黒

武装：黒灰

バイザー：黒

カチューシャ：白銀

形状：頭部以外を装甲で覆う半全身装甲
ハーフ・スキン

頭部：バイザーとカチューシャ型ハイパーセンサー

腕部：二等辺三角形のシールドアーマー、細身のアームガード

両前腕部に盾に似て先端が二股になっている物を装備している

胴部：仙骨と胸の部分に排気口を設置、腹部に発射口1基設置

腰部にはスカートアーマーがある

脚部：ニーレッグアーマーを装備

太腿と脹脛に1基ずつ、左右4基のミサイル発射口を搭載

踵、爪先があり、膝、爪先、踵にスパイクが付いていて、可変が可能

背部：折り畳み式の機械翼（展開して盾としても使用可能）

『アクティブクローク』を1対搭載している

武装：胴部：首元に小型ビームガトリング『フレア』

腹部に荷電粒子砲『スキュラ』

腕部：シオルダーアーマー内に片方6門、計12門のマイクロミサイル

前腕部に大型ビームソード『月光』及び、電撃式蛇腹剣『ヒートロッド』

拳には状況に合わせて物理武器、エネルギー武器の換装が可能、

主要武器は2基搭載した

AM・EN切り替え可能のガトリング砲『オクスタンガトリング』

EN射撃武器のみ反射可能ENシールド『シユピーゲル』

尚、通常ENシールドとしても使用可能

腰部：AM・EN切り替え可能のガンランチャー『ブリッツ・カノーネ』

脚部：太腿と脛脛に設置されている一つ9門、片方18門

計36門のコンテナマイクロミサイルスパイクによる脚撃

背部：機械翼内にAM・EN切り替え可能の射撃ビット『ソルディオス』15基

同じく切り替え可能の斬撃用ビット『ブレード』15基

同じくAM・EN切り替え可能のシールドビット『パンツァー』20基

機械翼上部内に設置されたレールキャノン『ブレイズ』

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力：夢幻乱舞

効果：無数の質量ある自身の偽物を作り出す。

ハイパーセンサー等索敵機器では判別が付かない

三鬼神ユニット

ムラクモユニット：『カインホクキエツア』の5つある内の一つ、攻撃、機動特化ユニット

ト

近距離戦特化型でエネルギーソードの『天叢雲剣』あまのむらぐもつるぎ

剣型と蛇腹剣型のモードがある『八岐大蛇』のみの武装となる。

アマテラスユニット：『カインホクキエツア』の5つある内の一つ、性能はどのユニット

トの

装

中でも最高、唯一『絶対防御』を無効化できるユニットでもあり『生命戦闘体』^{アマテラス}である美緒が本気で使うユニットでもある。

最強にして最凶のユニット、このユニット使用時にのみ使える武

陽電子砲『エーレンベルグ』がある。

ニツト ヤタノカガミニツト：『カインホクキツア』の5つある内の一つ、防御、機動特化ユニット

装甲を大型化及び強化を施し、防御力を底上げした。
武装面では変わりがない。

予備：本 I S には多重目標追尾機構^{マルチロックオン}を搭載しており、一対多の戦闘も可能。

コアが2基搭載されている理由は豊富すぎる武装、射撃管制

出力制御等が一つのコアでは困難と判断して二基搭載している。

尚、ワンオフ・アビリティは二つで発現させている為、一つである。

コアの成長によつてもう一つ、単一仕様能力が発生する可能性有

尚、同型機として『カインフィードバックヴオンデイン』がある。

『カインフィードバックヴオンデイン』との戦闘の際に自爆した為。

本機は完全に破壊された。

IS名：カグツチ

世代：第四世代

形態：第二形態

製作者：千条院家

搭乗者：千条院美紗緒

搭載コア数：1

待機状態：チヨーカー

カラーリング：装甲：蒼

武装：紅と白

ギアレシーバー：蒼

形状：標準型の部分展開装甲

頭部：ギアレシーバー型ハイパーセンサー及び額を覆い隠すヘッドギア

中央には『十三』と書かれている

腕部：丸みを帯びたシヨルダーアーマー、その頂点に発射口が取り付けられている。

細身のアームガード、

両前腕部に盾に似て先端が二股になっている

物を装備している

胸部：胸部全体を覆うアーマー

腹部：横腹のみ装甲が有り、腹直筋と鳩尾には装甲がない

腰部：股間部に申し訳程度の装甲が取り付けられている。

それ以外は装甲や I S スーツはなくなっている。

脚部：剣型のニーレッグアーマー、但し鼠蹊部、太腿の半ばまで素肌を晒している。

背部：剣を束ねた非固定浮遊部位『思兼神』のみ

武装：腕部：前腕部に大型ビームソード『月光式式』及び

電撃式蛇腹剣『大蛇』

肩部：肩の発射口からクリスタル型のエネルギー体

『シユタインズガンナー』を一度に8基まで出せるが、発射した後に、相手に向けた先端から

青白いレーザーを放つ。

但し、『シユタインズガンナー』はレーザーを撃つた後に

美紗緒の判断で自爆させることが出来る

腰部：スカートアーマーを变形展開することで放てる大型 E N ライフル『雷切』

背部：『思兼神』を分解することでビットにする数は8基。

こちらも呼び方は『思兼神』

『思兼神』は射撃、斬撃、盾と状況に合わせて変えることが出来る。

盾の場合はカグツチを守る様に覆う

単一仕様能力：発現していない為、不明

予備：美緒のIS『カインホクキエツア』の予備パーツから組み上げられた美紗緒の専用機

性能面では『カインホクキエツア』と同等かやや低め。

形状としては『カインホクキエツア』の『ムラクモユニット』に酷似している。

尚、『カインホクキエツア』の様に『三鬼神ユニット』を搭載しているわけではない。

ない。

白昼夢との戦いの最中に第二形態移行を果すが。

まだ戦闘経験値が足りていなかった為に一時的に美紗緒に負担が掛かった。

その際の負担とは『憎悪』を増幅させることであった。

その負担は第二形態移行をした時以降から続いている。

IS名：朱セレストイアル・ヴァーミリオンの天セカンド・シフト空

世代：第四世代

製作者：千条院家

搭乗者：シヤルロット・デユノア

搭載コア数：1

待機状態：朱色のロザリオ

カラーリング：装甲：朱

関節：薄い黄色

ギアレシーバー：黄色

形状：腕部、肩部、脚部に装甲が付いており、アンロック・ユニット非固定浮遊部位は肩部近くにある。

頭部：耳から二等辺三角形に伸びている。

腕部：細身アームガード兼多機能腕タクティカル・アームズを装備している。

肩部：菱形のシヨルダーアーマー

アンロック・ユニット非固定浮遊部位は『白式』と同型の大型ウイングスラスター4基

腰部：スカートアーマー、分離してEN射撃ビット『サンライズ』となる。数は

8機

脚部：細身のニーレッグアーマー

武装：腕部：両腕部に『カインホクキエツア』と同じ『月光』を装備

多機能腕を展開変形させることで射撃形態に移行して大型荷電粒子砲『カ

ラミティ』

になる。

腕部内蔵武装として本IS最強の威力を持つ、杭打ち機『インプロージョ

ン』

他武装としてAM・EN切り替え可能とした2連装ガトリング砲『オクス

タンガトリング』

グレネードランチャーと一体化した突撃銃『オアシス』

『オアシス』のEN版『デザート』

単一仕様能力：発現していない為、不明

予備：シャルロットの為だけに製造されたIS

第四世代機の特徴である展開装甲を腕部と非固定浮遊部位アンロック・ユニットに装着している。

性能的には機動を除き、『カインホクキエツア』よりかは少し劣るも

かなりの完成度を誇っている。

IS名：アルテミス

世代：不明

製作者：千条院家

搭乗者：千条院美緒

搭載コア数：2

待機状態：黒のハーフフィンガーグローブ

カラーリング：ギアレシーバー：黒

装甲&武装：黒

ワンピース：青

ソックス：青

ブーツ：ダークブラウン

形状：腕部、背部、腰部にのみ機械的な装甲を展開している。残りは服の形状をした
装甲

頭部：口元まで長いギアレシーバー型ハイパーセンサー

腕部：見た目は細身のアームガード兼多機能武装腕、掌に放射口がある。

背部：小型のスラスタードが性能面では最高性能にして規格仕様外。

通常の数度は『瞬時加速』と同等。

4対の悪魔型機械翼『八叉鴉』^{ヤタガラス}がついている

尚、武装プラットフォームから分離し、ビットとなる。

胴部及び腰部：胸の中央が開いた中華風ワンピースドレス

スカート部分が分離して多機能武装ビットになる。数は16基

脚部：太腿まであるソックスと脛の半ばまであるウエスタンブーツ

武装：腕部：剣戟用の大出力大型ビームブレード『月光零式』
げつこうぜろしき

AM・EN切り替え可能近、中、遠距離射撃武器『グングニル』EN時は荷電粒子砲となる

大型AM・ENシールド『アイギス』EN射撃武器のみ跳ね返し、他は普通に防げる

零距离用にして本ISの最大の攻撃力を誇る短距離陽電子砲『ソドム』

背部：機械翼『八叉鴉』^{ヤタガラス}の先端に発射口があり、そこから

収束、拡散、通常の計3種類の荷電粒子砲を切り替えて放つ、門数は8門尚、『八叉鴉』^{ヤタガラス}の武装プラットフォーム1つに付き。

収束荷電粒子砲ビット『シャッテン』、陽電子砲ビット『ナハト』の2基をマウントしている。

『八叉鴉』^{ヤタガラス}の武装プラットフォームは8つあり。

『シャッテン』8基、『ナハト』8基の計16基をマウントしている。

腰部：多機能武装ビット『ツヌグイ』1基で剣戟、射撃、盾と切り替えることが出来る

脚部：脚撃用大型ビームソード『月光』

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力：武神降臨

可
効果：限界以上の性能を出力する。効果時間は10分と短く、連続使用は不

予備：美緒の専用機『カインホクキエツア』の後継機にして既に第二形態移行を終えて
ている。

良した。
『カインホクキエツア』の稼動データを元に千条院家が基本フレームを組み、改

福音事件時に『亡国機業』^{ファントム・タスク}のμ-12を巻き込み前専用機を自爆した際に
より高性能の I S を造る為、以前、千条院家にあつたお蔵入りとされていた。
本 I S の設計図を美緒が発見し千条院家が製造する。

コアは『カインホクキエツア』に積まれていたコアを使用、初期化はせずにそ
のまま積まれた。

その為か歪なバイパスが生成され、上記の単一仕様能力^{ワンオフ・アビリティ}を生み出した。
性能面では『カインホクキエツア』を遥かに上回る。

最強にして最凶、そして最高と豪が言う

『カインホクキエツア』の『アマテラスユニット』同様

絶対防御を無効化する能力があるが ON/OFF の切り替えが可能。

尚、本 I S には自己修復用ナノマシン、背部の小型スラストターに

超小型核融合炉が搭載されており。

無尽蔵のエネルギーを確保しており高燃費の本 I S の戦闘時間を延ばしている。

その分、装甲の強度は本 I S では最高レベルである。

本 I S の自己修復用ナノマシンは美緒に組み込まれているナノマシンとは違い

自己修復に時間がかかる。

ただし、超小型核融合炉がある背部の装甲のナノマシンは瞬時に装甲を修復させることができる。

I S 名：ブルー・フォンタナ蒼い噴水

世代：第四世代

形態：第二形態

製作者：千条院家

搭乗者：セシリア・オルコット

搭載コア数：1

待機状態：青いイヤーカーフス

カラーリング：ブルー・ティアーズと同じ

形状：『ブルーティアーズ』と同じではあるが、第四世代の技術である展開装甲が使わ

れている

腕部と脚部は形状的には変わらないが腕部は多機能武装腕である。

胸部及び腰部：重厚な装甲が追加され、『ハーフ・スキン半全身装甲』となっている。

背部：無線誘導兵器『ブルー・ティアーズ』の数を6機から12基に増えた為、それに伴い

翼の様な形になっている。

セカンドシフト第二形態移行をした為、非固定浮遊部位はなくなっている。

武装：腕部：『ブルー・ティアーズ』の主力武器である『スターライトmkⅢ』の発展強化ライフル

『スターライトmkⅣ』実弾も装填可能であり、切り替えが可能

小さくなっており
第二形態移行（セカンド・シフト）を果した際にその大きさは2周りほど

両手持ちから片手持ちに変更されている。縦に接続することで狙撃銃と

なる。

名称は『ツイン・スターライト双星の光』

多機能武装腕を変形させて腕部内に収納してある近接武装『ムーンライ

ト』

近距離用AM・EN射撃武器『エグジスト』を使い分けることが可能
 背部：12基の『ブルー・ティアーズ』、斬撃、射撃、防御に変換可能であり、

変形せずとも切り替え可能

第二形態移行によって発射口が二つに増えた名称は『ティアーズ』

『ティアーズ』を射出後に残ったプラットフォームは蒼いエネルギーフィ
 ンを展開して

BTレーザー弾を放つことが可能

単一仕様能力：不明

予備：『ブルー・ティアーズ』の発展強化機、『ブルー・ティアーズ』の弱点を克服し、

攻撃力、防御力、機動力を底上げした。

偏光制御射撃を標準装備しており、ありとあらゆる角度からの狙撃が可能。

本ISは狙撃をする為に通常のハイパーセンサーをより性能を上げ、立体に見えるようにした。

その為、超遠距離からの狙撃が可能

『サイレント・ゼフィルス』との戦いで第二形態移行を果した。

その為、性能は遥かに上昇している。

IS名：神龍

世代：第四世代

製作者：千条院家

搭乗者：凰鈴音

搭載コア数：1

待機状態：黒のブレスレット

カラーリング：甲龍と同じ

形状：『甲龍』と同じではあるが、第四世代の技術である展開装甲が使われている

非固定浮遊部位のみ形状が違う

非固定浮遊部位：『龍砲』を強化した為、球体状からフィン状になる、数は8基

武装：腕部：投擲することで相手を自動追尾する『干将・莫耶』
かんしょう ぼくや

数は8対の計16本。

大型ビームブレード『月光零式』

小型連弾式収束荷電粒子砲『天砲』

中型ENブレードシールド『龍鱗』
ジャロンリン

状況によって使い分けられる

背部：フィン状に変化した『龍砲』が背部から臀部まで武装プラットフォームに繋がれている。

ムは

分離してビットとしても使用可能、名称は『龍砲』、尚、武装プラットフォー

単一仕様能力：不明

予備：『甲龍』の発展強化機、『甲龍』の火力不足を補う為に新武装を施し、

より攻撃力の高い機体となっている。

AIの補助によってビットを使いつつも腕部武装を使えるようになってい

る。攻撃力、防御力、機動力が『甲龍』よりも高くなっている。

連弾式荷電粒子砲とは通常のEN兵器と違い、圧縮された荷電粒子を弾として

撃ち出す物で、連射が効くまた、通常の荷電粒子砲としても使える。

IS名：Schwarz Schneetreibenシュヴァルツェア・シユネー・トライベン（黒き吹雪）

世代：第四世代

製作者：千条院家

搭乗者：ラウラ・ヴォーデヴィツヒ

搭載コア数：1

待機状態：黒いレッグバンド

カラーリング：『シュヴァルツェア・レーゲン』と同じ

形状：『シユヴァアルツェア・レーゲン』とほぼ同じではあるが、

第四世代の技術である展開装甲が使われている。

右肩部、首部、背部は形状が異なっている。尚、アンロック・ユニット非固定浮遊部位は排除されてい

る。

尚、腕部は多機能武装腕になっている。

首部：追加装甲が装備されている

肩部：大型レールカノンを外し、大型ENシールド『エアトラージェン』が装備されて

いる

武装：腕部：『シユヴァアルツェア・レーゲン』に装備されていたプラズマ手刀は換装さ

れ、

三日月状に展開する

『モントジツヒエル』になった。更に『モントシャイン』も装備されており、

同時に展開することも可能

近距離用射撃武器としてグレネード弾を連射できる『アイス・ツァプ

フエン』

を装備している

背部：『シユヴァアルツェア・レーゲン』のワイヤーブレードを12本収納しており、

何時でも出すことが可能。

2基の折り畳み式大型リニアキャノン『ドンナー・シユラーク』を装備

している。
ワシオフ・アベリテイ
 単一仕様能力：不明

予備：『シユヴァルツェア・レーゲン』の発展強化機、

課題でもあった『アクティブ・イナージェル・キャンセラ』
 A I C

の使用中に止まらなければならぬと言うデメリットをA Iに搭載し、

自動で止めることよって解消した。

尚、事前に友軍機として他のI Sを登録することよって友軍に対する発動を

回避している。

攻撃力、防御力、機動力は『シユヴァルツェア・レーゲン』よりも高くなつて

いる。

I S名：びやくしやくしやくしため白式改

搭乗者：織斑一夏

世代：第四世代

形態：第三形態

搭載コア数：2

待機状態：帯と縁が白く、覆う部分が鮮血の様に紅い。その右斜め上と左斜め下に黒い線が走っている。

縁の形は円形

発現コア人格名：ユキアネサ

カラーリング：白式と同じ、背部の翼は白銀

形状：全体：全装甲の強度と腕部、背部が変わったこと以外変化無し

腕部：右腕部が『雪羅』に換装され、より出力が上がっている。

背部：大型ウイングスラスターが消え、背部に1対の機械的な天使の翼になった。

その翼は分裂し、ビットとなる。

武装：腕部：両腕が『雪羅』になったこと以外変更無し↓『雪羅せつらにしき式』となり、

クローモードを廃し、ブレードモードが追加された。

背部：大型ウイングスラスターが消えたことにより背部にブースターが装備され

た。

武装：プラットフォームにマウントされたビット『雪月せつげつ』は

斬撃と射撃に切り替えることができる。マウントされている数は20基。

その際の変形は不要、

尚、本機の単一仕様能力『零落白夜』のブレードと射撃を使用することが

可能

『雪月』^{せつげつ}を分離した状態だと武装プラットフォームは荷電粒子砲を放つことが出来る。

その数2門

脚部：通常のエネルギー刃と単一仕様能力『零落白夜』のエネルギー刃に変える

ことが出来る。

ワンオフ・アビリティ
カタストロフエー、グラオザーム
単一仕様能力：『零落白夜』：原作参照

『神羅烈風』^{しんられつふう}：前面に不可視の四角錘状にエネルギーシールドを展開して

強烈無比の突進を行う。

その際の速度は『連続瞬時加速』^{れんぞくしゆんじかそく}を遥かに上回る。

直撃すると大爆発を起こし、追加ダメージを与える。

ヘレスイ・アビリティ
異端仕様：

『残酷なる災厄』：『白式改』、『アルテミス』のコアが

共鳴を起こし、発現させた異端とも言える仕様能力。

相手をエネルギーで出来た鎖で縛り、動けなくさせてから無数の

刀剣を呼び、

全方位からの弾雨や、刀剣で出来た大蛇^{おろち}で切り刻む。

反応の全て。

対象は一夏がハイパーセンサーを使って感知できる範囲の敵性

尚、任意でその数を絞れる。

予備：第三形態移行を果した『白式』を強化した姿、第二形態よりもエネルギーを消費する為、

千条院家により『アルテミス』と同じ超小型核融合炉と自己修復用ナノマシンを搭載している。

超小型核融合炉を搭載する事によって限界以上の機動力を誇り、荷電粒子砲を持続的に発射することが出来る。

自己修復ナノマシンは背部の装甲を同時に修理することが出来る。

それ以外の装甲は『アルテミス』と同等の速度で修理を行う。

第二形態にあつた生体再生も継承している為、その性能は『アルテミス』と同等。

第三形態移行により、コアが分裂した為ワンオフ・アビリティ単一仕様能力が二つになつた。

尚、その影響によるのかは定かではないが、『P I C』が強化され、

『白式改』の超加速にも余裕で耐えられるようになった。

コアの自己の改変により、多重目標追尾機構を開発、

I 対多による戦闘が可能となつた。

『雪片式型』は修理が不可能なほどに破壊された為、初期装備から除外されている。

サミーラとの戦闘でコアの人格が覚醒、自身の体である『白式改』を操作でき、搭乗者との

会話が可能になった。

IS本名：カインフィードバックヴォンデイン・

エレバス
II

世代：第四世代

製作者：不明

搭乗者：千条院白昼夢

搭載コア数：2

待機状態：両手の黒いガントレット

カラーリング：装甲：黒

武装：黒灰

バイザー：黒

カチューシャ：白銀

形状：頭部以外を装甲で覆う半全身装甲

頭部：バイザーとカチューシャ型ハイパーセンサー

腕部：二等辺三角形のシールドアーマー、細身のアームガード、

両前腕部に盾に似て先端が二股になっている物を装備している

胸部：仙骨と胸の部分に排気口を設置、腹部に発射口1基設置、

腰部にはスカートアーマーがある

脚部：ニーレックアーマーを装備、太腿と脛脛に1基ずつ、左右4基のミサイル発射口がある。

踵、爪先があり、膝、爪先、踵にスパイクが付いていて、可変が可能

背部：大型ブースターを搭載しており、以前よりも速い速度を出せるようになった。

折り畳み式の機械翼（展開して盾としても使用可能）『アクティブクロークII』を1対搭載して、その内部にビットを収納している。

武装：胸部：首元に小型ビームガトリング『フレアII』

腹部に荷電粒子砲『スキュラ』

腰部：収束荷電粒子砲『スキュラII』

腕部：シヨルダーアーマー内に片方6門、計12門のマイクロミサイル

前腕部に大型ビームソード『月光』及び、電撃式蛇腹剣『ヒートロッドII』拳には状況に合わせて物理武器、エネルギー武器の換装が可能、主要武器

は2基搭載したAM・EN切り替え

可能のガトリング砲『オクスタンガトリングII』

脚部：太腿と脛脛に設置されている一つ9門、片方18門、計36門のコンテナ

マイクロミサイル、ス パイクによる脚撃

背部：AM・EN切り替え可能で射撃、斬撃、防御切り替え可能のビット『レイ

ダー』を18基搭載。

機械翼上部内に設置されたレールキャノン『ブレイズII』

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力：発現はしているものの、使用していない為不明

予備：奪取された『カインフィードバックヴォンデイン』が『亡国機業』により

改修・発展された機体。

性能面では『アルテミス』、『白式改』と同等。

前途2機と同じく超小型核融合炉を搭載している。但し、ナノマシンは搭載していない。

尚、三鬼神ユニットを現在でも搭載している模様

IS名：終焉

世代：不明

製作者：千条院家及び『亡国機業』
ファントム・タスク

搭乗者：スコール

搭載コア数：2

待機状態：不明

カラーリング：装甲：黒

武装：黒

形状：西洋鎧を混合した全身装甲
フルスキン

頭部：楕円形の形状で目に当たる部分にはラインアイが搭載されている。

腕部：肩まで覆う細身のアームガード、前腕部には3連装式の発射口が取り付けられている。

肩部：大型ガトリング砲が片方の肩に1門、計2門設置されている。

胸部：ブリガンダインに酷似した形状を持つている。首元に小型の4門の発射口があり

胸部には開閉式の発射口を6門搭載している。

腰部：スカートアーマーの他に2本の大剣を挿している。

背部：折り畳み式3連装砲を左右に1門ずつ搭載されている。

脚部：細身のレッグアーマー

武装：腕部：3連装式高熱線砲『フレイム』

え可能

3 連装式連弾型荷電粒子砲『グレイム』連射、収束、拡散、通常に切り替

3 連装式陽電子砲ボジトロン『ロンレイ』に切り替えが可能

肩部：大型ガトリング砲『エレバス』弾丸は大型劣化ウラン弾

胴部：首元には小型ハイレーザー『エクスエム』

胸部にはガンマ線レーザー砲『ジエネシス』

腰部：実体剣とエネルギー刃を兼ねた大剣『月光壺式』

背部：3 連装式ハイレーザー『エクスエムⅡ』

3 連装式荷電粒子砲『グレイムⅡ』収束、拡散、通常に切り替え可能

3 連装式陽電子砲ボジトロン『ロンレイⅡ』

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力：不明

予備：元々は I S 用ではなく広範囲大量殺戮兵器として開発されていた。

それが I S の登場と同時に設計図を『亡国機業』フアントム・タスクによって奪取され

I S 用に改造を施された最悪の兵器。

環境破壊や搭乗者の負担を考慮されずに造られた為、

現存するすべての兵器、I S の性能を遥かに凌駕する。

そして千条院家製の I S や戦闘用メカの始祖機にあたる。

この機体にも超小型核融合炉と自己修復用ナノマシンを搭載しており、ナノマシンに至っては『アルテミス』、『白式改』よりも性能が高く、

限度はあるがある程度の損傷なら数秒で修復が可能。

また、『アルテミス』、『カインフィードバックヴオンデイン・II』エレバス

と同様に『絶対防御』を無効化することができる。

I S 名：白い閃光ホワイト・グリント

世代：不明

製作者：不明

専用搭乗者：織斑一夏

搭載コア数：2

待機状態：帯と縁が白く、覆う部分が鮮血の様に紅い。

その右斜め上と左斜め下に黒い線が走っている。

発現コア人格：ユキアネサ、美緒

カラーリング：装甲：白

関節：白灰

武装：白銀

形状：全体：頭部以外を装甲で覆われたハーフ・スキーン半全身装甲

頭部：頬までやや長めのギアレシーバー型ハイパーセンサー

そして顔面上部を覆い隠すヘッドギアと青いバイザーが装備されている。

胸部：胸部全体を四角錐状の装甲で覆われている。

肩部：二等辺三角形形状の装甲で覆われている。

背部側の装甲はスライドが可能で、推進力として使用可能。

推進力として使う場合、下部の装甲が横にスライドし、

小型の高出力ブースターが7基現れ上部の装甲と横に連結する。

この状態の旋回時には機体各所に設置されているスラストで方向を変

える。

腕部：細いアームガード型の装甲がついており、

大型ブレードシールド兼大型ビームブレード発生装置

3連装砲が内蔵されている。

背部：『白式改』とまったく同じ機械翼が搭載されている。

最高速度を出す時には、折り畳まれる。

2機の高出力ブースターが内蔵されている。

腰部側に追加ブースターがあり、肩部のブースターと連動して動く。

腰部：2門の大型砲が折り畳まれて設置されている。

脚部：レッグガードと高出力スラストター

武装：腕部：大型ビームブレード『月光零式改』げっこうぜろしきかい

3 連装式連弾型荷電粒子砲『グングニル』

通常発射形態と連弾発射形態の切り替えが可能であり

通常発射形態では収束、拡散、通常の3種に切り替えが可能

3 連装式超高熱線砲『グレイズ』

3 連装式陽電子砲ポジトロン『ソドムⅡ』

大型ブレードシールド『アイギス MkⅡ』、『アルテミス』の『アイギス』と

ほぼ同じ、

打撃が可能となった。

尚、『月光零式改』げっこうぜろしきかいは『アイギス MkⅡ』、『グレイズ』と同時に使用が可能

それ以外では同時には使えない。

背部：武装。プラットフォームには荷電粒子砲が搭載されている。

また、マウントされているピットは30基正式名称は『ツヌグイ』

射撃、斬撃、防御に切り替え可能。

尚、射撃時には荷電粒子砲、陽電子砲ポジトロン、通常が選択可能

脚部：脚撃用大型ビームブレード『月光零式』

その他：自身のシールド・エネルギーを高濃度に圧縮、

それを指向性を持たせて爆破することで

相手に大ダメージを与える『アサルト・アーマー』

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力：『零落白夜』：原作参照

『神羅烈風』：『白式改』参照

『武神降臨』：『アルテミス』のと同じ効果だが、連続使用が可能

ヘレスイ・アビリティ
異端仕様：

『残酷なる災厄』：『白式改』参照
カタストロフエー・グラオザーム

予備：『白式改』が次世代移行をした姿。
ヒューチャー・ジエネレーションズ

ある意味では『アルテミス』と『白式改』が融合した姿でもある。

素の最高速度は『アルテミス』がワンオフを使った最高速度であり

『瞬時加速』を使うと、それ以上の速度をたたき出す。
イグニッション・ブースト

火力面でも『終焉』と同等、防御面では『アルテミス』、『白式改』、『終焉』より

も高い。

次世代移行をした為、もう一つのコア人格が目覚め、操縦者へのアシスト能力が

高まった。

『白式改』から超小型核融合炉を受け継いだ為エネルギーが切れることは無い。

また、自己修復用ナノマシンはより高性能な物にグレードアップしている為、

『終焉』のナノマシンよりも早い速度で自己修復可能。

『アルテミス』等と同様に『絶対防衛無効化』を積んでいて、ON/OFFの切り替えが可能

そして『白式改』の最終進化形態でもある。

IS専用補給戦闘母艦レクイエムの設定

艦名：レクイエム

艦籍番号：S J N K | 1 3 X X

分類：IS専用補給戦闘母艦

所属：I C H N | 千条院家

建造：千条院家

全長：3 0 0 0 m

全高：4 0 0 m

全幅：4 0 0 m

艦長：織斑千冬

推進機関：レーザー核融合パルス推進ブースター4基

熱核短距離型高出力ジェットスラスタ4基

武装：艦首：大型荷電粒子砲『グングニール』2門

大型デュアルハイレーザー『ミニッツ』4門

散布型ミサイルポッド『バリエント』4門

レーザー式C I W S 8基

艦側：4連装分裂型ミサイルポッド『バリエントII』4門

レーザー式C I W S 8基

大型レーザーキャノン『グングニールII』4門

艦尾：散布分裂型ミサイルポッド『バリエントIII』8門

レーザー式C I W S 8基

艦底：収納型レーザー式C I W S 8基

艦体：大型エネルギーシールド『アイギス』

カタパルト：船首2基

船尾2基

船底2基

搭載機：『白式改』

『カグツチ』

『セレスティアル・ヴァーミリオン』

『ブルー・フォンタナ』

『神籠』

『シュヴァルツエア・シュネー・トライペン』

『紅椿』

『迅雷壱型』 12機

『迅雷弐型』 12機

予備：美緒が考案、千条院家が開発した新型戦艦。

ISのみを運用することを考えた戦艦であり、格納庫と呼ばれる物は

量産機の『迅雷』型を格納する為だけにある

乗組員にストレスを極力溜めない様に生活区域、娯楽区域、入浴区域を充実させている。

尚、全長が3000mと長いのはこの為である。

本来のISの用途でもある宇宙空間の運用も視野に入れて

建造されている為、『PIC』も搭載されている。

第一巻

幼馴染との再会と

く I S 学園前く

桜の花弁が舞う校舎前に、一人の少女が居た。その少女は足首まである白ホワイトシルバー銀の髪を束ねず。そのままおろし時折吹くそよ風がその髪をゆらゆらと広げる。太陽光が髪に当たり、きらきらと煌く、そして時折横顔から伺える優しそうな目付きに左目に深スカイレット紅と右目に蒼ブルーの虹彩異色症身長は大体150cm代後半といった所で出る所は出て、引つ込む所は引つ込んでいる。

容姿の造形も悪い所かとても良く、綺麗とも言えて可愛いとも言える10人中10人が通り掛れば振り向くと言う良いところ取りな容姿であった。その少女の近くに一人の女性が近付く。

「漸く来たか、遅かったな？」

その言葉とは裏腹に懐かしそうな声色を含ませ、微笑んだのは織斑千冬おりむらちかゆ初代ブリュンヒルデであり、元日本代表だった女性だ。現在ではここ I S 学園の教師をしている。

「遅くなって申し訳御座いませぬ。織斑先生。そして御久し振りです」

「ああ、久し振りだな。大体……4年振りだな千条院」

「これから3年間宜しくお願ひしますね？」

千条院と呼ばれた少女がそう言う。「ああ、問題を起こすなよ？」と千冬が言う。千条院は苦笑しつつも同意する。そして二人が歩き出し、数分すると「――」と書かれた教室の前に着く。

「少しここで待ってて貰うぞ？千条院」

「ええ、判りました」

千冬がそう言う。千条院が同意をして千冬が入り、少し経つと聞き覚えのある。幼馴染の男性の声が聞こえた直後にパァン!!ととても大きい叩く音が聞こえて千条院は苦笑をする。そして少し経つた後に千冬の呼ぶ声が聞こえて千条院は中に入る。そして騒いでいた教室内が静まり返る。

「遅れて申し訳御座いませんでした。千条院美緒せんじょういんみおと言います。宜しくお願ひします」

美緒がそう言う。女子がまた騒ぎ出す。それを千冬が鎮める。その後、一時間が始まる。

（一時間目終了後休み時間）

一時間目が終わり。美緒は早速幼馴染の元へ向かう。そこには別の女子が居て、髪型はポニーテールだ。それを見た美緒はその女子に抱き付いた。

「箒ちゃん♪」

「うわっ！って……美緒か？丁度良い、一夏と一緒に廊下に行くぞ」

箒と呼ばれた少女、篠ノ之箒しののほうきは美緒を背中にくっつけながら廊下に出る。そして唯一

ISを動かせ、IS学園唯一の男である織斑一夏おりむらいちかも後を追う様に廊下に出る。

そして出た途端美緒は箒から離れる。

「一夏と箒ちゃん♪久し振りだね♪」

「あ、ああ……6年振りだな？息災だったか？」

「うん♪勿論だよ♪箒ちゃんも元気そうだね♪一夏も元気そうだし……それに更にかっこ良くなったね♪」

「そ、そうか？それにしてもあまり背が伸びてないな？美緒は4年前と同じ身長だぞ？」
「うー私が気にしてる事言うなんて酷いよー！」

一夏が美緒の気にしてる事を言い、プンスカと擬音が付きそうな怒り方をする。それを箒は苦笑しながら見ていると、一夏が箒の方に振り向く。

「去年、剣道の全国大会で優勝したんだってな。おめでとう」

「……………」

「え？何々？箒ちゃん全国で優勝したの？おめでとう♪」

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「なんででって、新聞で見たし……………」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

「箒ちゃん、それは横暴だよ……………」

箒の物言いに美緒は、呆れを混じりながら言った。

「あー、あと」

「な、何だ!？」

「……………」

「あ、いや……………」

流石に自分の剣幕に気付いた箒はばつの悪そうな顔をする。

「久し振り。六年振りだけど、すぐに判ったぞ」

「え……………」

「ほら、髪型一緒だし」

一夏はそう言っつて自分の頭を指すと箒は急にポニーテールを弄りだす

「よ、よくも覚えているものだな……………」

「いや、忘れないだろ、幼馴染のことくらい」

「……………」

「はあ……相変わらざるの唐変木っぶりだね……一夏」

美緒の呆れの言葉と同時に予鈴が鳴る。一夏、箒、美緒はすぐさま教室に戻るも一夏はスパアン!!と千冬に出席簿アタックを食らうのだった。

「……………であるからして、I Sの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したI S運用をした場合は、刑法に罰せられ……………」

すらすらと教科書を読む山田先生……本名は山田真耶（やまだまや）の講義を聞き流しながら美緒はボーっと一夏をちらちらと見てほんのりと頬が紅くなってるのは恋する乙女と言うところだろう

「（一夏がI Sに乗るなんて驚いたよ……千冬お姉ちゃんがそんな事許すはずなのに……………あの人の陰謀かな?）」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンツ!!と大きな叩く音で美緒は一夏を見ると千冬に叩かれていた。

「（あら……また何かやったんだね……一夏）」

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……………」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

「（これはチャンスだね♪）織斑先生」

「どうした？千条院」

「良ければ私が織斑君に教えますが」

「そうか……千条院なら覚えさせる事ができるだろう……頼むぞ千条院」

「はいっ！」

千冬はそう言っつて溜息を吐く。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができてなくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ」

千冬はそう言っつて一夏の方を見る。

「……貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思ってるな？」

ギクリと一夏の体が揺れる

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めるんだな」

千冬はそう言っつて教室の端に戻る。美緒は思考の海にもぐり、あれこれとプランを立

てている内に二時間目が終了した。

く二時間目の休み時間く

「ちよつと、よろしくて?」

美緒と一夏が話をしていると、地毛の金髪が鮮やかな女子が話し掛けて来る……勿論一夏にだが、その金髪の女子は一夏を品定めをするかの様な、眼差しを向ける。

「訊いてます?お返事は?」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ?」

一夏がそう答えるとその女子はわざとらしい程に声を上げる。

「まあ・なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら?」

それを聞いた美緒と一夏は気付かれない程度に顔を歪める。二人ともこの手合いは苦手だからだ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

一夏の答えは気に入らないものだったらしく、吊り目を細めて、男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!？」

女子……セシリアは一夏の答えを信じられないと言う目で見つめる……ちなみに美緒は少し苛立った様子だ

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って何？」

がたたつ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名と美緒はずっこけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』?」

「あなたつ、本気でおっしゃってますの!？」

物凄い剣幕で一夏に聞く、漫画であれば怒りマークが三つほど出ているであろう。

「おう。知らん」

「……………」

セシリアは怒りが一周したことで冷静になったらしく、こめかみを人差し指で押さえながらぶつぶつと言い出す。

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのか

しら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

その物言いに美緒はカチンとくる。

「たかだか候補生程度で何を偉そうに……」

「え？」

昔の美緒を知る一夏はその言い方に吃驚する。それを言われたセシリアは更に目を細める。

「あら、貴女、何処の誰かしら？」

「貴女程度に名乗る名前はないよ……実戦経験を碌に積んでないひよっこ程度にはね」

「なんですつてえ!!？」

美緒の言葉にセシリアは激怒するもそこで予鈴が鳴る。不機嫌なまま、美緒は席に戻る。

「つ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくつて!？」

セシリアの言葉に一夏は頷いた。

「(美緒の奴どうしたんだ？急に怒り出して)」

一夏は思考をするも、三時間目は真耶ではなく千冬が入ってきたことで思考をやめて聞く体制に入る。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

何か大切な事があるのか真耶はノートを持ってゐる。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出した様に千冬が言う。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわつとクラスが色めき立つ。

「はいっ織斑くんを推薦します!」

「私もそれが良いと思います!」

「では候補者は織斑一夏……他にいないか? 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺!」

一夏はつい立ち上がってしまう。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか? 無投票当選だぞ」

「なら俺は美緒を……千条院美緒を推薦します!」

一夏の言葉に美緒は立ち上がる。

「ちよつと一夏あ! 私を巻き込まないでよ!」

「俺だつて目立ちたくないんだよ!!」

ぎやあぎやあと二人が騒ぐ

「待つてくださいい! 納得がいきませんわ!」

バンツ!と机を叩く音と甲高い声が響き渡る。

「そのような選出は認められません!! 大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しです!
! このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!
!」

怒涛の如くセシリアの言葉が教室中に響き渡るそれに美緒は苛立つ……先程よりも強く。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは当然、それを物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります! 私はこのような島国までIS技術の修練に來たのであつてサーカスをする気は毛頭ございせんわ!」

ふるふる……と美緒の体が震える。それに気付いた一部の生徒は美緒に落ち着く様に言うも意味がなかった。

「いいですか! クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ!」

ゴゴゴ……と擬音が付きそうな怒気と殺気が入り混じる。流星にまずいと千冬が止めに入ろうとする。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛」

「ブツンツン！そんな音が聞こえた瞬間美緒が立ち上がる。」

「五月蠅い！いい加減黙りなさい!!」

セシリアを上回る美緒の怒号が響き渡り、流石にセシリアも口を止める。

「大体聞いていれば一夏や私達の祖国を侮辱して……貴女の祖国はとてつもなく不味い料理の覇者でしょ！それに貴女程度の腕で候補生なんてイギリスも堕ちたものだね！」

「なっ……!?あ、あ、あ、あなた！ 私の祖国を侮辱しますの!?!」

「侮辱する価値も何もない底辺もおこがましい塵の様な国如きが何を言ってるの」

「決闘ですわ!!」

「良いよ？ 貴女程度に私を傷つけることはできない」

「言っておきますが、わざと負けたりしたら私の奴隷にしますわよ」

「寝言は寝てから言いなさい」

「そう？ 何にせよ丁度良い機会ですわ。イギリス代表候補生、この私、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

美緒とセシリアは怒気を発しながら睨み合う

「それで、ハンデはどの程度つけければよろしいのかしら？」

「……いらねえよそんなもん」

そこに一夏が入る。

「むしろ俺らがどれぐらいハンデをつけるんだ？」

一夏の言葉にクラスの生徒達は爆笑するも、美緒の殺気が籠ったにらみで一瞬にして静かになる。

「そんなもの不要ですわ！」

「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、千条院、オルコットはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」
千冬の一言で三人の険悪モードが解除され、各々の席に戻って千冬の講義を聴くのだった。

幼馴染と模擬戦と

〓月曜。第三アリーナ〓

先週の騒動から一週間が経ち、いよいよセシリアとの対決が始まる……………が

「ジャンケンポン!!」

「あいこでしょ!!」

一夏と美緒はじゃんけんで、順番を決めていた。

「よかった!私が勝った!♪」

「ぐあああああ……目が!目があああああ!!」

ただ普通のじゃんけんではなかったと言っておこう。

「それじゃ、一夏が最初ね♪」

「判ったよ……あく、目が痛い……」

「だ、大丈夫か?一夏」

「ああ、なんとかな……」

一夏はそう言いつつ、一夏の専用IS『びやくしき白式』を装着する。

「フォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかった

な」

「はい、わかりました。ちふ……織斑先生」

「宜しい、ならばいけっ！」

千冬の声と共に一夏はカタパルトに乗り、アリーナに躍り出た。

「一夏……」

「あれ？ 箒ちゃん。一夏の事心配なの？」

美緒の言葉に箒は驚き、しもどもどろに言う。

「な、そんな訳無いだろ！ この一週間、美緒と私で鍛え上げたんだからなっ！」

「ふふ♪ 照れ隠しだね？ 箒ちゃん。でも大丈夫、例え勝てなくても一夏は良い所まで攻め立てるから」

美緒のその自信のある言葉に箒は美緒を見つめる。がその美緒はセシリアと一夏の戦闘をじつと見つめる。

それは何か決めあぐねている様な感じがする。

「あーら、セシリアが有利になったね……一夏の悪い癖が出てるし……これは一夏の負けかな」

そんなはずはないだろう！ と箒が言おうとするが、その直前にセシリアが放ったミサイルを一夏が受け、爆煙に姿を消した所を見てしまった。

「一夏！」

「大丈夫だよ……一夏は機体に守られて無事だから」

箒はじつと画面を見る。勿論美緒が言った事も気になる。そして爆煙が晴れるとそこには先程とは違う姿になった『白式』が居た

「一夏……！」

「成る程……」ファーストシフト「次移行で逃れた訳だね」

そして一夏は残る2基のビットを斬り落とし、セシリアを間合いに取らえ、いざ斬ろうとした所でエネルギーが0になり。試合に負けてしまった。

「あらら……残念♪」

美緒の表情は言葉とはまったく違う反応だが、それでも瞳の奥にある殺気は消えていなかった。

「さてと、かなり早いけど。私は先にアリーナの方に行くね」

美緒はそう言つて両腕を前に出す

「おいで……『パンツァーアイゼン』」

スカレットブルー深紅と蒼の光に包まれ。晴れるとそこにはハーフ・スキャン半全身装甲に包まれ。左右4基のミサイルポッド、踵、爪先、膝にあるスパイク、両前腕に盾に似た物を付け、背中に一对の機械翼を装備した美緒が居た。

「じゃ、また後でね」

美緒はそう言つてカタパルトに乗り、アリーナに躍り出た。

「(各部異常なし……か)」

美緒はまだ相手が来ないアリーナの中で軽く準備運動をしているとセシリアがやってくる。

「遅かったね……」

「あら、そうですか？ てつきり私は貴女が逃げたと思つてましたわ」

「そう……言葉は不要だね」

美緒が言い終わると同時に二人は互いに距離を取る。セシリアの手には『スターライト Mk-III』が握られて、美緒の手には2門のガトリング砲が横に連結された『オクスタンガトリング』が両手に握られている。美緒は機械翼を広げ、多数のビット……射撃型の『ソルディオス』、斬撃型の『ブレード』、盾型の『パンツァー』を全て展開して、その機械翼上部にあるレールキャノン『ブレイズ』を展開する。

そして最後にショルダーアーマーと脚部を展開して48門のミサイル射出口を表す

「な、なんですの!?! その馬鹿げた武装の多さは!」

「さあ……圧倒的力を見せてあげる……!!」

セシリアの絶叫を無視した美緒は『オクスタンガトリング』を構え、突撃する。『パン

ツアー』は美緒を守りながら、『ソルディオス』はエネルギーチャージをしながら美緒に従う様に並走し、『ブレード』はセシリアに突撃をする。セシリアは『ブレード』を撃ち落す為に『ブルー・ティアーズ』を射出4基全てを展開して撃ち落すも如何せん数が多かった。撃墜を免れた『ブレード』に『ブルー・ティアーズ』は斬り落とされ、爆散をするも、別の『ブルー・ティアーズ』に撃ち落され残る『ブレード』は4基となった。その残った『ブレード』を美緒は機械翼に戻す。

「やるね……セシリア」

「これくらい……当然ですわー」

セシリアはそう言うと『スターライトMk-III』を美緒に放つ。だがそれは『パンツアー』によって防がれる。

「く……」

「ふふ♪じゃあ……こんどはこっちの番だね!! 『ソルディオス』!!!」

美緒はそう言い、『オクスタンガトリング』をセシリアに向け、実弾を撃ちだす。それと同時にマイクロミサイル12門、コンテナマイクロミサイル36門から全てを射出する勢いで撃ちだし。尚且つ『ソルディオス』をセシリアに向かわせる。コンテナマイクロミサイルから更に小さいマイクロミサイルが射出され、セシリアに向かう、セシリアは逃げつつもマイクロミサイルを撃ち落とし、周りを爆煙だらけにするも『ソルディオス』

『勝者千条院美緒』
ウイナー

美緒の狂った様な啞い声がアリーナに響き渡っていた。

「美緒対セシリア戦前ピット内」

「美緒はどんな戦い方をするんだろうな？ 箒」

「わからん、だけどIS……専用機みたいだからかなりのレベルだとおもうぞ？」

一夏と箒が話していると美緒が武装を展開する。

「うわあ……なんだあれ？ 結構な数だぞ？」

「馬鹿な……ありえん。どうやったらあんな数の武装を積めるんだ」

「わかんねえけど……あの戦い方えぐいぞ」

そして佳境に入り、美緒がセシリアを掴む所に入る。

「ん？ 美緒はどうしてセシリアを掴んだんだ？」

「恐らくあの腹部にある何かを当てるつもりなんだだろうが……!!」

二人は美緒がISの腕でセシリアを殴打するのを見て一瞬硬直するも、直ぐに我に返る

「な、なんであんなことしてるんだ!?! 止めないと!」

一夏はそう言って『白式』を装着し、アリーナに出ようとすることも目の前に千冬の顔が映し出される

『織斑。何をしている?』

「美緒を止めにくんだ!流石に不味い!」

『駄目だ。許可はできん』

「何でだよ!?何で駄目なんだよ!」

『これはあいつらの勝負だからだ。それにもう終わる』

一夏が試合の画面を見ると地面に落ちたセシリアに荷電粒子砲を放った直後が見え、その様子を見て嗤う美緒の姿があつた。

「美緒に……何があつたんだ……?」

一夏の眩きは箒と千冬以外に聞かれることはなかつた。

く一夏達とは違うピット内く

「(ふう………暴走しちゃったな)」

あの試合の後美緒は酷く落ち込んでいた。その理由はあの姿を一夏に見られたからだ。

「(うう………一夏に嫌われたらどうしよう……)」

『おい、千条院』

「ひゃ、ひゃい!」

『そろそろ織斑との試合の時間だ。早くアリーナに出ろ』

「わ、判りました」

千冬の言葉に美緒は答えると『パンツァーアイゼン』を展開装着して、もう一度アリーナに躍り出た。

そして美緒がアリーナにでると既に一夏が居た

「美緒……お前に何があつたんだ？」

「うっ……………」

「何でセシリアにあんな酷いことしたんだ？」

「……………怒ってる……………ね。誰にでも優しいからそうなんだろうけど……………だからこそ私は……………」

「美緒聞いてるか？」

「……………さい」

「ん？」

「五月蠅いって言ったの!!」

美緒は怒鳴ると同時に『月光』を展開する。

「一夏には判らないかもしれないけど。私は大切な人を侮辱されて黙っていられるほど私は大人でもないよ。だから……………だからこそ私は徹底的に叩きのめした。それだけだよ」

「だからって……だからってあんな酷いやり方はないだろう!?他にやり方があったはずだ!!」

「なら………私に勝つてから言うんだね………一夏!!」

美緒はそう言って『月光』を構えて一夏に接近する。一夏は少し戸惑うも『雪片式型』を構えて全速力で接近する。そして『月光』と『雪片式型』がぶつかり合い、火花を散らす。

「おおおお!!」

「甘い………よっ!」

鏢迫り合いの中、空いているもう片方の『月光』で一夏の頭部目掛けて振り下ろすも一夏はそれを避ける。一夏が距離を開けたことで美緒は直ぐに『月光』の刀身を仕舞い、両腕に『オクスタンガトリング』を粒子展開し、そのまま放つ。AM・ENが入り混じった弾幕を一夏は縦横無尽に避け、直撃しそうな物は『雪片式型』で切り払う。

だが美緒も甘くは無く、追撃とばかりにミサイル射出口を全門開き、全てを射出しながらも荷電粒子砲『スキュラ』を撃ち込み、着実に追い込んでいく。だが

カチンカチンと音が聞こえ、美緒は舌打ちをすると『オクスタンガトリング』を破棄して新たに『オクスタンガトリング』を粒子展開し、一夏に向かってフルオートで撃つも悉く避けられる。そうしてうちにミサイルの残弾も底を付き、残る射撃武装は『ス

キュラ、『ブレイズ』と手の中にある『オクスタンガトリング』のみになった。そこで美緒は『オクスタンガトリング』を収納して『月光』と電撃式蛇腹剣の『ヒートロッド』を展開する。

「それっ!」

美緒の軽い声とは裏腹に『ヒートロッド』を伸ばし、一夏を捕まえようとする。だが一夏も捕まらないようにと逃げる。逃げながらも一夏は美緒に接近する。

「うおおお!!」

「くっ!」

一夏の『雪片式型』が振り抜かれ、美緒の胸部に当たり、切り裂かれる。

「やるね!一夏!!」

「へへっ!どんなもんだ!」

美緒の素直な感想に一夏は誇らしげに言う、が一夏の腕を『ヒートロッド』が捕まえる

「げっ!」

「ふふ♪油断大敵……だよ!」

美緒は一夏を引っ張り近づけさせて腹部に脚撃を何十発と浴びせていく、そしてその後に一夏をさらにゆっくりと自分の方に近付ける

「一夏……ごめんね？」

「え？」

そして美緒は一夏を強く地面に叩き付けて意識を奪った。

↳保健室↳

「一夏……ごめんね？」

時間は過ぎ夕方方の保健室に美緒と一夏は二人で居た。箒も居ると言ったのだが、美緒が押し切ったのだ。

夕焼けのせいか、美緒の頬がほんのりと紅い。

「んにや、いいさ。勝負に怪我は付き物だからな」

「体の方は大丈夫？」

「ああ、勿論だ。それじゃ、帰ろうか」

「うん♪」

美緒は一夏の腕に腕を絡ませてぴったりとくっつく、二人の頬がほんのりと紅くなるのは当然だった。

「ねえ、一夏……」

「ん？どうかしたか？」

「私の方を向いて目を瞑ってくれないかな？」

「ん？ああ良いけどよ……何をするんだ？」

「いいから早く！」

「わ、わかった……これで良いか？」

一夏は美緒の言われた通りに向き、目を閉じる。

「まだか？」

「まだだめだよ！」

美緒は一夏の言葉に返事をする。爪先立ちをして……一夏の唇を奪った。

「んん!？」

美緒の柔らかい唇の感触に一夏は驚き、硬直する。数十秒ぐらい経っただろうか。美

緒は一夏の唇から唇を離した。

「えへへ♪キス、しちゃったね♪」

「あ……う……」

「ふふ♪二人だけの内緒だよ？♪」

美緒は悪戯っぽい笑みを浮かべタッタッタと数歩走る。

「それじゃ、一夏。また明日ね♪」

美緒はそう言って、一夏の元から走り去った。今だ硬直している一夏を置いて。

幼馴染と後日談と

↳翌日。教室↳

あの模擬戦から翌日の朝。通常ではありえないことが起きていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

真耶は嬉々として喋っている。それに同調する様にクラスの子も沸き上がる。美

緒は昨日の自分の行動を思い出して少し紅くなっていた。それは一夏も同様だ。だが

一夏は思わず拳手をしてしまう。

「先生。質問です」

「はい、織斑君」

「何で俺がクラス代表なんですか？ 昨日勝ったのは美緒とセシリアですよ」

「それは私とセシリイが辞退したからだよ」

「美緒さんの言うとおりですわ」

「美緒？ セシリイって……」

「私と友達になった記念に付けてくれた愛称だよ？」

「さいですか……」

一夏は美緒の言葉にがくつと肩を落とす。それを見た美緒とセシリアはクスクスと仲良く微笑む

「それに、一夏をクラス代表者にすることで。ちゃんとどれぐらい成長してるか見せる為でもあるんだよ?」

「そ、そうか」

「ふふ♪それにセシリアにもIS訓練のコーチ役を頼んであるからね」

美緒の言葉にガタツと音が聞こえ、一夏、美緒、セシリアが向くと箒が立っていた。

「それはどう言う事だ?!美緒!」

「私と箒ちゃんでは遠距離用ISとの実践訓練や回避訓練ができないでしょ?私も一応遠距離用武装は有るけど。あまりにも強力すぎるから私じゃできないからね」

「わたくしセシリア・オルコットが遠距離の訓練を担当するのですから一夏さんはより強くなるはずですよ!」

「だ、だが!私と美緒だけで事足りるはずだぞ!どうなんだ一夏!」

「俺に振るなよ……でも美緒の言い分も判るからセシリアにお願いしようかな」

「と、当然ですよ!何せわたくしセシリア・オルコットなのですから!」

美緒はニコニコとセシリア、一夏、箒の喧騒を見守っている。それは本当に楽しそうに見守っていたがその瞳の奥には何を写していたのか……、ちらりと見ていた千冬だ

けが知っていた。

「それではこれよりI Sの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、千条院。試しに飛んで見せろ」

遅咲きの桜も既に散り終えた四月も下旬。美緒達は鬼教官こと千冬の授業を真面目に受けていた。

「早くしろ。熟練したI S操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

既に美緒とセシリアは展開済みで、遅れていた一夏千冬にせかさ慌てて展開しようとする。

「来い、白式！」

一夏はそう念じ、右腕のガントレットを掴むと直ぐに展開されて『白式』が装着された。

「よし、装着できたな？では飛べ！」

千冬に言われて、美緒とセシリアの行動は早かった。セシリアは普通の急上昇し、美緒はバレルロールをしながらセシリアよりも早く上昇し、雲に届きそうなくらいの位置で止まった。

「何をちんたらやっている。『パンツァーアイゼン』は兎も角、スペック上の出力は『白

式』の方が『ブルー・ティアーズ』よりも上だぞ」

「そんなこといっても飛ぶイメージが掴めないんだよ」と一夏は小声で呟く

「一夏さん、イメージは所詮イメージ、自分が一番やりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「私もそう思うよ？最初はイメージし辛いと思うけどやっぱり自分のイメージでやっていけないとね」

「そう言われてもなあ。大体空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんが、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「いや、やめておくよ。余計わからなくなりそうだ……」

「そう、残念ですわ。ふふっ」

セシリアが笑うと美緒も釣られて笑う。ちなみに一夏は『白式』が届いてから毎日起動して訓練をしている。その時の筈の教え方が

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、とする感覚だ』

『ずかーん、という具合だ』

と擬音ばかりで役に立たず。美緒の教え方は

『一夏。これからISを起動しての鬼ごっこをやるよ？これはISの機動に慣れる為の訓練だから全力で逃げるようにね？』

と遊び心を入れながらもISに慣れさせる為の訓練をしていた。その訓練を見ていた教師は不謹慎だと言っていたが実際一夏がこれで上達しているのだから何とも言えなかった。

『織斑、オルコット、千条院。急降下と完全停止をやって見せる。織斑、オルコットは目標地表から10センチ。千条院は1センチだ』

「了解です。じゃあ、私から行くね？一夏、セシリー」

美緒はそう言つて残像が残るほどの速度で急降下し始め、10秒にも満たない時間で地表に降りて、千冬に言われたとおり、1センチの空間を空けて降りていた。そしてセシリアも急降下をして地表12センチの空間を空けて停まった。そして一夏は……

ギユンツ!!ズドオオオオン!!一夏は見事に墜落をした……美緒を巻き込んで

「あいたたた……美緒？大丈夫……うおあ!？」

一夏は思わず硬直してしまう。それは巻き込んだ美緒の両胸に手を添えているからだ。

「うう………一夏……？」

一夏は美緒が目覚める前にその場から少し離れる。

「わ、悪い。大丈夫か？」

「うん、何とかね」

美緒はそう言つて立ち上がり、一夏に手を差し伸べる。一夏も美緒の手を握り、立つ。
「全く……これは追加訓練もしないとだね？」

「面目ない……」

「大丈夫ですか、一夏さん。美緒さん？お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「私も大丈夫だよ」

「………ISを装備していて怪我などするわけがないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

バチバチと二人の間で火花が散る。それを見ていた美緒は一夏の手を握ってクレールから出る。

「………おい！美緒！抜け駆けは許さないぞ！」

「そうですわ許しませんわよ！」

「おい馬鹿ども。邪魔だ。端っここでやっている」

千冬は言い争っているセシリアと箒を押しつけて美緒と一夏に近づく。

「織斑、千条院。武装を展開しろ。それくらいは自在に出来る様になっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。でははじめろ」

千冬の言葉に一夏は直ぐに展開しようとするが数秒の間を空けて『雪片式型』を展開し終える。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

一夏にそう言って美緒の方に向く

「次に千条院。やってみろ」

「はい」

返事をし終える直後に両腕を正面に出し、既にアイドリングをしている『オクスタンガトリング』を展開する。

「よろしい。だがそのポーズはなんだ？」

「はい。この方が素早く撃てる様にする為です」

「そうか、わかった」

美緒の言葉に返事をするときシリリアの方に向く

「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

シリリアは肩まで左手を上げて、真横に突き出し、『スターライトMk-III』を展開する。その速さは美緒と同等であった。

「さすがだな、代表候補生。……………ただし、そのポーズをやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるに必要な……………」

「直せ。いいな」

「……………はい」

千冬はそう言い、美緒の方に向く。

「千条院。近接用の武装を展開しろ」

「はい」

千冬に言われた美緒は両手の『オクスタングトリング』を粒子にすると同時に両手に『月光』のエネルギーの刀身を出現させる。

「よろしい。ではオルコット。近接用の武装を展開しろ」

「えっあ、はっ、はいっ」

千冬に言われ、セシリアは『スターライトMk-III』を粒子にして近接用武装を展開しようとするも。中々イメージに結びつかないのか光がくるくと漂うだけだった。

「くっ……………」

「まだか？」

「す、すぐです。……………ああ、もうっ！『インターセプター』！」

武器の名前を半ばヤケクソ気味に叫び、それに合わせて武器が構成される。……………このやり方は初心者用なのでそれを行ったセシリアは屈辱的だったらしい。

「……………何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待つてもらおうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑や千条院との対戦で初心者の織斑に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……………」

セシリアはプライベート・チャネルにごによごにと言っていたが一夏をキツと睨み。個別通信を開く

『あなたのせいですわよ！あ、あなたが私に飛び込んでくるから……………責任をとっていたきますわ！』

セシリアの言葉に一夏は答えていなかった。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

とある意味非情な言葉を一夏に言う。まあ一夏の自業自得だが……………この時、箒とセシリアは既にアリーナから出ている。

「これを一人でやるのはしんどいな……………」

「あ、私も手伝うよ？ 一夏」

「本当か？ 助かる」

「(ふふ♪役得役得♪)」

美緒の下心も無事成功したようだった。

く夜IS学園正面ゲート前く

「ふくん、ここにそうなんだ……………」

小柄な身体の少女が、その身に似つかわしくない大きなボストンバックを肩から提げて立っていた。

金色の留め具で左右それぞれに高い位置に結んでいる髪を四月のまだ暖かな夜風に揺らせる。

少女はくしゃくしゃの紙を上着のポケットから取り出す。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

取り出した紙を見ても判らず。そのまま上着のポケットに仕舞う。

「本校舎一階総合事務受付……って、どこにあんのよ？」

その少女はそう言って歩き出す。彼女は考えて動くより動いてから考えるタイプの様だ。

ぶつぶつと独り言を言いながらアリーナ・ゲートに着く。

「(ここで待ってれば誰か通りかかるでしょ。その人に案内してもらおう)」

そう思って待とうとするが直ぐに数名の生徒が出てくる

「(あ、あの人達に聞けば良いかな)」

そう思って少し近付くと聞き覚えのある男性の声がある。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

ドクン！と少女の胸が高鳴る。

「(あたしってわかるかな。わかるよね。一年ちよつと会わなかっただけだし)」

少女はそう自分に言い聞かせて。近付く

「いち……………」

「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ、『くいって感じ』って」

「そうだよ。箒ちゃん。それじゃ一夏は勿論。誰だってわからないよ……………」

そう話して居た複数の生徒は去っていった。

「(誰?あの女の子達なんで親しそうなの?っていうか何で名前で呼んでるの?)」

胸の高鳴りは一気に冷め。ひどく冷たい感情と苛立ちが雪崩れ込む。だが直ぐに受けがつかかり。手続きを行った。

「I S 学園へようこそ、フイン・リンイン 凰鈴音さん」

事務員の歓迎の言葉を軽く聞き流し、鈴音はその事務員に聞く

「織斑一夏って、何組ですか?」

「ああ、噂の子?一組よ凰さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になつたんですって。やっぱり織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

「二組のクラス代表ってもう決まっていますか?」

「決まってるわよ」

「名前は?」

「え?ええと……聞いてどうするの?」

「お願いしようかと思って。代表、あたしに譲ってって」

にっこりとしたその笑顔には、ばっちり血管マークがついていた。

幼馴染と転校生と暴走と

～一年食堂～

「とういうわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

パン、パン。とクラツッカーが乱射され、わいわいと騒ぎ始める。

「あはは……一夏も大変だね」

「なら、代わってくれよ……美緒」

「それは遠慮するよ♪」

「だよなあ……」

美緒との会話で凹む一夏。それを面白く無さそうに箸は見る。

「人気者だな、一夏」

「……本当にそう思うか？」

「ふん」

「はあ……」

箸のその不機嫌さに美緒は溜息をつく。

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君と千条院美緒さんに、特別インタビューをしに来ました〜！」

そう言つて美緒と一夏の前に独りの女子が現れた。

「あ、私は二年のまゆずみかわる薫薫子。よろしくね。新聞部副部長やつてます。はいこれ名刺」
そう言つて、美緒、一夏、セシリアに名刺を渡す。

「ではではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ〜！」

ボイスレコーダーをずずいっと一夏に向け、無邪気な子供のように目を輝かせる。

「まあ、なんとというか、がんばります」

「えー。もつといいコメントちょうだいよく。俺に触るとヤケドするぜ、とか〜！」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

そう言つて薫子は美緒に向きを変える

「それでは！代表候補生ではないのに専用機を持っている千条院美緒ちゃん！どうして専用機を持っているのですか〜！」

「極秘事項の為、お教えすることは出来ません」

美緒はそう言つて緑茶を啜る。

「そこをなんとか！ほんの少しでも良いから！お願い〜！」

美緒は薫子にそう言われ、少し考える。

「まあ、良いでしょう……私の I S 『パンツァーアイゼン』は世代的には第四世代機。開発者は言えませんが、私の実家とその開発者が手がけた『パンツァーアイゼン』は現行 I S を遥かに凌駕する性能を誇っています。あとこれは……オフレコで頼みます。私の I S 『パンツァーアイゼン』にはコアを二つ搭載しています。」

美緒の暴露に会場が凍った。それはそうだ。何せ今各国が漸く第三世代機の試験機が出来上がりつつあると言うのに美緒の機体はそれの一步先、第四世代機だと言うのだ。

更に驚く事にその I S にはコアを二つ搭載しているのだ。現在コアの数は 467 機、つまり。美緒の機体は確認されていない 468 及び 469 機目と言うことになるのだ。「ちなみに、今の情報を漏洩した場合、貴女方全員に行動制限及び軍法会議並びに懲罰を下されるので絶対に口外しないように」

美緒はそう言って会場を後にした。

～ I S 学園屋上～

雲ひとつ無い満月の夜空が見える屋上にて、美緒は電話を掛けていた。

『はいは～い♪束さんだよ～♪』

「久しぶりだね♪束お姉ちゃん」

『うんうん♪久しぶりだね♪みくちゃん♪どうしたのかな?』

「うん、実はね『パンツァーアイゼン』の事なんだけど」

『ほうほう?何か不具合があったのかな?』

「そうじゃなくて、コアの成長を見てもらう為にね?」

『そっか♪じゃあ、明日の夜に見に行こうか♪』

「本当?」

『もちのロンだよ♪天才束さんに不可能はない!♪』

「それは良かった♪あと、あのISのことなんだけど」

『ああ、あのISだね?基本フレームは出来上がってるから、あとは肉付けと装甲と武装で完成だよ♪』

「うん♪了解♪それじゃ、またね♪」

『またね♪』

美緒はそう言つて電話を切る。

「さつとと♪明日が愉しみだね♪」

美緒はそう言つて自室へと戻つた。

↳翌朝教室↳

「織斑くん、美緒ちゃん。おはよう。ねえ、転校生の噂聞いた?」

美緒と一夏、箒が席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。

「転校生？今の時期に？」

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「別にこのクラスに転入してくる訳でもないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい
いつの間にか一夏の傍に箒がいた。箒も噂には敏感らしい。

「どんなやつなんだろうな」

「とりあえずは今の一夏よりは強いよ」

「だよなあ……………」

「む……………気になるのか？」

「ん？ああ、少しは」

「ふん……………」

一夏の言葉に箒はそっぽを向く

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるという
のに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましよ

う。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さんと美緒さんだけなのですから」

「一夏はもう基本動作をマスターしてるから。これからは『雪片式型』を使った応用実戦訓練をするよ」

セシリアの言葉に美緒は続ける様に言い、一夏はそれに了承する形で話をする。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「うん、そうだね。気楽にやると良いよ」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきますとー！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でする」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ！」

「あははは………」

セシリア、箒、クラスメイトが各々に好き勝手言うので美緒と一夏は乾いた笑いしかでなかった。

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表つて一組と四組だけだから、余裕だよ」

きやいきやいと楽しそうな女子の気概を崩すわけにはいかなかった一夏は「おう」とだけ返事をした。

「その情報、古いよ」

一夏達がその声が見る方向を見ると、少女が腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には「りくんちゃくん!!」

少女の言葉を遮って美緒は抱き付く

「ちよ、ちよつと！美緒！私の言葉を遮らないでよ!!」

「にゅふふ〜♪3年振りだね♪」

「まったく、あんたのそう言う所。変わってないわね……………」

「当然だよ！私だもん！」

「まあ、それは兎も角、今日私はあんたに宣戦布告しに来たつてわけよ。一夏」

「鈴……………？本当に鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン凰鈴音がね」

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなつ……………?!なんてこと言うのよ、アンタは！」

「私もそう思うよ〜？鈴ちゃん」

「ええい！美緒はこうしてやる！」

「いふあい、いふあいひよく、ういんふあん」

美緒の余計な言葉に鈴音は頬を引つ張る。

「おい」

「なによ!？」

パシンツ！と鈴音の頭を叩く音がした。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

鈴音はそう言つて千冬に言われたとおり、入り口から退く。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さつさと戻れ」

「は、はい！」

鈴音はそう言い捨てるのと二組に戻っていた。美緒は鈴音が教室に戻ると同時に自身の席に戻っていた。

（昼1年食堂）

「ごめんね、一夏。今日は私一緒に食べられないんだ」

「ん？ そうなのか？ 珍しいな」

「あはは……ごめんね！」

そう言つて美緒は走つて一夏の元を離れた。

「はあ………はあ………」

何時の間にか美緒は女子トイレの個室についていた。だが美緒の顔色は悪く、真つ青を通り越して白くなつていた。

「くう………あ………うくう………」

美緒は丸くなつて耳を塞ぎ、何かからの声を聞かないようにする。

「来ない………で………私は貴女………じゃ………ない」

「返して………私の体を………返して………！」

「駄目………この体は私のだから………」

「（一夏と話したい………話したい………）」

「消えたくない………消えたくないよお………助けて………一夏あ………」

「（返して………私の体を返して!!!）」

もう一人の美緒と言うべき存在の声が大きくなると同時に美緒の震えが大きくなる

「嫌あ………消えて………消えてよお………」

「(返して!!返して!!この偽物!!!)」
 「嫌……………いやああああああああ!!!」

美緒の悲鳴は学園全体に響き渡る。数分後に聞き覚えのある声とする。

「おい!千条院!何があつた!!返事をしろ!!」

ドンドンと個室のドアが叩かれる。だが美緒にはそんな余裕があるはずも無く、ただ震えているだけだった。

「(返せ……………!!!返せえええ!!!)」

「嫌だ……………いやだああああああ!!!」

バチバチと美緒の体に紫電が走り! 『Return of the primordial System Start』と浮び上がり、辺りを衝撃波が襲う。そこに一夏が女子トイレに到着し、中に入ると衝撃波で飛ばされ、倒れている千冬とISを纏っている美緒が居た。だが通常の美緒のIS『パンツァーアイゼン』とは違い、姿形こそ同じだが。装甲、武装、バイザーはより深い黒に、カチューシャ型のハイパーセンサーが白銀から白金に変わっていた。

「美緒!!何をやってるんだ!」

本来の美緒なら反応するだろう……………だが今の美緒は普通では……………ない

「見ツケタ……………見ツケタヨ……………一夏」

「誰だ……………」

「忘レチャツタノ？4年前引ッ越シタ千条院美緒ダヨ？」

そう言つて美緒は一夏に近付く……………が箒と鈴音に遮られる。

「お前……………本当に美緒なのか？」

「本当ダヨ？本当ニ忘レチャツタノ？箒ちゃん」

「さつきまでの美緒は誰なのよ！」

「アノ子ハ私デハナイ私ダヨ。鈴ちゃん」

電子音交じりの声に一夏、箒、セシリア、鈴音は顔を歪める。

「私ではない私？どういふことなんだ？」

「アノ子チャンネル説明シテナインダ……………偽物ノクセニ」

美緒の言葉に箒が疑問を持ち、聞く。

「なあ、美緒……………私が……………正確にはお前が引ッ越して何があつた？」

「フフフ……………ソウダネ、チャンネル説明シナイトネ……………デモソノ前ニ」

美緒は鈴音、箒、一夏の脇を通り、校舎外に展開されている教師陣のISを見る。

「邪魔ナ奴ハ掃除シナイトネ？」

美緒はそう言つて両手に『オクスタンガトリング』を展開させて、狙う。

「!!やめろおおお!!」

一夏は『白式』を展開装着させて美緒を押しさえる。

「ナニヲスルノカナ？ 一夏？」

「4年前のお前は……………そんなことを言う奴じゃなかったのに……………どうしてなんだよ！」

「フッフ……………ソウダヨネ……………デモ私ハ産マレ変ワツタ……………ウウン私ハ一度死ンデルンダヨ一夏」

「どう言う……………ことなんだ？」

「嘘を言わないで！ 大体美緒がしんでたらここに居る訳ないでしょ！」

一夏の呆然とした声に続く様に鈴音が怒鳴り付ける様に言う。

「ソウダネ……………デモ私はコウシテ生キ返ツテル……………コノ体『生命^ア戦^マ闘^テ体^{ラス}』ニヨツテネ」

そして美緒は一夏が押さえているにも拘らず、『オクスタンガトリング』を教師に向け、放つ、反応に遅れた教師は『オクスタンガトリング』をまともに受け、墜落していった。

「マズハ一匹……………」

「これ以上は……………許さないぞ！ 美緒！」

「許サナイツテドウイウコトカナ？ 一夏？」

「決きまつてる……………美緒を取り戻す！」

一夏の言葉に美緒は嗤う

「アハハハハ………ナニヲイツテルノカナ？美緒ハ私ダヨ？」

「いいや、お前は美緒じゃない、美緒の名前を語っている亡霊だ！」

一夏の言葉に美緒の態度は一変する。

「ソウ………ソクニニ偽物ノホウガ良インダ？ナラ……一夏モアノ子ノ元に送ツテアゲル！」

美緒はそう言つて一夏を振り払い、校舎外に出る。

「くそ！セシリア、鈴！悪いけど手伝つてくれ！」

「当然よ！あの馬鹿美緒を起こさないとね！」

「わたくしも行きますわ！美緒さんにはまだ借りを返してないのですから！」

一夏、鈴音、セシリアはそう言つて各々のISを展開させる。

「いくぞー！」

「了解／ですわ!!」

3人は美緒の元へむかった。

「一夏………」

箒はただ自分の無力に拳を握っていた。

く第三アリーナ上空く

一夏達が辿り着くとそこは既に戦場だった。…………ただ、たった一機のISによつて数十機のISが落とされていくというあまりにも実力差が激しい戦いであった。

「遅カッタネ。準備運動ガテラ、ココノ教師達を落トシテタヨ」

「美緒…………アンタは!!」

「まて!鈴!」

一夏の制止を振り切り、美緒に突撃する。その際に『双天牙月』を展開させ、握る

「フッフ…………相変ワラズノ直情ツブリダネ…………デモココノ戦場デハ…………」

「てやあ!!!」

鈴音は『双天牙月』を振り下ろす。しかし、美緒は『月光』を打ち合わせる

「命取りダヨ!」

「!しまつ!」

美緒の言葉が終わると同時に『スキュラ』が発射される。その直前に鈴音は一夏によつて難を逃れた。

「大丈夫か!鈴!」

「私は平気よ!…だけどあの美緒…………」

二人が話している最中に。美緒は追撃をかける為に『スキュラ』と『ブレイズ』を放とうとした瞬間、横からビームが美緒の左肩と左足に当たり、姿勢が崩れる。

「チー！」

「わたくしを忘れてもらってはこまりますわ！」

セシリアはそう言つて、『ブルー・ティアーズ』を美緒に向かわせる。

「邪魔ダヨ！」

美緒も『ブルー・ティアーズ』を落とす為に、『ソルディオス』を15基展開させる。それを全て、セシリアに向かわせた。

「くっ！」

だがセシリアも前回の敗北を糧にしたのか『ブルー・ティアーズ』を巧みに使い、『ソルディオス』を全基落とした。

「ナツナンデ!?」

「貴女には美緒の様な技術が無いからですわ！」

「黙レエエエ!!!」

普段の美緒ならば掛からない挑発にも今の美緒は掛かる。それが以前の美緒と今の美緒の決定的な差の一つでもあった。

「鈴！」

「一夏！」

「てやあああああ!!!」

「クツ！」

一夏と鈴の左右からの攻撃を美緒は『月光』で受け止める……だがそれは悪手でしかない。

「かかったわね！」

鈴音はそう言うど衝撃砲『龍咆』で美緒に奇襲を浴びせる。

「アアアアアアア!!」

美緒は『龍砲』を浴びつつも後退する。

「普段の美緒だったらあんな行動を取らなかった。何故だか判る？まあ、判る訳ないわよな。お前には実戦経験が無いのだから」

一夏の言葉を聞きながら美緒は『スキュラ』と『ブレイズ』を放つ、弾幕を張る様にマイクロミサイルとコンテナマイクロミサイル、そして『オクスタンガトリング』を展開してより密度の高い弾幕にしていくも。マイクロミサイル、コンテナマイクロミサイルは『龍砲』と『ブルー・ティアーズ』によって撃ち落される。

「そろそろ終わりだあ！」

一夏は『瞬時加速』を起動させ、一気に間合いを詰める。

「来ナイデエエエエ!!」

美緒はそう言って首元にある小型のビームガトリング『フレア』で一夏を少しでも近

付けまいとするも。一夏は軽く左右に避け、速度をそのままに美緒の懐に入る。

「はあああ!!!」

一夏の咆哮と共に『白式』の単一仕様能力ワンオフ・アビリティ

『零落白夜（れいらくびやくや）』が発動し、美緒の胸を薙ぎ払った。その時に胸部アーマーと一
が砕け散った。

「アアアア……」

それと同時に美緒の体の力が抜け、ISが消えて落下する直前に一夏が美緒を抱き止
め。美緒の暴走事件は幕を閉じた。

幼馴染と後日談2と

（夕方医療室）

「うう……………ん……………ここは？」

美緒が目を覚ますとそこは見たことが無い部屋だった。

「漸く起きたか、千条院」

声のした方を向くとそこに千冬がいた。

「具合の調子はどうだ？」

「はい、特に異常はありません。迷惑を掛けて申し訳御座いませんでした。」

「今回のことは私にまかせろ。巧くはぐらかしてやる。さて、本題に入ろうか」

「『生命戦闘体』のことですね？」

「ああ、詳しく話せ」

美緒は一度目を閉じ、決心をした様に目を開ける。

「『生命戦闘体』とは肉体のみでありとあらゆる事態を単機で武力解決出来る様に設計された。最強にして最凶の生体兵器です。その素体となるのが『遺伝子改造素体』です。」

千条院家ではこの技術は完成していました。脳と脊髄さえ無事であれば移植して第

二の人生が歩める程に……そして3年前のある日、千条院美緒……この場合オリジナルとでも言いましようか。オリジナルは交通事故により脳と脊髄以外に多大なダメージを受け、既に手遅れでした。

ですが偶然にもオリジナルとほぼ同じ容姿の『遺伝子改造素体』があり、急遽『生命戦闘体』^{アマテラス}としての最終工程を行い、脳と脊髄を移植、無事技術的には成功し、『生命戦闘体』^{アマテラス}となった千条院美緒が誕生した訳ですが……ここで誤算が起きます。

それは私と言う人格が産まれてしまった事です。オリジナルにとつては屈辱だったのでしよう……蘇れると思ったら自分に似て非なる人格が産まれてしまった。そして誕生後の3年間でオリジナルは狂ってしまった。」

美緒はそこで一旦口を閉じる。

「そうか……それでオリジナルの美緒はどうなった？」

「はい、オリジナルは消滅しました。一夏に亡霊と言われてしまったのですから」
それを聞いた千冬はくすくすと笑う。

「くく……織斑がそう言ったのか……ふふふ……まあ、解った。とりあえず今日は療養しておけよ？そこで盗み聞きしてる馬鹿どもの為にもな」

「ふえ？」

千冬がそう言うのと仕切りの奥から一夏、箒、セシリア、鈴音が出てくる。

「一夏……箒ちゃん、セシリイ、鈴ちゃん……」

「この馬鹿美緒！」

「びっ!?!」

鈴音の怒声と共に美緒の頭頂部に拳骨が落ちた。

「馬鹿な美緒にはこうしてやるわ！」

「い痛ふ痛あい、い痛ふ痛あいひよく鈴うちいんふあんんくく」

鈴音が美緒の頬をある程度引つ張ると美緒がじたばたともがく、それを一通り堪能した鈴音は手を離す。

「さてと美緒? どうして黙ってたわけ? そんな大事な事」

「……………」

「黙ってるだけじゃ解らないわよ?」

「言える訳がないよ……こんな突拍子もないこと……」

美緒はそう言つて俯く

「私達が信用できない? それとも頼り無い?」

「違う! それは絶対違うよ!」

「鈴」

鈴音が何か言おうとしたが一夏に止められる。

「悪いけどちよつと美緒と二人だけにしてくれないか？」

「でも……」

「いいから……な？」

「わかったわよ……美緒。兎に角、今日は休んでなさい。いいわね？」

「うん……」

「まあ、何だ……無事で良かったぞ、美緒」

「本当ですわ、借りを返すまで元気にしてもらってないと困りますわ」

「さて、では私も戻ろうとしようか。ではな」

鈴音、箒、セシリア、千冬はそう言つて救護室から出た。

「それで？一夏は私とどんな話をしたいの？」

「ああ、『パンツァーアイゼン』の胸部装甲を壊した時に別の何かが悪れた感じがしたんだ。あれは何なんだ？」

「一夏は気づいてたんだね……これだよ」

美緒は徐に制服の上を脱ぐ、一夏は美緒のいきなりの行動に驚くも右乳房の下辺りに少し大きな窪みと何かの破片を見る。

「何だ……これ」

「これは『生命戦闘体』になる前のオリジナルの記憶と人格が入っていたコアの破片だ

よ」

「千冬姉に言った事は嘘なのか？」

「脳と脊髄に関してはね……それ以外は本当のことだよ。このコアによって元々の『生命戦闘体』に入っていた人格を上書きして故人を蘇らせる。そういうやり方をしてみたい」

「……………」

「私の場合、運良く記憶と性格だけ引き継げたからね、でも一夏」

「なんだ？」

「私は感謝してるよ？ 暗い暗い闇の中から一夏が私を助け出してくれた事」

「当然だろう？」

「一夏の言葉に美緒の胸は高まる。

「大切な幼馴染なんだからさ」

その言葉に美緒はガクツと肩を落とす。そして次第に美緒の肩がプルプルと震えだす。

「一夏の……………」

「ん？」

「一夏の馬鹿あ!!!!!!」

「バチーンツッ!といつそ爽快感を感じさせる殴打音が一回だけ聞こえた。

「深夜屋上」

一夏を叩いた後、美緒はゆっくりと寝て、深夜の時間帯になった時にここにこつそりと来ていた。

「そろそろかな?」

「みーちゃん♪」

後ろから声が聞こえたと思つたら美緒の胸が揉まれた

「ひゃわっ!」

「にやはは〜♪相変わらずみーちゃんの胸は柔らかくて最高だね♪」

「もう……束お姉ちゃん不意打ちはやめてよ〜」

「あはは〜♪それじゃ、早速コアの状態を見るよ」

「うん」

美緒は東に返事をする『パンツァーアイゼン』を展開する。そして東は何処からかコードを伸ばして『パンツァーアイゼン』に繋げる。それと同時にコアの状態が映し出される。

「ほうほう……面白い事になってるね」

「どんな風になってるの?」

「元々『Keine R・ckkehr Zurr』は二個で一つのコア構造にしたのは覚えてる？」

「うん、大量の武装データ、単一仕様能力ワンオフ・アビリティ、各形態の出力データとかでだよな？」

「そうだね、でも今のコアを見るとどうも一つのコアで事足りてるみたいだね。天才東さんもびつくりだよ」

「え？ そうなの？」

「うん♪ だけどそんなみーちゃんに追加武装を持つてきたよ♪ 後ろをご覧あれ♪」

美緒が後ろを向くと何時の間にかコンテナが一つあった。

「ふふふ♪ 今回の『Keine R・ckkehr Zurr』の追加武装は東さんの自
信作なのだ！♪ ポチつとな♪」

東の声に反応してコンテナが開く、そこには二丁の細長い黒い何かのパーツと発生装置があった

「説明しまーす♪ まずその細長いのは腰部の追加パーツガンランチャーの『ブリッツ・カノーネ』AM・EN切り替え可能の中・遠武装だよ♪ 次にEN系統だけ反射可能のエネルギーシールド『シユピーゲル』これは他のAM射撃武器と近接武器には普通のエネルギーシールドとして使用可能の優れものだよ♪」

「また凄い物を作ったね……東お姉ちゃん」

「てひひ♪じゃあ早速『インストール粒子変換』と標準装備にしようか♪」

東はそう言いながら既に作業を開始していた。その手際は鮮やかで早く、既にほぼ完了と言った状態であった。

「これでよしと♪『インストール粒子変換』も終わったみたいだし早速『クローズ収納』と『オープン展開』やってみようか♪」

美緒は東に頷くと『カインホクキエツア』を粒子に変え、少し経った後にもう一度展開すると『ブリッツ・カノーネ』がしっかりと付いていた。

「それじゃ、あとは『シユピーゲル』だね♪」

美緒は構えて『シユピーゲル』を展開する。

「よしよし♪これで終わりだね♪」

「ありがとう♪東お姉ちゃん♪」

「みーちゃんのためだから良いよ♪ああ、それとみーちゃん」

「うん?どうしたの?東お姉ちゃん」

「もしかしたらもう一つのコアが単一仕様能力を発現するかもね」

「ええ!?!それ本当なの!?!東お姉ちゃん」

「もしかしたらだからまだ解らないけどね♪それじゃ!またね♪」

東はそう言って屋上から飛び降りた。美緒が慌てて下を見ると既に東の姿はなく、呆

然とした美緒を残していったのだった。

第二卷

幼馴染と転校生と

（I S 学園教室）

美緒の暴走事件が終わってから幾日が経つ六月の上旬。一夏達は千冬の話聞いていた。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがI Sを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のI Sスーツが届くまでは学園指定の物を使ってもらう。忘れた者は学校指定の水着で受けてもらう。まあそれすらも忘れた者は下着で構わないだろう」

「いやいや、流石にそれはまずいよ？織斑先生」

美緒の突っ込みを千冬は無視をして連絡事項を伝える。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

少し慌てた様子の真耶は少し子犬チックで可愛らしかった。

「今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

一瞬の静寂が訪れる。美緒はとりあえず一夏に耳栓をして自分は聴覚を一時的に切った（常人では出来ません）

そして美緒が聴覚を切った直後にクラス中がざわつく。

「それでは入ってください。」

「失礼します」

「……………」

二人の転校生の姿を見てクラスのざわめきは止まる……それは当然だ。何せそのうちの一人の転校生が男（・）なのだから

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルルの容姿は人懐っこい様な顔で、濃い金髪は首の後ろで束ねられている。体型は華奢で中性的な容姿をよりきわださせている。

「お、男……………」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入を……………」

「きや……………」

「はい?」

「きやあああああああつ!」

美緒は再度聴覚を切る。今回ばかりは一夏を助けることは出来なかったらしい。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！しかも守ってあげたくなる系の！」

「地球に産まれて良かった〜〜！」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬は面倒くさそうにぼやく

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜〜！」

真耶がそう言うところクラスの女子はみんなもう一人の転校生を見る。だがその佇まいは正に『軍人』だ。

輝くような銀髪……美緒のよりかはまだ銀色ではある。その髪を腰近くまで伸ばしている。そして左目には医療用ではない黒眼帯を付けている。そして開いている方の目は赤色だ。しかしその目の温度はゼロで教室の女子達を見下している。

「……………」

「…………挨拶をしろ。ボーデヴィツヒ」

「はい、教官」

「…………ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、…………ではお前も一般生徒だ。私のこ

とは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

千冬にそう言つてボーデヴィツヒは横を向く

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

「あ、あの以上……………ですか？」

「以上だ」

ラウラはそう言つて不意に別の方向を向くと一夏と目が合う

「！貴様が……………」

ラウラはそう言うのとツカツカと一夏の元に向かい。平手を当てようと振り、当たる直前に美緒がラウラの手を握つて止めた。

「……………何の真似だ？」

「それはこつちの台詞だよ？ 『シュヴァルツェア s c h w a r z ハー H · s c h e n c h a n (黒い子兔ちやん)』」

「何者だ……………貴様は」

美緒の言葉にラウラは殺気を浴びせるも美緒は対して気にしていないようだ。

「ドイツの劣化コピーは学習能力がないみたいだね」

「我が祖国を侮辱すると言うのか！」

「五月蠅いよ『遺伝子強化試験体』、私の家の技術を劣化コピーでしか再現できなかった出来損ない程度で何をしようとしているのかな？」

「貴様！何故そのことを……まさか！貴様は『生命戦闘体』の！」

「そう言う事だよ。『Schwarz H・Schrenckhan（黒い子兔ちゃん）？』

「そうか……漸く会えたな！『Schwarz Drache（黒き竜）！』

ラウラはそう言ううと部分展開をしてプラズマ手刀を繰り出す。千冬も流石に驚き、一夏と一緒に止めに入ろうとする。クラスの女子は目を瞑る。……だが来ると予想されていた惨劇は起こらなかった。

「なっ!？」

「『遺伝子強化試験体』には出来なかった『生命戦闘体』の本当の力だよ」

そう、美緒はあろうことかプラズマ手刀のプラズマを人差し指と中指で挟み込んで受け止めていた。それも肉が焼ける臭いもせずだ。誰もが驚くであろう事態が起こっているからだ。

「それに……この程度で過去に最高傑作って言われてたなんて……層だね」

「貴様ああああ!!」

ラウラは怒り狂い。美緒の手から手を離そうとするも一切動かない

「どうしたの? 『遺伝子強化試験体』? ドイツの最高傑作ではなかったの?」
 「殺す! 殺してやる!」

ラウラは右肩の大型レールカノンを展開しようとする。

「遅すぎるよ」

僅かコンマ秒の世界でも美緒にとつては遅すぎる。展開最中にも拘らず、美緒はラウラの顔を空いている腕で殴打する。その際にあえて美緒は手を離す。

「ぐう!……この!」

「やめないか!! 馬鹿ども!!!」

千冬の怒声で二人の動きは止まる。

「貴様らここは何処だと思つてゐる! 千条院! ボーデヴィツヒ!」

「すいませんでした。織斑先生」

「申し訳御座いませんでした、教官」

「ここでは織斑先生と呼べと言わなかつたか! ボーデヴィツヒ! 貴様らは反省室にきてもらうぞ!」

千冬はそう言つて教室を出る。美緒もその後につき、ラウラも美緒より少し遅れて出た。

く 四時間後、購買部前く

千冬の説教と反省文が終わり。解放された美緒は残り少なくなった筆記用具を買い足しに来たのだった。

「えつと必要なのは……シャーペンの芯と消しゴムと……つてあれ？セシリイ？」

「あら、美緒さん。もう終わりましたの？」

「うん、お説教が2時間、反省文が2時間だったよ」

美緒の言葉にセシリアは若干引く。

「セシリイはどうしてここに？お昼ご飯なら自分で作ってたよね？」

「えつ、ええ飲み物を買いに来ただけですわ」

「そうなんだ？（これは怪しいね………尾行しようかな）」

「それでは美緒さん。また後で」

「うん。またあとでね♪」

セシリアはそう言って購買部から出た。

「（さあ、尾行開始だよ♪）」

く I S 学園屋上く

「（成る程ね……皆でお昼食べてたんだ……私もあの中で食べられたらどれだけ楽しいんだろうね……）」

美緒は入ろうとするも、思い止まる。

「でも……沢山の思い出を作ったら……皆が逝った後が辛くなるね。生き返ったと同じ時に永遠に辛くなるなんて……ね」

美緒は階段を降りつつ自分の体を考えて一人静かに苦笑する。

それは『生命戦闘体』にする際のナノマシンと『遺伝子改造素体』が大いに関係する。人間の寿命はテロメアが関係している。細胞分裂をする毎にテロメアが短くなる。そしてテロメアが無くなると細胞は死に、一般的に言われる寿命の死となる。だが『遺伝子改造素体』はテロメアの長さを極端に伸ばし、長寿にしている。それだけならばまだ寿命が長いだけであるのだが。そこに『生命戦闘体』の自己治癒用ナノマシンが関わって来る。

本来自己治癒用ナノマシンは怪我を治し、病気に掛かり難くする為に埋め込まれた物だ。だが美緒に埋め込まれた自己治癒用ナノマシンはそれだけではなく何故かテロメアの長さを元に戻してしまう。

つまり自己治癒用ナノマシンがある限り、肉体を完全消滅させない限り不老不死なのだ。

「ふふふ……それだったらこの思いも……伝えなくて良いよね」
美緒の目から一筋の涙が流れ出る。

「あれ……？なんで……？止まって……よ……止まってよお……」

美緒はそのままぺたんとして座りこんでしまう。

「ああ……うあああ……」

美緒はそのまま静かに泣き出す。一夏達にこの姿を見せない様に唯静かに泣き続けた。

〓五日後アリーナ〓

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そうだね、『白式』は格闘戦特化型だから通常のISと戦う時は不利になるから射撃武器の特性をちゃんと把握しないとね？」

「そ、そうなのか？ 一応、わかっているつもりだったんだが」

「一夏、つもりじゃ駄目だよ。それだと何時まで経っても強くなれないよ」

一夏は美緒の言葉にがくつと肩を落とす。

「うーん、知識として知っているだけって感じかな。さつき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うっ……、確かに。『瞬間加速』イグニッション・ブーストも読まれてたしな……」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の『瞬間加速』イグニッション・ブーストって直線的だから反応できなくても軌道予

測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か……うーん」

「あ、一夏。何なら私の『瞬間加速』イグニッション・ブーストの軌道データ見る？一応参考にはなると思うけど」

「本当か!?後で見せてくれよ!」

「うん♪じゃあ、後で私の部屋に来てね♪」

「おう!」

「あれ?千条院さんって……専用機持ちだったんだ?」

「まあね、丁度良いからみせてあげる♪」

美緒はそう言つて両手を前に出す。

「おいで……『カインホクキエツア』」

美緒がI S名を言うのと直ぐにI Sが展開装着された。

「凄いなだね……千条院さんのI Sって」

「あはは……ゴツいのは仕方ないんだけどね」

シャルルの率直な感想を聞いた美緒は自分も思っていたことを軽く言い、笑い合う。そこに一人乱入者が現れた。

「見つけたぞ!『Schwarz Drache』シュヴァールツェアラッヘ(黒き竜)!!」

それはI Sを纏ったラウラだった。

「あれは……ドイツの第三世代機『Schwarz Regen』（黒い雨）……!?」

「何の用かな? 『遺伝子強化試験体』?」

「2年前の恨みを晴らしてやる!」

ラウラは言い終わると同時に右肩にある大型実弾砲を美緒に向けて放つ。だが美緒は焦りもせず、素早く『オクスタンガトリング』を左手に展開して大型実弾砲の砲弾を撃ち抜き、爆散させた。

「いきなり実弾砲を撃つとは思わなかったよ……これは認識を改めないといけないのかな? 『遺伝子強化試験体』?」

美緒はそう言い終わると同時にラウラに向けて殺気を放つ。ラウラも美緒に向けて殺気を放った。

少しでも音がすれば爆発するような雰囲気の中。スピーカーから声がする。

『その生徒! 何をやっている! 学年とクラス、出席番号を言え!』

担当の教師が騒ぎを聞きつけてやってきたのだろう。興が削がれたのかラウラは戦闘形態を解除する。

「命拾いしたね? 『遺伝子強化試験体』?」

「それはこちらの台詞だ。『Schwarz Drache』（黒き竜)』」

ラウラはそう言ってアリーナを後にしたのだった。

幼馴染と私闘と

く夕方美緒の部屋く

先程の約束通り、一夏は美緒の部屋に来ていた。

「それじゃ、早速始めようか」

「ああ、よろしく頼む」

美緒は一夏に確認を取ると目の前にモニターを3枚ほど展開する。

「この左のデータが『瞬時加速』イグニッション・ブーストの出力データで右のデータが私のバイタルデータ

……つてこれは不要だね。それで真ん中のが私が『瞬時加速』イグニッション・ブーストを使つてるときの軌道

だよ」

「へえ……凄いな。どうやってこんなにデータを取つてるんだ？」

「私の場合コアが二つ搭載されてるからね。それを利用してデータ収集してるんだ」

「なるほどな……便利なんだな。美緒のISつて」

「あはは……私のISは結構癖が強い子だからね。でも慣れると良い子なんだよ」

「俺のISは大食らいだからなあ……」

「微調整しつつ、出力も調整しないと駄目だからね？一夏」

「ああ、そうだな。助かった。ありがたいな美緒」

「これぐらいならお安い御用だよ♪一夏」

「いや、マジで助かった。お礼に何でもするよ。」

一夏のその言葉に美緒の目がキラッと輝く

「なら一夏、出来たときに言うで良いかな？」

「そんなことで良いのか？」

「うん♪」

「わかった。よろしくな、美緒」

美緒と一夏は二人でデータを見ながら『白式』の出力改良プランを組み立てていった
く第三アリーナ

月曜日の放課後、美緒は先に一人でアリーナに来ていた。本来なら一夏とシャルルと一緒に居るのが今日は二人とも用事があるから先に行つててくれと言われた為である。

「さあ……今日も行こうか『カインホクキエツア』」

美緒はそう言つてISを展開装着する。

「ん……今日も調子が良いみたいだね」

美緒は自身のIS『カインホクキエツア』にそう語りかける……見た目的には独り言

を呟いてるようにしかみえないが。

「それじゃ、慣らしでもしようかな」

美緒は一夏達が来るまで軽く体を動かす事を決めた美緒だったが

「あ」

そんな間抜けな声が聞こえたので美緒は声のした方向を見ると鈴音とセシリアがいた。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

美緒の目には鈴音とセシリアの間にスパークが走った様な気がした

「ちようどいい機会だし、この前の実習を含めてどっちが上かはつきりさせとくつても悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの砲がより強くより優雅であるか、この場ではつきりさせましょうではありませんか」

「なら私が審判してあげるよ♪」

二人の会話を聞いていた美緒はふよふよとゆつくりと鈴音とセシリアに近付く

「あら美緒。丁度良いわね。頼むわよ」

「こちらこそ頼みますわ。美緒さん」

「あはは♪それじゃ、位置について」

美緒が了承して言葉をかけると二人は少し離れる。

「レディ……………ゴー！」

美緒の開始の合図と共に二人がメインウエポンを取り出した直後に砲弾が飛んでき、近くに着弾し、爆炎と轟音が起こる。

「!?!」

「へえ…………」

鈴音とセシリアは驚いて、美緒は忌々しそうに砲弾が飛んできた方向を見るとIS『シユバルツェア・レーゲン』を展開装着しているラウラが居た。

「…………どういうつもり?いきなりぶつ放すなんて良い度胸してるじゃない」

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……………ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

ラウラの挑発的な物言いに鈴音とセシリアは口元を引きつらせるが。美緒は二人に手で静止させる

「それでどういった用件なのかな?『遺伝子強化試験体(アドヴァンスド)』?」

「ふん、下らない種馬を取り合う二人を倒した後貴様を倒す為だ。!『Schwarz

Drache(黒き竜)』!」

「今なんて言ったの?」

ラウラの一言によって尋常ではない殺気が辺りに満ちる。殺気を向けられていない鈴音とセシリアは立っていられずに座り込んでしまう。ラウラでさえも腕が振るえ、戸惑う

「もういいや、決めた。貴様を殺さずに壊してあげる」

美緒はそう言つて I S を解除してニタア……と唇を三日月状に吊り上げる。それを見たラウラは後ずさる。

「なっ! 生身で I S に勝てるわけがないだろう! 『Schwarz Drache(黒き竜)』!」

「普通ならね。まあ……身をもって知りなさい 『遺伝子強化試験体』」

そう言つて美緒の姿が掻き消える。ラウラはハイパーセンサーで美緒の位置を掴もうとした瞬間、横に吹き飛ばされた。

「なっ! 馬鹿な!! ハイパーセンサーが感知するよりも速いだと!」

ラウラは空中なら安全だろうと思ひ空に上がる。だがそれは悪手だった。

「私にとつて空は範囲外ではないんだよ? 『遺伝子強化試験体』」

「なっ!?! どうやってここに!?!」

「それはね」

驚くラウラを余所に美緒は腕を掴む

「貴女が戦う為に存在するのなら……私はね？」

美緒はラウラにアッパーカットを撃ち込む

「ぐっ!？」

「殺す為に産まれてきたんだよ。だから貴女は私に勝てない」

そう言い終えると美緒はラウラの両腕を掴み、思いつき蹴り飛ばす。ラウラは防ぐことが出来ずにアリーナのシールドに叩き付けられる。

それを見ていた美緒の瞳は冷たく、殺気で満ちていた。

「まだ終わったわけじゃないでしょう? 『Schwarz シュヴァルツェア H・schenchan ハ・シュカナン (黒い子兎ちゃん)』?」

ラウラは立ち上がるも足元が少しふら付いている……どうやら脳震盪を起こしているようだ。

「止めを刺してあげる」

そして美緒の姿が消える。その直後にラウラは両腕を交差させる、その後、美緒が現れて殴るも途中で無理やり止められる。

「くっ 『アクティブ・イナードナル・キャンセラ A I C』とはまた厄介な……」

「よ、漸く捕まえたぞ……! 『Schwarz シュヴァルツェア Drache ドラッヘ (黒き竜)』!」

ラウラはそう言うと『ワイヤーブレード』で美緒の両腕を絡めとる。

「それで？私をどうするのか？『遺伝子強化試験体』？」

「こうするためだ！」

美緒の問いにラウラ自身が近付き、美緒の腹部を殴る。

「ぐっ」

「その顔が見たかったぞ！『Schwarz Drache（黒き竜）』！」

ラウラの口元が釣りあがる。それは漸く復讐が出来ると確信したからだ。

「やっぱり生身だと『AC』とは相性が悪いね」

「なんだと？」

「つまり私のISは『ACI』を打ち破れるって事だよ」

「ほう……ならやってみるが良い！『Schwarz Drache（黒き竜）』！」

「後悔しても知らないからね……おいで『カインホクキエツア』」

美緒はISを展開装着させる。

「行くよ！『カインホクキエツア』！」

美緒の掛け声に答える様に『カインホクキエツア』から銀色の光が溢れ美緒を包み込

む

「その光は……単一仕様能力だ?!」

「そうだよ……行くよ! 『夢幻乱舞』」

その言葉と共に美緒の体がぶれ、瞬く間に無数の美緒が現れた。

「なっ?! 馬鹿な!」

『さあどれが本物か解るかな? 『遺伝子強化試験体』?』

美緒達はそう言うと一緒に散り、ラウラに接近し始める。ラウラはプラズマ手刀を展開してそのうちの一人に切りかかる。それに答える様に接近されている美緒は『月光』を展開して受け止める。

「貴様が本物か!!」『Schwarz Drache (黒き竜)』!」

「残念♪私は偽物だよ♪」

そう言うって偽物の美緒はラウラの腕を掴み、別の方向に投げる。

だがラウラは直ぐに止まり、近くに居た美緒に大型実弾砲を撃つ、撃たれた美緒はあえて受け、爆散した。

「何処だ本物は……」

ラウラはそう言うって辺りを見渡すと一人だけ、銀色に輝いている美緒を見つける。

「そこかあ!!」

ラウラは見つけた瞬間に『瞬間加速』を使って輝いている美緒の懐に飛び込む。

「おおおおっ!」

「その意気込みは買うけど……」

美緒はラウラの腕を掴みながら歪んだ笑みを浮かべる。

「私こそが偽物だよ♪」

美緒はそう言ってラウラの背後に回って首を掴み、急降下を始める。

「なっ！ 離せえ！」

「まだだめだよ♪」

美緒がそういう間に地面へとどんどん近付く。

「それっ♪」

軽い声とは裏腹にその速度は速く、地面に直撃する瞬間に美緒はラウラを手放し、地面へと激突させる。美緒自身は急制動をかけて、アクトイブ・イナーシャル・キャンセラ地面にはぶつかりはしなかった。

「これでわかったかな？ 貴女の切り札でもある『A I C』は私にとって無意

味な物で、私に勝てないと言うことがね」

「ぐっ……」

ラウラは苦しそうに声を上げながらも立つ、だがその姿はあまり傷は付いていないものの、満身創痍であった。

「それでどうするの？ まだ私とやるの？」

美緒は何時の間にか『幻想乱舞』を解いていた。

「まだ……だ……まだ私はやれる……！」

ラウラはそう言いつつも美緒に近付く

「その辺にしておけ」

美緒は声が出た方を向くとそこには千冬がいた。

「何の騒ぎだと思えば I S を使つての喧嘩か……馬鹿馬鹿しいとは言わないがやり過ぎだ馬鹿者」

千冬はそう言つて溜息をつく

「これ以上やるのであれば、月末の学年別トーナメントで決着をつけろ。いいな？」

「教官がそう仰るなら」

「私も構いません」

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンツーと千冬が手を強く叩く、その音は銃声のように強く辺りに響いた。

幼馴染とトーナメントと

↳一夏の部屋↳

あの騒ぎから1時間後、美緒達は一夏の部屋に来ていた。その理由は……

「だから一夏！幼馴染である私と組みなさいよ！」

「いいえ！クラスメイトである私と組んでくださいな！」

一夏に詰めよってそう言ってるのは鈴音とセシリアだった。その理由は学年別トーナメントの変更によるものだった、その内容というのがより実践的な模擬戦を行う為にペアに変更すると言う内容だ。

そして一夏と組む為にいつものメンバーが集まっていた。

「お、おい……だから落ち着けて、鈴とセシリアも……」

「一夏がさつきと決めれば落ち着くわよ！」

「そうですね！早く決めてくださいまし！一夏さん！」

そう言っただけで中々収まらない二人に一夏は困り果てる……まあそれほどにまで想われている証拠なのだが……そして美緒が見かねて仲裁に入る。

「まあまあ、二人とも、これを飲んで落ち着いてね？」

美緒はそう言うと二人に紅茶を出す。

「有難う美緒」

「ありがとうございますわ、美緒さん」

二人はそういつて紅茶を飲む。だが直ぐに倒れる。

「お、おい!?大丈夫か?」

一夏が倒れた二人を見るとすやすやと眠っていた。

「美緒!!何を入れたんだ!?!」

「うん?超即効性の睡眠薬だよ。それと一夏」

「なんだ?」

「約束……覚えてるよね?」

「……約束……だと?どんな約束だ」

美緒と一夏の話の最後に箒が入り込む。

「ああ、美緒に『瞬間^{イグニッション・ブースト}加速』のデータを見せてもらった時のお礼にな」

「私が聞いているのは何時の約束ではなくその内容だ」

「ああ、なんだ。そのことか俺に出来ることなら一度だけ何でも聞くつて約束だな」

「なっ!?!あれほど何でも聞くつて約束をするなど言っただろう!」

箒はそう言つて顔を背ける。

「あははは……それで一夏、今回のトーナメントは私と組んでね？」

「解った、美緒なら頼もしいな」

「女の子としてはその言葉複雑だけどね……それじゃ、私は鈴ちゃんとセシリイを部屋に送り届けてから部屋に戻るね」

美緒はそう言つて鈴音とセシリアを片手で抱える。

「おう、また明日な」

「うん♪お休み」

美緒はそう言つて部屋を出た。

くアリーナピット内く

美緒と一夏のペアが決まって数週間後、あれから何事もなく、一夏の訓練が進み、最初の頃より格段に強くなっていた。

「いよいよ始まるね。一夏」

「ああ、しかも一年Aブロックの最初だとは思わなかったな」

「私は手っ取り早くて良いと思うよ？」

「それは俺も同感だな」

美緒と一夏が話している間に対戦相手が決まる。

「あ、対戦相手が決まったようだよ」

「お、本当だ………え？」

「へえ………とことんついてるね。一夏」

次の対戦相手はラウラと箒であった。

「アリーナ」

「一戦目から当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こつちも同じ気持ちだぜ」

「ふふふ、そうだよ………それじゃ、今回は私のIS『カインホクキエツア』のもうひとつの姿を見せてあげる」

美緒はそう言つて右腕を前に突き出す。

「第666虚数バイパス展開接続開始………イリーガル機関稼動開始確認！『ムラクモユニット』………起動！」

美緒のIS『カインホクキエツア』が呼応する様に蒼色の粒子を出していく

「コード入力 スピリット・オブ・ライン S O L！起きなさい！『ムラクモ』！」

美緒が言い終わる直前に『カインホクキエツア』の形が変わる。半身装甲でハーフスキンあつた姿が折りたたまれ、一夏達同様部分展開される。

両腕部には手甲が装着され、両手に2mはあるエネルギー型大剣『天叢雲剣』あまのむらぐものかみを持ち、脚部は膝までを覆う剣型のアーマー、背後に非固定浮遊部位である八つ剣型のピツ

ト『八岐大蛇』^{やまたのおろち}があり、カチューシャは消え、バイザーの中央上部に漢数字で十三と書かれていた。

「これが『カインホクキエツア』の5つある内の一つ『ムラクモ』……全てを薙ぎ払う姿だよ」

開幕直前から美緒のISの姿形が変わり、会場は静寂に包まれる。

「さあ……始めようか」

美緒の言葉と同時にカウントダウンが始まる。

「美緒、悪いが先に俺がボーデヴィツヒの方に行くぞ」

「わかったよ」

試合開始と同時に一夏は『瞬時加速』^{イグニッション・ブースト}を使い、ラウラに突撃する。

美緒は箒の懐に瞬時に入る。それに気付いた箒は近接ブレードで応戦しようとする。

「箒ちゃん、遅いよ」

美緒はそう言つて『天叢雲剣』^{あまのむらくものつるぎ}を素早く振つて近接ブレードを弾き飛ばす。

「せいやあ!!」

美緒の掛け声と共に箒は『天叢雲剣』^{あまのむらくものつるぎ}に斬られシールドエネルギーがごっそりと

持つていかれる。

——バリアー貫通、ダメージ250。シールドエネルギー残量27。実体ダメー

ジ、レベル中破

箒が使っている訓練機『打鉄』うちがねからダメージ報告が来る。それを見た箒はそのありえないダメージを見て一瞬止まる。

「なんだ!?!この馬鹿げた威力は!!」

「これが攻撃力と機動に特化した『カインホクキエツア』のもうひとつの姿……『ムラクモ』だよ!」

美緒はそう言い放ち、箒の背後に回って『打鉄』うちがねのエネルギーシールドを切り裂き、戦闘不能にした。

「ごめんね、箒ちゃん」

美緒は戦闘不能になった箒にそう一言言ってからラウラと一夏の方に向かった。

美緒が着く頃には一夏がラウラに戦闘不能にされる寸前であった。美緒は間に合えと念じながら『瞬時加速』イグニッション・ブーストを使い、ラウラの横合いに接近する。

「私の勝ちだ!織斑一夏!」

「くそおお!!」

ラウラの勝ちを確信した声と負けると確信しながらも抗おうとする一夏の声が混ざり、決着がつこうとした瞬間、ラウラが横に吹き飛ぶ。

「ふう、間に合ったようだね♪一夏♪」

美緒はそう言いながら一夏に微笑む。

「悪い……助かった」

「いいよ♪それよりも一夏……戦闘はいけそう？」

「ああ……だけどシールドエネルギーがやばいな……」

「そっか……ならあとは私に任せて？」

「いや、俺も戦う！」

「ここは私に任せて？一夏の分もぶつ飛ばすから……ね？」

美緒がそう言う。「そこまで言うなら……」と言った感じで一夏は引き下がる。

「さてと……そろそろ決着をつけようか……『遺伝子強化試験体^{アドヴァンスト}』？」

美緒がそう言う。ラウラは無言で『ワイヤーブレード』を6本美緒に向かって射出する。美緒はラウラの『ワイヤーブレード』に向けて『八岐大蛇』を通常の剣型から蛇腹剣型に変えて射出する。

『ワイヤーブレード』と『八岐大蛇』は互いに絡み合い、動けなくなる。だが『八岐大蛇』は8本であり、残り2本がラウラに向かう。

ラウラはプラズマ手刀を展開して残り2本の『八岐大蛇』を断ち切ろうとするが斬れずに弾くだけに止まった。

「さあ……まだまだ行くよお！」

美緒の軽い掛け声と共に2本の『八岐大蛇』は別々の方向からラウラに近付き、絡めとろうとする。

ラウラはプラズマ手刀で弾き、絡めんとするも、そこは実戦経験差か、徐々にだがラウラの顔に疲労の色が見え始める。

「ふふふ♪流石『遺伝子強化試験体』だね、この程度は持ちこたえられるみたいだね?」

美緒はそう言つて『八岐大蛇』を元の剣型のビットに戻す。

「何のつもりだ……!! 『Schwarz Drache (黒き竜)』!」

「お遊びはここまでだよ『遺伝子強化試験体』……ここからは私は本気で往くよ」

美緒はそう言つて姿が消える。ラウラは直ぐに上空に移動するも、目の前に美緒が現れると直ぐに『A I C』を使う。それで美緒自身の動きは止まるが『八岐大蛇』によつて注意が逸れ、『天叢雲剣』によつて大型実弾砲を斬り落とされる。ラウラ

の意思とは関係なく大型実弾砲は強制破棄されると同時に爆散した。

「まだまだいけるでしょ? 『遺伝子強化試験体』?」

「当然だ!」

「なら……今の貴女が出せる最高の攻撃をしてきなさい……『ラウラ・ボーデヴィツヒ』」
美緒の言葉にラウラは一瞬止まるがその意図を理解したラウラは今までの怒りや恨みから来る笑みではなく、認められたと言う普通の人では解らないような喜びの笑みを

浮かべる。

「往くぞー! 『千条院美緒』!」

「来なさい! 『ラウラ・ボーデヴィツヒ』!」

ラウラの声と共にプラズマ手刀の出力は最高になり、美緒は『天叢雲劍（あまのむらくものつるぎ）』を構え、ラウラと美緒は突撃する。そして、互いに位置が入れ替わり、数秒間二人は止まったままだった。

『カインホクキエツア』—— バリアー貫通、ダメージ31。シールドエネルギー残量480。実体ダメージ、レベル軽微

『シユバルツァ・レーゲン』—— バリアー貫通、ダメージ230。シールドエネルギー残量22。実体ダメージ、レベル大破

二機のISからダメージ報告が終わるとラウラは膝を着く

「認めるよ……貴女の実力を 『ラウラ・ボーデヴィツヒ』」

「漸くか……漸く認めてくれたか 『千条院美緒』」

その時、ラウラは思った。彼女達のような実力が欲しいとそう願った。

『——願うか……? 汝、自らの変革を望むか……? より強い力を欲するか……?』

ああ、欲しいと彼女達と同じ処へ行けるなら……と

Damage Level ……D

Mind Condition ……Uplift

Certification ……Clear

《Valkyrie Trace System》 ……boot

「ああああああつ!!」

突然ラウラから絶叫が発せられ、同時に『シユバルツァ・レーゲン』から紫電が走る。

「これは……『VTシステム』!?ドイツ軍め……!!」

すぐにその原因を察知した美緒はこの細工を施したドイツ軍に対して怒りを覚えた。

『シユバルツァ・レーゲン』の装甲がドロリと溶け、ラウラを飲み込むと球体になる。

本来ならばISがこの様な変形はしない。変形するのは『初期操縦者適応』と

『形態移行』^{フォーム・シフト}だけだ……美緒のは特別製なので当てはまらないが……なので今回のよう

な変形はありえない。

少ししてからその球体は急速に人型の形を取り始める。その姿は誰かに似ていたが

手に持った得物を見て一夏は怒りを露にする。

「『雪片』……!」

一夏は中段に構える……だが直ぐに『シユヴァルツァ・レーゲン』だったものは一夏

の行動を直ぐに察知して横に薙ぐ。

「くっ!」

『雪片式型』が弾かれ、そのまま一夏は縦一線に斬られそうになるが、後方回避によって避けるも一夏の左腕に掠り、そのまま出血してしまふ。

それが『白式』の最後の力だったのか消えてしまった。

「それが……」

一夏は理性を失ったように怒り狂う

「それがどうしたああああ!!!」

一夏は拳を握って突進しようとする。それを箒が止めた。

「馬鹿者！何をしている！死ぬ気か!？」

「離せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

一夏はそう言っただけで押さえている箒を振りほどこうとする。それを美緒が一夏の頬を叩く

「これで目が覚めた？一夏？」

「あ………ああ、すまない……」

「一夏が怒るのは私にも解るよ。あの技は千冬お姉ちゃんのだからね……だから一夏」
「？」

「私がチャンスを一度だけあげる……だからその一度で決めてね？」

「ああ！勿論だ！」

「だがどうやってそのチャンスを作ると言うのだ!? 『白式』のエネルギーが残っていないこの状況で」

「無ければ分けければ良い事だよ箒ちゃん」

美緒はそう言つてウインクをする。

「始めるよ…… 『カインホクキエツア』 コア・バイパスからのエネルギー譲渡を開始、対象は『白式』」

『カインホクキエツア』からケーブルが伸び、ガントレット状態の『白式』に繋がる。

そのケーブルから流れてくる力の奔流に一夏は傷ついた体に力が戻る感じがした

「（これなら……いけるっ！）」

そう一夏が確信した時、美緒はケーブルを抜く

「これで大丈夫、さあ……一夏！往くよ！」

「おう！」

一夏は気合を入れると共に『白式』を『雪片式型』と右腕だけ展開させた。

「死ぬな……絶対死ぬな！」

「当たり前だよ、箒ちゃん。私がついてるからね」

「ああ……俺を信じろ。箒」

一夏は箒にそう言つて背を向ける。

「何時でもいいぞ！美緒！」

「わかったよ……一夏！」

一夏の言葉に答えた美緒は『瞬間加速イクニツション・ブースト』を使い、一気に黒いISの元に向かう。
「!?」

予想以上の速度だったのか黒いISは驚くが直ぐに対応するように『雪片』を振り上げる。

「それは悪手だよ、紛い物」

美緒はそう言つて『天叢雲剣あまのむらぐものつるぎ』で『雪片』を砕いた。

「私の出番はここまで……一夏ああ!!!」

「うおおおおお!!!」

一夏の咆哮と共に黒いISは斬られた。その割れ目からラウラが出てきて一夏が抱きとめた。

「ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

一夏の言葉を聞いていたのはラウラと一夏そして美緒だけだった。

く夕方医療室前

美緒が医療室前に来ると丁度、千冬が出て来たところだった。

「なんだ、千条院も来ていたのか」

「はい、織斑先生。ちよつとした私用ですよ」

「まあいいだろう……長居はするなよ？」

「当然ですよ♪」

二人はそう言つてクスリと笑う、そして千冬が去つた後に美緒は医療室に入る。

「ん……？なんだ千条院美緒か……どうしたんだ？」

「あはは……フルネームじゃなくて美緒で良いよ、ラウラ」

「ふむ……お前がそう言うなら別に良いが……それで何の用だ？」

「そんな硬くならなくて良いよ……そうだね……まずは誕生おめでとうとでも言つておくかな？」

美緒がそう言つとラウラはククツと笑う。

「ああ、確かにそうだな……私と言う存在は今日産まれたのだからな」

「そうだね♪これからもよろしくね？ラウラ♪」

「ああ、こちらこそよろしく頼む。美緒」

二人はそう言い、笑い合いながら握手をした。

美緒の怒り

（夜 I S 学園屋上）

ラウラと話し合った後、夕食を食べ終えた美緒は屋上に来ていた。だがそこには先客が来ていた。

「あ、織斑先生」

「どうした千条院、消灯時間はとっくに過ぎてるぞ」

「ええ、解っています。けれど」

「行くのか？」

美緒の言葉を遮るように千冬が言った。

「ええ、あんな姑息な細工をされては私も黙ってはいただけませんよ」

「そうか……本来なら反対すべきなのだろうが……今回だけは多めに見てやる……だがな千条院」

千冬が美緒を見つめる。この屋上だけ気温が下がったと錯覚するぐらい二人は真剣に向き合う

「殺すなよ？」

「それは保証できませんよ織斑先生」

美緒はそう言つて『カインホクキエツア』を展開した瞬間、直ぐに飛び発つた。
 ↳ドイツ軍とある研究所↳

美緒はIS学園からここまで僅か10分で辿り着いた。本来ならばその速度は人体を破壊してもおかしくはないのだが美緒の体『生命戦闘体』の利点を利用した速度であつた。

「往こうか……『カインホクキエツア』」

美緒はそう言つと右手を上にあげる。

「第666虚数バイパス展開接続開始……イリーガル機関稼動開始確認！『アマテラスユニット』……起動！」

『カインホクキエツア』から黒い粒子が溢れ出し、美緒の体を包み込む。

「コード入力D O L！起きなさい！『アマテラス』！」

美緒が言い終わると同時にISの姿形が変わる。

本体の形はそのままなのだが、背部にある『アクティブ・クローク』が分解され、鋭利な剣の翼になり、その後ろに日輪を連想させる非固定浮遊部位が形成される。

「さあ……この土地を無に還そうか」

美緒の瞳には以前出ていた『Return of the primordial

System Start」と言う文字が浮かび上がっていた。

「往くよ」

美緒は独り言を呟いて研究所の施設の一つを強襲する。

その施設はISの研究をしていた様だった。だが突如天井を突き破り、侵入してきた美緒に驚き、研究員は何やら叫ぶ、だが今の美緒にはその声は届かない。美緒は両腕に『オクスタングトリング』を呼び出し、研究員達に向ける。研究員は逃げようとするがそれよりも早く美緒は引鉄を引いた。発射された弾丸は研究員達を血潮に変えていく。その時の美緒の表情は変化が無い、何故ならば『生命戦闘体』として産まれてきた美緒には、人を殺す時の罪悪感や嫌悪感、忌避感が一切無くなっているからだ。

その施設内に居た研究員を皆殺しにすると侵入した部屋にISがある事に気づき、戻る。そのISを見るとどうやらコアがあった様で、そのコアを機体から外すと肩にある展開装甲の中に入れ、その施設から飛び上がり出る。

「来なさい……『エーレンベルグ』」

美緒が呼び出した武器は異様で、大きさは5mを超えた大砲とも呼ぶべき物だった。

そして呼び出した直後に発射準備が始まり、数秒で撃てるようになった。

『『エーレンベルグ』……発射！』

美緒の掛け声と共に『エーレンベルグ』から凄まじい轟音と共に光の奔流が産まれる。

荷電粒子砲よりも強く、絶対的な破壊力を持つ陽電子砲だ。ボジトロン 標的にされた施設は文字通り消滅した。そして漸く襲撃に気付いた6機のIS警備隊が駆けつける。

「貴様……ここがドイツの研究所だと解つての襲撃か!？」

「……………」

IS警備隊員が問いかけるも美緒は無視をして『エーレンベルグ』を収納し、『月光』を展開する。

「貴様！聞いているのか！」

「排除……開始」

やはり美緒はIS警備隊の言葉を無視してハイパーセンサーでは感知出来ないほどの速さでISを一機両断した。両断されたISの搭乗者の血飛沫を全身に浴びながら美緒は次の獲物に飛び掛る。しかしそこはやはり唯のIS警備隊ではなかった。一人目の犠牲者が出た時点で警備隊は散開し、波状攻撃を仕掛けるつもりだ。普通のISならば一たまりもないだろう……そう普通のISならば、だが美緒のISと美緒自身は普通では……ない、それを証明するかのように、美緒は散開する直後に既に二人を殺していたその異常な惨状に残った3機のISは震え上がる。

「な……なんだこのISは!？」

「ありえない……ありえない!!!」

「『絶対防御』が働いてないの!？」

そう、本来ならIS操縦者を守るはずの『絶対防御』があるにも拘らず既に3人死者を出しているのがおかしいのだ。だがその『絶対防御』を無効化する機能を『アマテラスユニット』は搭載されている。

最強にして最凶のユニット『アマテラスユニット』これは千条院家が独自開発をし、研究を重ねた結果、殺す為に産まれた『生命戦闘体』^{アマテラス}の美緒専用機体『カインホクキエツア』の本当の姿だ。

束もこのユニットの存在は知っているが、自身の興味のある人以外どうなろうと関係ないので黙認している……もつともこれも興味深い事例なので観察も兼ねているのだろうが……それを知らないIS警備隊員達は美緒とそのIS『カインホクキエツア』に恐怖を抱いている。

だが美緒は排除する為に直ぐに動き出す。直ぐにIS警備隊員も攻撃をするが、美緒の動きが早すぎて警備隊のISでは美緒の動きについてこれない、その結果、警備隊員の攻撃も無意味と化し、また一人殺された。

既に恐怖を抱いていたIS警備隊員の二人は逃走しようとして美緒に背中を向ける。本来であるならば絶対しないであろうその行為をしてしまった二人は、美緒の新しく展開された『オクスタング』によって蜂の巣にされていった。

「排除……完了……コアの回収……開始」

機械的に優先順位を呟いた美緒は殺したIS警備隊のコアを回収しに向かった。

「ドイツ研究所中央施設施設長室」

「何なんだ!!あのISは?」

そう怒鳴り散らしているのはこの研究所の所長である男だ。襲撃があつたと報告を受け、モニターで見えていたのだが一方的に殺していく美緒の姿を見て驚愕を通り越して怒りが沸いて来ると言つた感じであつた。

「このままでは不味い……一刻も早く研究データを回収しなければ……」

所長が動き出そうとした瞬間、モニターがある壁が破壊される。そこに居たのは先程、所長が見ていた『カインホクキエツア』を纏つた美緒だつた。

「時間を遡りIS警備隊との交戦地」

「全機体のコア……回収完了……続いてこの研究所のコアの回収及び……消滅を再開する」

次に美緒が侵入した施設はどうやら『遺伝子強化試験体』を生産する為の施設だつた。

美緒は無表情を貫きつつもまずは研究員に『オクスタングトリング』を向け、先程と同じ様に血潮に変える。その際に鉄の子宮を壊し、中に居た『遺伝子強化試験体』の少女が咳き込みながら這い出て、美緒を見上げる。

「お姉ちゃん……だあれ？」

「……………」

まだ完成されていないからか肉体と精神が釣り合っていない様だった。

「お姉ちゃん……？」

「未完成の『遺伝子強化試験体』の起動を確認……捕獲します」

美緒はまだ完成されていない『遺伝子強化試験体』の少女に電気ショックを与えて絶させた。

「『遺伝子強化試験体』の捕獲完了……この施設を抹消する」

美緒はそう言つて捕獲した少女を日輪の非固定浮遊部位の上に乗せる。

すると日輪の非固定浮遊部位は少女を揺り籠に乗せるかのように包み込んだ。

そして天井を突き破り、上空に出た美緒は『エーレンベルグ』を構え、発射する。

発射された陽電子はそのまま施設を飲み込み、消滅させた。

「対象の消滅を確認……次の目標を殲滅する」

美緒は次の行動を眩き、残った一番大きな施設を目指し、飛翔した。

そして、到着すると同時に美緒は施設の中央部分の天井から侵入する。だがそこには今までの施設にはなかったガードロボが居た。

『侵入者ハッケン、侵入者ハッケン』

ガードロボは美緒を見ると頭部と思われる部分の上部にあるミサイルポッドを発射体勢に移行する。だがそれは発射されるまでも無く、ガードロボ自身が美緒の『月光』に斬り裂かれ、破壊されたからであった。

「障害の排除を確認……続行します」

美緒は近くの壁を破壊し、室内に侵入した。

「最重要排除対象を発見……抹殺します」

美緒は所長らしき男に『オクスタンガトリング』を向ける。

「ま、待て！何か欲しいものはないか!？」

「必要……VTシステム……開発している施設……」

「そっそれを何処で知った!？」

「解答義務……無し……」

美緒はそう言うと、所長に『オクスタンガトリング』を向ける。

「わっ、わかった！話す！話すから殺さないでくれ！」

「早急……解答……」

「VTシステムはこの研究所でしか作ってない！」

「証拠……提示……」

美緒がそう言うと、所長は自分のデスクからUSBメモリーを取り出し、美緒に渡す。

「こ、これがドイツの全研究所で開発されているデータの一覧だ。これで良いだろう!」
「情報提供……感謝……」

美緒はそう言い、『オクスタングトリング』を所長に向ける。所長は美緒の行動に驚き、抗議の声を上げる。

「約束が違うではないか!!」

「排除……」

所長の言葉を無視して美緒は『オクスタングトリング』の引鉄を引いた。

瞬く間に所長は血潮に変わっていった。

「最優先排除対象の抹殺を完了……残りの排除対象を抹殺する」

美緒は生体反応を探り、まだ残っている研究員を抹殺する為に動き出す。

くドイツ研究所跡地上空く

あのあと、残っていた研究員を皆殺しにしたあと、『エーレンベルク』で消滅させ、一息ついていた。

今は『Return of the primordial System』を解除しており、いつもの美緒に戻っていた。

「ふう……これでまたVTシステムを開発しようとは思わないでしょ」

美緒が独り言を言っていると、日輪の中から声がする。どうやら少女が目覚めたらし

い。

「あ、起こしちゃったかな？」

「うん？」

どうやら少女は目覚めたばかりで寝ぼけているようだ。

「名前言えるかな？」

「『遺伝子強化試験体』No. 113これが私の名前……」

「そっか……なら……私が名前を付けてあげる」

美緒はそう言い、微笑む。

「お姉ちゃんが……？」

「うん♪」

そして、美緒は少し考える仕草をする。

「決めた！貴女はこれから『千条院美紗緒』だよ♪」

「『千条院……美紗緒』？」

「うん♪私の妹の……美紗緒ちゃん♪」

美緒の言葉が判つて来たのか徐々に笑顔になる。

「私のお姉ちゃん……？」

「うん♪私は美紗緒ちゃん的美緒お姉ちゃんだよ♪」

美緒がそう言うのと美紗緒は抱き付こうとする。

「わわっ！今は危ないから抱きついちゃ駄目だよ」

「あう……ごめんなさい……」

美紗緒は美緒に注意されてシユン……と落ち込む。

「ふふ♪美紗緒ちゃん。これから日本に行くよ？」

「日本？」

「うん、私の故郷だよ♪」

「美緒お姉ちゃんの故郷に行ってみたい！」

美紗緒がそう言うのと美緒は微笑む。

「それじゃ、行くから中に戻ってね？」

「はぁい」

美緒が言うのと美紗緒は素直に返事をして、日輪の中に戻る。

美緒はブースターを吹かし、行きと同じ速度を出し、日本のIS学園に戻って行った。

～IS学園屋上～

あの後、美紗緒を中に入れたままIS学園に戻った美緒はどうしようか悩んでいた。

「さてと……どうしよう……」

悩みつつも美紗緒を降ろして『カインホクキエツア』から奪ったコアを取り出し、ガ

ントレットに戻した。

「美緒お姉ちゃん♪」

美紗緒の声がしたと同時に後ろからだきつかれる。

「わつと……どうしたの？美紗緒ちゃん」

「ありがとう……お姉ちゃん……」

美緒が見ると美紗緒は今にも泣き出しそうになっていた。

「あの暗い……鉄の子宮から出してくれて」

「怖かったんだね……もう大丈夫だから……」

美緒は美紗緒の頭を撫でる。

「お姉ちゃん……ああ……うああ……」

美紗緒は大声で鳴き始めた。

暫くすると美紗緒は寝てしまっていた。産まれて初めて泣いたのだ疲れるのも当然だろう。

「ふふ……さてと、そろそろ出てきてても大丈夫ですよ。織斑先生」

美緒がそう言うのと千冬が出てくる。

「まずはよく帰って来たと言うべきか？千条院？」

「さあ？私にはなんとも言えないですね」

千冬の問い掛けに美緒は苦笑しながら答えになっていない答えを返す。

「ふん。まあいい、ところでその娘は……」

「はい、ドイツ軍の『遺伝子強化試験体』^{アドヴァンスト}の最後の一人です。私の義妹で名前は千条院美紗緒ですよ。」

美緒はそう言つて美紗緒の頭を優しく撫でる。

「この学園に入れるのか？」

「そのつもりです」

「なら私の方で手続きをしておこう」

千冬の意外な提案に美緒はキョトンとする。

「今まで苦労をしてきたんだ。そのぐらいの我が儘に私が叶えてやるさ」

千冬はそう言つて屋上から姿を消した。

「……………有り難う御座います……………千冬お姉ちゃん」

美緒は既に姿が見えない千冬にお礼を言つて、美紗緒を背負つて自室に戻った。

く教室く

ラウラの暴走事件から翌日、美緒は少しクスクスと笑っていた。

「美緒はどうしたんだ？何がそんなに可笑しいんだ？」

そう聞いてきたのは一夏だった。

「ああ、ちよつとね……ふふふ♪」

一夏に答えて美緒はまた笑う、一夏は箒を見るが箒もお手上げだと言わんばかりに首を横に振る。

そうしていると教室に真耶が入ってくるがふらふらと足元が覚束なく、今にも倒れそうであつた。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を二人紹介します。片方の方は転校生と言うか……既に紹介は済んでるというか……」

真耶の要領を得ない言い方に美緒は少し疑問に思い、真耶の方を向く
「それでは、入ってきてください」

「失礼します」

美緒の耳には二人とも聞き覚えがあつた。片方のは急遽決めた事の当事者であるので解つているのだがもう片方が解らなかつた。

最初に入ってきた転校生は金髪に白が入った白金髪でその髪をリボンで腰辺りに一纏めにした髪型で、目の色は美緒と同じなのだが左右の色が逆転していた。制服は美緒のを使つているのだがサイズが合わなかつたのか袖の部分が長く、指の先近くまで隠れている。

「千条院美紗緒です♪お姉ちゃん共々よろしくお願いします♪」

美紗緒はそう言うのとペコリと頭を下げた。それだけでもクラスメイトは大騒ぎになるのだが次の自己紹介でかき消される。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願ひします」

スカートを履いたシャルル……改めシャルロットはお辞儀をした。それによつてクラスがざわつくのだがそれを掻き消す様な轟音が響き渡る。

「一夏あつ!!!」

その轟音の主は鈴音だった。鈴音は叫ぶと同時にIS『甲龍』の『龍砲』のチャージを行う

「死ね!!!」

鈴音はそう言つて、一夏に向けてフルパワーで発射する。その直後に爆発音が響き渡るも一夏は無事であった……ラウラの『A・I・C』《アクティブ・イナードシャル・キャンセラー》によつて守られたからだ。

!?「一言ほど一夏と話した直後に一夏はラウラに唇を奪われた。

?!「?!」

「お、お前は私の嫁にする!決定事項だ!異論は認めん!」

「………嫁?婿じゃなくて?」

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、

お前を私の嫁にする」

ラウラは顔が紅くなりながらも一夏にそう言う、その後鈴音は復活し、一夏に向けて『龍砲』を構えるが一夏は後ろ側出口から逃げようとするも、セシリアの『ブルー・ティーズ』によって止められる。往生際が悪い一夏は窓から逃げようとするが今度は箒に止められ、逃げ場を失った一夏はとにかく何処かへ逃げようとしたがシャルロットにぶつかり、二人して笑顔になるがシャルロットはIS『ラファール・リヴアイヴ・カスタムII』のアーマー部分のみが展開されている。そしてパンツ！軽く炸薬弾ける音が響くと同時に『ラファール・リヴアイヴ』シリーズ最強の武器六九口径パイルバンカーグレー・スケール『灰色の燐殻』。通称『盾殺し』シールド・ピアスが姿を現す。シャルロットが発射する直前に一夏は何者かの手によってシャルロットの前から姿を消す。

「た、助かった美緒……」

そう、美緒が一夏を助けたの……だが

「美緒!!一夏を私達にわたさ……いえ、なんでもないですごめんなさい」

鈴音が美緒に一夏を渡す様に要求しようとしたが何故か取りやめた。その理由は一夏以外解らなかつた。

「ふふふ♪皆……?一夏をあまり苛めちゃ駄目だよ?」

「本当に助かったよ。み……?!?!」

「ふふふふ♪一夏あ……う？ちゃんと言明してくれるよねえ？」

一夏が美緒を見ると美緒は笑顔ではあった……それは良いのだが顔の至る所に怒りマークが出ていた……それだけならばまだ良いが背後に阿修羅や鬼神、果ては破壊神シヴァの幻影が見えている様な気がする……それほどまでに美緒は怒っていた。

「あはははは……あはははは……」

「一夏のお……」

たっぷりと溜めを作りながらも美緒は『カインホクキエツア』を展開して『ソルデイオス』を全基一夏の回りに展開して、『スキュラ』、『ブレイズ』、『ブリッツ・カノーネ』のチャージを始めていて、『マイクロミサイル』と『コンテナマイクロミサイル』の発射口を開き、『フレア』と『オクスタンガトリング』のアイドリングを既に行っていた……ぶっちゃけオーバークイルを超えていると思うが……

「馬鹿あああああつ!!!」

無慈悲にも全てが発射され、轟音と爆音そして小さいながらも一夏の悲鳴が轟き、教室のみならず学園全体を揺らした。

第三卷

美緒の過去そしてオリジナルの夢

ドクン……ドクン……

規則正しい心音が鳴り響く、生体培養カプセルが最初の私が存在していた世界……その世界は暗く、音もない。音があるとすればそれは私の心音だけ、光は私がいるこの生体培養カプセルから漏れる淡い光だけ、それは何も無く、何も映し出さない孤独が支配する寂しい所だった。

『生命戦闘体N^o. Δ—1—1』

それが私につけられた最初の名前であり製造体識別コードだった。

既に私以外で10体の『生命戦闘体（アマテラス）』は造られたらしい。けど性能（スペック）的には完成されていたが容姿が駄目だと言われ廃棄処分されたらしい。らしいと言うのは私がここで研究員が話していたのを聞いていたに過ぎない。

「目覚めなさいN^o. Δ—1—1」

培養液内にいるので私は返事の変わりにゴポポ……と気泡を吐き出す。その後には生体培養カプセルから出たところで場面が変わる。

そこは戦場だった。過激派集団のアジトの近くにある町だった。

「撃て！撃ち殺せ!!」

一人の男の声がして私は迎え撃つべく重機関銃『M134ミニガン』を片手1艇両手で2艇を持ち、発射する。反動は『生命戦闘体』である私にとつて無いも同然で弾道に少し誤差が出るも殆どの敵を駆逐する。撃ち終わった重機関砲『M134ミニガン』を捨て、未だに生き残っている敵の懐に入る。

「この！化け物があああ!!」

入られた敵はそう言いながら、私に向かって発砲する。私の肩や胸部に銃弾が入り込む。しかしそこに私の体に埋め込まれた自己治療用ナノマシンが銃弾を外に出し、傷口を塞いだ。

「ひいつ!?何だこいつ!!」

男は銃弾が効かない私に驚くがその次の瞬間、私の手で心臓を貫かれ、絶命した。死んだ男だったものを私は冷たく見下ろしていた。そしてまた場面が変わる。目に飛び込んできたのはまぶしい光だ。

「今回の移植素体かね?」

「はい、何でも死んだご息女に似た容姿の『生命戦闘体』を用意したようで」

「金持ちの思考はわからんね。と言っても私達がやるんだからな」

「そうですね先生。ですがこの容姿にする為にいったいどれだけの『生命戦闘体』が廃棄になったか……」

「それこそ私達が気にすることじゃないだろう……まあ、気分が良い話ではないがな」

二人の男性がカチャカチャと器具を準備しながら話し合う。

「それでは『生命戦闘体N.O. Δ—1』に千条院美緒のコア移植に取り掛かる」

先生と呼ばれた男性が私の右乳房の下辺りにメスを入れる。

「いっ—！」

「我慢しろ」

私が悲鳴を上げようとしたら、先生はそれを封殺するように言う。そして入れたメスをゆっくりと斜めに移動しながら肉を切り裂く

「あああ!!」

私はもがこうとするが両手両足を固定され、身動きが出来ない状態で体内に異物を入れられる感触を味わう。自己治癒用ナノマシンが動くので余計に痛みが増す。

「あがああああ!!」

「五月蠅い、手術の邪魔だ」

パシッ！と私は頬を叩かれる。だが先生とその助手は興味が無さそうな顔をして着々と進めていく。

「やめーいやーぎやあああああ!!」

脳内に知らなかった映像や音声が流れる。それを私自身は異物だと認識する。拒絶反応が起こるが投薬によって無理矢理拒絶反応をかき消した。今の私は涙と涎、鼻水でぐちゃぐちゃになってるのだろうかと他人事のように思った。そしてまた場面が変わる。そこは豪華としか言いようが無かった一室だ。そこに私の……オリジナルの両親がいた。

「これから君は千条院美緒になるんだ……良いね?」

「わかりました……お父様」

「私達も貴女の事を娘と思うから貴女も私たちのことは両親と思つてね?」

「はい……お母様」

そうだ……これは『生命戦闘体N.O. Δ-1』から『千条院美緒』になった時だ……そう思った瞬間、また場面が変わった。今度は色褪せていて明確には見えなかった。

そこには男の子と女の子が居た……その女の子は私に似ていた……ということはこれはオリジナルの記憶……?

「ねえいつくん……」

「どうしたんの? みつちゃん?」

オリジナルが一夏に声をかけて紅く俯いた

「もしおおきくなったら……」

「おおきくなったら？」

「いっくんのおよめさんにしてほしいな？」

「うん！ぜったいおよめさんにしてあげる！」

その光景が急速に遠ざかる。ああ……これが前に言ってたオリジナルの夢だったんだ……狂ったあの時も一夏と約束したその夢を実現させたかったんだ……私はなんてずるいんだろう……私はそう思いつつも意識を浮上させた。

義妹と買い物と

「ISS学園美緒、美紗緒自室」

目覚めた美緒は勢い良く跳ね起きる。全身汗だくで呼吸は乱れていた。

「一夏あ……」

美緒は相眩いて美紗緒を起こさないように静かに泣いた。

「食堂」

時間は過ぎ、美緒と美紗緒は食堂に来ていた。その近くには一夏、ラウラ、箒も居た。

「ちなみにこれは一夏が言っていたことだが」

ラウラはチキンサラダを食べ、飲み込む

「おしとやかな女が好きだそうだ」

「！」

「うゆ？」

美緒と箒は驚き、美紗緒はわからなさそうに小首をかしげる。蛇足だがこの時一夏は美紗緒に萌えたそうだ。

ドタドタと慌しい音がして5人はその音がする方を向く

「わああっ！ち、遅刻っ……遅刻するっ……！」

その発生源は意外なことにシャルロットであった。シャルロットは余っている定食から一番近くにあるものを取る。

「よ、シャルロット」

「あつ、一夏お、おはよう」

「シャルロットちゃん。おはよう〜」

「よう〜♪」

「美緒ちゃんと美紗緒ちゃんおはよう」

一夏が挨拶をしてそれに続く様に美緒も挨拶をするが……美紗緒は途中まで食べていたので最後の方しか発音できなかつたが……

「ほらほら、美紗緒ちゃん。口の周り汚れてるよ」

美緒はナプキンを取り出して美紗緒の口の周りを拭く、それをくすぐったそうに目を細めてなすがままにされる。

「ありがとう♪お姉ちゃん♪」

美紗緒は美緒にそう言ってまた食べ始める。

「なあ美緒？」

「ん？どうしたの？一夏？」

「いや、何時の間に妹が出来たんだ？」

一夏の疑問に美緒と美紗緒はぎくつとほんの少しだが動きが止まる。

「あはは……2年前にね……ね？美紗緒ちゃん」

「う、うにゆ……ほうふあよそ」

「そうなのか……ところでシャルロット」

「ほえ!?何かな!!一夏!?!」

一夏とシャルロットが話すのを見て、美緒と美紗緒は安堵の溜息を吐いた。

「(危なかったあ……妙な所で一夏は鋭いんだから)」

「(気をつけないとだめかな……お姉ちゃん)」

「(それに越したことはないよ美紗緒ちゃん)」

美緒と美紗緒のやりとりを静かに見ていたラウラはさり気なく美紗緒の隣に座った。
ところが

キーンコーンカーンコーン。

「うわあつーい、今の予鈴だぞ、急げ！」

と一夏が言うも既に美緒、美紗緒、一夏以外いなかった。

「一夏も慌てなくて良いのに」

「馬鹿!今日は織斑先生のSHRだぞ!俺はまだ死にたくない!」

「う〜？お姉ちゃん？織斑先生のSHRに遅刻したらしんじやうの？」

一夏の悲鳴に美紗緒が素で返す。美緒はお茶を啜りながら答える。

「美紗緒ちゃん、別に織斑先生のSHRに遅れたって死にはしないよ……と言うか私がいるから遅刻はしないからね〜」

美緒はそう言つてからお茶を飲み干す。

「それじゃ、美紗緒ちゃん……私の首に捕まつてね」

「は〜い♪」

美紗緒が美緒の首に捕まつたのを確認する。その間に一夏は既に寮内から姿を消していた。

「いっくよ〜♪」

美緒の軽い掛け声と共に二人の姿は消える。美緒お得意の高速移動だ。走つてゐる途中の一夏とすれ違う

「うわっ！美緒！汚いぞ！」

「ふっふ〜ん♪おっさきき〜♪」

「わ〜♪早い早い〜♪」

一夏の抗議を軽く返して美緒は教室に入る。

「千条院姉妹」

「うわっ！織斑先生!？」

教室のドアを開けた直後、そのまん前に千冬がいて美緒は驚く

「廊下で走るなど注意しただろうが」

スパアンツ！と千冬の出席簿アタックが美緒に炸裂する。

「いたた……ごめんなさい」

「よろしい、席に座れ」

そういつて美緒と美紗緒は席に着く。その直後に一夏とシャルロットが到着する。だがシャルロットは部分展開している為、千冬に二人して怒られ、教室の掃除を罰として言いつけられ、席に着く。

「今日は通常授業だったな。IS学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

授業数こそ少ないがIS学園にも普通の高校でも教える授業がある。中間こそ無いものの、期末はあり、ここで赤点を取ると長期休校の大半を補修に費やされるのでどの学園生も必死になる。

「それと来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間では羽目を外しすぎないように」

七月の頭に校外実習……臨海学校がある。三日間の日程のうち、初日は丸々自由時間

となつてゐる。

「ではSHRを終了する。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」

千冬に一人の女子生徒が質問をする。

「山田先生は校外実習の現地視察に行つてるので今日は不在だ。なので山田先生の事は私が今日一日代わりに担当する」

すると女子達が騒ぎ始める。千冬はそれを鬱陶しそうにしながら言葉を続ける。

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行つてゐるんだ。遊びではない」
はーい、と揃つた返事をしたのだった。

く放課後第三アリーナく

「それじゃあ美紗緒ちゃん。ISの訓練を始めるよ♪」

「うん♪お姉ちゃんよろしくね♪」

美緒と美紗緒は訓練の為に第三アリーナに来ていた。美紗緒は訓練機である『ラファール・リヴァイヴ』^{ゼロリアクト・ターン}を装着していた。

「それじゃ、まずは無反動旋回^{ゼロリアクト・ターン}だね。私がやるから見ててね」

美緒は美紗緒が見える速度で無反動旋回^{ゼロリアクト・ターン}を行う

「つとこんな感じだけど美紗緒ちゃん。解つたかな？」

「うん♪こうだよね？」

美紗緒は美緒とまったく同じ動きをする。

「うん♪そうだよ♪良く出来たね♪」

美緒は美紗緒の頭を撫でると美紗緒は目を細めて気持ち良さそうにする。

「これを後10回ぐらいやったら今日は終わりにしようか」

「はい♪」

美緒は美紗緒に言った後、ふと考え事をする。

「(今週末は美紗緒ちゃんの洋服買ってあげないとね♪)」

『マルチタスク並行思考』を使いながら美緒は予定を組みながら美紗緒の訓練を行うのだった。

　　♪日曜、プラットホーム♪

「良く晴れてるねえ♪」

「ねえ♪」

美緒と美紗緒は町に繰り出していた。何故かと言うと

「今日は私達の水着と美紗緒ちゃんの洋服を買うから楽しもうね♪」

「うん♪お姉ちゃん有難う♪」

今だに服を持っていない美紗緒の為に美緒が提案したのだった。

「最初は何処から見たほうが良いかな？お姉ちゃん」

「そうだね〜……まずは水着からにしよう♪」

「はあい♪」

そう言つて二人は水着売り場に向かった。

そして二人が水着売り場に着くとそこで見かけたのは何故かシャルロットと一夏が試着室一緒に入つて行く所だった。

「ねえ、お姉ちゃん。さつき一夏さんとシャルロットちゃん一緒に入つていったよね？」
「私の間違いでなければね……？はあ……」

美緒は頭を抱えて溜息を吐く、気を取り直して美緒と美紗緒は水着を選ぼうとするが
「ん？千条院姉妹じゃないか」

「あ、千条院さんこんにちわ」

「織斑先生と山田先生こんにちわ」

「こんにちわ〜♪」

千冬と真耶に会い挨拶をする。

「織斑先生達も水着を？」

「はいそうですよ。あ、それと今は職務中ではないのですから、無理に先生と呼ぶなくても大丈夫ですよ」

「はい、じゃあ千冬お姉ちゃん」

「ん? どうしたんだ? 美緒」

「今度……お父様とお母様の一周忌だから……久しぶりに顔を見せてあげて?」

「ああ……また機会があればな」

「は〜い♪」

美緒がそう返事すると先程、一夏とシャルロットが入った試着室が少し慌しくなる。

「ん? なんだ? やけに騒がしいな」

千冬はそういうと二人が入った試着室に向かう。それと共に真耶、美緒、美紗緒もついていく注意しようと真耶が声をかけようとした瞬間

「え?」

「えっ?」

「ええっ?」

一夏がドアをあけて出ようとしているところだった。

「何をしている、バカ者が……」

千冬がそう呟いた後に真耶の悲鳴が響き渡った。

それから数分間一夏とシャルロットは真耶に説教をされ、今しがた漸く終わり、少し

一夏と真耶が話していると

「そろそろ出てきた方がいいんじゃないか?」

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

千冬に言われ、出てきたのはセシリアと鈴音だった。

きやいのわいのと一夏達が騒いでいると千冬が溜息をつく

「さっさと買いい物を済ませて退散するでしょう」

「あ、あー。私ちよつと買いい忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので鳳さんとオルコットさん、ついてきてください。それとデュノアさんと千条院さん達も」

「ふふ♪私達は別行動するので……それじゃ♪一夏またね♪」

美緒はそう言つて美紗緒を連れて離れた。

「お姉ちゃん」

「うん? どうしたの?」

「一夏さんと居なくて良かったの?」

「うん、千冬お姉ちゃんと二人つきりにしないとね……? 一夏と千冬お姉ちゃんは家族だし唯一の肉親だからね」

「うゆ? どう言う事?」

「美紗緒ちゃんにも何れ解るよ」

美緒はそう言つて美紗緒の頭を撫でた。
その瞳の奥は哀しみに彩られていた。

幼馴染と苦悩の解決と告白と

（バス内）

「海っ！見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声をあげる。

臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。陽光を反射する海面は穏やかで、心地良さそうな潮風にゆつくりと揺らいでいた。

「あれが海なの？お姉ちゃん」

「うん、とっても綺麗でしょ？」

「うん！♪」

美紗緒が元気良く笑顔で答えると近くの女子から「お持ち帰りしたい」等と聞こえ、美緒の顔が少し引き曇る。

「ねえねえ、お姉ちゃん」

「うん？どうしたの？美紗緒ちゃん」

「何か歌って？」

「ん、わかった♪」

「あれにしようかな……うん♪そうしよう」

美緒は喉の調子確かめてから目を閉じ歌い始める。

しばらくして美緒が歌い終わって目を開けると何故か静かになっているバス内に気付く。

「あれ……？何で静かになってるの？」

何処からか拍手が鳴り、段々とバス内全体に広がる。

「え、ええ？どうして？え？」

「あはは……お姉ちゃんの歌声を皆で聞いてたんだよ」

美紗緒の言葉に全員が頷く

「そんなに私の歌声良くないよ？」

美緒はそう言うが「それはないっ！」と千冬、真耶と運転手以外の全員が言った。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと座って静かにしろよ」

千冬がそう言うのと全員が元気の良い返事をする。

　　～海岸～

「んっ！夏はやっぱり海だねえっ♪」

そう言うって伸びをしているのは美緒で黒地のビキニに胸元から白のレースがアクセントのセーターストラップのトップス、同じ黒地のボトムでハイレグのフルバックだ。

その上から同じ黒地の専用ミニスカートを履いており、そのスカートにも二段のフリルが付いており、可愛さをアピールしている。

ビーチサンダルは黒のローヒールトングTストラップサンダルを履いている。

「あちちっ！こ、これが夏の海なんだ〜」

そう言つて出てきたのは美紗緒であり、美緒と同じデザインではあるが色がスカイブルーになっている。

こちらは青のトングTストラップサンダルを履いている。姉妹揃つてほぼ同じ格好なのは驚きだ。

「あー！お、織斑君が肩車してる！」

「ええっ！いいなあっ！いいなあ〜」

「きつと交代制よ！」

「そして早い者勝ちよ！」

なにやら女子達が騒いでいるのを美緒は見て、美紗緒の肩に乗る。

「わわっ！お姉ちゃん!?!」

「美紗緒ちゃん、ゴー！」

美緒は一夏が居る方向を指差す。美紗緒は訳も解らずにとりあえず向かった、そこで二人が見たのは鈴音が一夏の肩から降りるところだった。

「よつとー！」

美緒は美紗緒の肩から降りて高く跳ぶ。その目標地点は一夏だ。

「いっちか〜♪」

「げえっ！美緒！」

美緒は一夏の背後に飛び降り、そのまま一夏の肩に乗った。

「ちよっ！まつ！」

「ん〜♪やつぱり一夏の肩車は乗り心地が良いね♪」

「美緒、降りろ〜！」

一夏は美緒を降ろそうともがくがそれが逆効果となり、美緒が一夏の頭にしがみ付く、当然そうなると美緒の豊満な乳房が押し付けられるわけで……

「／／／／／！！」

「ふふ♪一夏赤くなってる〜♪」

赤くなつた一夏を美緒はコロコロと笑い、からかう。

「こら！美緒！さっさと降りなさいよ！」

「そ、そうですわ！早く降りるべきですわ！」

「まあ、二人がそういうなら仕方ないね〜」

美緒は二人が言うのと素直に一夏の肩から降りる。

ちなみに鈴音はスポーティーなタンキニタイプでセシリアは鮮やかなブルーのビキニでパレオを腰に巻いていた。

「ふふ♪私は十分愉しんだから、また後でね♪」

そう言つて美緒は一夏達から離れた。

「美緒の奴どうしたんだろうな？最近おかしいぞ」

「一夏もそう思う？」

「ああ、引越する前はよくこういうイベントの時はよく一緒に居ただけだな」

「そうよね……やっぱり何かあったのよ、『あの事』と関係あるのかしら？」

鈴音の言うあの事とは以前美緒暴走事件の時に美緒が話したことであった。

あながちそれは間違いではない、だが一夏達にそれを知る術は無かった。

場所は離れ、海岸に直ぐ近くある森林内に美緒は一人居た。

「一夏に水着姿を見てもらいたかったけど……やっぱりやめておいた方が良いね」

森林内をゆつくりと歩き、草木の濃厚な匂いを嗅ぎながら一人想う

「（一夏が私に好意を持ったらみんなが悲しむし、私も辛い……）」

それは美緒の独りよがりな想いだ……そう言える者は今ここには居ない。

「（だから一夏には他の人に好きになつてもらわないと困る……私だけが遺されてしま
うから）」

美緒は遺されて行くのを極端に怖がる……現在不老不死である『生命戦闘体』だからこそその苦悩でもある。

「(不老不死が人類の夢……誰がそんなことを言ったんだらうね……不老不死なんて終わりの無い生き地獄だよ)」

永遠の美貌、死ぬ事のない肉体、確かに人類の夢ではあるだろう……当事者以外には、それは遺される者ではないからだ。当事者にとつては生き地獄、親しい人達の死をずっと見続けなければならぬのだから。

「(だから……私は楽しかった思い出だけ有れば良い……そうすれば……夢の中だけでも孤独ではないから)」

心が壊れない様に、美緒はそう、自身に言い聞かせる……自身の想いとは逆に……それが美緒自身の心の茨となり、締め付け、苦しませる。

「(本当は私も普通の女の子になりたかった……でもそれは贅沢だね……本来の美緒を消してまで生きる事を望んだのに……)」

美緒の目から涙が一筋流れ出る。本人が知らぬ間に

「(辛いよ……辛いよお……寂しいよ……寂しいよお……)」

何時の間にか美緒は蹲り、地面にポタツポタツと染みを作っていく。

「遺されるのは嫌だよお……」

美緒の口からその言葉が漏れ、嗚咽と共に涙が溢れ、孤独になるという恐怖、遺されるという絶望、その様々な感情が溢れ出てくる。美緒はただ独り泣き続けた……もつとも聞かれたくない人物に聞かれながら

時間を遡り、一夏が女子達とビーチバレーを終えた後のことだった。一人で森林内に入っていく美緒を見かけた。

「何をしに入っていくんだ……?」

一夏は興味本位で後をついていく……後悔をすることも知らずに

森林の奥深くに美緒はゆっくりとした歩調で進んでいく、何も知らない人が見れば森林浴をしていると見えるだろう、一夏もそうだった。

「森林浴か……?」

「……………」

「(何だ?)」

美緒はとてもしずかな声でぶつぶつと独り言を言っていた。だが歩みを止めて美緒はそのまま蹲った。

「(美緒……?)」

「遺されるのは嫌だよお……………」

一夏の耳に美緒の声が聞こえた。

「(遺される? どういう事だ?)」

「どうして……普通の女の子に……産まれなかったの……?」

美緒の独り言に一夏の疑問は大きくなる。

「どうして私は……不老不死なの……?」

「(不老不死?! どういう事なんだ!?)」

一夏は美緒の言葉に動揺して近くにあつた小枝を踏んでしまい、音を立てた。美緒はその音のした方向に向くと一夏と目が合う。美緒はサツと顔色を青くしてその場から逃げ出す。

「待てよー美緒ー」

一夏は慌てて美緒を追いかけるが『アマテラス生命戦闘体』である美緒に追いつけるはずもなく、見失ってしまった。

く夜大宴会場く

あれから一夏は美緒に避けられていた。幾度と無く一夏が話しかけようとすると目を伏せてそのまま通り過ぎ去ってしまう。

今でも美緒は離れた場所で一人で夕食を取っていた。

「(今しかないか……)」

意を決して一夏は立ち上がる。

「あれ？一夏。どうしたの？」

「ああ、美緒の所にな」

一夏はそう言つて美緒が座っている所に向かう。

「美緒」

一夏は美緒に声をかけるが美緒は無視をして立ち上がり、そのまま大宴会場を出ようとする。

「までよ！美緒！」

一夏は美緒の手を掴む。周りの女子は騒ぐが一夏と美緒には関係無い

「話したいことがあるんだが」

「話すことなんて……ないよ」

美緒はそう言つて一夏の手を振り払おうとするが何故かそれが出来なかつた。

「いくぞ」

一夏はそう言つたと美緒の手を握つたまま大宴会場を後にした。

そして一夏と美緒は海岸に来ていた。

「離してよ……一夏あ……」

「いいや、離さないぞ。美緒が話してくれるまでな」

「一夏の強い意志に美緒はたじろぐ。」

「なあ、美緒。そんなに俺に話したくないことなのか？」

「そう……だよ……一夏にだけは聞かれたくなかったのに……」

美緒はそう言つて俯く

「一人で抱え込むなよ……ロクなことにならないからな」

「言えないよ……絶対……」

「そうだな……不老不死なんて言えないよな」

一夏はそう言つて美緒の頭に手を乗せて撫でる

「あ……」

「だけど俺は聞いちまったんだ。この事は誰にも言わない。だから俺にも背負わせてくれ。美緒が持つその重い荷物を」

ドクンツ！と美緒の胸が跳ね上がる。

「嫌いに……なったり、気味悪がらない……？」

「ああ、ならない。絶対にな」

一夏がそう言つてまた美緒の頭を撫でる。

「うん……じゃあ話すよ……『生命戦闘体』の最重要機密を……」

美緒は一夏に話した。不老不死の原因を包み隠さず全てをそれを聞き終えた一夏は

納得した顔をしていた。

「これが……『生命戦闘体』^{アマテラス}の最重要機密だよ」

「そうか……」

「ねえ……一夏……」

美緒は一夏を上目遣いで見つめる。

「なんだ？」

「私は……人を好きになって良いのかな？」

「当然だろ」

美緒の問い掛けに一夏は当然のことだと答える。

「なら一夏……」

「ん？」

「ここでキスをして……？」

「はあ!？」

美緒の突拍子も無い言葉に一夏は素つ頓狂な声を上げる。

「好きになって良いんだよね……？ だったら……一夏がその証明になって……」

美緒の目から涙が零れ落ちる。

「私は……一夏が好き……友達としてではなく……幼馴染としてでもなく……一人の

……女の子として」

突然の美緒の告白に一夏は紅くなる。

「俺は……まだ恋つてのが判らない……それでもいいか？」

「うん……これから……判つていこう？ 私と一緒に……ね？」

「ああ……」

自然と二人は沈黙する。そして自然と二人の顔が近付き、もう少しで触れようとした所で乱入者が現れる。

「こらあ！一夏あ！美緒！何やってんのよ!!!」

鈴音の怒声が聞こえ、二人がその方向を見る。

「一夏さん……？何をしてらっしやるのかしら？」

「一夏……貴様……!」

「一夏は何をしているのかなあ？」

「貴様は私の嫁だ……浮気は許さんぞ」

セシリア、箒、シャルロット、ラウラの姿があつた。

「あ……俺死んだか？」

そしてセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラはISを展開して箒は真剣を鞘から抜く。

「「一夏……美緒……」」

「一夏さん……美緒さん……」

「「覚悟は出来てるな？／よね？／わね？／ますわね？」」

五人とも禍々しいほどのオーラを発して二人に向かって走り出した。だが箒はISと並走しており、本当に人間かと問いかけたくなる。

「あははは……俺死んだな」

「大丈夫、一夏を死なせないよ」

美緒はそう言つて一夏を所謂お姫様抱っこで抱える。

「ちよっ！美緒!」

「いくよ？一夏♪」

美緒は走り出す。一夏を抱えながら、だがその顔は先程の暗い悲しそうな顔ではなく。満天の星空のような笑顔だった。

幼馴染と姉妹と非常線と

く入り江く

いつものメンバーは千冬に呼ばれ、海岸の傍にある入り江に来ていた。

「ところでどうして箒と美紗緒が来てるのですか？専用機持ちじゃないでしょう？」

鈴音が疑問に思うのも当然だ。まだ箒と美紗緒には専用機がない

「あー……それはだな」

千冬が答えようとした瞬間に砂煙を上げて猛スピードで接近してくる人影があった。

「ちーちや~~~~~~~~ん!!!」

その人影は跳び、千冬に突撃をするも激突する寸前に千冬の手を頭を捕まれ、そのま

まアイアンクローを決められる。

「何やってるんだろ……東お姉ちゃん……」

「わからん」

東の奇天烈な行動を見た美緒はそう眩くと一夏が返事を返す。

「でも東お姉ちゃんが着てるなら……あの機体もロールアウトできたんだね」

「……あの機体？なんだそれ」

「うん、ちよつとね」

「さあ、大空をご覧あれ！」

東の声を聞いて全員が上を見ると二つの物体が落ちてくる。

その物体は砂埃を舞い上げながら地面におちた。

「東お姉ちゃん、あの機体がこれなんだね？」

美緒はそう言つて落下してきた二つの物体のうち一つの前に立つ

「そうだよ♪みーちゃん。その中にみーちゃんが私に頼んでたあの機体が入ってるよ

♪」

東はそう言つたとその物体が光の粒子となつて二機のISとなる。

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃんの専用機こと『あかつばき紅椿』！全スペックがみーちゃん達のI

Sを除く現行ISを上回る東さんお手製ISだよ！」

「そして美紗緒ちゃんの専用機『カグツチ』だよ♪私のIS『カインホクキエツア』の予

備パーツでくみ上げたISだけどその性能はほぼ同等だよ♪」

美緒と東は言つて二機を膝をつかせる。

「さあ、パーソナライズとフィッティングを始めよう♪」

美緒と東が言うのと箒と美紗緒は双方のISに乗る。

「東お姉ちゃん、コンソール貸して〜」

「いよいよ♪」

東は美緒にコンソールを貸す。そして二人はまったく同じ速度でコンソールを叩く、美緒は『並行思考』マルチタスクを使用して東と同じ速度で作業を終わらせていく。

「は〜い♪フィッツティング終了♪」

美緒と東はコンソールを片付けると声が聞こえてきた。

「あの専用機つて篠ノ之さんと千条院さんが貰えるの……？身内つてだけで」
「だよねえ。なんかずるいよねえ」

美緒はその声の主を探そうと視線を向けようとしたところ、意外な声が聞こえた。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界が平等であったことなど一度も無いよ」

東の指摘を受けた女子は気まずそうに作業に戻った。

「あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくんとみーちゃん、『白式』と『カインホクキエツア』見せて。東さんは興味津々なのだよ」

東が言うのと美緒と一夏はISを起動する。

「データ見せてね〜。うりゃ」

言うなり、『白式』と『カインホクキエツア』にコードを挿す。するとディスプレイが空中に浮き上がる。

「ん〜……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんでだろ？見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？」

東はそう言いつつ『カインホクキエツア』を見る。

「こつちもこつちで変なフラグメントマップをしてるねえ？コア2つ搭載してるからかなあ？」

東はそう言つてさらに作業を続けていると美緒のISに個別通信プライベートチャネルが入る。

『美緒様突然の連絡で申し訳ございません』

聞こえてきたのはとても低い男性の声だった。

『何かあったの？』

『はい、二時間前ハワイ沖で実験稼動していたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスペルが制御下を離れて暴走。監視空域を離脱しました』

『それだけだったら私が出る幕じやないでしょう？本題は？』

『はい、その『銀の福音』から10km離れた所に『無からの帰還』カインフィードバックウォンティンらしき機影を
確認しました』

「専用機持ち全員集合しろ！織斑、千条院姉妹、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、
凰！それと篠ノ之も来い」

『ごめん。召集が掛かったからデータを送っておいて』

『わかりました』

美緒は通信を切ると千冬の後続に続いた。

「では、現状を説明する」

千冬は最初だけは先程聞いた説明と同じことを話す。それを感じていたのは美緒だけだった。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2 km先の空域を通過することがわかった。時間にして50分後。学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

ラウラは「銀の福音」シルバリオ・ゴスベルのスペックを開示することを要求し、それを見て作戦を立てていく。

「そして未確認だが福音の後方10 kmに未確認機アンノウンがあると通達があった。これを見ろ」

立体映像ディスプレイに未確認機アンノウンが映し出されると美緒は立ち上がる。

「どうした？千条院」

「やっぱり……」

美緒の言葉に千冬は目を鋭くする。

「知っているんだな？」

「はい、この機体名は『無からの帰還』私のIS『カインホクキエツア』の同型機です。性能スペック、武装、外装が全て同じであり、世代も第四世代です」

美緒の言葉に専用機持ち全員が固まる。

「しかし……これは厄介なことになりました」

「どう言う事だ」

「はい、『カインホクキエツア』と『カインフィードバックヴオンデイン』には『三鬼神ユニット』と呼ばれる特化ユニットを装備しています」

「『三鬼神ユニット』？なんだそれは」

「『三鬼神ユニット』とは攻撃、機動特化型の『ムラクモユニット』、防御、機動特化型の『ヤタノカガミユニット』、戦闘破壊特化型の『アマテラスユニット』の3ユニットから構成される。千条院家の即時万能対応機リアルタイム・マルチロール・アクトレスの象徴たる物です。『ムラクモユニット』及び『ヤタノカガミユニット』はそれ程脅威ではありません。けれども『アマテラスユニット』ははつきり言つて最悪です」

「何故だ？詳しく説明しろ」

「『アマテラスユニット』は本来『生命戦闘体』アマテラスが使う物で特性として『絶対防御無効化』という機能を搭載しています。これによりIS同士での戦闘で敵対搭乗者を殺害することが可能です」

美緒の説明に室内に居る全員が驚愕した。

それは当然だ。『絶対防御』が無効化されるということは本当の殺し合いをすることになるからだ。

「今回の実戦では申し訳ないですが私は『カインフィードバックヴォンデイン』を落とすに行きます」

美緒はそう言つて立ち上がる。

「聞こえてるね言峰？」

『勿論でございます。美緒様』

立体映像ディスプレイに男性の老人の顔が映し出される。

「『カインフィードバックヴォンデイン』を完全破壊及び搭乗者の殺害で良いんだね？」

『左様で御座います。美緒様』

「わかった……あとでデータを送るよ」

『はい……後武運を』

言峰はそういうと通信を切り、立体映像ディスプレイは元に戻る。その直後に一夏は美緒に詰め寄る。

「美緒！殺害つてどういうことだよ！」

「一夏……悪いけどこれは私の家の問題だから……ごめんね」

美緒は申し訳無さそうに言い、部屋を出た。

く海岸く

現在午前11時半、美緒、一夏、箒が居た。

「「……………」」

あの司令室の中での事で少しお互いに話し辛くなっていた。

「そろそろ時間だね…………」

「ああ」

「そうだな」

美緒の言葉に二人は短く答えた。

「おいで…………『カインホクキエツア』」

「こい！『白式』」

「いくぞ！『紅椿』」

3人はISを展開させる。

「それじゃ、一夏…………行ってくるね」

「ああ、気をつけてな」

美緒は一夏に行って近付く。

「一夏…………」

「どうしたんだ？美緒」

美緒は一夏の唇を奪った。一夏と箒はその行動に驚き、固まる。

「!？」

「ん……勇気を貰ったよ♪」

美緒はそう言っただけで離れる。

「第666虚数バイパス展開接続開始……イリーガル機関稼働開始確認！『ヤタノカガミユニット』……起動！」

『カインホクキエツア』が呼応する様に紅色の粒子を出していく

『コード入力 S O L！起きなさい！『ヤタノカガミ』！』

美緒が言い終わる直前に『カインホクキエツア』の形が変わる。少し重量感があった装甲がより堅牢な形になり、大型化され、通常状態の『カインホクキエツア』の1.5倍ほどの大きさになった。

「じゃあね」

美緒は今だ固まっている箒と一夏を置いて、戦場に向かった。

幼馴染と海上での戦いと撃墜と

（戦闘空域）

「こちら千条院美緒、本部聞こえますか？」

『こちら本部、聞こえているぞ千条院』

「未確認機視認しました。以上通信を切ります」

『わかった。状況が変わり次第連絡を入れる』

美緒は通信を切ると美緒は『カインフィードバックヴオンデイン』の前に立つ

「漸く見つけたよ『カインフィードバックヴオンデイン』、そしてその搭乗者」

「……………」

「貴女の目的は何？どうして貴女がそれを奪取できたの？」

「……………目標……………確認」

『カインフィードバックヴオンデイン』の搭乗者は眩き、美緒を見る。

「I S名…………『カインホクキエツア』…………搭乗者…………『生命戦闘体』千条院美緒

……………N O. A I I と確認……………初めましてお姉様」

「!？」

搭乗者の言葉に美緒は驚き、目を剥く。

「どうして貴女がそれを……………」

「改めて紹介します…………『亡国機業』所属、『生命戦闘体』No. μ12、千条院白昼夢

と申します。お姉様」

白昼夢の自己紹介に美緒は再度驚く、だがその中で一番驚いていたのは…………

『生命戦闘体』だって!?!ラストナンバーは私のはず!」

「記録上ではそうなっていますが……………事実は違います。姉妹機として同タイプの私が製造され、ロールアウト直前に『亡国機業』に『カインフィードバックヴオンデイン』と共に奪取され、現在に至ります。投降してくださいませ。お姉様」

「貴女の目的は……………何?」

「はい、私の目的は『カインホクキエツア』とその搭乗者の確保、それが遂行できない場合は『カインホクキエツア』及びコアの奪取です」

「私が……………投降すると思う?」

美緒はそう言って、戦闘態勢に入る。

「しないでしょうね……………なので奪取を遂行します」

白昼夢は言うてから戦闘態勢に入り、互いに『瞬時加速』を使い、『月光』で鋸迫り合いを始める。

だが直ぐに美緒が白昼夢^{さだめ}の腹部を蹴り、距離を取り、『オクスタンガトリング』を出現させ、アイドリングを始めて、撃ちだす。それを白昼夢^{さだめ}は避け、白昼夢^{さだめ}も『オクスタンガトリング』を呼び出し、美緒に撃ちだす。美緒もそれを避け、『マイクロミサイル』、『コンテナマイクロミサイル』を双方同時に射出する。互いの『マイクロミサイル』、『コンテナマイクロミサイル』が着弾し、爆ぜる。その爆炎を駆け抜け、接近したのは美緒だった。

その手には『オクスタンガトリング』は無く、『月光』の青白い光の刀身が輝き、白昼夢^{さだめ}を斬り裂かんと美緒は薙ぎ払う様に横に構え、懐に入る。

「かかりましたね?」

「!?しまっ」

白昼夢^{さだめ}は零距离からの荷電粒子砲『スキュラ』を放ち、美緒は『シユピーゲル』を展開する暇も無く、左腕の装甲で受け、吹き飛ばされる。

——バリアー貫通、ダメージ250。シールドエネルギー残量650。実体ダメージ、レベル左腕部中破

『スキュラ』を受けた左腕部装甲は半ば爛れ、骨格がほんの少し見えるようになってしまったが、動きには問題無さそうだ。

「いきなさい。『ソルディオス』」

白昼夢は『アクティブクローク』から『ソルデイオス』を15基出し、美緒に向けて実弾射撃を行わせる。美緒は『ソルデイオス』と『ブレード』を展開して『ソルデイオス』に『ソルデイオス』を向かわせ、封じる。残った『ブレード』を白昼夢（さだめ）に向かわせ、自身は『ブレイズ』、『スキュラ』、『ブリッツ・カノーネ』の発射準備（チャージ）を行いつつ、白昼夢に向かいながら『オクスタンガトリング』を放ち、接近していく。

美緒の意図を察しながらも『ブレード』によつて動きを阻害され、同じく『ブレード』を展開して反撃しようとした瞬間。

「捕まえたよ」

「!？」

美緒に両肩を捕まれ、『ブレイズ』、『スキュラ』を向けられ、身をよじろうとするが、できず。右腕にある『月光』で振り払う、その際に『ブレイズ』は外れ、『スキュラ』は右腕部に当たる。

———バリアー貫通、ダメージ250。シールドエネルギー残量600。実体ダメージ、レベル右腕部中破

白昼夢と美緒は互いに反対側の腕にダメージを与え、無傷の腕にある『月光』で斬りかかる。だがやはり、鏝迫り合いになるも、互いに『オクスタンガトリング』を撃ち、被弾する。

——バリアー貫通、ダメージ75。シールドエネルギー残量420。実体ダメージ、レベル左腕部以外軽微

——バリアー貫通、ダメージ75。シールドエネルギー残量410。実体ダメージ、レベル右腕部以外軽微

美緒は『マイクロミサイル』と『コンテナマイクロミサイル』を放つ、白昼夢も『マイクロミサイル』と『コンテナマイクロミサイル』を放ち、爆煙で姿を見せなくする。

『ヤタノカガミユニット』解除！

美緒は通常形態の『カインホクキエツア』に戻す。その頃に爆煙は晴れ、互いの姿が見えるようになる。

「第666虚数バイパス展開接続開始……イリーガル機関稼働開始確認！『アマテラスユニット』……起動！」

『カインホクキエツア』と『カインフィードバックヴォンデイン』から黒い粒子が溢れ出る。

「コード入力DOL！起きなさい！『アマテラス』！」

「コード入力DOL！起きて！『アマテラス』！」

二人が言い終わる直前に『カインホクキエツア』と『カインフィードバックヴォンデイン』が互いに姿が変わり、同じ姿に変わる。

美緒と白昼夢（さだめ）の瞳に『Return of the primordial System Start』と浮かぶ。その直後に美緒と白昼夢は『瞬間加速』を超える速度で激突する。その速度は速く、『月光』同士で発生する紫電よりも速く、次の鏝迫り合いで紫電が発生して一帯を紫電の光で覆い尽くす。だが次第に両者の体に斬り傷が増えていき、多量の出血を強いることになる。それは自己再生能力が驚異的な『生命戦闘体』であつてもだ。『生命戦闘体』同士の戦闘は想定されておらず。再生能力が追いつかず、ダメージが蓄積されていく。

『カインホクキエツア』——バリアー貫通、ダメージ350。シールドエネルギー残量150。実体ダメージ、レベル中破

『カインフィードバックヴオンデイン』——バリアー貫通、ダメージ350。シールドエネルギー残量140。実体ダメージ、レベル中破

「排除……排除……」

美緒と白昼夢は5mの陽電子砲『エーレンベルク』を出現させ、構えて放つ、『エーレンベルク』が放つ陽電子は互いの陽電子を相殺しながら進むことも出来ず。『エーレンベルク』が過負荷で自壊した『エーレンベルグ』だったものを捨て、『月光』の刀身を出現させ、『ブレイズ』と『スキュラ』を発射体勢しながら突撃する。互いの左右対称の『月光』で『月光』を受け止め、『ブレイズ』を『ブレイズ』で撃ちぬき、強制排出をし、『ス

キュラ』を放つも拮抗し、過負荷（オーバーロード）で自壊する。『カインホクキエツア』のみに装備されている『ブリッツ・カノーネ』も白昼夢（さだめ）の『月光』に斬り落とされ使用不可能にされる。

体を『月光』の刀身で斬られ様とも互いに表情を変えずに戦う。

互いの目的の為に殺し合う。戦場ではよくある事だが二人の場合は次元が違う。

常人が見ようものなら吐き気を催し、或いは失神をしてしまう……既に互いの血で濡れ、真つ赤に染まっている。

それでも互いに斬り合い、相手を殺すだけを考え二人は……否、二体の『生命戦闘体』は戦う。互いの目的の為に……互いを殺す為に。

『カインホクキエツア』と『カインフィードバックヴォンデイン』も既に稼動限界領域を超えており、何時機能停止になってもおかしくはない……それでも戦い続けられるのは『生命戦闘体』である二人が自身のナノマシンを使い、微量ながらも自己修復させているからだ。

既に戦闘開始してから三時間は経過している。二人からしてみれば既に丸三日は戦い続けている様に感じられる。それほど密度が濃い戦闘であった。

だがその戦闘も美緒への個別通信プライベート・チャンネルによって終わりを告げる。

『美緒！聞こえる！』

それはシャルロットからの個別通信だった。

『戦闘続行中により……返信不能……』

『いいから聞いて！一夏が……一夏が箒を庇って墜ちた!!』

『!?!』

シャルロットの言葉によって美緒は一時的に止まってしま

「(一夏が……墜ちた……?)」

美緒の思考回路が一時的に硬直する……だが白昼夢(さだめ)がその隙を見逃すはずもなく『月光』を美緒の心臓がある場所を貫いた。

「(い)ん(づ)っ……」

貫いた『月光』を白昼夢(さだめ)は引き抜くと美緒の口から大量の血が吹き出し、それによつて『カインホクキエツア』が解除され、生身のまま美緒は海中に沈んだ。

夢と第二形態移行と別れと

）
???)
）

美緒は一人暗い闇の中一人座っていた。そこは太陽があるが月食の様に黒い太陽であつた、ふと思いついたように美緒は立ち上がり、ゆつくりと歩き出す。

「()は……?」

周りを見ても何も見えない、闇ではなく無だと美緒は確信する。暫く歩くと何か聞こえてくる。

「—————♪」

それは美しい歌声だつた。だけでも哀しく寂しい歌声……美緒はその歌声に誘われるかのように歩みを速める。

「漸く来たのかえ?」

美緒は後ろを振り返るとそこには十二単を着た女性が居た。背中まである黒髪を下ろし、泳がせている

「貴女は……?」

「主は力を欲するかの?」

美緒の質問を無視した女性はいかける。

「他者を圧倒し破壊する力を」

「うーん……私はもうその力は必要ないかな」

「何故じゃ？」

「私にはもうその力があるからね。だから今欲しいのは……」

美緒は自然と強い意志が宿った目になる。

「愛しい人や大切な仲間、友達を護る力が欲しい」

「その言葉に嘘偽りはないのじゃな？」

「当然だよ」

美緒の答えに女性は微笑む

「ならば、主にその力を与えようかの」

女性はそう答えると泡の様に消えた。

「今の人は一体……」

「あの人は貴女」

「貴女はあの人」

「だよ。お姉さん」

二人の声が聞こえると同時に風景が突然変わり、夕焼けに変わる。美緒はゆっくりと

声のした方を向くと白と黒のワンピースを着た美緒よりも小さい少女が居た。

「君達は……?」

「私は貴女の相棒」

「私は貴女を護る盾でもあり矛でもある」

「貴女は何を望むの?」

「私は……大切な人達を護りたい!」

「良かった……私達の相棒が貴女で」

二人は安堵した声で微笑む。

「私達から貴女に最後の力を渡すから」

「貴女が護りたい世界を……人達を護って」

「例え今の肉体が減んでも」

「貴女と共に有るから」

二人がそう言うのと徐々に世界が歪み始める。

「待って! 貴女達は!」

「貴女が思ってる通りだよ……お姉さん」

そして世界が消え、美緒は現実に戻る。

〈戦闘海域海中〉

あの激しい戦闘から5時間経っていた。白昼夢は直ぐに美緒が持つ『カインホクキエツア』を回収しようと思っていたが、先程の戦闘ダメージが残っていて、うまく動けずに居た。

今も自己再生に専念している所だったが突然海中から巨大なエネルギー反応が発生する。

「高エネルギー反応……!?!」

海面が上空に向かって放たれたエネルギー波によって蒸発する。その姿は『カインホクキエツア』に似ているが何処か違っていた。損傷しきった装甲、操縦者も傷だらけであり。それは白昼夢も同じで、ボロボロであった。

「そっか……これがあの子達が言っていた最後の力なんだね」

その声は美緒であった。だが『カインホクキエツア』の装甲には紫電が時折走り、損傷具合が危険であることがわかっていた。

美緒は機械翼『アクティブクローク』が変形した新しい機械翼に『月光』と同じ青白い光を纏わせる。その光から無数のエネルギー弾が放たれ、白昼夢を追尾する。白昼夢は『月光』でエネルギー弾を弾く、だが弾いてる間に美緒は白昼夢に近付き、『月光』を展開し、斬り上げる。

白昼夢はなんとか避け、『月光』を構えて美緒に反撃をする。美緒も『月光』を横に薙い

で『月光』同士で撃ち合い、肉体や装甲を削っていく。だが美緒には新しい機械翼がついており、それによる零距离のエネルギー弾雨を白昼夢に浴びせ、美緒は白昼夢の肩を掴む。

——『カインホクキエツア』の稼動限界領域を突破、修復不可能。機密保持の為自爆シークエンスに移行します。

「!?」

美緒は『カインホクキエツア』のメッセージに驚く。そして『カインホクキエツア』から美緒とコア2個が排出された。

「なっ！『カインホクキエツア』!?」

美緒が居なくなつた後も『カインホクキエツア』は白昼夢の肩をしつかりと握り、離さない。美緒は『カインホクキエツア』のコアを抱きしめ、海に落ちた。

残された『カインホクキエツア』と白昼夢は未だに動けないで居た。既に搭乗者が居ない『カインホクキエツア』は当然なのだが白昼夢は戸惑っていた。『生命戦闘体』である自身が無人であるとはいえI S 一機の拘束を解けないことに、心底驚いていた。

「（早くしないと……!）」

白昼夢は心の中で舌打ちをした瞬間に『カインホクキエツア』は内部から爆発し、白昼夢と『カインフィードバックヴォンデイン』を巻き込み、自爆した。

く花月荘作戦司令室本部く

あの後、海を走って戻って来た美緒を一番に見たのが真耶で、全身血塗れの状態で更に水の上を跳躍しながら走っている美緒を見てまず最初に驚いた時の声が出て、その直後に血塗れ状態の美緒を確認して悲鳴を上げて真耶は気絶した。

真耶の悲鳴を聞いて千冬を始め教師陣、専用機持ち全員、生徒達が集まり、一同は騒然としたのはまた別の話。

「それでだ。『カインフィードバックヴオンデイン』との戦闘で『カインホクキエツア』は自爆したと言うことなんだな？」

「はい、間違いありません。織斑先生」

美緒は先程の戦闘の詳細を報告していた。ただ、あの夢の中での出来事は話してはいない。

「そうか……報告ご苦労。さてと……千条院、お前は何時カラーコンタクトをしたんだ？」

「え？していませんが？」

「確認してみろ」

千冬はそう言うのと近くに居た女性教師からコンパクトを借りて、美緒に渡す。そして美緒が自分の顔を見ると瞳の色が変わっていた。左目は深^{スカーレット}紅右目は蒼^{ブルー}だったのが左目

は金色で右目が銀色に変わっていて、美緒自身が驚いていた。「とりあえずその瞳に関することは後日説明してもらおうからな」「わかりました」

美緒はどう説明しようかと悩みながら司令室を出て行った。

幼馴染と後日談3と

　　夜の海岸へ

　　美緒は人知れず夜の海を見る為に見ていた。その手には『カインホクキエツア』の口アが握られていた。

　　「あの夢は一体……それに心臓も何時の間にか修復されてるし……」

　　短い時間ではあったが『カインホクキエツア』は確かに『第二形態移行』^{セカンドシフト}をした。

　　それと同時に美緒の心臓のみが修復されていた。

　　「あの子達が……まさかね」

　　美緒はふとある考えが浮かぶが直ぐに捨て去る。それは美緒がありえないと直ぐに思ったからだ。だが事実はそうである。美緒自身は知らないが『カインホクキエツア』は確かに美緒の心臓だけを修復していた。本来ならば美緒の体にある全ての傷を修復しなかったのであろうがその時の状況が許さなかった。故に心臓だけを修復したのだった。

　　「(でも……なんで目の色が変わったのかな?)」

　　突然の身体的特徴の一つである瞳の色の变化、それに伴うナノマシンの活性化。これ

は一度本家に戻る必要がありそうだと美緒は思う。

「『カインホクキエツア』に新しい体を作ってあげないとね……」

美緒はポケットのの中から二つのコアを取り出してぎゅつと軽く握って星空を眺める。暫くすると後ろからぎざぎざと足音がする。美緒は振り返らずに声を掛ける

「こんな時間にどうしたのかな？ 一夏」

「いや、一泳ぎしようと思ってさ」

答えたのは一夏だった。美緒が振り返ると傷一つ無い水着姿であった。

「あれ？ 一夏、傷は？」

「ああ、『白式』が『第二形態移行』した時に傷が治ってた」

「そっか……一夏が無事で良かったよ」

「美緒の方はどうだったんだ？ 心臓貫かれたって聞いたぞ？」

「私も……『カインホクキエツア』が『第二形態移行』したら治ってたよ」

美緒がそう言うのと一夏は「不思議なこともあるんだな」と言う。

「美緒はどうするんだ？ 専用機無くなっちゃったし、することが無いだろ？」

「夏休み中に本家に戻ってこの子達の新しい体を作ることにするよ」

美緒は一夏にそう言いながら2個のコアを一夏に見せる。『第二形態移行』を果した

コアは力強い輝きを放っていた。

「一夏は夏休みの間、暇かな？」

「んー基本的にはな。それがどうしたんだ？」

「一夏の『白式』の燃費の悪さを克服できるかもしれないからね。もし良かったら私と一緒に本家に行かない？」

「本当か!？」

「うん。できるかもしれないだからあまり期待しないでね？」

「わかった」

一夏は美緒にそう返事をする。美緒は微笑んで一夏に抱き付く。

「み、美緒!？」

「んー♪一夏の体暖かい♪」

美緒はそう言つて一夏の胸板に顔を擦り付ける。

「ところで一夏あ……」

「どうしたんだ？」

「私達……恋人だよね……?？」

美緒の問い掛けに一夏は固まる……その問い掛けは一夏の予想外であつたからだ。美緒は一夏を見つめる。

その目は縋る様な寂しげな目であつた。

「どうなの……?」

「それはだな……彼氏として間違つた事をしちまうかもしれない……まだ俺も『恋』つて物がわかつてないんだ。だからそれでも良いのなら……美緒の『恋人』になつても良いか?」

一夏の言葉を聞いた美緒は目を大きく開けて涙を一筋流す。

「如何して泣くんのだ!」

「ごめんね……やつと……想いが通じたと思つたら……」

美緒そういつてぐしぐしと目を擦つて一夏に微笑む。

「悪いな……」

一夏はそう言つて美緒の頭を撫でる。美緒は気持ち良さそうに目を細めて為すがままとなる。

何時の間にか二人は海岸の傍にある岩の上に座っていた。一夏の肩に頭を預けて寄り添う様に美緒は座っていた。

「綺麗だね……」

「そうだな……こんな星空を見ると、人間の悩みなんかちっぽけに思えるな。」

「それは私も同感だよ……」

そのまま二人は互いの顔を見て、目を瞑り、そのまま唇を重ね合おうとした時、こつ

んと一夏の頭に当たる。一夏はもう一度試みるがこつんと当たる。不審に思った一夏は目を開けるとそこにはとつても見覚えのあるフィン状の浮遊物体が浮いていた

「……『ブルー・ティアーズ』……」

一夏はビットからレーザーが発射される寸前で避け、髪の毛を焼く程度に収まった。

「一夏……貴様あ……」

「ほう……」

「——よし、殺そう」

「一夏……何をしているのかな……？」

「ふふっ、うふふふふっ」

一夏が回避行動で避けて振り返った先には各々のI Sを展開させて怨念を漂わせるような怒気を纏っているのは箒、ラウラ、鈴音、シャルロット、セシリアだった。

「み、美緒っ！逃げるぞ！」

「えっあつ。きゃ!!」

一夏はいきなり美緒を抱える。その際に美緒は悲鳴を上げるが一夏は既に逃走を開始していた。

一夏の表情は必死だが美緒はただ可笑しそうに微笑んでいた。

第四卷（原作キャラ強化の巻）

幼馴染と本宅と強化と

（千条院家本宅）

八月のある日、美緒と一夏は千条院家の本宅に来ていた。

「へえ、ここが美緒の家なのか」

「うん、一夏はこっちの家は初めてだったよね？」

「ああ、……けどすげえ広いな」

一夏の言うとおり、本宅は広がった。突き当たりの壁まで大体100m以上ありそうで、突き当たりの壁が小さく見えていた。

「お帰りなさいませ、美緒様。そしていらっしやいませ、織斑一夏様」

「ただいま。言峰」

「あ、お邪魔します」

老執事……言峰が美緒と一夏に挨拶をし、美緒と一夏は挨拶を返す。

「言峰……例の物は？」

「工房に運び込んでおります。技術班も既に」

「そう……解ったよ。技術班に伝えて、『すぐにでも開始をする』って」

「畏まりました」

「それと移動用のを一機頼むね」

「はい、直ちに」

言峰はそう言うのと二人の許を去る。

「なあ、美緒」

「なあに？一夏」

「例の物って？」

「『白式』の燃費の悪さを解消するかもしれないパーツだよ」

「本当なのか!？」

「それをこれから……って来た来た♪」

そこに現れたのは一台大型バイクだった。旧世代の人気モデル『ハーレー・ダビットソン』の外装をそのまま使い、後輪の両サイドにブラスターをつけた物だ。

「うお!?!何だこれ!」

「屋敷内で使ってる移動用大型バイクだよ」

「色々と突っ込みたいが……やめといた方が良いか」

「そうだね♪さっ乗って?」

美緒は何時の間にか乗っており、一夏を後部座席に座らせる。

「しつかり掴まってね？」

「お……おう」

美緒はしつかりと一夏が掴まった事を確認してから一気にフルスロットルで走り始める。ブースターは使用せずに走っているため。最高速度は120km/hだがそれでもかなり速かった。目的の場所まで2分と掛からずに到着した。

「着いたよ〜♪って一夏。どうしたの？顔真っ赤にして」

「気づいてなかったのか!？」

それはそうだろう。何せ年頃の女子の腰に抱きついていたので。恥ずかしいとか柔らかないとか感じて真っ赤になるのは当然だった。

「それは兎も角、ここから地下に降りるよ」

目の前にあるのは極普通のエレベーターであった。美緒と一夏はそれに乗り、地下に降りた。その先にあったのは無数のISパーツであり、解析中の物や分解して構造を調べたり、改造中の物。様々な工程が見えた。

そして二人がエレベーターを降りると作業をしていた人達が作業を止めて美緒と一夏の許に集まる。

「おお！美緒様！この少年が例のですな!？」

「うん、そうだよ。でもちよつと待って、班長は？」

「ここにいるぞ〜」

人垣の中を掻き分け、二人の前に現れたのは筋骨隆々で身長190cmは超えるだろう大男だった。

「おう！嬢ちゃん。久しぶりだな！3年振りか？」

「うん、大体その位だね。あ、彼が織斑一夏。世界で唯一ISを動かせる男だよ」

「どつ、どうも」

「おう！俺は千条院家IS技術班長の天童豪だ。今回一夏君のIS『白式』の担当になったから宜しくな」

「彼はIS発表後にずっと研究を重ねて来た一流の技術者で、工学部門の天才でもあり。私の前専用機の『カインホクキエツア』と『カインフィードバックヴォンディン』の製作者だよ」

ガツハツハツハ！と天童は豪快に笑い、美緒の髪の毛をくしゃくしゃと乱暴に撫でる。

「照れるじゃねえか嬢ちゃん！それに東さんの協力があつたからあいづらができたんだ。俺一人の力じゃねえよ」

「え？あの……東さんって？」

「一夏は天童が言った一言に食い付く。」

「なんだ一夏君は知らないのか？」

「い、いや。束さんは知ってるけど……」

「一夏は豪さんと束お姉ちゃんが、どうして知り合いなのかを聞きたいんだよ」

それに合点がいった豪は語り始める。

「俺と束さんが出会ったのは嬢ちゃんの専用機『カインホクキエツア』とその予備機『カインフィードバックヴオンデイン』を作る時でなあ。コアを2個搭載するなんて初めてだから当時嬢ちゃんが束さんと呼んだわけよ。その際に一緒に作業しながら話をしたら意気投合してな……嬢ちゃん達には及ばないが少しだけ信頼関係が出来たわけさ。偶に技術的な事を教えてもらってる」

「一応、束お姉ちゃんのスポンサーでもあるからね。千条院家は……その繋がりでもあるんだ。さっ早く『白式』の強化と改造を始めよう♪」

美緒は一夏にそう言っつて、作業場に連れて行った。

く千条院家本宅前く

「……ここが美緒さんのご実家………ですか？」

「ああ………みたいだな」

「予想外ね………これは」

「凄いね……」

「昔一度見たが……やはりでかいな」

セシリア、ラウラ、鈴音、シャルロット、箒が来ていた……美紗緒は千条院家の生命体研究所に行っている為、ここには来てない。さて、何故この五人が来ているかと言うと朝早く美緒と一夏が出かける所を目撃したからだ。そこからずっと尾行を続けているわけだが美緒は気付いてはいるものの、あえて放置していた。

「さて……これからどうする」

「密かに潜入……は無理そうですね」

「このまま待つのも癪だしね」

「でもどうするの？このままだと一夏と美緒が……」

シャルロットの一言で全員が紅くなるがそこはご愛嬌だろう。

「仕方ない……」

箒はそう言うかと普通に呼び鈴を押した。箒の行動を止めれなかった三人は箒に問い詰める。

「何をしらっしやるの!?!箒さん!」

「そうだぞ!私達が尾行してるのを知られたら……!」

「そうよ!何してるのよ!」

「えっと、落ち着いて？」

シャルロットだけが三人を落ち着かせようとする。だがその間に呼び鈴の近くに
あつたスピーカーから声がした。

『はい、どちら様でしょうか？』

「篠ノ之箒ですが……」

『御久し振りで御座います。箒様、美緒様が御待ちで御座います。他のご学友様とご一緒に来てください』

スピーカーからの声が途絶えると同時に門が開く。セシリア、ラウラ、鈴音、シャルロットは呆気にとられ、箒はすたすたと歩いていく。それを追いかける様に四人はついていった。

そして五人が通された場所は応接室のようだった。通された五人は出された紅茶を飲み、待つていた。

ガチャリと音がして五人が音がした方向を向くと、そこには一夏と美緒が並んで入ってきた。

「やっ♪漸く来たんだね♪」

「よお……美緒の言つた通りだったな」

美緒と一夏は五人が座つてるソファーとは反対側に座る。

「みんなは私と一夏がどうしてここに来たのか知りたそうだね？」

五人はコクコクと頷く、美緒その様子にコロコロと笑った。

「ふふ♪見せてあげるよ♪でもシャルロットちゃんはちよつと残つてて？ビジネスの話があるからね……言峰？そこにいるんでしょ？」

「はい……美緒様」

何時の間にか言峰が美緒の背後に現れていた。一夏を含めた六人は驚く。

「みんなを技術工房に案内してあげて」

「畏まりました……では皆様こちらに」

言峰は一夏、セシリア、箒、ラウラ、鈴音を連れて応接室を出た。

「さてと……シャルロットちゃん」

「それで？ビジネスの話って……？」

「簡単な話だよ、シャルロット・デュノアさん。私の家の専属IS操縦者にならない？」
美緒のその言葉にシャルロットは驚く。

「シャルロットちゃんの事情は全て知ってるよ。私の家の専属になってくれれば、ありとあらゆるデュノア社からの干渉から守ってあげる」

シャルロットはその提案に対してのデメリットとメリットを考える。自身に対しては一夏と離れずに済む。そして専用ISをもらえる可能性を考えた。しかしデメリット

トが見つからない、対して美緒の方のメリットとしてはIS操縦者が手に入ることのみ。デメリットは情報が流出する事のみ……シャルロットはそんなスパイみたいなこととはしないが……

「でもどうしてこんな話を？千条院家としては関係のない話でしょ？それに美緒にはメリットがあまりにも少なすぎるよ」

「確かに……千条院家としてははつきり言えばどうでもいい事だけだね。でも私はそうじゃない。親友とも言える子が困っているのなら私は迷わず手を伸ばして助けるよ」

シャルロットは美緒の言葉を聞いてクスリと笑う

「美緒は損な性格をしてるね？」

「あはは……よく言われるよ。それじゃ、宜しくね。シャルロットちゃん」

「こちらこそ宜しくね」

美緒とシャルロットは互いに握手をする。

「それじゃ、そろそろ演習場に行こうか」

「演習場？何かあるの？」

「うん♪まあ行ってからのお楽しみだよ♪」

美緒はそう言って、シャルロットと共に演習場に向かった。

（演習場）

美緒とシャルロットが着くと既に一夏達が来ていた。一夏は既に白式を展開済みだが形状が少し変わっていた。大型ウィングスラスターが更に大きくなっている、背中に装甲と小型スラスターが追加されて、腰部に装甲が追加されていた。

「一夏、『白式』の方は終わったんだね？」

「ああ、これからテストを行うんだが……まだ何にも無くて」

「そっか……じゃあ慣らしも兼ねてターゲットを破壊してね？」

美緒はそう言つて、コンソールを呼び出して10機の球体状のターゲットを呼び出す。そのターゲットはその場を回ったり、一夏の周りを回ったりと統一性の無い動きをする。

一夏は『雪片式型』と『雪羅』を構えて突撃する。『雪羅』を射撃形態に移行して、荷電粒子砲を放つ、避け切れなかった1機に当たり、爆散する。

「どう？一夏？エネルギー消費量は少ないでしょ？」

『ああ！確かに前より消費量がかなり減ったのと同じ威力だ！』

「今度は新武装『雪月』^{せつげつ}を使ってみて」

『解った！行けっ！『雪月』！』

『白式』の上部大型ウィングスラスターが開き、中から二等辺三角形のビットが6機出てくる。そのビットは頂点から側面に向かってエネルギー刃を展開してターゲットを6

つ切り落とした。

「よし♪最後に『零落白夜』を使って残りのターゲットを破壊してみて」
『解った！行くぞ！』

一夏はそう言うのと『零落白夜』を使う、その証拠に金色のオーラを一夏が纏い、
『瞬時加速』で瞬間に残りの3機を切り落とした。

「は〜い♪テスト終了〜♪一夏。戻ってきてデータ見せて〜♪」

美緒は一夏にそう言つて一夏が戻ると美緒は稼動データを見ていく。

箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラがわいのわいのと集まってその日の演習
場は賑やかに賑わっていた。

幼馴染と本宅と強化とその2

く千条院本宅執務室く

一夏達がお昼を取っている間に美緒は執務室でとある人物と通信をしていた。

「それで？貴方は渡さないと？」

『当然だ！あれは私の物だ。どんな風に使おうと私の勝手だろう！』

「へえ……そうなの、まあいいよ。私はあの子が欲しいからこうやって色々と用意したのよ」

美緒はそう言うのと画面越しではあるが第三世代機の基礎データを表示する。

『こっつ、これは!？』

「あの子を渡せばそのデータをあげる。どう？欲しくないの？『イグニツション・プラン』から外されたデュノア社長？」

そう、先程から美緒と通信していたのはシャルロットの父親だ。

「私としては別にあげなくてもデュノア社を潰せば別に問題はないけど……穏便に済ませるに越したことはないからね。それでどうするの？」

『良いだろう……早くよこせ』

その高圧的な物言いに美緒はイラつくも我慢をしてデータを送信した。

「それではあの子は私が貰いますね」

『勝手にしろ』

そういつてデュノア社の社長は通信をきった。その直後に美緒は溜息を漏らす。頃合を見計らった様に言峰は紅茶を美緒の前に置く。

「美緒様、どうぞございましたか？」

「問題ないよ。まあ送ったデータはフェイクでウイルス付きだから、もうデュノア社は終わりだよ」

美緒はさらりととんでもない事を言うがそれはある意味当然であり、調査に基づいた当然の制裁であつた。

「言峰」

「承知しております。美緒様」

言峰はそう言うのと執務室から出た。美緒はその後モニターを出し、技術班に繋げる。「豪、はいるかな？」

『これは美緒様……今班長を呼んできます』

そう言つて、モニターに出ていた男は、一旦席を外すと豪がモニター前の席に座る。『嬢ちゃん？一体どうしたんだ？』

「以前から製造してた、あの機体は今何処まで出来てるの？」

『あとは……試運転して微調整すれば完成だな』

「なるほどね……それじゃあ、演習場に持ってきてね」

『おうよ。搭乗者は決まってるんだろ？』

「勿論、千条院家の専属IS操縦者になった子だよ」

『なるほどなあ……まあ良いけどよ。専属は何人目だ？』

「あの子が初めてだよ」

美緒はそう言うのと別のモニターを出して演習場の様子を見る。そこには新装備を使い、健闘している一夏と多少は戸惑っているが有利なのは変わらないラウラがいた。

「巧く新装備である『雪月』を使いこなしてるね……一夏は」

『みてえだな。流石あの織斑千冬を姉に持つ弟だ』

「だけどやっぱりビットを使ってる間は……」

『ああ、止まってやがるな。素の状態だとそれが限界か……』

「あの子でさえもきつとそうかもね……それは兎も角、言峰。演習場にあの機体を運び込んでおいて」

『はいよ。わかった』

美緒はそう言うてモニターを全て切り、演習場に向かった。

〈演習場〉

美緒が演習場に来ると、一夏とラウラの模擬戦は未だに決着が付いてなかった。

「そこだあ！」

「まだまだ甘いぞ！一夏！」

一夏が『雪月』を射出して、ラウラの『ワイヤーブレード』を切断するも、
アクティブ・イナードナル・キャンセラ
 『A』 I C』によって『雪月』は止められる。止められた『雪月』を一夏はそ

のままにしておき、『イクニツシヨンプースト瞬時加速』を使い、『雪片式型』でラウラに攻撃を仕掛けるも
アクティブ・イナードナル・キャンセラ
 『A』 I C』を『雪月』から一夏に切り替え、離脱を図る。

だが、『A』 I C』の束縛から外れた『雪月』は再度、ラウラを斬り裂かんとするも、残っていた『ワイヤーブレード』によって弾かれる。

「は〜い♪そこまでっ！」

美緒が大きな声で言うのと二人は動きを止めた。互いの首筋に『プラズマ手刀』と『雪月』の刀身が添えられていた為、引き分けとなり。二人はISを解除して、美緒の許に歩く。

「どうしたんだ？美緒」

「実はね、今からとあるISのテストをここで行うんだ。IS名は『セレスティアル・ヴァーミリアン朱』の『天空』
 『カインホクキエツア』の機動以外はやや劣るけど現行ISを遥かに上回り、『紅椿』を

超える第四世代型 I S だよ」

美緒が説明し終わると装甲を開放した状態で地下からの搬出口から出てくる。一夏達は皆、驚く……『紅椿』は東特製の I S であり、美緒の前専用機『カインホクキエツア』よりも機動以外では劣ると言われれば、その規格外の性能を容易に連想させた。

「それじゃあ、シャルロットちゃん。パーソナライズとフィッティングを始めるよ♪」

美緒の言葉にシャルロットを除く、全員が驚く。それは当然だ。フランス代表候補生であるシャルロットに千条院製の I S を渡すというのだから、規格外の I S をフランスに渡すと言うことは世界のパワーバランスが崩れる可能性が出てくるのだ。だが既に存在していたものの、自爆をした『カインホクキエツア』、現在でも存在していて、フアントムタスク『亡国機業』に奪取された『カインフィードバックヴオンデイン』、美紗緒の専用機『カグツチ』だけでも脅威的なのにさらにもう一機追加されるのだ、はつきり言って異常事態を通り越している。

それにいち早く気付いたラウラは声を荒げて言う。

「どういうことだ!? シャルロットはフランス代表候補生だろう! 何故その規格外の機体を渡すんだ!」

「ふふ♪ラウラの言うことも解るよ。鈴ちゃんやセシリー、箒ちゃんの言いたい事もね♪でもね。既にシャルロットちゃんはフランス代表候補生ではないよ」

「「「はああ!?!」」」

それを聞いた一夏達は頭の上に『?』マークをしきりに飛ばす……様な幻覚が見える程に混乱していた。

「まあその話は置いて、シャルロットちゃん。早く乗って〜?」

「うん、わかった」

シャルロットはそう言つて、『セレスティアル・ヴァーミリオン』に乗る。その後美緒は『セレスティアル・ヴァーミリオン』にコードを繋げて作業に入る。その速度は以前のよりも速く、数分で終わらせた。

「はい♪フィッティング終了♪あとはパーソナライズを自動処理に任せておけば、すぐに終わるよ♪」

美緒はコードをしまいながら言う、一夏達は『セレスティアル・ヴァーミリオン』を見ながら美緒に質問をする。それに美緒は丁寧に答えていると通信が入る。

『嬢ちゃん、聞こえるか?』

「天童? どうしたの?」

『例の機体が完成したぞ』

「それは本当!?!」

『本当だ』

「直ぐに持ってきてー！」

『あいよ』

美緒が焦った様に叫び、天童が返事をして通信を切ると先程『セレスティアル・ヴァーミリオン』が出てきた搬出口から機械的な装甲と洋服が一体化した不思議な物が出てくる。

「これが……」

「なあ、美緒。そのISはなんだ？」

一夏は代表をして美緒に聞いた。そのISらしき物の形状は不可解で、洋服をかけるハンガーに胸の中央が菱形に開いた中華風ワンピースドレスがかけているが、スカート部分に装甲が取り付けられていて、その下に太腿まであるソックスと脹脛の半ばまであるウエスタンブーツ、それに付く様に細身のアームガードが浮いていた。

「これは私の新しい専用機『アルテミス』だよ」

その言葉に一夏達は言葉を失う。それはそうだ、僅か一ヶ月で新型ISを製造したのだ。その驚異的な技術力に度肝を抜かれた。

「まあ、これの元となった設計図を前に嬢ちゃんが見つけたからこんな早く製造できたからな」

全員が振り返るとそこには豪が居た。豪は誇らしげに『アルテミス』を見つめる。

「しかし、こいつあ……はつきり言つて凶悪としか言い様が無いな。そう思うだろ？嬢ちゃん」

「まあね……設計図的に『カインホクキエツア』、『カインフィードバックヴォンデイン』の後継機なのは解つてたけど……。私の所の技術者は変態しかいないのかな」

「それは、俺も含まれてるのか？」

「当然でしょ？何処の世界に超小型核融合炉を搭載するISがあるの？」

美緒の言葉に豪と美緒以外の全員が言葉を無くす……。それは当然だ。核融合炉を搭載すればエネルギーの減少を気にせず高火力EN武器を使い続けることができ、メンテナンスを除けば操縦者の体力と気力が続く限り戦闘を行えるのだから……。二人はその重要な事実を無視して話を続ける。

「それじゃあ、嬢ちゃん。パーソナライズとフィッティングを始めるぞ」

「わかったよ」

美緒はそう言つて服を脱ぎ始める。その美緒の行動に驚き、箒、ラウラは一夏を殴り、気絶させる。

シャルロット、鈴音、セシリアは美緒を止めようとするが既に服を脱ぎ終え、中に着ていたISスーツの姿になる。美緒のISスーツはかなり細く、柔軟性が有り、それでいて切れにくい強靱なワイヤーで結ばれた三角ビキニとローライズと言うほぼ水着で

通用する姿だ。

「みっ、美緒!?!いきなり脱ぐんじゃないわよっ!」

「そうですわ!何を考えているのかしら!?!」

「女の子としてそれは駄目だよ!」

「?別にISスーツ着てるんだから問題ないはずだけど?」

美緒はどうやら本気で解らない様だ。箒、鈴音、セシリア、シャルロット、ラウラは絶句する。

絶句している5人を放って置いて、美緒は『アルテミス』を装着すると、豪はコンソールを呼び出し、指の上に2枚、指の下に2枚のキーボードと空中投影ディスプレイを8枚呼び出す。

「まあ俺なんかは、嬢ちゃんのISスーツ姿なんて見慣れてるから別にどうでもいいがな、まあ羞恥心ぐらい持って欲しいのは確かではあるな」

豪の言葉を聞いた美緒はますます解らないといった顔をする。そうこうしてるうちに美緒のパーソナライズとフィッティングが終わる。それと同時にシャルロットのパーソナライズも終わる。

「よし、これで2機のパーソナライズとフィッティングは終わりだな。後はファースト、ソフト第一形態移行を待つだけだ」

豪はそう言うのと左胸ポケットから煙草を取り出し、右胸ポケットにあったジッポを取り出すと直ぐに火をつけて煙を吐き出す。

「ふう……それじゃ、俺はまた工房に戻るぞ」

「うん、ありがとう……。ってちよつとまつて、ファースト・シフト第一形態移行をスキップして第二形態移行《セカンド・シフト》に入ろうとしてる!？」

「何!？」

美緒の驚いた声に豪が振り返ると『アルテミス』の背部にあつた、小型スラスタアの噴射口の両サイドから悪魔を連想させる機械の翼が4対生える。豪はつけたばかりの煙草を口から零す。

「こいつぁ……驚いた……」

「初期化しなかったから……かな?」

「さあな、それは俺にもわからん。だがそれだけこいつらが嬢ちゃんに答えようとしてるのかもな」

豪はそう言つてその場を後にした。美緒はとりあえず『アルテミス』を待機状態にする。

「ちよつとハプニングが起きちゃったけど……。シャルロットちゃんの新I Sのテスト始める?」

美緒の提案に一夏達は頷くのがだった。

美緒とアルテミスの解説と

く千条院家本宅地下工房く

シャルロットのテストを終えて美緒は研究工房に来ていた。それは『アルテミス』が
ファーストシフト第一形態移行を通り越して第二形態移行セカンドシフトを起こしたからであった。

「それでどうなの？原因はわかった？」

「これが全くと言っていいほどわからねえな」

美緒と豪の前に無数の立体映像のディスプレイが浮かぶもどれも原因不明と表示されており、コアの解析も含めて全て『ERROR』と出る。これには豪と美緒は頭を悩ますしかなかった。

「ねえ、豪」

「ん？なんだ、嬢ちゃん」

「世界での第二形態移行ファーストシフトの定義ってコアが自己の確立と操縦者との同調シンクロだったよね？」

「ああ、そうだ。第一形態移行は自己の確立と同調で、第二形態移行は自己進化と自己追加武装の生成だ」

「ということは……。第一形態移行は既に終わってるってことじゃないかな？」

「どういふことだ？ 嬢ちゃん」

「つまりね？ 『アルテミス』のコアは『カインホクキエツア』のコアを使ってるでしょ？ それも初期化していないから、自己の確立と私との同調は終えてるよね？ それを考える……。第一形態移行は不要だったってことじゃないかな。通常なら初期化をしてから新しい機体に搭載するからね。それを含めるといきなり第二形態移行に移行したのは不思議じゃないよ」

「なるほどな……それなら合点はいくが……。機体との同調はどうなる？ 第一形態移行にはそれも含まれているんだぞ？」

『アルテミス』が何か拒否反応を起こした事ってある？」

「ああ、あつたぞ」

「それはいつ？」

「確か……超小型核融合炉を積む時だったな……。その後もう一度やったら……って。おいおいまさか!？」

美緒は豪が辿り着いた答えに肯定する様に、頷く。

「そんなことがありえるのか!？ 自身の肉体が構成中に同調する。なんて事が!」

「東お姉ちゃんが作った物だからね。ありえないことはありえないよ」

それに、と美緒は続ける。

「今でもコアは自己進化を続けてる。それが何よりの証拠であり、証明に繋がるよ」
「そう考えるとコアってえのは……まるで生き物のようだな」

豪の言葉に美緒は肯定をして、『アルテミス』を待機状態に戻す。『アルテミス』の待機状態は、黒色のハーフフィンガーグローブだ。

美緒は一夏達のところに行くと言えて、工房から出た。

幼馴染と本宅と試験と

（演習場）

美緒が演習場に着くと、セシリア、鈴音、ラウラに捕まる。

「え？ええ？みんなどうしたの？」

「美緒！私の I S も強化してくれ／くださいまし／しなさいよ！」

「あはは……。みんな落ち着きなよ」

「そうだぞ、美緒が困ってるじゃないか」

突然の事で困っている美緒を一夏とシャルロットは助けようとするが、3人はそれでも止まらなかった。

「一夏は良いじゃない！一夏は強化武装とエネルギー問題を解決できて！」

「シャルロットは新しい I S を貰ってるからな」

「わたくし私達の I S も強化して欲しいですわ！」

3人の本音は羨ましいと言う事だろう。一夏の『白式』は第四世代機に加え、エネルギー消費を抑える為の強化を施され、追加武装として無線誘導兵器を搭載し、より高性能の機体に仕上がっている。

シャルロットは千条院家製の第四世代機を渡されている。一夏の場合はその特異点であり、イレギュラーが故に、早急に力をつける必要があるからだ。シャルロットの都合は千条院家の専属操縦者になつたから当然だ。さらに、裏取引があつたとはいえ、デュノア社は千条院家に倒産に追い込まれている。

それを知らない3人は強化して欲しいと言う。

「一夏とシャルロットちゃんの場合は特殊だつたからね……。だから私の家の専属IS操縦者になつてもらつたけど、セシレイ、鈴ちゃん、ラウラは正式な国家代表候補生でしょ？だから私は3人のISを強化することは出来ないよ」

美緒がそう言うのと、3人は一旦黙る。

「私の家でセシレイ達のISを強化するという事は、千条院家がこの国に肩入れをすると言う事でもあり、祖国を裏切ると言う事でもあるんだよ……。？貴女達にその覚悟がある？大切な物を捨て、親しい人達を裏切り、敵になる覚悟が」

美緒の言葉はとても重かつた。一時的な感情で言つたとしても祖国を裏切ることとは出来ない和美緒は思っていたが、それを裏切る声が上がつた。

「私なら別に構わないわよ？中国に未練とかないし」

そう言つたのは鈴音だつた。美緒はその言葉に驚き、目を剥く。

「え？鈴ちゃん……。中国に未練はないの？」

「あつたとしても母さんだけだから、別に大丈夫よ」

「……………本当に良いんだね？小母さんにも会えなくなるんだよ？」

「良いわよ。母さんの事だから元気にやっていけるだろうからね」

美緒と鈴音は互いを見つめる。すると、美緒がふふつと笑う。

「わかつたよ、鈴ちゃん。『甲龍』の強化をしてあげる。その代わり、今日から貴女は私の家の専属ＩＳ操縦者になつてもらうからね？」

「わかつたわ、これからも宜しく」

美緒と鈴音は握手をする。そして、美緒はセシリアとラウラの方に向く。

「２人はどうするの？祖国に牙を向けれる？」

「そ、それは……………」

美緒の問い掛けにラウラとセシリアは口ごもる。昔からの美緒を知る筈、一夏、鈴音は溜息を吐き、シャルロットは見守っている。

「はあ……………まあ良いかな。ラウラとセシリィのＩＳも強化してあげる」

セシリアとラウラの表情が少し、綻ぶが「だけどね……………」と美緒は続ける。

「私に何でもいから一撃与えられたらＩＳを強化してあげる。だけど、与えられなかつたら強化はしない。それでどう？」

美緒の提案にセシリア、ラウラは同意する。

「それじゃあ、ちよつと移動しよう」

3人は一夏達から300mぐらゐまで離れる。

「それじゃ、ISを起動して」

美緒はそう言う、『アルテミス』を展開し、セシリアとラウラも『ブルー・ティアーズ』と『シユヴァルツエア・レーゲン』を展開する。

セシリアとラウラは構えるも、美緒は構えていなかった。上体を倒し、両手を垂れさせた油断しきっている格好になった。その格好の美緒に疑問を持ちつつも、セシリアは『スターライトmkⅢ』を美緒に向けて放つ、それを美緒は右腕の多機能武装腕ダクテイカルアームを起動させて、大型ビームブレード『月光零式』の刀身を出現させ、BTレーザーを弾いた。その直後にラウラは大型レールカノンダクテイカルアームを美緒に向けて2連射をする。今度は左腕の多機能武装腕を起動して、『グングニル』の砲身に変形させて、青白い閃光を放った。大型レールカノンの砲弾は蒸発し、ラウラとセシリアに向かう。

2人はその閃光に驚くも、避けた。

「なっ！荷電粒子砲ですの!?!」

「くっ……」

セシリアはそう言いつつも、ビットを四基射出し、様々な方向から、BTレーザーを撃ちながら、ラウラもワイヤーブレードを射出して、美緒を捕獲しようとするが美緒は

その場から離れ、スカートアマーマーを分離して、多機能武装ビツト『ツヌグイ』にする。その数は16基と多い、美緒は『ツヌグイ』を剣戟形態8基、射撃形態8基に分け、それぞれを4基ずつセシリアとラウラに向ける。

剣戟形態の『ツヌグイ』は音速の速度でセシリアとラウラを斬り裂かんと向かう。射撃形態の『ツヌグイ』は避けた後の隙を突く様にハイレーザを放つ、ラウラは剣戟の『ツヌグイ』を避けた後、プラズマ手刀を展開して、ハイレーザを弾く。

セシリアはラウラと同様に剣戟の『ツヌグイ』を避けるが、射撃の『ツヌグイ』のハイレーザを弾くのではなく、自身のビツトにて相殺する。

だが美緒はその間に背部にある、『八叉鴉』ヤタガラスを展開、その武装プラットフォームから収束荷電粒子砲ビツト『シャツテン』を8基分離させ、近くに漂わせながら、『月光零式』を展開していた右腕の多機能武装腕を『グングニル』の砲身に変更して、両腕を前に突き出し、それと同時に『ツヌグイ』が離れる。

それを不審に思ったセシリアとラウラは美緒の方を見ると。

—— 警告！敵IS一斉発射体勢に移行。緊急回避を要請！

—— 警告！敵IS一斉発射体勢に移行。緊急回避を要請！

『ブルー・ティアーズ』と『シユバルツェア・レーゲン』から警告が鳴り響く。その場から離れようとするも、射撃体勢に入っている『ツヌグイ』16基と『シャツテン』8基

が周りを囲む、更に『アルテミス』自体も『グングニル』と『八叉鴉（ヤタガラス）』を
発射体勢にしており、何時でも撃てる状態にあった。

「チエツクメイトだよ……二人とも」

18門の荷電粒子砲から青白い閃光と16基のビットから紅い閃光が放たれ、ラウラ
とセシリア、『シャツテン』と『ツヌグイ』を爆煙が蔽い、見えなくする。美緒は『シャツ
テン』と『ツヌグイ』を戻し、『アルテミス』に接続させた。この程度では墜ちていない
と美緒は確信していた、それを証明するかのように『アルテミス』から警告が出された。

——警告！——後方から小型無線誘導兵器の熱源とエネルギー収束を確認

！

その警告が終わると同時に、いつの間にか射出されていた『ブルー・ティアーズ』か
らBTRレーザーが放たれるも、美緒はそれを軽く上昇することで避けた。上昇した直後
に、ラウラが『イクニッション・ブースト瞬時加速』を使い、美緒の懐に入る直前にプラズマ手刀を展開して、
懐に入ると同時に突きを放つ。

「おおおお！」

「くっ！」

美緒は左腕の多機能武装腕を『グングニル』から『月光零式』に切り替え、プラズマ
手刀を防ぐ。空いた右腕の『グングニル』で零距离の荷電粒子砲を放とうとするが、『プ

ルー・ティアーズ』の横槍によつて放てず。距離をとつた。それを追撃する様にラウラは大型レールカノンを放ちながら、ワイヤーブレードを向かわせ、セシリアは『スターライトmkⅢ』で美緒を狙撃する。

それを美緒は避け、『ツヌグイ』を分離させ、射撃形態にし、ありとあらゆる方向からハイレーザを放ち、その余波から『ブルー・ティアーズ』と『シュヴァルツエア・レーゲン』のハイパーセンサーにノイズが走る。だが2人はそれを無視し、セシリアは『ブルー・ティアーズ』で美緒を牽制しながら『ツヌグイ』を落とす。ラウラはプラズマ手刀、ワイヤーブレードで接近戦を挑み、『アクティフ・イナード・キャンセル』『A』『I』『C』を使う機会を伺う。だが『ツヌグイ』によつて思う様に『アクティフ・イナード・キャンセル』『A』『I』『C』が使えない。それは当然でもあつた、美緒はそれを一番警戒しているからこそ、『ツヌグイ』を使い、『アクティフ・イナード・キャンセル』『A』『I』『C』を使わせないようにしているからだ。

そして美緒は『ツヌグイ』の残量ENを見て、呼び戻す直前に『シャツテン』を分離させる。入れ替わるようにラウラ、セシリアに『シャツテン』を向かわせ、『ツヌグイ』を腰部に接続させて、ENを回復させる。

ラウラは再度『イグニッション・ブースト瞬時加速』を使い、プラズマ手刀を両腕に展開すると、美緒の脇腹を狙い、放つ。その攻撃を美緒は『グングニル』から『月光零式』に変え、防ぐ。しかし、それは悪手でもあり、油断でもあつた。

「捕まえたぞ！美緒！」

「くっ！油断した……」

「ラウラさん！そのまま、押さえてくださいまし！」

セシリアの声に呼応する様にラウラは、ワイヤーブレードで美緒の両手を縛り、離れない様にする。そして、セシリアは『スターライトmkⅢ』を構え、美緒を狙撃する。だが美緒は『八叉鴉（ヤタガラス）』の荷電粒子砲をセシリアに向けて、収束荷電粒子砲を放つ、BTレーザーは収束荷電粒子砲は拮抗することも無く消えた。

EN残量が稼動限界域に来ていた『シャツテン』を『八叉鴉』の武装プラットフォームに戻した直後に美緒は体を動かさなくなった。

「なっ!?!」

「漸く止められたぞ……!」

何時の間にかラウラは左目の眼帯を外し、『ヴオータン・オージエ越界の瞳』が輝いていた。

「ここで『アクティブ・イナードナル・キャンセラA I C』とはね……。やっってくれるよ」

「ああ……ビットが全て戻るのを待っていたから……。以前美緒にやられた事を覚えていたからだな」

「なるほどね……。けどっ!」

美緒はラウラの作戦を素直に評価した直後に『アクティブ・イナードナル・キャンセラA I C』を強引に解いた。

ラウラはそれに驚き、一瞬、硬直する。美緒はそれを見逃す筈も無く、爪先から脚撃用大型ビームソード『月光』の刀身を出して、ハイキックを繰り出す。ラウラは避けきれずに直撃してしまう。『絶対防御』が発動して大きくシールドエネルギーを削られる。

——バリエーション貫通、ダメージ300。シールドエネルギー残量27。実体ダメージ、レベル中破

『シュヴァルツエア・レーゲン』からダメージ報告の直後に、ラウラは演習場の端ギリギリまで飛ばされる。美緒は直ぐに両腕の『月光零式』を『グングニル』に変更、その際に左腕の『グングニル』はAM射撃形態に移行し、分間30発のグレネード弾を発射し、右腕の『グングニル』は荷電粒子砲を放つ。

セシリアはグレネード弾と荷電粒子砲を避け、『ブルー・ティアーズ』を展開して、ラウンドの方向から美緒にBTレーザーを放つ、撃ち終わると同時に『ブルー・ティアーズ』を戻し、『スターライトmkIII』を構えて狙撃する。

美緒は避けつつも当たりそうな物は左腕の『グングニル』を大型ENシールド『アイギス』に変えて防ぐ。それと同時にBTレーザーは跳ね返り、セシリアの元に戻る。

セシリアはそれを少し驚くも、直ぐに避け、『ブルー・ティアーズ』を射出して多角同時攻撃を行う。それを美緒は後退することで避け、右腕の『グングニル』をEN射撃形態に移行して、荷電粒子砲を放つ、だがそれは誰もいないところであった。

「何処に撃ってるんですの？美緒さん」

「ふふ♪見れば解るよ……はあああ!!」

セシリアの問い掛けに美緒は答えると、荷電粒子砲を放ちながら、強引に腕を振るって荷電粒子砲を曲げた。今度こそセシリアは驚き、動きを止める。それによつて『ブルー・ティアーズ』はセシリアの制御下を離れ、墜ちて行く、その下に美緒の荷電粒子砲が通り、射出していた『ブルー・ティアーズ』を全て破壊した。その直後に美緒は荷電粒子砲を止め、『ツヌグイ』を射出し、全基をセシリアに向け、多角波状攻撃を行う。

セシリアはそれを全て避け、『ツヌグイ』を撃ち落していく。美緒自身も左腕の『グングニル』をAM射撃形態からEN射撃形態に移行させ、『八叉鴉（ヤタガラス）』の8門全てを拡散荷電粒子砲に変え、撃ちだす。

それをセシリアは避けるが、砲撃は近くにあつた『ツヌグイ』、『シャッテン』全てを破壊する。

美緒は右腕の『グングニル』を『月光零式』に移行させ、左腕の『グングニル』で荷電粒子砲を撃ちながら、セシリアに近付く。

セシリアはその砲撃を避けながら『スターライトmkⅢ』を撃ち、美緒との距離を離そうとするが一向に距離が広がらず、『スターライトmkⅢ』のエネルギーが無くなる。

「弾切れですの!?!こんな時に!」

セシリアは『スターライトmkⅢ』を粒子に戻し、『インターセプター』を転送して、握る。それを見た美緒は左腕の『グングニル』を『月光零式』に移行させ、両足にも『月光』を展開して『瞬時加速』を使い、一気にセシリアとの距離を詰める。

抵抗とばかりに虎の子でもある残り2基の『ブルー・ティアーズ』の弾道型が^{ミサイル}発射されるも、すぐに両断され、美緒の背後で爆発が起きるも、美緒はそれを無視してセシリアに斬り掛かる。セシリアはそれを『インターセプター』で辛うじて防ぐも、両手両足から繰り出される斬撃と脚撃を防ぎきれずに『インターセプター』が弾かれ、粒子になり、消えた。

「これで……終わりっ！」

美緒はそう言って、横に薙ぎ払おうと構える。

『勝者！セシリア・オルコット、ラウラ・ボーデヴィツヒ！』

その言葉に美緒が硬直して後ろを見ると、ラウラのワイヤーブレードの先端が『アルテミス』の背部に刺さっていた。

「あーあ……負けちゃった」

美緒はそう言って地上に降り、『アルテミス』を解除する。それに続く形でセシリアも地上に降り、解除する。ラウラも既にISを解除しており、2人が美緒の前に来る。

「それじゃあ、約束通りに、2人のISを強化してあげる」

美緒の言葉にラウラとセシリアはほっと胸を撫で下ろす。それを美緒はくすりと笑って、その場を後にする、その後を一夏はこつそりと着いていった。

更衣室で I S スーツを脱いで、普段の服装になり、更衣室から出た美緒を一夏は呼び止めた。

「よう、美緒」

「あつー！一夏♪」

美緒は一夏を視認すると、抱き付く。それを一夏は難なく受け止め、2人はこつそりとキスをする。

「ん……」

数十秒はそのまま居て、口を離す。

「それで……一夏はどうしてここに？」

「ああ、セシリアとラウラとの模擬戦で最後、手を抜いただろ？」

「まあね、2人がどれぐらい本気なのか見たかったからね♪だから最後まで諦めなかった様だから最後の一撃をあえて受けた訳♪」

「なるほどな、まあ余り無茶するなよ？」

「解ってるよ♪それじゃ、そろそろ行こう♪」

一夏と美緒は手を繋いで皆の所に向かっていった。

幼馴染と晩餐会と

〔千条院家本宅食堂〕

「まずは皆、お疲れ様でした♪今夜はゆっくり寛いでね♪」

美緒の音頭と共に皆、食べ始める。集まっているのが美緒、美紗緒、一夏、箒、鈴音、セシリア、シャルロット、ラウラであった。

あの後、美緒は中国に専用機と共に代表候補生が欲しいと言い、コアと第三世代機の基礎データを送ると伝えるとあつけなく了承し、中国国籍から日本国籍に変えてもらった。イギリスには強化後のデータとコアを送るので専用機と代表候補生をくれないか？と打診したところ、中国と同じ様にあつけなく了承した。ドイツに至っては『シユヴァルツェ・ハーゼ隊』の隊員全てと同じ様に専用機とその操縦者が欲しいと言うと交換条件として人数分のコアと第三世代機のデータをよこせと言われるが、美緒はあつさりと了承した。

美緒は其々の代表候補生達にはこちらから言うのと打診し、三国は了承する。その際、ドイツは『シユヴァルツェ・ハーゼ隊』はこちらから打診しておくと言い、美緒は了承した。そして美緒は三国の評価を最底辺におとして通信を終え、食堂に来た。尚、この

ことは本人達には伝えておらず、明日話そうと考えていた。

「美紗緒ちゃん、体の調子はどうか？」

「うん♪すつごく調子がいいよ。それに『越界の瞳』ヴオータン・オージエの稼働率もかなり上がってるし、何より『準生命戦闘体』ハイ・アマテラスになれたからね♪」

「『準生命戦闘体』？」

「何でも『遺伝子強化素体』アドヴァンスドを『生命戦闘体』アマテラスと同じナノマシンを注入して強化したんだよ。生身の戦闘能力的には『生命戦闘体』アマテラスよりは少し劣るけど、索敵範囲と精度が『生命戦闘体』より遥かに上なんだって」

「そっか♪なら良かった」

「『越界の瞳』ヴオータン・オージエだど？どう言う事だ。」

美紗緒

そこに現れたのはラウラだった。『越界の瞳』ヴオータン・オージエと言う言葉に惹かれて2人の会話に入った様だ、だが、ラウラの瞳は氷の様に冷え切っており、心なしか、睨んでる様に見える。

「えーつと……。お姉ちゃん……。？」

「いいよ、私から話すよ。ラウラ」

「なんだ？」

「美紗緒ちゃんはね、以前私がVTシステムを研究していた所を襲撃した際に奪取した

『遺伝子強化素体』だよ……まあ、今では元が付くけどね」

「どういうことだ……? 『遺伝子強化素体』は既に製造中止していたと聞いたが」

「それは私にも解らない、目下調査中って所だね。あ、そうそう、ラウラ」

「ん? どうした」

「『シユヴァルツエア・レーゲン』を貸してくれないかな? この後強化するから」

「わかった」

ラウラは美緒に待機状態の『シユヴァルツエア・レーゲン』を美緒に預けて、ラウラはその場を離れた。

「それじゃ、美紗緒ちゃんも楽しんでってね」

「うん♪」

美紗緒はすったったーとシャルロットの方に向かった。美緒はそれを確認した後、鈴音とセシリアの方に向かった。

「やつ、鈴ちゃんもセシリイ、楽しんでる?」

「まあ、そこそこね」

「私も同じですわ」

「なら良かった♪そうそう、『甲龍』と『ブルー・ティアーズ』を貸して? この後強化するから」

ラウラ同様2人は待機状態の『甲龍』と『ブルー・ティアーズ』を美緒に渡した。

「良い子に仕上げるから楽しみにしててね♪」

「勿論よ」

「ええ、お願いしますわね」

「うん♪」

2人からそう言われて、美緒は頷くとその場を後にして全員と話をしたり、一夏を巻き込んでわいわいと騒ぐ。そんな楽しい時間もあつという間に終わり美紗緒ははしやぎ疲れたのか、既に自室にて寝ている。鈴音達もそれぞれに割り振られた部屋で寛いでいる。そんな中、美緒は本宅の屋根の上に来ていた。

「今夜は良い夜だね」

美緒は独り言を言いながら、月を眺める。その顔は憂いを帯びているように見え、少し寂しげであった。

「一時の時間は掛替えなく、美しく。その想いは駆け、昇華しながらも心に在り続ける……。短き生を生き、友との想い出は掛替えなくも、楽しき日々の軌跡となり、己の抛り所になるであろう」

美緒は昔読んだ哲学の本の一説を声に出し、そのあと苦笑する。

「でも、私は……想い出だけで十分だよ。一夏達が居なくなつた後……私は独りになる

んだから……辛いね……そう思うでしょ？ 『アルテミス』？」

キイン……と寂しげな音色を『アルテミス』は奏で、月の光を反射する。それを見ていた美緒は月を見上げ、近くに置いていた純米吟醸の一升瓶から杯一杯分を注ぎ、半分飲む。

「ん……。一人で月見酒も乙な物だね。今夜は沢山飲みそうな気がするよ」

『アルテミス』はキインと強く奏で、それは怒っているようであった。それを美緒は謝り、ゆつくりと注いだ分を飲み干す。そのまま杯に注ぐ、と美緒の背後から足音が聞こえた。

「こんな所で何してるんだ？ 美緒」

「あ、一夏……見ての通り、月見酒の真つ最中だよ？」

「まだ酒を飲める年齢じゃないだろ!？」

一夏はそう言って、美緒から一升瓶を取り上げる。それを取り返そうと美緒は立ち上がるも、ふらついてしまい、一夏に支えられる。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ」

美緒はそう言って、一夏から離れようとするが、またふらついた。見かねた一夏は支えながら美緒を部屋に送ることにした。酒が入っているせいか美緒の顔はほんのりと

紅く、色香がでていた。一夏はそれにドキドキしながら美緒を部屋に送る。

「ほら、部屋に着いたぞ」

「ん……。一夏も中に入つて？」

美緒はそう言つて、強引に一夏を自分の部屋の中に入れる。美緒の部屋は廊下等の豪華な飾り付けに対して、かなり質素であつた。装飾品がなく、デスクパソコンを置く為のデスク一式とロッキングチェア、そしてダブルベッドしかなく、一目見て年頃の女の子の部屋とは思えなかつた。

「……意外だった？ 私の部屋がこんなに女の子らしくなくて」

「……正直に言えばな……。だけど美緒は美緒だろう？俺はそんなの気にしないぞ」

「一夏らしい答えだね」と一夏に言つて、美緒は一夏に抱き付く。一夏はそれに驚き、戸惑う。

「み、美緒？急にどうしたんだ？」

「ねえ、一夏」

一夏に問い掛けながら、一夏をベッドに座らせ、自身も隣に座る。

「一夏は……私のが好き？」

「ああ、好きだぞ」

「それは……異性として？それとも幼馴染として？」

「今は……」

一夏はそれ以上言えずに口籠る。美緒は一夏の心情を察した様に、立ち上がり、一夏の方に振り向く。

「私は一夏だけが好き、この世界で、唯一 I S を動かせる男としてではなく。織斑一夏という人間を愛しています」

「美緒……」

「例え、一夏が世界の敵になっても。例え、一夏達が先に逝ってしまつて孤独になつても。例え、一夏が他の女の子を好きになつて、私の許を離れても。私は貴方^{織斑一夏}だけを愛しています」

美緒はそう言つて、一夏の唇に唇を重ねた。

「私は貴方に楔を打ち込むから……^{織斑一夏 千条院美緒}貴方も私に楔を打ち込んで……」

美緒は一夏を押し倒す。

「み、美緒?!」

「一夏あ……」

シユル……と布が擦れる音が聞こえ、美緒は服を脱いでいく。服に隠れていた肌は傷が無く、綺麗なままであつた。

「ねえ……一夏……して?」

美緒の言葉に一夏は理性が飛んだかのように美緒を求めた。事実、学園内ではある種の禁欲状態にあつた為。それが爆発し、美緒に襲い掛かる。

美緒も望んでいた事であるから、悲鳴ではなく嬌声を上げ、一夏を受け入れた。

一夏の猛る声と美緒の嬌声が混ざり合い、行為は太陽が昇るまで続いた。

当然の事ながら、二人は互いの体液で濡れ、ベトベトであつた。その始末を終えた頃には既に朝食の時間であり、二人は一睡も出来なかつた。

幼馴染と本宅と強化その3

〈演習場〉

美緒達は演習場に来ていた。今回は美紗緒も参加しており、現在は一夏と美紗緒が模擬戦をしている。

「行って！『思兼神』！」
おもひかね

「行け！『雪月』！」

一夏と美紗緒は互いに斬撃形態のビットを射出して、互いのビットに向かわせる。

一夏が6基、美紗緒が8基ではあるが、互角に戦い、2人のビットは全部破壊する。だが、美紗緒はスカートアーマーを変形展開をして、大型ENライフル『雷切（らいきり）』を一夏に向かって放つ、一夏はそれを避け、『雪羅』をカノンモードに切り替えて、荷電粒子砲を放つ、美紗緒もそれを避る。

荷電粒子砲とENライフルの応酬が繰り返される。

それを見ていた美緒を除く全員が驚いていた。

「流石一夏だね、もう強化された『白式』を使いこなしてるよ」

「あれが本当に一夏なのか？随分と動きが違うぞ」

「それは無線式誘導兵器があるからだろうか？それに消費EN効率も上がってるから、より長い間戦えるようになったからだな」

「元々一夏はセンスは良かったからね、ただ『白式』のかなり効率の悪い消費ENのせいで発揮されなかっただけで、強化された消費EN効率と新武装『雪月』のおかげで急成長してるみたいだね」

「でも何故『雪月』は剣形態のみなのですか？美緒さんの家の技術力なら射撃形態も搭載出来ると思うのですけれど」

「それは『白式』が嫌がったからだね。最初は射撃形態と剣形態を併せ持った無線式誘導兵器を搭載する予定だったんだけどねえ……『白式』が嫌がったから遭えなく剣形態のみの『雪月』になったんだよ。まあその分、『雪月』の消費EN効率が上がって、長時間展開出来る様になったんだけどね」

「随分と我侷なISみたいね。『白式』って」

「あはは……。まあ、そうだね」

「それでも、一夏の成長は凄いな……。僕もうかうかしてられないかな」

箒、ラウラ、セシリア、鈴音、シャルロットは美緒と話しながら一夏と美紗緒の模擬戦をじつと見つめていた。

そんな中、一夏と美紗緒は互いにシールドエネルギーを0にして引き分けとなった。

「二人とも、お疲れ様♪」

美緒は一夏と美紗緒にタオルとスポーツドリンクを渡す。

「ありがとうな、美緒」

「お姉ちゃん、ありがとう♪」

2人は美緒にお礼を言いながら、汗を拭き取る。それを見て美緒は微笑む。

「それじゃ！セシレイ、ラウラ、鈴ちゃんのISのお披露目を始めるよ！」

美紗緒以外の全員は驚く、そんな中、美緒の背後から3機のISが上がってくる。

「まずはセシレイのIS『ブルー・ティアーズ』の発展強化機『Blue^{ブルー} Foundation^{フォウンタナ}』（蒼い噴水）』世代は第四世代で、ビットの『ブルー・ティアーズ』をより操作し易い様に補助AIを搭載して、腕部の武装と同時に使えるようにしたよ。

『ブルー・ティアーズ』よりも遥かに性能が良くなってるから注意してね、詳しくは『ブルー・フォンタナ』に説明用プログラムを入れてあるからそれを見てね『ブルー・フォンタナ』は左側だよ」

「有難う御座いますわ！美緒さん！」

セシリアはそう言って『ブルー・フォンタナ』の許に向かった。

「さあ次は鈴ちゃんのIS『甲龍』の発展強化機『神龍^{シエンロン}』、世代は『ブルー・フォンタナ』と同じ第四世代だよ。火力不足だった『甲龍』に新たな武装を加えて『龍砲』の出力等

を上昇させてみたよ、更に『龍砲』を強化したことによって『龍砲』自体の形状も変わってるから注意をしてね。

『ブルー・フォンタナ』と同じ様に性能も上がってるから、説明プログラムをよく見てね
『神龍』は右側だよ」

「助かるわ！美緒！」

鈴音もセシリアと同様に『神龍』の許に向かう

「最後にラウラのIS『シュヴァルツエア・レーゲン』の発展強化機『Schwarz^{シュ} Schneetreib^{ネー・トライベン}en(黒き吹雪)』だよ。この子も世代は第四世代で、『シュヴァルトツエア・レーゲン』の課題でもあった『A^{アクティブ・イナードナル・キャンセラ} I C』を発動中でも動けるようにしたよ。武装面でもかなり変わったし、性能面でもかなり向上したから説明プログラムをよく見てね、ちなみに中央だからね」

「すまないな、美緒」

ラウラも新しいIS『シュヴァルツエア・シュネー・トライベン』の許に向かう。

「ふふ♪これで大体強化は済んだみたいだね」

「みたいだな……でも良かったのか？」

「何が、かな？一夏」

「こんな凄い技術を公開して」

「問題ないよ、その理由はね……。鈴ちゃん！セシリー！ラウラ！ちよつと着て!!」

美緒がそう大声で言うのと、鈴音、セシリア、ラウラが近付く、ちなみにISを装備したままだ。

「どうしましたの?」

「どうしたのよ?」

「何か問題でもあったのか?」

「うん、実は皆に大事なお知らせがあるんだ」

どんな話なんだろうと、皆が耳を傾ける。

「現時点を持って、箒ちゃん以外の全員の全員が千条院家の専属操縦者になりました!」

「「「「ええええええええ!!」」」」」

6人の驚きの声が演習場に響いたのだった。

幼馴染の実家と楽しい時間と

（織斑宅前）

「一夏の家に行くなんて何年ぶりだろうね？」

八月が終わりに近いある日の事、美緒は一夏の家の前に来ていた。その手には高級和菓子店の紙袋が握られていた、ちなみに中身は抹茶羊羹だ。

あの後、一夏達はすんなりと受け入れた。やはり一夏と一緒に居られるのが一番の理由らしかった、一夏の場合は見知らぬ所で実験動物モルモットになるよりは良いらしかった。箒院家に所属することになった。

「さてと♪」

ピンポーンと呼び鈴が鳴り、少しすると一夏が出てきた。

「お、美緒だ。どうしたんだ？」

「遊びに来たよ♪」

「おう、中に入ってくれ。立ち話もなんだしな」

「お邪魔しま〜す♪」

一夏に案内されて美緒が入ると、そこには箒、鈴音、セシリア、シャルロット、ラウラが居た。5人は美緒を見て驚いている。

「やっ♪皆揃ってるね♪」

「み、美緒!?!どうしてここに!?!」

鈴音の言葉が意外だった様で、美緒は小首を傾げる。

「んん?鈴ちゃんは何笑しなことを言うね?私だつて一夏の家に来ることはあるよ?」

美緒はそう言いつつ、一夏に紙袋を渡す。

「はい、一夏♪お土産だよ♪中に羊羹と茶葉が入ってるから気をつけてね」

「おう、ありがどうな」

一夏はそう言つて、紙袋から羊羹が入った箱を取り出して、冷蔵庫に入れ、茶葉が入った袋を戸棚に仕舞った。

「美緒は昼飯食ったのか?これからざるそばを食べるんだが一緒に食うか?」

「あ、お願いしようかな?」

「おう、ちよつと待つててくれ」

そう言つて一夏はキッチンに行き、ざるそばを作り始める。

「けど皆はどうして一夏の家に?」

「そ、それはだな……」

「今日、偶然にヒマになったからだ」

「……なるほどね、そういう事にしておいてあげる♪」

箒とラウラの言葉で直ぐに察知した美緒は5人の顔を見ながら微笑んだ。実際美緒を除く全員が『来ちやつた♪』というのをやりたかっただけだった。そして6人できやいきやいと話していると、一夏が7人分に分けたざるそばを持つてくる、美緒は直ぐに立ち上がり、4人分を一夏から受け取り、並べる。そして一夏は座り、全員でざるそばを食べ始める。

「しかし、来るなら来るで誰か一人くらい事前に連絡くれよ」

「仕方ないだろう、今朝になってヒマになったのだから」

「そうよ。それとも何?いきなりこられると困るわけ?エロいものでも隠す?」

「わ、わたくしは、ケーキ屋さんに寄っていて忙しかったので」

「ご、ごめんね。うっかりしちゃってて」

「ちなみに私は突然やってきて驚かせてやろうと思ったのだ。どうだ、嬉しいだろう」

「私はヒマだったからのと、久し振りに一夏の家に行こうと思ったからだね」

ざるそばを食べながら会話をして、それぞれが食べ終わると一夏が片付け始める。

「お茶でも入れるからちよつと待っててくれ」

「あつ、僕も手伝うよ」

「私も手伝うよ、一夏」

「ん？そっか、客なのに悪いなシャル、美緒。それじゃあテーブルの片付けを頼む」

「あいさ♪」

「うん♪任せて」

後片付けを手伝い始める美緒とシャルロットに危機感を覚えた鈴音とセシリアは同時に立ち上がった。

「あ、あたしも手伝うわよ！」

「ほ、本来ならわたくしの役目ではありませんが、ここは力を貸して差し上げますわ！」

「いや、4人いても仕方ないし、鈴とセシリアは休んでてくれよ」

「むっ……」

「で、でもっ……」

食い下がろうとする2人だったが、あんまりしつこくするのは逆効果だと思い、引き下がると同時にソファに掛け直す。

ちなみに4人がけのソファには鈴音、セシリア、シャルロット、ラウラが座り、一夏、箒、美緒はクッション座布団で床にいますという座席配置だった。

「これ、洗っちゃっていいのかな？」

「おう。そのスポンジと洗剤で頼む。なんか悪いな、洗い物までさせて」

「いいよいよよ。僕こういうの得意だし、その……好きだし」

ほんの少しだけ好きという単語を強く言うシャルロットだったが、さすがにあからさまな言い方をするのは恥ずかしかったようで、結局口から出た言葉はほとんどわからない程度の違いしかなかった。

ちなみにだが、美緒にはしっかりと聞こえていた。

「良かったね……。一夏、私なんかより魅力的な子に好かれてるよ……」

美緒はそう思いつつ、お湯を沸かしていた、そして目的の温度に沸かしたお湯を急須に入れて湯呑みにも別のお湯を入れて急須と湯呑みを暖める。

そして入れたお湯を全て捨て、茶葉を急須に入れてお湯を注ぎ、蒸らす。

蒸らした茶葉から出たお茶を、湯呑みに淹れて運ぶ、そして全員が座り、寛ぐ。

「やっぱ食後は緑茶だな。はー、落ち着く」

「ふふ♪緑茶にして正解だね。それに、昔から一夏のこだわりは変わってなかったし」

「よく覚えてたな……。まあそれで、この後はどうしたもんかな。うちはあんまりみんなで遊べるものとかないぞ」

「まー、そういうだろうと思って、あたしが用意してきてあげたわよ。はい」

そう言って鈴音が一夏に渡した紙袋には、様々なカードゲームやボードゲームが溢れていた。

「おー。そういうや鈴はこういうの好きだったな」

「そりやそうよ、勝てるもん」

「その代わりテレビゲームだとかかなり弱いけどね♪」

「美緒は余計なことを言わない！」

「いふ^痛あい、いふ^痛あいひよ^よ、ういん^鈴ふあん^{ちや}」

きやいのきやいのとみんなで騒ぎながら、何をやるか決める。決まったのはバルバロッサというドイツ発祥のゲームだった。

このゲームのルールを説明し、経験者である一夏、美緒、鈴音は最初説明役に回ると言うことでゲームが始まった。

「こねこねこねこね……」

「できたっ」

「それじゃ、スタートね」

シャルロットからサイコロを振り、ゲームが開始される。

「えーと、一、二、三、と」

「あ、宝石を得ましたわ」

「私は……質問マスか。よし、ではラウラの粘土に質問するぞ」

「受けて立とう」

「ちなみに回答は『はい』、『いいえ』、『どちらでもない』よ。『いいえ』を出されるまで質問できるから、最初は大分類ではじめるとお得ね」

「補足だけどきどき配った、黒い石を使って答えに割り込むことが出来るからね」

鈴音と美緒の説明を聞きながら、ふむふむと箒が頷く。そして再度、ラウラの粘土を見る。

その粘土は『ゴゴゴゴ……』と静かな威圧を放っている円錐状のなにかで、まったく見当が付かない。

実際、ラウラ以外の全員が『あれは何だ?』と気になっていた。

「それは地上にあるものか?」

「うむ」

「よし……。では、それは人間より大きいか?」

「そうだ」

ということとは、道具の類ではない。しかし、人間より大きいということかなり限定されてくるはずなのだが、まだ全員がわからなかった。

「それは都会にあるものか?」

「どちらともいえないな。あると言えはあるが、ないと言えはない」

この答えでさらに全員が頭を悩ませた。特に、ほぼ全員が東京タワーだと思っていた

ので、この回答は混乱しか生まれなかった。

「人間の作ったものか？」

「ノーだ」

「はい、質問終了。箒はこのまま回答できるけど、する？」

「う、うむ。そうだな。外しても失点はないようだし、答えよう」

正式なルールの場合は紙に書いて製作者だけが見るのだが、今回はあくまでお試しゲームなので回答情報を全員で共有するというルールに鈴が変更した。

「じゃ、答えをどうぞ」

「油田ゆでんだ！」

ずびしっ！物体を指差して箒が答える。

「違う」

がくつとうなだれる箒だったが、一夏を含め全員が「なぜ油田？」と箒の回答にもちんぷんかんぷんの顔をするのだった。

そんなこんなでゲームは進み、中盤を過ぎる。

「そろそろ正解しないと、当てられた人も得点入らないよ？」

ちなみにシャルロットの作った馬はすぐに当てられてしまい、本人に得点は入らなかった。このあたりの進行時点での正解による得点がバルバロッサの特徴であり、バス

トなのは『そういわれればそう見えるような』造形である。中盤で正解されることにより、正解者だけではなく製作者にも得点が入るというルールなのだ。

ちなみに箒の作ったものは「井戸」だった。かなり分かりにくいものだったが、シャルロットの質問がうまかったこともあり、ベストタイミングで正解している。

そして、問題はラウラとセシリアの二強である。

ラウラは相変わらず謎の円錐物体、セシリアは謎の細胞体のようなものをそれぞれ誇らしげに見せていた。

「そ、それは、食べ物?」

「違いますわ?」

「それはビルより小さいのか?」

「いや、巨大だ」

すでに自分の粘土が当てられている箒とシャルロットは、とにかくラウラとセシリアが何を作ったのかを必死で考えては質問をするが、かすりもしない。

そうこうして、とりあえずのお試しゲームは終了となった。

「で、ラウラ、これはなんなんだ?」

ずっと訊きたくて仕方がなかった一夏が早速口を開く。

「何? わからんのか。嫁失格だぞ」

「いやまあ、それはいいから。答えは？」

「山だ」

ラウラの予想外すぎる答えを聞いて全員が固まる。

「は？」

「山だ」

二回、同じ言葉を繰り返すラウラ。

「いやいや待て待て！こんなには尖つてないだろ！」

「むっ……。失礼なことを言うやつだな。エベレストなどはこんな感じだろう」

「それならエベレストに特定しねーとわかんねーって！」

「エベレスト以外にもこういう山はある」

あくまで自分の粘土に問題はないというラウラは、腕組を崩さない。

「ま、まあ。ラウラ。正解されなかったから減点だね。それでセシリイのは？」

「あら。誰もわからないのかしら？」

わかつていたら正解してるっつーの、という言葉を一夏、美緒、鈴音は飲み込む。

セシリイはもったいつけるように全員を一瞥して、それから右手を広げて大々的に

言った。

「我が祖国、イギリスですわ！」

「「……………」」

全員が沈黙。ちなみにこれまでの回答一覧は『潰れたジャガイモ』『原初細胞体』『ぐちやぐちやのピザ』『藻』『ボロ布』『ケガをした犬』『ジャンプ中の猫』。

「まったく、みなさんの不勉強には驚きますわ。一日一回世界地図を見ることをおすす
めしますわ」

『イギリスの形を知らないわけじゃねーよ！』とは、全員が言いたい反論だったが、黙つ
ていることにした。ラウラ以上に自分の造形物に自信満々のセシリアを見ると、逆にそ
んなツツコミは野暮だという発想まで出てくるから不思議である。

「ま、まあ！大体のルールはわかったよね？次からは鈴ちゃんと一夏も入ってやるよ」
「美緒はやらないの？」

美緒の言葉にシャルロットが問いかける。

「私はいいよ、みんなでやって？私はそれだけでも十分楽しめるから」

美緒の言葉を聞いた一夏は誰にも気づかれないう様に眉を顰める、その言葉の真意に気
付いたのは一夏だけだった。

そうして第二回戦が始まり、楽しい時間を全員が過ごしていった。

美緒の瞳の奥に哀しみを宿しているのも知らずに

第五卷

幼馴染と生徒会長と

く第三アリーナく

「でやああああつ!!」

ガキインツッ!と鋭く重い金属音を響かせ、一夏と鈴音は刃を交えて対峙する。

九月三日。二学期初の実戦訓練は、一組二組の合同ではじまった。

「くっ……!」

「逃がさないわよ!」一夏!」

クラス代表者同士ということではじまったバトルは、最初から互角であった。

その理由は『白式』のエネルギー問題が解決し、より攻撃回数が増えたのもあるが、『神龍』の攻撃のバリエーションも増え、火力が上がった為でもある。

一夏が『雪月』を射出すれば、鈴音も『龍砲』を射出し、『雪月』を撃ち落とそうとするが、別の『雪月』によって斬り落とされる。

始めは形状の変わった『白式』と『甲龍』の発展強化機体『神龍』を見て、千冬は美緒に問い詰めた。

美緒は素直に箒以外全員の機体を強化したことを告げると千冬は納得したような表情をする。

そうしているうちに一夏と鈴音の決着が着いた。

「1勝1敗ね。それにしても腕を上げたわね、一夏」

「まあな、これも全て美緒のおかげだな」

「私はただ一夏達のISを強化しただけであって、それを物にした一夏達のがんばりがあつたからだよ」

美緒はそう言って、お茶を啜る。美緒が食べていたのは月見蕎麦だ。

一夏は少し照れながらも鯖の味噌煮を食べる。

「ラウラ、それおいしい?」

「ああ。本国以外でここまでうまいシュニツツエルが食べられるとは思わなかった」

相変わらずシャルロットと仲が良いラウラは、その皿に盛られたドイツ料理の仔牛のカツレツを一切れ切り分ける。

「食べるか?」

「わあ、いいの?」

「うむ」

「じゃあ、いただきます。えへへ、食べてみたかったんだ、これ」

ラウラから分けてもらったシュニッツェルを頬ぼつて、シャルロットはぼわぼわと幸せそうなオーラを発しながら幸せそうな顔をする。

「ん〜！おいしいね、これ。ドイツってお肉料理がどれもおいしくていいね」

「ま、まあな。ジャガイモ料理もおすすめだぞ」

故郷のことを褒められて嬉しいのか、ラウラの顔は赤い。

そんな様子を見てると他の女子も加わりたくなったらしく、早速料理談義に花が咲いた。

「あー、ドイツってなにげに美味しいお菓子多いわよね。バウムクーヘンとか。中国はあんまりああいいうの無いから羨ましいかも」

「そうか。では今度美緒に頼んでフランクフルタークランツを作るとしよう」

フランクフルタークランツとはリング形の王冠のような形をしたケーキで、全体がバタークリーム（もしくはジャムかゼリー）で塗られ、上部はクロカンと呼ばれるクルミ入りのカラメルで覆われている。

ちなみに名称は、ドイツ語で都市 フ ラ ン ク フ ル ト ク ラ ン ツ ト と花輪を意味する ク ラ ン ツ に由来する。

「ドイツのお菓子だとわたくしはあれが好きですわね、ベルリーナー・プファンクーヘン」

そういったのはセシリアだったが、シャルロットはきよとんとして聞き返す。

「えっ、ベルリーナー・プファンクーヘンってジャム入りの揚げパンだよ？しかもバナナの衣が乗ってるからカロリーすごいと思うけど……セシリアはアレが好きなの？」

「わ、わたくしはちゃんとカロリー計算をするから大丈夫なのですわ！そう、ベルリーナーを食べるときはその日その他に何も口にしない覚悟で……」

「ジャム入り揚げパンか、確かにうまそうだ」

「セシリア、揚げパンが好きなら今度ゴマ団子作ってあげよつか？」

「それはどんなものですか？」

「中国のお菓子よ。あんこを餅でくるんでゴマでコーティング。その後、揚げるの」

「お、おいしそうですね！ああ、でも、カロリーが……」

「ま、食べたくなったら言つてよ」

「鈴さん……思っていたよりいいひとですわね……」

「思っていたよりつてなによ！思っていたよりつて！」

相変わらず、鈴音・セシリア組は仲が良い

「私は日本の菓子が好きだな。あれこそ風流というのだろう？」

「春は砂糖菓子、夏は水菓子とくれば秋はまんじゅうだな」

「ほう。冬は？」

「せんべいだ」

「私はミルフィユかな。作る所で色々な作り方になるから好きだね」

「あら？美緒さんはイギリスのお菓子が好きですか？」

「ミルフィユはフランスのお菓子でもあるよ？セシリア」

きやいきやいと7人でお菓子談義で盛り上がる女子達を見ながら、一夏は考え事をす
る。

「(もつと、もつと強くならねえと……誰にも負けないように……)」

一夏はそう決意をした。

「やっぱり無駄に広いもんだ……」

場所は変わり、一夏専用となっているロッカールームは、ただただ静かであった。

一夏はISスーツを着ると、『白式』のコンソールを呼び出して調整をはじめた。

「(やっぱり美緒に頼んで正解だったな。エネルギーバランスがここまで整ってるなんてな)」

そんなことを考えていると、突然目の前が真っ暗となった。

「!?」

「だーれだ？」

一夏の背中から聞こえた声は同級生よりも大人びている。そのくせ、楽しさがにじみ

出ているような笑みを言葉に含んでいて、イタズラを楽しむ子供のようにも聞こえた。

「はい、時間切れ」

一夏は声の主を確認しようと振り向く。

「……………誰？」

「んふんふ」

一夏はその女子のリボンを見ると、リボンの色が二年である黄みが強い黄緑色だ。その女子は一夏の困惑する顔を楽しそうな笑顔で眺めつつ、どこから取り出したのかひとつの扇子を口元に持っていく。

「あの、あなたは——」

「あっ」

その女子は一夏の後ろに視線をずらす。一夏も視線を後ろにずらすと。

「引つかかったなあ♪」

むにつと頬を扇子で押される。

「……………」

「それじゃあね。キミも急がないと、織斑先生に怒られるよ」

「え？」

一夏は嫌な予感がして、壁の時計を見る。……………授業開始時間から3分が過ぎていた。

「だあああつ!?や、やばい!まずい!」

もう一度元凶の人物を見ると、もうそこには誰もいなかった。

一夏は遅刻し、高速切替ラピッド・スイッチの的となったのだった。

翌日。SHRとI限目の半分を使って全校集会が行われた。内容はもちろん、今月中程にある学園祭についてである。

「それでは、生徒会長から説明させていただきます」

静かに告げたのは生徒会役員の1人だろう。その声で、ざわつきが消えていった。

「やあみんな。おはよう」

「!?」

壇上で挨拶をしている女子。2年のリボンをしたその人、昨日ロッカールームに現れた人物だった。

「ふふっ」

一夏と一瞬だけ目が合い、笑みを浮かべられる。

「さてさて、今年の色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は『更識さらしき楯たてなし無』。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

につこりと頬笑みを浮かべて言う生徒会長は、異性同性を問わず魅了するらしく、列のあちこちから熱つぽいため息が漏れた。

「生徒会長の命令だとしても？」

「だからなに？ 学園最強程度で何を偉そうに……」

美緒の見下した物言いに楯無はカチンとくる。

「随分と偉そうに言うけど、貴女は誰だったっけ？」

「随分と記憶力がないみたいだね。ロシア代表は」

「!!」

「それに……千条院家を敵に回すでいいみたいだね……ロシアと更識家は」

「なっ!!じゃあ、貴女は!!」

「そうだよ？ やつと思いい出した？ 更識家当主17代目の楯無さん？」

美緒はそう言って、壇上に上る。教員はそれを止めようとするも、美緒から発せられる覇気に萎縮して、とめられなかった。

「この場を借りて、生徒会長である更識楯無に『各部対抗織斑一夏争奪戦』を撤廃する公式試合を申し込みます！」

美緒の言葉に先程以上の驚きの声が上がったのだった。

幼馴染と生徒会長と試合と

（第六アリーナピット内）

「美緒！負けたら承知しないわよ！」

その後、楯無は美緒の申し込みを受けた。その時は顔には出てきてはいなかったが心情的には怒り狂っていただろう。

「美緒、頑張れよ」

「うん♪頑張るよ……いくよ『アルテミス』」

美緒は『アルテミス』を装着すると、カタパルトに乗る。

「千条院美緒、『アルテミス』、行きます！」

勢よく美緒はピットから飛び出て、バレルロールをしながら楯無がいる場所まで向かった。

——戦闘待機状態のISを感知。搭乗者更識楯無。ISネーム『ミステリアス・レイディ霧纏の淑女』。戦闘タイプ特殊型。特殊装備有り——。

『アルテミス』から楯無のISデータが表示された。それを見ているうちに楯無と正対する。

「待たせたみたいだね」

「そんなことないわよ、始めましょう」

楯無はそう言うが早く、『ラストイー・ネイル』と呼ばれる蛇腹剣を美緒に振るう、左腕に『月光零式』を展開した美緒は、『ラストイー・ネイル』を弾き、『ツヌグイ』を全基射出してありとあらゆる方向から赤い閃光を放ち、それと同時にブレード形態になった『ツヌグイ』が、楯無に襲い掛かる。

楯無はそれを避け、当りそうなものは展開されている水のヴェールで防ごうとしたが、『ツヌグイ』は静のヴェールを貫通した。そのまま楯無に直撃する。

———バリアー貫通、ダメージ100。シールドエネルギー残量450。実体ダメージ、レベル軽微

美緒は『ツヌグイ』を操作しつつ、左腕に展開していた『月光零式』をしまつて、『グングニル』を両腕に展開する。

「これは避けられる?」

呟く様な小さい声で問いかけながら、右腕をEN形態、左腕をAM形態にして、グレネード弾と荷電粒子砲を楯無に放つ、楯無は荷電粒子砲とグレネード弾を避けながら、『ラストイー・ネイル』をしまつて特殊ナノマシンで水を呼び出し、超高周波振動の水を纏ったランス『蒼流旋』そうりゅうせんを展開して、それに付いている4門のガトリングガンで美緒に

放つ、美緒はガドリリングガンの銃弾を避けつつ、『グングニル』から『月光零式』に切り替え、『連続瞬時加速』を使い、残像を残す程の速度で楯無に迫る。その間にも『ツ

ヌグイ』による追撃をやめずにいた、楯無はガドリリングガンで撃ち落そうとするも、イクニツヨクノフスト

『瞬時加速』並の速度で尚且つ無作為に動く『ツヌグイ』を撃ち落せずにいた。

「くっ……このビットはやかいかいね。はや「この程度でロシアの代表？笑わせるね」!?!」

楯無の独り言に介入して美緒は嘲笑とも取れる様に言う、その声に気付いた楯無は振り返ろうとしたが美緒は脚部大型ビームソード『月光』を展開して、楯無を蹴り上げる。「あぐうっ!」

——バリアー貫通、ダメージ200。シールドエネルギー残量250。実体ダメージ、レベル中破

蹴り上げられた楯無を美緒は追撃をかける為に『連続瞬時加速』を使つて追い

越し、上がってきた楯無を踵落として蹴り落とす。だが楯無は地面に接触する直前でバックシブ・イナーシャル・キャンセラー『P I C』をフル稼働して、地面との接触を防いだ。

「くう……化け物のような性能ね……だけど!」

突然、美緒は爆炎に包まれた。『ミステリアス・レイディ』のナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物へ散布し、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や熱で相手を破壊する特殊攻撃『清き情熱』、楯無は美緒が居るであろう場

所を警戒しながら見つめる。

そして、爆炎が消えると同時に楯無の表情が驚愕に彩られる。

——バリアー貫通、ダメージ20。シールドエネルギー残量900。実体ダメージ、レベル軽微

「こんな隠し玉があるなんてね？」

『清き情熱』の直撃を受けてもほぼ無傷なのだ、驚くなど言う方が無理だ。

「まだまだあるんでしょう？撃つてきていいよ？それすらも砕いてあげる」

美緒はそう言って、楯無の前に下りる。

「後悔しても知らないよ？」

楯無はそう言って、拳を上げる。するとアクア・ナノマシンが拳の上に集まり、巨大な水の槍を作り上げる。

「受けなさい。『ミステリアス・レイディ』の最大火力を！」

楯無は槍を構えて美緒に突撃する。美緒は大型AM・ENシールド『アイギス』を両腕で展開して、槍を受ける。

——『ミストルティンの槍』発動。

爆発音と共に、砂埃が舞い、二人の姿を隠した。そのまま沈黙が訪れ、見ていた観客も固唾を呑んで見守る。

砂埃が晴れると、そこには爆発直前のままの二人が居た。

——バリアー貫通、ダメージ120。シールドエネルギー残量650。実体ダメージ、レベル軽微

「それが最大火力……？ 失望したよ」

美緒は失望した声色で言い、楯無を蹴り飛ばし、空中に飛ぶ。その間にも楯無は動くとするが、『ミストルティンの槍』のダメージが抜けてなく、思うように動かせない。

「受けなさい……」

美緒は『八叉鴉』^{ヤタガラス}を広げ、『ツヌグイ』、『シャッテン』を美緒の周りに展開し、『アイギス』からEN射撃形態の『グングニル』に変更した。

「これで……終りだよ」

美緒が言い終ると同時に一斉発射をし、閃光が楯無を飲み込んだ。

閃光が消え、砂埃が晴れると楯無は立っていたが……

——バリアー貫通、ダメージ340。シールドエネルギー残量0。実体ダメージ、レベル大破

『ミステリアス・レイディ』は粒子となって消え、ISスーツのみとなった楯無はゆっくりと倒れた

『勝者』^{ウィナー} 千条院美緒

静寂した会場内に勝者を伝えるアナウンスだけが響き渡ったのだった。

幼馴染とクラス会議と夢語りと

（1—1教室）

楯無と美緒の公式試合から数刻経った放課後の特別HR。今はクラスごとの出し物を決めるため、わいのわいのと盛り上がっていた。

「えーと……」

クラス代表として、一夏は意見をまとめる立場にあるのだが——

「（内容が『織斑一夏のホストクラブ』『織斑一夏とツイスター』『織斑一夏とポツキー遊び』『織斑一夏と王様ゲーム』……って、あのなあ）」

一夏は頭を抱える。このクラスの常識人（？）の一夏と美緒は溜息をつく。

「却下」

えええええー!!と大音量サラウンドでブーイングが響く。

「あ、アホかー！誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「織斑一夏は共有財産である！」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「たすけると思ってた！」

「メシア気取りで！」

一夏の抗議にクラスメイト達はさらに抗議をする。一夏は助けを求めると教室には既に千冬はいなかった、『時間がかかりそうだから、私は職員室に戻る。あとで結果報告に来い』と言いつ残していったのだ。

「山田先生、ダメですよね？ こういうおかしな企画は」

「え!? わ、私に振るんですか!? え、えーと……。うーん、わ、私はポツキーのなんかいいと思いますよ……?」

やや頬を赤らめながら言う副担任・山田真耶先生はどうやら地雷のようだ。

「とにかく、もつとまともな意見をだなー」

「メイド喫茶はどうだ」

そう言ってきたのは、意外にもラウラだった。

一夏だけでなく、クラス全員がぼかんとしている。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのだろうか? それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

いつもと同じ淡々とした口調だったが、あまりに本人のキャラにそぐわない言葉だっ

たため、一夏もクラス全員も理解に時間を要した。

「え、えーと……みんなはどう思う？」

「いいんじゃないかな？一夏には執事か厨房を担当してもらえばオーケーだよ」

そう言ったのはシャルロットだった。ラウラの援護射撃と思われるそれは、見事一組女子全員にヒットする。

「織斑君、執事！いい！」

「それでそれで！」

「メイド服はどうする!?私、演劇部衣装係だから縫えるけど！」

「まあ、変わった衣装の喫茶店だと思えばいいか」

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

そう言ったのは、またしても意外な人物——というか、ラウラだった。

え？と全員が目丸くする中、ハッと気がついて咳払いをする。

「——ごほん。シャルロットが、な」

「え、えつと、ラウラ？それって、先月の……？」

「うむ」

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね」

不安げにそう告げるシャルロットに、クラスの女子は声を合わせて『怒りませんとも

！』と断言する。

かくして、1年1組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』に決まった。

「……というわけで、1組は喫茶店になりました。」

職員室。一夏は千冬の元でクラス会議の報告をしていた。

「また無難なものを選んだな。——と言いたいところだが、どうせ何か企んでるんだろぅ?。」

「いや、その……コスプレ喫茶、みたいなものです。はい」

「立案は誰だ? 田島か、それともリアーデか? まあ、あの辺の騒ぎたい連中だろう?。」

「えーと……」

にやにやしている千冬に本当のことを言うのが若干躊躇われるも、意を決して言うことにした。

「ラウラです」

「……………」

きよんとする千冬は二度まばたきをして、盛大に吹きだした。

「ぶつ……ははは! ボーデヴィツヒか! それは意外だ。しかし……くつ、ははっ! あいつがコスプレ喫茶? よくもまあ、そこまで変わったものだ」

「やっぱり意外……ですか？」

「それはそうだ。私はいいつの過去を知っている分、おかしくて仕方ないぞ。ふ、ふふっ
あいつがコスプレ喫茶……ははっ！」

それからひとしきり笑って、千冬は目尻の涙を拭う。そんな千冬の反応は、職員室の先生方にとつてもかなり意外な光景だったらしく、みんな目をきよとんとさせて眺めていた。

「ん、んんっ。——さて、報告は以上だな？」

「はい。以上です」

「ではこの申請書に必要な機材と使用する食材などを書いておけ。1週間前には出すよ
うに。いいな？」

「(うっ、めんどくさそうだ……)」

「い・い・な？」

「は、はいっ」

「織斑、学園祭には各国軍事関係者やIS関連企業など多くの人が来場する。一般人の参加は基本的にYは不可だが、生徒一人につき1枚配られるチケットで入場できる。渡す相手を考えておけよ」

「あ、はい」

そんなこんなで千冬への報告は終わり、一夏は礼をして職員室を出た。

所変わり寮の屋上にて、美緒は連絡を取っていた。

「なるほどね……それと『亡国機業』フアントム・タスクに奪われた、設計図とコアを搭載してない機体の数は？」

『、、、。』

「意外と多いね……解ったよ。それと、例の事を聴いてみる。また後で」

美緒はそういうと、電話を切り、再度別の相手に繋げる。

『はろはろ〜♪み〜ちゃん。どうしたの〜?』

その相手は束だった。その場には束はいないのに、表情を引き締める。

「実はね、ISでの実戦戦闘についてなんだけど……」

『みーちゃん。それは駄目だって、前にも束さんは言ったけど?』

「どうも、そうは言ってられなくなりそうだよ」

『どういふことかな?』

「どうやら亡霊達のお人形さん達が近々大きな祭りを仕掛けるみたい」

『大きな祭り?……どういふことかな?』

美緒の言葉に束は不審がる。

「どうやら、戦争を起こすみたい……第二次世界大戦よりも大きな」

『!!……なるほどね……対抗する為にとってところかな?』

「うん……それもあるけど、一番は一夏や箒ちゃん達を守る為に……」

『みーちゃんはその中に含まれてないの?』

「私は恐らくこのお祭りの時に……」

『みーちゃん?』

急に黙った美緒を束は心配そうに声をかける。

「私は今回の戦争で命を落とすかもしれない」

『——?!みーちゃん!』

美緒の発言に束は慌てるも、美緒は続ける。

「それでも……私はあの子達に生きてもらいたい……それに、私にはもう未練がないから」

『みーちゃん……どうしてそんなことを……?』

「私の夢が叶ったからだよ……一夏との子供を生すつて言うね」

美緒の言葉に束は息を呑む……唐変木と言われる一夏の子供ができると言われたからだ……それだけではないが、一夏と自身の子供を生したのが美緒の夢と言ったのも、束は驚いた。

『そのことをいつくんは……』

「当然知らないよ……一夏には余計な重荷を背負わせたくない……なにより一夏には絶対知らせちゃいけないことだから……」

『どうしてなのかな？その根拠は？』

「私との間に子供が出来たと知ったら……一夏はその子を育てると言い出すかもしれない……うん。絶対そう言い出すよ。でもね、一夏には自由に生きて欲しい。私の勝手だけど……ね、だから新しく産まれて来る子には、一夏が父親と言うことは伏せておきたいから……一夏に恋するあの子達に一夏との愛を育んで欲しい……生体兵器である私の唯一つの夢でもあり、欲望でもあり、我侭だよ」

『……わかった、ISでの実戦戦闘を許可するよ……その代わり！』

東は少し大きな声で言う。

『必ず生きて帰って帰ること！それが絶対条件だよ！』

「解った……有難うね……東お姉ちゃん」

美緒はそう言つて電話を切った。美緒が空を見ると既に夕焼けが無くなり、宵闇に変わろうとしていた。

幼馴染と学園祭と演劇と

（1—1教室）

「それでは、皆さん中間テストがんばってくださいね」

四時限目、一般科目（必修）が終わり、教室内はいつもと同じく騒々しくなる。

この授業に関しては言語圏に依存する為、クラス内には日本人しかいない。いざ黒髪ばかり（美緒を除く）だと、それはそれで不思議な光景だった。

「織斑くん、学食行こうよ」

「たまには私達と食べようよー」

「そうそう。専用機持ち組はずるい」

女子にわあつと囲まれて、一夏は学食へと強制連行……かと思いきや。

「お邪魔します」

そう言っただけで入ってきたのは楯無だった。

「何しにきたの？更識楯無」

楯無を見た美緒は一夏を守る様にわざと間に入る。

「織斑君とお弁当を一緒に食べようと思ってね」

「一夏には箒ちゃんのお弁当があるから貴方のは不要だよ」

「あら？分けて合つて食べるつて言う選択肢もあるんじゃない？」

「何寝ぼけたことを……調子に乗つてるみたいだね、殺されたいの？」

「そう簡単におねーさんは殺されないわよ？」

2人は段々と殺気を込めて睨み合う、その影響でクラス内は静まる。

中には目頭に涙を浮かべる者さえも出てくる。それに一夏はまったをかける。

「二人とも落ち着いてくれ！俺は箒のを食べるから、先輩は悪いけど美緒と食べてくれ
！」

一夏がそう言うのと2人は殺気を抑えて一夏のまわりに座り、静かに食べ始めた。

この時、一夏の心境は『生きた心地がしなかった』と言う。



「あ〜……」

べちゃりとテーブルに突っ伏している一夏を、いつもの面々が苦笑いで眺めている。

「一夏、お疲れ様」

「おー……シヤルか……」

「お茶飲む？ご飯食べられないなら、せめてそれだけでも」

「おう……サンキュ……」

一口だけでもと、一夏は顔を起こす。

「それで、あの女はどうしたのだ？」

少しぴりぴりした様子でラウラが言う。

「一夏。あの女はどうしたんだと訊いたんだ」

「ん？生徒会の仕事があるって出て行つたぞ」

「そーそー。書類がちよお溜まつてるんだよね」

間延びした声、のんびりとした調子に振り向くと、やはりというかそこには布仏本音

(のほとけほんね)、通称のほほんさんがいた。

「私はね、いと仕事が增えるからね。邪魔にならないようにしてるのだよね」

「自分で言うなよ……」

のほほんさんの手にはお茶漬けがあつた。それも、鮭の切り身をこれでもかと言うぐ

らいてつぺんに乗せている。

「えへへ、お茶漬けは番茶派？緑茶派？思い切つて紅茶派？私はウーロン茶派」

空いている席に座つてそんなことを一夏に訊いている。ぐりぐりと箸でかき混ぜら

れたどんぶりは、なかなか混沌の様相を呈していた。

「なんとこれに」

「……これに？」

「卵を入れます」

あろうことかお茶漬けに卵を入れるのほほんさん……正直言つて想像したくない（作者本人も）

「ぐりぐりぐり〜」

粘り気を増したそれをさらに混ぜて、のほほんさんは幸せそうに顔を緩ませる。

「食べまーす。じゆるじゆるじゆる……」

「わあ！音を立てずに食べるよ！」

「えー。むりっぽ〜。ずぞぞつていくのが通なんだよ〜」

「それはソバだ！」

「じゃあ努力します〜。ちゆるちゆる……」

「コホン……。一夏さん？」

「ん。なんだよ、セシリア。改まって」

「あの部屋にいるのがつらいなら、仕方なく、人助けということ、武士の情けということ、で、わたくしの部屋にいらしても構いませんわよ？」

「ちよつとセシリア！待ちなさいよ！一夏、あんたこつちの部屋に来なさいよ。トランプあるわよ？」

「トランプで釣られるとか、小学生か！」

「じゃあ金平糖」

「幼稚園児か！」

鈴音はなぜランクを下げたのか一夏と美緒は頭を悩ませた。

「なによ、「豆がいいわけ？」

「ハトか！」

「鈴ちゃん……流石にそれはないよ……」

「部屋に戻る……」

「あつ、私も部屋に戻るから送っていくよ」

疲労感を感じさせる一夏を美緒が少し支えながら食堂を出る。

「おかえりなさい。お風呂にします？ごはんにします？それともわ・た・し・？」

ドアをあけて二秒で楯無を見た一夏は口から白い物体を吐きながら脱力して膝から倒れ込むのだった。



いよいよやってきた学園祭当日。

一般開放はしていないので開始の花火などは上がらないが、生徒たちの弾けっぷりは

それに匹敵するくらいにテンションが高かった。

「うそ?! 1組であの織斑くんの接客が受けれるの!?!」

「しかも執事の燕尾服!」

「それだけじゃなくてゲームもあるらしいわよ?」

「しかも勝つたら写真を撮ってくれるんだって! ツーショットよ、ツーショット! これは行かない手はないわね!」

とりわけ1年1組の『ご奉仕喫茶』は盛況で、朝から大忙しだった。

具体的には一夏が引つ張りだこな状態で、他のメンツはわりと普通に楽しそうにしている。

「いらつしやいませ♪こちらへどうぞ、お嬢様」

とりわけ楽しそうなメイド服姿のシャルロットで、朝からずっとここにこしている。

「似合ってるって褒めたからかなあ。それにしてはやけに上機嫌だったけど」

ちなみに接客班(つまりコスプレ担当)は一夏、美紗緒、シャルロット、セシリア。そして意外や意外、箒とラウラ。美緒は他の露店に出なければいけないと言い、現在不参加だ。

「(ラウラは発案者だからとしても、よく箒が折れたなあ……。しかしまあ、なんというか……)」

残りのクラスメイトはというと、大きく分けて二つ。片方が調理班でもう片方が雑務全般。

雑務は特に切れた食材の補充やテーブル整理など忙しそうにしている。そして、その中でも一番大変そうなのが、廊下の長蛇の列を整理しているスタッフだった。

「はい、こちら2時間待ちです」

「ええ、大丈夫です。学園祭が終わるまでは開店してますから」

各種クレーム（ほぼすべて待ち時間苦情）にも対応していて、かなり忙しそうにしている。

「朝より列が長くなってんだけど、大丈夫かな……?」

一夏はそう思いながら、接客の合間にひよいと教室から顔を出す。

「あ、最後尾の看板持ちますよ」

「ねえ、ゲームって何あるの?」

「ジャンケンと神経衰弱とダーツだって。それぞれ苦手な人のために選べるようにしてくれたい」

「えー、まだ入れないのー?」

一年生教室の前をほぼ埋め尽くす、人、人、人の山。その大人数に対応しているクラスメイトには、一夏は頭のあがらない思いをする。

「あー！織斑くんだー！」

「(しまった、見つかった)」

一夏がそう思っていると、すぐさま列整理のクラスメイトが数人飛んできて、一夏を教室内にと押し込める。

「こらー、出るなって言ったでしょー！」

「混乱度合いがあがるの！」

「お楽しみは最後まで取っておかないとね」

「(う、うん？最後のはなんだ?)」

「(いいから戻る!)」

そう言われてはどうしようもなく、一夏は接客に戻った。



同時刻、美緒はIS学園の屋上にいた。だが、いつもの楽しい表情とは違い、酷く険しい表情をしていた。

連絡相手の報告を聞いて更に表情が険しくなった。

「それは本当なの？言峰？」

『はい。間違いありません』

「さすが亡霊といったところだね。でも……不味い事になったね……それで、対抗手段は？」

『現在、本宅及び全施設、工房を捜索中で御座います』

「見つかる可能性は？」

『I割が良い方かと……何せ90年も前の服従コードで御座いますから……見つからないことを前提に新たに製作中で御座います』

「そう……私に何かあったら全権を美紗緒ちゃんに譲渡して、もし解除コードが効かない場合は……解ってるね？」

『はい。美緒様』

「それと……建造中のアレは？」

『既に9割完成しております。あとは、AIを搭載して試運転をすれば完成で御座います』

「急いでね……恐らく、もうそろそろ仕掛けてくるはずだから」
『畏まりました。美緒様』

美緒は通信を切ると、空を見上げた。



「ああ、一夏。良かった。すぐに3番テーブルでゲームして。あと、ついでにこっちのオーダーを4番に持って行って」

戻つてすぐ、一夏はシャルロットからトレーを渡される。

「お、おう。ていうか楯無さんは？」

「生徒会の方があるって言つてどこかに行っちゃったよ」

「(な、なんと無責任な……)」

「ともかく！お店が大変なんだから、急いで！」

「りよ、了解！」

あっちに行つたりこっちに行つたりと一夏は忙しく動き回る。

「お待たせしました、お嬢様」

「きゃー！織斑くんだー！」

「ゲーム！ゲームしよ！」

「こっちはご褒美セットだから、座って座って！」

「(それにしても、結構な重労働だな、これは……)」

働いているうちにだんだんと暑くなってきたのか、一夏は腕まくりをする。

「こら、一夏。勝手に服装を変えるな」

「箒か。ちよつとぐらいいいだろ？」

「ダメだ。せつかくの衣装だから、ちゃんと着ろ」

「なんだよ……。もしかして箒、気に入っているのか？」

「なつ、何を言うか！わ、私はただ、仕事はちゃんとするようにと思つてだな！」

「冗談だつて」

「な、なに……。？」

「なんだよ？」

「ふ、ふん！何でもない！」

スカートを翻して、箒はキッチンに向かった。

「よし！がんばるか！」

それから1時間ほど忙しく動き回り、一夏はやつとのこと引つ張りだこから開放されたのだつた。



美緒は現在、学園内を彷徨い歩いていた。その眼に映る光景はどれも美緒にとつてまぶしく映る。

「(やつぱり良い場所だね……ここは、私には勿体無いぐらいに……)」
そうして、暫く歩いていると、第4アリーナから大人数の声でしたので、美緒は第4アリーナに向かったのだった。



一夏は演劇に参加しているはず……なのだが何故かセシリアの狙撃、鈴音の飛刀を避けていた。

「し、し、死ぬ！死ぬでしもうー！」

そう言っている間にも、セシリアの狙撃が雨霰と降り注ぐ。セツトに隠れたが、すぐにセシリアの狙撃によって追い出される。

ステージに出ると、拍手と歓声が上がリ、一夏は律儀に挨拶をしていると、その隙を見逃さないとばかりにセシリアの狙撃襲い掛かる。

「げえっ、行き止まり!?!」

「一夏、伏せて!」

「!?!」

突然、一夏の前に現れたのは、白地に銀のあしらいが美しいシンデレラ・ドレスを纏

い、対弾シールドを装備したシャルロットだった。

「じゃ、シャル、助かった……」

「いいから、早く逃げて！」

「お、おう！サンキュ！」

「あ、え、えつと、ちよつと待って！」

「な、なんだ？」

「その、できれば王冠置いていってけると嬉しいなあ……」

「う、うん？まあ、いいけど」

王冠に手をかけた一夏を、楯無のアナウンスが遮った。

「王子様にとつて国とは全て。その重要機密が隠された王冠を失うと、自責の念によつて電流が流れます」

「はい？」

一夏は一瞬ぼかんとしたが、そのまま王冠を外すと――
「ぎやあああつ?!」

一夏の全身に電流が流れる。

「な、な、な……」

ぶすぶすと服の所々が焼き切れて煙を上げる。

「なんじゃこりゃあ!？」

「ああ!なんとということでしょう。王子様の国を思う心はそうまでも重いのか。しかし、私たちには見守るしかできません。なんとということでしょう」

「2回言わなくていいですよ!」

一夏は急いで王冠をかぶりなおす。

「す、すまん、シヤル。そういうことだから」

「ええっ!?そんな、困るよ!」

「そう言われても……スマン!」

「あっ!い、一夏つてばあ!」

脱兎の如く逃げ出す。

しかし、一夏の前に現れたのは黒髪と銀髪のシンデレラ×2だった。

「一夏、そこに直れ!」

「王冠は私がいただく」

箒は日本刀、ラウラは二刀流のタクティカル・ナイフを装備していた。

「あ、あ、あぶねえ!!」

間一髪、両サイドからの斬撃を回避した一夏は、そのままゴロゴロと転がっていく。

「邪魔をするな、ラウラ!」

「こちらの台詞だ。まずお前から排除してやろう」

「面白い……来い！」

「さあ！ お願いだからフリーエントリー組の参加です！ みなさん、王子様の王冠目指してがんばってください！」

「はあっ!？」

地響きとともに数十人のシンデレラ（？）が一夏に迫る。

「織斑くん、おとなしくしなさい！」

「私と幸せになりましょう、王子様」

「そいつを……よこせえええ！」

一夏は向かってくるシンデレラ（？）の一群からどう逃げたものかと考えながら、セツトの上を走り回る。

「見つけたぞ、一夏！」

「(ギャー！ 箒だ!)」

「その王冠をよこせ！ そうすれば、……そうすれば……」

「な、なんだよ?」

「ええい！ とにかくよこせ！ 断れば斬る！」

「(なにそれ、怖い！ 誰か助けて!)」

「(こ)ち(ら)へ」

「へっ?」

「一夏は足を引つ張られて、セットの上から転げ落ちたのだった。」

幼馴染と服従と第三形態移行

（更衣室）

「着きましたよ」

「はあ、はあ……。ど、どうも……」

一夏は誘導されるまま、セツトの下をくぐり抜けて更衣室へとやってきた。最初に一夏が使った側の部屋だった。

「えつと……。どうして巻紙さんが……」

「はい。この機会に『白式』をいただきたいと思ひまして」

「……は？」

「一夏！そこから離れて！」

突然、美緒の声が聞こえたかと思うと、一夏の体が横に飛ばされる。

「ちいっ！もう感づいたか！」

「やっと出てきたね、亡霊さん？それともオータムと呼ばばいいかな？」

「くそがつ！まあいい、お前らのISを奪ってやる！」

巻紙と一夏に呼ばれ、美緒にオータムと呼ばれた女性の背後から爪が飛び出す。それ

もクモの脚によく似たそれは、美緒に向かつて振り下ろされる。

「っ！美緒！」

美緒が返事をするよりも早く、美緒はそのクモの脚に似た物をひとつ蹴り、その場から離れる。

「一夏、早く『白式』を展開して！」

「ああ、解かった！」

一夏が美緒に返事をし終わると同時に2人は『白式』と『アルテミス』を展開装着し終える。

「くらえ！」

背中から伸びた8つの装甲脚の先端が開き、銃口を見せる。

美緒は横に一夏は真上に跳ぶ、オータムは一夏に狙いを定めたようで、真上に撃とうとする。だが、美緒がそうさせるはずも無く、右腕の『月光零式』を展開して、左の装甲脚4本のうち、上段の2本を斬り飛ばす。

一夏は天井に足をつき、スラストを吹かして前転気味に懐へ飛び込む。

それと同時に進行で構築した『雪片式型』を右手に握り締めて、斬りかかった。

「(もらった!)」

「甘え！」

2本の装甲脚に『雪片式型』が食い込み、抜けなくなる。

「くそっ！」

押ししても引いても刀身と装甲がうまく噛み合ってしまった、抜けなかった。

オータムはその手にマシンガンを構築、一夏に向かって弾丸を放つ。

「ぐうっ！」

何発かシールドバリアーを貫通した弾丸が、一夏の体に断続的な衝撃を伝える。

「一夏ー！」

美緒は背後から『雪片式型』が食い込んでいる装甲脚を斬る。

それによって、一夏はウイング・スラストアーを逆噴射し、後方宙返りをする。

オータムはその場から離れ、残った装甲脚から銃口を出し、美緒と一夏に弾丸を放つ、その銃撃を2人は避ける。

「そうそう、第2回モンド・グロツソでお前を拉致したのはうちの組織だ！感動のご対面
だなあ、ハハハハ！」

「——！！」

その言葉に一夏の頭は沸点を一瞬にして超える。

「だったら、あの時の借りを返してやらあ!!」

「クク、やっぱガキだなあ、てめえ。こんな「へえ……そうだったんだ？」ぐうっ!!」

オータムの言葉に沸点を超えたのは何も一夏だけではなかった。

美緒はオータムの首を掴み、地面に叩き付けた。

ガゴンツ!!と鈍い音がして、更衣室の床とオータムのISが凹む。

「さあ……全て吐いて貰おうか? 本部及び拠点は何処?」

「だ、だれが……」

「言わないのであれば……」

首を掴んでいる腕の力を少し込める。それによって、オータムの顔色が悪くなる。

「どうする? 言う? 言わない?」

「いうものかあ……!」

オータムは全力で美緒を蹴り、拘束を逃れる。

「かはっ! はあ……はあ……くそっ!」

オータムは近くにあった壁を壊し、外に出た。

「逃がさないよ!」

すぐに美緒と一夏が追いかける。だが、外に出た直後、オータムが乗っていたISが光り始める。

「何!?!」

「一夏あ!」

美緒は一夏の前に立ち、護る様に抱きしめた。その直後に大爆発が起きた。

「……大丈夫？一夏」

「ああ……あの女は!?!」

「まだ近くにいるよ……どうやら公園の方に向かってるみたい……掴まって!」

「おう!」

一夏は美緒に掴まる、美緒は『連続瞬時加速』アクセレート・イグニッション・ブーストを使って一気に公園についた。

「待ちなさい、オータム!」

「ちいつ!しつこいガキだなあ!?!」

悪態をついていたオータムが不自然に転んだ。

「クソツ!ドイツのI.S.だな!?!」

「その通りだ、『亡国企業』」

「動くな。すでに狙撃手がお前の眉間に狙いを定めている」

「くっ……!」

「洗いざらい吐いてもらおうか。貴様らの組織について」

「!!ラウラ、離れて!」

「何!?!」

美緒はラウラに声をかけるも、反応できず。このままでは当たると判断し、ラウラを

横に蹴り、直撃を防いだ。

「あの機体は……『カインフィードバックヴオンデイン』!? いや……でも形状が少し違う……?」

「お久しぶりですね……お姉様」

そこには以前、『カインホクキエツア』の自爆に巻き込まれた白昼夢さだめがいた。

「やっぱり……生きてたんだね……」

「二応『生命戦闘体』なので、それにこの子は『カインフィードバックヴオンデイン II』エレバス……大破した『カインフィードバックヴオンデイン』を改修、発展させた機体です」

そして、白昼夢さだめの後ろに2機のISが舞い降りる。その2機を見てセシリアと美緒が目を剥く。

『『サイレント・ゼフィールズ』!?』

『『終焉』!? どうしてここに!』

『サイレント・ゼフィールズ』。イギリスのBT二号機として製造されたISで、その基礎データには一号機であった『ブルー・ティアーズ』が使われている。

『終焉』。千条院家が作り出した最強にして最凶最悪のIS、千条院家が作り出した全ISの始祖機であり、乗り手の負担を一切無視した殺戮兵器とも言えるISだ。

『亡国企業』……想像以上にやっかいなISをそろえてるみたいだね……」

「Hinknien, um uns zu folgen Gottesdien-
t (我に跪き、崇め従え)」

「Wir beherrschen die deine Gebote (我は汝を支
配せり)」

「Ich binde dich an meine Beine Keil nur
Rednerpult (我が足を吻けよ汝を縛る楔に)」

美緒は何かに抗うように地面に頭を打ち付ける。それを見ていた一夏は美緒に駆け
寄る。

「我に跪き我が聖言ことばを聞けや」

「深き淵罪業の燃ゆ闇」

「美緒!! しっかりしろ!!」

「やめっ!! いやああああ!!!」

一夏の言葉に反応する余裕がない美緒は涙を流しながら抗う

「奈落の深き底に映るは汝の」

「Um uns die wahre deinen Namen (汝の真なる名を我
に)」

「Wir kennen den Namen deiner Seele (我は汝の

魂の名を知っている)」

「Um uns die wahre deinen Namen (汝の真なる名を我に)」

「Wir kennen den Namen deiner Seele (我は汝の魂の名を知っている)」

「魂が真名ぞ与えよ我に」

「Um uns die wahre deinen Namen (汝の真なる名を我に)」

「Wir kennen den Namen deiner Seele (我は汝の魂の名を知っている)」

「Um uns die wahre deinen Namen (汝の真なる名を我に)」

「Wir kennen den Namen deiner Seele (我は汝の魂の名を知っている)」

ラウラとセシリアは美緒のその異常な行動をスクールが原因だと直ぐにわかり、突撃をするも、エムと白昼夢に遮られる。

「購えぬ傷痕^{あかし}」

「A k z e p t a n z k ・ m p f e n , f o l g e n w i r d e m (足掻くな受け入れ、我に従え)」

「従属の鎖縛られる魂」

「D u b i s t m e i n S k l a v e (汝は私の奴隷)」

「一夏!今はとにかくあの女を止めるぞ!」

「解かった!」

一夏とラウラで白昼夢に接近戦を挑む、一夏は『雪片式型』を、ラウラは『モントジツヒエル』と『モントシャイン』を展開し、両サイドから斬撃を叩き込もうとする。

だが、白昼夢は軽く往なす様に一夏とラウラを弾く、その際に、一夏の『雪片式型』がばらばらに破壊された。

セシリアも、『サイレント・ゼフィルス』を巻こうとするが、偏光制御射撃フレキシブルによって、足止めをされる。セシリアも偏光制御射撃(フレキシブル)を使い、スコールに攻撃をするが、『サイレント・ゼフィルス』のシールド・ビットによって防がれる。

「その魂を縛る」

「d u n k l e K e i l (黒き楔)」

「全てを隷属させる」

スコールは一呼吸の間を空ける。美緒の瞳の光が消えたり点つたりを繰り返す。

「……………認識」

美緒は一夏の声を無視して、スコールの許に向かう。

『生命戦闘体△——』は貴女様をマスターと認識しました。ご命令を」

「お、おい美緒？何を言ってるんだ？」

一夏の言葉に反応したのか、美緒は一夏の方に向く、その瞳には光が宿っていないかった。

「そうね……じゃあ、△——。織斑一夏を倒しなさい」

「解かりました我が主」

「なっ?!何を言ってる!!」

一夏が言葉を発し終える前に、美緒は一夏の懐に入っていた。美緒は既に『月光零式』を展開し終えており、斬り裂こうとするが、一夏は『雪羅』をシールドモードにして防ぐ。

「美緒?!やめろ!」

「我が主の命令は絶対……破壊します」

一夏は防戦一方であり、迷いがあった。だが美緒にはそれはない、『月光零式』によって『雪羅』が打ち上げられ、隙が出来た所に美緒はもう片方の『月光零式』で一夏を斬り裂いた。

本来ならラウラかセシリアが一夏の援護をするのだが、2人は既にシールドエネルギーが0となっていて、援護が出来る状態ではなかった。

「があっ!!」

「Δー11。そこまで良いわ、帰るわよ」

「解イエス・マイ・マスタかりました我が主」

スコールが言うと、追撃しようとしてた美緒はあっさりと攻撃をやめ、スコールの許に戻る。

「エム、白昼夢さだめ、オータムも帰るわよ」

「「了解」」

「……返せ」

一夏の声が聞こえたのか、スコールは振り向く。

「何かしら？ 織斑一夏？」

「美緒を返せえええ!!」

——操縦者の劇的な感情の発露を確認、自己の改変とコアの分裂が完了しました。コアの人格を発現及び第三形態サード・シフト移行の条件を満たしました。第三形態サード・シフト移行します。

『白式』から巨大なエネルギーが発現し、辺りを閃光で見えなくする。

そして閃光が消え、一夏の姿を見ると、『白式』の姿が変わっていた。左腕にしかなかった『雪羅』が右腕にもついており、背中の大型ウィング・スラスターが消え、一對の白銀に輝く機械的な天使の翼が装備されていた。

「うおおおおお!!」

新しい姿になった『白式』は今までの『瞬時加速』イグニッション・ブーストを遥かに上回る。『瞬時加速』イグニッション・ブーストでスコールに迫る。だがそれは美緒によって防がれてしまう。

「美緒、そこをどいてくれえええ!!」

「マスターに危害を加える者は排除します」

「△———。いいわ、通してあげなさい」

「イエス・マイ・マスター解かりました我が主」

美緒が退くと、一夏はスコールに荷電粒子砲を放つ、だがスコールは既にそこにはおらず。一夏の左腕を掴んでいた。

「なっ!?!」

「出直してきなさい、織斑一夏」

スコールはそう言うと、一夏を地面に叩き付けた。

「がっ!!」

「エム、煙幕を張りなさい」

「……了解」

スコールの指示通りにエムは黒い煙幕を張る。

しばらくすると煙幕が晴れるが既に美緒の姿はなかった。そして、その場に一夏の慟
哭が響き渡ったのだった。

一夏と新しい名前と宣戦布告

（ I S 学園応接室 ）

美緒がスコールによって連れ去られてから 1 週間が経った。

一夏はあの後、正確にはその次の日から、地獄の特訓と言う言葉が生温いほどの密度が濃い特訓をしていた。それは美紗緒を含めた第四世代型 I S 全機を相手に、1 対多の実戦を想定した模擬戦を幾度となく繰り返し返した。

それによって、一夏の戦闘技術は飛躍的に伸び、国家代表を相手に互角以上の戦いを出れるようになったのだが……『白式』本来の問題でもあるエネルギー消費量が一気に増えたのだ。

その理由が第三形態移行をした際に、新しく発現した武装が全てエネルギーを消費する物ばかりだからだ。短期決戦であるなら無類の強さを誇るようになった『白式』だが、『亡国機業』まして美緒や白昼夢を相手にするのであれば、不安要素にしかない。

よって、一夏は美紗緒に頼んで千条院家の技術班の班長である天道豪に I S 学園に来てもらったのだった。

「態々来てもらって申し訳ないです。天道さん」

「何、いいってことよ。それでどうしたんだ?」

一夏は今までのことを話した。学園祭の最後に『亡国機業』ファンタム・タスクのオータムとの戦闘から美緒が連れ去られ、『白式』が第三形態移行を果したことを、その後のエネルギー消費量が増えたことを包み隠さずに話した。

「なるほどな……事情はよく解った。それで一夏は何をどうしたい?」

「俺は……美緒を助け出したい、その為に『白式』を強化して欲しい」

「解った……すまないが、美紗緒の嬢ちゃん。織斑先生を呼んでくれないか?」

「解ったよ。豪さん」

美紗緒は応接室を出た。暫くすると、千冬を伴って美紗緒は戻ってくる。

「初めまして、千条院家技術班の天道豪です」

「ご丁寧に、IS学園の教師を務めてる織斑千冬です。それでどういったご用件ですか?」

「はい、織斑くんのISを強化する為に整備室をお借りしたいのですが」

「……どうしても必要なことですか?」

「はい、織斑くんが後悔しないように……まして子供が後悔しないようにするのも私たち大人の役目でもあるでしょう?その為に必要なことです」

「はい、織斑くんが後悔しないように……まして子供が後悔しないようにするのも私たち大人の役目でもあるでしょう?その為に必要なことです」

豪の言葉に暫く黙っていた千冬だが、結局のところ、許可を出した。

豪はすぐに機材とパーツを搬入し、第4整備室で強化を始める。その様子は以前、一夏が見た『白式』の強化とは全然違った様子だった。

一夏もパーツを積んだ時の違和感がないかなどのチェックをして、2時間ほどで出来上がった。

「どうだい？一夏くん。新しくなった『白式』は」

「はい、とても乗り易いです。天道さん、有難うございます」

「なあに、いいってことさ……それより一夏くん、新しくなった『白式』に新しい名前をつけてみないか？」

「新しい……名前ですか？」

「ああ、その方が更に愛着が沸くだろうとおもってね」

「わかりました……『白式改』びやくしきあらため。これがいいでしょう」

待機状態の『白式』改め『白式改』と新しい名前を貰った『白式改』は喜ぶようにコアを点滅させた。

そして天道が整備室から出ようとしたところ、通信が入る。

「どうした？」

『班長！今すぐテレビを見てください!!』

何か慌てた様子の子の班員を気にしつつも、天道はテレビをつける。

『——。よって私たちはイギリス、フランス、中国、日本に宣戦布告をする!! テログ
ループを匿う不穏分子は排除せねばならない!』

この時、今回の宣戦布告によって史上最悪で最大の戦争が始まったのだった。

オリジナルルート開戦編 オリジナル編プロローグ

IS——正式名称ヘインフィニット・ストラトス

篠ノ之束が作り出したマルチフォーム・スーツ。

篠ノ之束がISを作り出した目的は宇宙進出……だが開発者が起こした白騎士事件により

従来の兵器を凌駕するという篠ノ之束の言葉が実現し、兵器転用されることとなった……。

ISは女性しか扱えず、数多くの男性の牙を無理矢理抜いていった……それは私も例外ではなかった。

国家、企業はISの開発を最優先とし、篠ノ之束が開発した目的である宇宙進出を忘れ、兵器としての

開発にいそしんでいた……。

それから十年……女尊男卑が世界に広がり、多くの男性は失意に堕ち、女性の奴隷と化すのも時間の問題であった。

そこに一人の男性がI Sを起動させることが出来た……名は織斑一夏。

初代ブリュンヒルデ、織斑千冬の弟だ、何故彼がI Sを起動させたのかは不明だ……。

だが、あの男は世の男性の希望となった。

しかし、世界は彼を男性がI Sを操縦できる鍵としか見ておらず、政治的技術的利用価値しかない非力な操縦者この時はまだ誰もがそう思っていた……私を含めて。

当時内閣総理大

臣

開戦直前

↳千条院家本宅執務室

「さてと……。みんなに集まってもらったけど、昨日の宣戦布告……。どう思う?」

世界に配信された宣戦布告から一夜明けた翌日。一夏達は千条院家当主の執務室に来ていた、IS学園では話し辛い内容も含まれるので、誰にも聞かれないようにと集まったわけだ。

「唐突すぎるな……。それにきな臭い感じがする」

そういったのはラウラだった、その意見に全員が同意する。

「お姉ちゃんが連れ去られてから1週間……。それも関係あるのかも」

「なあ、美紗緒。美緒が連れ去られる時にスコールがやったのはなんだったんだ?」

「それは――」

「『生命戦闘体』だけに作用する服従コードで御座います。一夏様」

一夏が美紗緒に聞いた質問は言峰が答えた。言峰は更に詳しく説明をする。

「服従コードとは、本来『生命戦闘体』が暴走した時。若しくは裏切ろうとした時に使われるもので、『生命戦闘体』に対して絶大な洗脳とも呼べる効果をもたらすので御座いま

す。

本来なら服従コードの対となる解除コードと呼ばれるものがあるのですが、服従コードと解除コード自体が90年前に開発されて以来。一度も使われたことがないので御座いますが……。今回『亡国機業』ファンタム・マスターに旨い事利用され、美緒様を連れ去られる結果に……。」

言峰の説明を聞いている間に一夏はこぶしを強く握っていた。

「とにかく、今は解除コードの発見若しくは製作に全力をつくしていますので——」
ドカンッ!!と一夏は壁を叩いた。

「あの時……。俺がもつと早く動いたら……!」

一夏はそう言いながら部屋を出て行こうとした……。が、美紗緒の前に現れたモニターによって止められる。

『当主代理!』

「どうかしたの?そんな慌てて」

『これを見て下さい!!』

別のモニターに映し出された映像を見て美紗緒は驚く、それに映っていたのは無数の空母や戦艦だった。

それを見ながら、モニター越しにでも物々しきを感じる事が出来た。

「予想以上に早い……!」

「如何なさいますか? 美紗緒様」

「ここまできたらもう引き返せないよね……? 言峰さん」

「左様で御座います。美紗緒様」

美紗緒は少しの間、目を閉じる。

そして決心をしたかのように、美紗緒は目を開けた。

「千条院家の戦力は?」

「はい、第三世代機『迅雷』の壱型、弐型が12機ずつと完成したIS専用補給戦闘母艦が1隻で御座います」

「IS専用補給戦闘母艦?」

「はい、美緒様がこの戦争を予想し、その為の力として建造を進めた戦闘母艦で御座います。」

その火力、防御力、機動力は現存戦艦を遥かに上回っております。

現存戦艦と違い、この戦闘母艦は『P I C』パッシブ・インテリシャル・キャンセラによつて浮遊しておりますの

で魚雷は無視を出来ませんが、その分ミサイル、敵主砲等に狙われ易いのですがレーザ式の迎撃武装があるのでなんとかなるでしょう。何か質問は御座いますか?」

言峰の言葉に一夏が手を上げる。

「はい、一夏様」

「詳しいスペックデータを見せてください」

「畏まりました」

言峰は一夏の要求を快く受け、スペックデータのみが書かれた文面が全員の目の前に現れ、目を通す。

「全長3000m、全高400m、全幅400m……。でかくないか？これ」

「主砲が荷電粒子砲2門!?副砲がデュアルハイレーザー4門、補助武装として大型レーザーキャノンが4門。迎撃用レーザーがパルスレーザー？ミサイルとかを撃ち落とすならこれが妥当ね」

「対ミサイル用装備にフレアが20門にミサイルは……。船首近くに散布型4門、船側に4連装分裂型ミサイル4門、船尾に散布と分裂の混合型ミサイルが8門……。すごいねこれ」

「カタパルトは船首に2基、船尾2基、船底に落下式が2基か……。これなら直ぐに出れそうだな」

「搭載ジェネレーターが4基……。妥当なのか？これは」

「ブースターは船尾に高出力の大型4基に船側に……。スラスター!?戦艦にスラスターって何を考えてますの!？」

「艦体全てを覆うエネルギーシールド？言峰さん。このエネルギーシールドってどんなの？」

「はい、美緒様の専用機『アマテラス』と同じエネルギーシールド『アイギス』で御座います。

ただ、その大型化故に反射はできなくなりました。」

「十分すぎるよ……。そういえば同時に補給できるISの数が出てないけど、どれぐらいなの？」

「30機でございます。記入漏れがあつたようで……。まことに申し訳ございません」

言峰はそういつてお辞儀をする。

「それはもういいけど……。実物はすぐに出せるの？もう余り時間がないよ」

「それは問題ありません。庭をご覧下さい」

一夏達が庭を見ると庭が割れて、中から艦首両舷から前方に突き出したハッチがついている脚部状のものと、通常の戦艦に使われる艦体に丸みを帯びた二等辺三角形の艦橋が取り付けられ、船底には脚部状のものと連結させる装甲が取り付けられ、その下部装甲から青白い噴射炎が見えることからブースターが取り付けられていることがわかった。

一見するとアンバランスであり、とても戦艦や補給艦には見えなかった。

「これが……?」

全員の心情を代弁するかのようになり、一夏が眩く。

「はい、I S専用補給戦闘母艦『レクイエム』で御座います。では皆様、時間がありませんので『レクイエム』にお乗り下さい」

言峰に言われ、一夏達は『レクイエム』に乗った。



『レクイエム』に乗った一夏達は、艦橋に向かう。その途中で言峰に『レクイエム』に関する説明を聞いていた。

「この『レクイエム』は長期に渡る移動手段としても想定されて作られておりますので、生活区域、入浴区域、娯楽区域等も充実されております。

I S操縦者の皆様にストレスを溜めない様にとの美緒様の配慮にて、実現された物でございます」

「それにしても美緒は用意周到ね、いつから準備を?」

「はい、『銀の福音』シルバリオ・ゴスベル事件後ですが?」

「それでも早すぎですわ……。千条院家には裏の情報網が広いのですのね」

鈴音の問いに言峰が答え、セシリアが感想を言っていると艦橋の前に着く。

そして、スライド式のドアが開かれると予想外の人物が居た。

「なんだ、遅かったじゃないか織斑」

そこにはここにいないはずの千冬がいた。

「どうした？ 鳩が豆鉄砲食らったような顔をして」

千冬を見て、一夏達は呆ける。それ見た千冬は可笑しそうに言った。

「どうして千冬姉がここに!?! I S 学園はどうなったんだよ!?!」

一夏の疑問は確かだ。本来であるなら千冬は I S 学園にいるはずだ。

しかし、千冬は『レクイエム』の艦橋にいた。千冬は少し陰のある表情をしながら言う。

「I S 学園は……解体された」

「え?」

「名目上は無期限の休校だがな。事実上、I S 学園は解体されたんだ」

千冬の言葉に全員が納得がいった様だ。世界大戦とも言える現状で、代表候補生やそれに準ずる生徒を敵地に居させる筈も無く、7 割近い生徒と教師が I S 学園から其々の祖国に呼び戻された。

結果、国際 I S 委員会は無期限休校と言う名目で I S 学園を解体したのだった。

「それに、今回の戦争については美緒からある程度聞いているからな……。私はそれを含め、美緒にこの『レクイエム』の艦長をやらせてもらおうように頼んだんだ」

「そっか……」

千冬の話が終わり、一夏達が静かになると、千冬はクルーに命令を出す。

「各自システムチェックを終わらせる！時間はいもう無いぞ！」

千冬の命令に各方面から報告が上がる。

「管制システムオールグリーン！」

「索敵システム問題ありません！」

「操舵及びエンジン、ブースター、スラスターに異常はありません！」

「全武装に異常無し！」

「大型エネルギーシールド『アイギスⅡ』展開に問題ありません！」

「これより『レクイエム』を発進させる！微速前進後、高度6600フィートまで上昇次第、全速前進に切り替える！」

千冬の掛け声と共に、『レクイエム』は浮上しながら少しずつ進み、千冬が言った6600フィートに到達すると、一気に風景が流れる。

「これよりI S 操縦者は第一種戦闘配置、専用機持ちの織斑、ボーデヴィツヒは船首カタパルト。デュノア、オルコットは船尾カタパルト。凰、篠ノ之は船底落下口にて待機！」

『迅雷』の操縦者は壱型と貳型でツーマンセルを組み、各カタパルトに2組ずつ就け、各員急げ！」

千冬の号令により一夏達は各カタパルトに向かった。



一夏は『白式改』を展開して、カタパルトに接続し終わると近くにあつたモニターから通信がくる。

『初めまして、これから専用機持ちの皆さんのオペレーターを勤めさせていただきます。フィオナです』

フィオナと名乗る少女はお辞儀をする。

『それでは作戦を説明します。作戦目標はこちらに向かつているアメリカ戦力の排除です。』

アメリカ戦力は海軍、空軍の混合師団。その数は巡洋艦700、空母400、補給艦200ですが、空母の中に一隻のみIS専用空母となります。

未確認ですが、既に国家代表がこの空母に乗り込んでいるとの情報がきてます。情報どおりだとしたら、まともに戦うにはリスクが大きすぎます。起動前にその空母を見つ

け出し、一気に破壊してください。

それでは、作戦の説明を終了します……。無事の帰還を」

フィオナが言い終えると、カタパルトのハッチが下り、一夏は腰を低くした。

『織斑一夏さん、発進どうぞー！』

「織斑一夏、『白式改』出るぞー！」

一夏はそういうと同時にカタパルトから出る。その瞬間に『アクセレート・イクニッション・ブースト連続瞬時加速』を使い、最速で、戦場へと向かった。

開戦

（太平洋海上）

『これより、『迅雷式型』による超遠距離狙撃を開始します。注意してください』

フィオナが言い終えると同時に海面近くを飛行している一夏が見る先にあつた、巡洋艦の1隻が轟音を出しながら轟沈した。

一夏はそれを合図とばかりに両腕の『雪羅』をカノンモードに移行させて、両腕と背部にある翼から荷電粒子砲を放つ、4門の荷電粒子砲の斜線上にある巡洋艦と補給艦が飲まれて沈んでいく。

その直後にアメリカ軍の空母から続々とF-15Eストライクイーグルが出撃する。

『一夏あ！先行しすぎだ!!』

プライベート・チャネルが一夏の耳に入る。首だけを少し後ろに向けると、ラウラとシャルロットがいた。どうやら先程の怒声はラウラのものだったらしい。

「そうだよ、一夏一人で戦ってるわけじゃないんだから」

シャルロットは一夏に注意をしつつ、右手に『オアシス』、左手に『デザート』を既に持っており。近付いてくるストライクイーグルを撃ち落す。

ラウラもワイヤーブレードを6本伸ばし、シャルロットと同様にストライクイーグルを斬り落とす。

「すまない。シャル、ラウラ……。ところで、セシリアと鈴と箒は？」

「箒とセシリアは『レクイエム』の防衛に当たっている。何でも『迅雷』のみでは厳しいかもしれないと言うことだな、鈴は別の方向から強襲するみたいだ」

一夏の質問にラウラが答える。その間にも巡洋艦やストライクイーグルのミサイルや砲撃が飛んでくるも、3人は避け、反撃にとシャルは『オアシス』、『デザート』でストライクイーグルのミサイルを撃ち落とし、ラウラはワイヤーブレードでストライクイーグルを斬り刻み、一夏は荷電粒子砲で巡洋艦を沈ませる。

一夏は『雪羅』を射撃形態からクローモードに切り替え、『雪月』を射撃形態で20機射出する。『雪月』は一夏の周りを数秒漂い、直ぐにストライクイーグルや巡洋艦を攻撃する。

『敵艦隊後方からISの反応を確認！注意してください！』

突然、ファイオナからの通信が来ると同時に無数のエネルギー弾が一夏達に襲い掛かる。

一夏達は紙一重でエネルギー弾を回避する、撃たれた方向を見ると一夏達は驚く。

「『銀の福音』!？」
シルバリオ・ゴスベル

「こんな時に……!!」

臨海学校で戦ったアメリカ・イスラエルで共同開発された第三世代型の軍用 I S であり、まだ『第二形態移行』セカンド・シフトをしていなかった『白式』を墜とし、一夏に重傷を負わせた

I S だ。

その『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルからオープン・チャネルが開かれる。

「こんな形で再会するなんてね……? 白いナイトさん?」

「それは俺もですよ。ナターシャさん」

軽口を言いながらも、一夏達は近付いてくるストライクイーグルを落とす。

一夏がナターシャに突撃する直前にラウラが一夏の前に出る。

『一夏。『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルは私に任せろ』

ラウラからのプライベート・チャネルが届く、それに一夏は少し驚く。

『一人じゃ危険だ! ここは3人で!』

『それでは遅い! こうしている間にも増援がくるかもしれないんだぞ?! だから一夏はシャルロットを連れて、敵戦力を削れ、私一人で十分だ』

『僕も行くよ、だから一夏……行つて!』

ラウラとシャルロットは一夏にそう言うのと、『瞬間加速』イグニッション・ブーストを使い、ナターシャに突

撃をした。

一夏は2人に感謝の念を抱くと『雪月』を武装プラットフォームに戻し、『連続瞬時加速』を使って、その場から離脱した。

一夏が『連続瞬時加速』を使い、離脱する。

その直後にシャルロットは『サンライズ』をブレード形態で8基射出して、『銀の福音』に向かわせ、『オアシス』と『デザート』を収納して、『オクスタング』を両手に展開する。

ラウラは『モントジツヒエル』と大型リニアキャノンの『ドンナー・シユラーク』を展開する。

「あら？行かせても良かったの？」

ナターシャの挑発を2人は聞き流す。

『ラウラ、僕が弾幕を張るからその間にお願い』

『解った』

シャルロットとラウラはプライベート・チャネルを使い、連携を組む。

ラウラが領いた直後にシャルロットはENモードにした『オクスタング』を

構えて、『瞬時加速』イクニツシヨウ・ブーストを駆使しながら弾幕を張る。

「!?」

ナターシャはシャルロットの不意打ちとも言える攻撃を避けながら翼の『銀の鐘』シルバー・ベルを無差別に、それも全方位に放つ。

シャルロットは『銀の鐘』シルバー・ベルを『オクスタンガトリング』で撃ち落す。それによつて『銀の鐘』シルバー・ベルが爆発し、双方に爆炎と爆煙が起こり、視界を塞ぐ。だが、視界が塞がれてもハイパーセンサーによつて敵の位置が捕捉出来る為、無意味であつた。

しかし、それはシャルロットの狙いでもあつた。

ナターシャはシャルロットの『オクスタンガトリング』と『銀の鐘』シルバー・ベルを撃ち合いをしている中、ふと疑問に思った。

「(そういえばもう一人は……?)」

ナターシャの疑問が直ぐ解ることになった。

それは背後からラウラが、『ドンナー・シユラーク』を『銀の福音』シルバリオ・ゴスペルに撃ち込んだからだ。

『背後からの砲撃に成功、これより』アクティブ・イナードナル・キャンセラー A I C 『で』シルバリオ・ゴスペル『銀の福音』の動きを止めるぞ』

『了解!』

シャルロットは『オクスタンガトリング』を収納して、『月光』を展開し、
ダブル・イグニッション・ブースト
 『2段階瞬時加速』を使い、ナターシャの懐に飛び込む。

「くっ！」

ナターシャは距離をとる為、右腕部に『銀の鐘』シルバール・ベルの腕部装備砲（ハンドカノン）をシャルロットに放とうとする。

しかし、放つ直前にナターシャの動きが不自然に止まる。

『アクティブ・イナード・キャンセル』
 『A I C』!?』

「これで……」

シャルロットは『月光』を上段で構える。

「終わりだああああ!!」

気迫さえ感じられるシャルロットの声と共に『月光』が振り下ろされ、『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルのシールドエネルギーを一気に削りきった。



シャルロットとラウラがナターシャを倒したその頃の一夏は、アメリカ艦隊を順調に倒していた。

『雪月』を展開して、ストライクイーグルを斬り落とし、荷電粒子砲で巡洋艦や空母を一撃で沈めていく。

ストライクイーグルと巡洋艦からミサイルが放たれたれば、後進しながらの『瞬間加速』を行い、荷電粒子砲を放ってミサイルを破壊していく。

そんな中、ファイオナから通信が入る。

『織斑一夏さん、そちらに所属不明I.S.が急速接近中！気を付けて下さい！』

「了解！」

一夏はそう答えながらも『雪月』を射撃形態とブレード形態で展開して、斬り刻み、風穴を開け、破壊していく。

——警告！上空から高エネルギー反応！回避を推奨します！

『白式改』からの警告メッセージは遅く、一夏が上空を見ると既に青白い閃光が近付いていた。一夏は『雪羅』をシールドモードに切り替えてそれを防ぐと、聞いたことのある声が聞こえる。

『こちらは『アルテミス』です。我が主の命により、加勢します』

「美緒!？」

美緒は一夏の声に答えずに『ツヌグイ』を射撃形態で射出、一夏に向かってエネルギー弾が放たれる。

一夏はそのエネルギー弾を高速横回転移動と『瞬時加速』を組み合わせた機動で回避、だが美緒は多機能武装腕を『グングニル』に展開変形させて荷電粒子砲を放つ。それを『雪羅』のシールドで防ぐ。

「美緒、どうして!!」

「……………」

「聞こえてるのか!? 美緒!」

「…………… 五月蠅いですね」

一夏の呼びかけに美緒は本気で五月蠅そうにしながら『グングニル』から『月光零式』に切り替え、『連続瞬時加速』を使い、一夏に接近する。

一夏は『雪羅』をクローモードに切り替えて『月光零式』の刀身を挿んだ。

「!?」

「美緒、正気に戻ってくれ!!」

「……………何を言うかと思えば……………私は正気ですよ。織斑一夏」

美緒は一夏の説得を何とも思わず、脚部の大型ビームソード『月光』を展開して一夏を横に蹴る。

『織斑一夏さん。服従コードに縛られている『生命戦闘体』に説得は不可能です。

『戦闘を続行してください』

フィオナの言葉に一夏は苦虫を噛み潰した様な顔をして、海面を蹴り上げて『連続瞬間加速』を使い、美緒に急接近する。

美緒はニタア……。と嬉しそうに口元を歪めて『連続瞬間加速』を使い、一夏と美緒は互いの接近武器で激突した。

開戦終了

（太平洋海上）

一夏と美緒は常人ではありえない速度と機動で戦っていた。

互いに『連続瞬時加速』アクセル・イグニッション・ブースを駆使し、バレルロールをしながら『月光零式』と『雪

羅』のクローモードで打ち合う。

美緒が『ツヌグイ』を展開すると一夏も『雪月』を展開して、ビット同士の撃ち合いが始まり、周りのストライクイーグルと巡洋艦、補給艦、空母を破壊していく。

一夏は右腕の『雪羅』をクローモードのまま構え、左腕の『雪羅』はカノンモードにして荷電粒子砲を放つ。

美緒は荷電粒子砲を避け、『八叉鳥』ヤタガラスで荷電粒子砲を撃ち返し、両腕の『月光零式』を構えながら『瞬時加速』イグニッション・ブーストを使う。

一夏はカノンモードにしていた『雪羅』をクローモードに切り替え、荷電粒子砲を急降下しながら避ける。『瞬時加速』イグニッション・ブーストで接近してきた美緒を脚部エネルギー刃で切り払おうとするも、美緒は『月光零式』で横に薙ぎ払い。互いのエネルギー刃が触れ合いますパークが起きる。一夏は後方に弧を描く様に下がり、美緒は左腕の『月光零式』を『グ

ングニル』に切り替えて放つ。

それを一夏は右腕の『雪羅』をシールドモードに切り替えて防ぐと、左腕の『雪羅』で美緒の左腕部を殴り、装甲を砕きながら吹き飛ばす。

「……………」

一夏に殴られたことに美緒は少し動揺するも、すぐに思考を切り替えて『シャッテン』を射出し、収束荷電粒子砲を放つ。

一夏は避けて背部の翼から荷電粒子砲を放ち、その直後に『連続瞬間加速』アクセレート・インニジョンブーストを使つて急速接近し、両脚部のエネルギー刃を展開してサマーソルトを放つ。

美緒はそれを後退で避けるも、追撃とばかりに背部の翼から荷電粒子砲が放たれ、直撃を受ける直前に『アイギス』を展開して防ぐが、距離が近すぎたせいで反射できずに海面に叩き付けられる。

一夏はさらに追い討ちを掛けるように荷電粒子砲を美緒が叩き付けられた所に撃ち込む。

だが美緒は一夏がいる所の真下から、海面を突き破つて現れる。その手には『月光零式』が既に展開されていて、右腕の『雪羅』を斬り飛ばした。

——右腕部切断！ 一時的に右腕部の武装使用不可能……。自己修復モードに移行します。

「くっ！」

『雪羅』を斬り飛ばされた一夏は距離を取り、残った左腕の『雪羅』で荷電粒子砲を放つ。

美緒は『アイギス』で荷電粒子砲を受け止めて反射させる。反射された荷電粒子砲を一夏は避けて『雪羅』をカノンモードからクローモードに切り替えて振り上げるも、美緒は『月光零式』で受け止める。

「ちい……」

「……………」

罅迫り合いをしている中、美緒に異変が起きた。

「……………イエス・マイ・マスターはい、我が主」

美緒は突然後退し、即座に『グングニル』をENからAMに切り替え、海面に向かって放ち、水飛沫と爆炎を起こす。

「美緒！」

水飛沫と爆炎が晴れると既に美緒は戦闘区域から離脱していた。

その直後に鈴音が一夏に近づく。

「一夏！大じよ……。あんたその腕！」

「俺は大丈夫だ」

一夏がそう言い終わると同時に斬られた『雪羅』の修復を終え、元通りの『雪羅』が

そこにあつた。

「鈴。そつちの状況は？」

「あたしは巡洋艦20、空母10、補給艦5ね。一夏は？」

「俺は……。どれぐらいかは覚えてないけどよ……。美緒と戦つた」

鈴音は最初、誇る様に言つたが、一夏の報告を聞いて目を見開く。

「……説得しようとしたけどよ……。だめだつた」

「そう……。よくやつたわね。一夏」

一夏の痛々しい表情を見た鈴音は胸が締め付けられるような痛みを感じた。

『織斑一夏さん、シャルロット・デユノアさん聞いてください！』

切羽詰つた様なフィオナの通信が突然入る。

『今入つた情報で本国に敵ISが数機上陸した模様！直ちに排除しに向かつてください』

！美紗緒様は一足先に本国に向かつています！』

オープン・チャネルで言われた内容を聞いた一夏と鈴音は顔を見合わせて。一夏は反

転して、『アクセラレート・イクニッション・ブースト連続瞬時加速』を使い、日本に向けて飛び立つた。



五反田弾は家族と逃げていた。

その理由は本土に敵国 I S が上陸した為である。祖父の敵を先頭にして弾は一つ下の妹、蘭を手を引いて走り、父親の剛つよ、母親の蓮れんは弾と蘭の後ろを走っている。

「はあはあ……。お、お兄……。一夏さん……。無事かな……。？」

「あいつなら大丈夫だろ……。何せ、千冬さんの弟だからな」

不安げに話しかける蘭を勇気付ける様に弾はそう返す、しかし、弾も内心不安と心配でいっぱいだった。

そこに I 機の I S が弾達の前に現れる。

「見いつけた♪」

その I S 操縦者は弾達を見て獲物を見つけた猛禽類の様な笑みを浮かべる。

「ここで殺つてもかまわねえだろ……。なあ？」

その I S 操縦者は呟きながら敵にその手に持った西洋剣を模った凶刃を振り下ろそうとした瞬間、何かに気づいた I S 操縦者は後退すると、先程まで居た所に 8 つの大剣が突き刺さる。

「何者だ！」

青白い噴射炎を出しながら、I 機の I S が弾達に背背を向けて降りる。

「こちらは『ツヌグイ』。貴女は日本国の主権領域を侵犯しています。速やかに退去して

ください。さもなければ、実力で排除します」

「ふざけんなよ！テロリスト国の狗が！」

「反抗の意思を確認……。警告はしましたよ？」

ISの操縦者が美紗緒に西洋剣を振り上げ、美紗緒に攻撃しようとした瞬間、敵ISを美紗緒が横に蹴り飛ばす。蹴り飛ばされたISは近くにあつた家屋を倒壊させるも、状況に追いついていなかった。

「……ギリシャ製第三世代IS『アテネ』……。スペックカタログよりも低いね……」
「あ、あの……」

美紗緒に弾が話し掛けようとするも、美紗緒の隣に一夏が降りる。

「あ、一夏さん。民間人を『レクイエム』まで護衛して」

「ああ、解った……。つて弾!？」

「一夏か!？」

一夏と弾は互いを見て驚く、美紗緒は知り合いなのだろうと判断して、未だに動きを見せない『アテナ』を警戒する。

「弾！無事だったんだな」

「ああ、その人に助けられたんだ」

弾は美紗緒を見て、美紗緒は軽く会釈をする。

「一夏さん。感動の再会の所申し訳ないけど、早くその民間人を『レクイエム』に
「ああ、俺についてきてください！」

一夏に先導されて五反田一家は『レクイエム』に向かった。



『お帰りなさい、織斑一夏さん』

五反田一家を『レクイエム』に連れて戻るとフィオナの声が出迎えた。

「今戻った。状況は？」

『はい、現在アメリカ艦隊は撤退を始めています、こちらはまもなく終わるでしょう。』

問題は本国に上陸したIS数機で、軍事施設70%、発電所関連施設40%、IS関連施設70%を破壊しています。幸い、原子力発電所は被害は出ていませんが、実質ほぼ壊滅状態と言っても過言ではない状況です。これに対し千条院家の対応は徹底抗戦、及びこれを引き起こした『亡国機業』フアクトム・システムズを完全壊滅する方向で決まっています』

「わかった、それで俺はこれからまた出撃れば良いのか？」

『いいえ、暫くは第二種戦闘配置にとなっておりしますのでゆっくり休んでください……。』

織斑一夏さんが今連れている民間人の皆様はご友人とそのご家族なのでしょう？』

「了解、それじゃ俺は一足先に休んでる。みんなは何処に案内すれば良い？」
『はい、居住区の第二ブロックに案内してください。今艦内データをモニターに送りま
す』

フィオナがそういうと、モニターが現れる。

一夏はそのモニターの艦内図を見ながら弾達を案内する為に歩き始めた。



九月某日、強襲された日本、中国、フランス、イギリスの各国首脳は極秘会談を敢行。

その結果、同盟を組み、各国の頭文字を取り『I C H N』と命名。
イーチャン

これにより第三次世界大戦とも言える戦争は激化の一途を辿るのだった。

オリジナルルート大戦編 大戦プロローグ

史上初のＩＳ同士の直接戦闘、亡国機業に繰られた国々による宣戦布告に世界は理念無き戦乱に突入した。

軍用施設があっけなく崩壊し。無秩序に拡大する戦争……俗に言う『ＩＳ戦争』だ。初期の奇襲により壊滅的な打撃を被り、一方的な防戦に追い込まれたＩＣＨＮ陣営の切り札となったのが

あの男、織斑一夏だった。

この戦争におけるあの男は正に圧倒的だった……。時に味方である私でさえ不安と恐怖を抱くほどに……。

あの男……織斑一夏は守るべきである人達の為に戦い続けると言っていた。

その戦い方に敵は畏怖を、味方には畏敬を齎した。

あの男と戦った敵軍はあっけなく崩壊し、味方をほぼ無傷の状態で帰還させた……ただ一人の少女を除いて。

当時内閣総理大

臣

砂塵の毒蛇対白式改

（インド洋）

『ICHN』が結成されて早2週間が経つ、その間に一夏達は様々な戦場に向かい、敵を沈めていった。

現在一夏とはある任務が下され、その任務の為に現在インド洋を飛んでいた。

そんな中、フィオナから通信が入る。

『作戦の確認をします。マグリップ連合の陸送部隊を襲撃し、同連合のIS、砂塵の毒蛇とサミールラの機体を破壊します。』

サミールは人格破綻者で、その人格破綻者故に奇抜な戦術と行動を取るIS操縦者として知られています。

その奇抜な行動をIS展開中に制限する為、精神負荷を掛けてある程度の軍事行動を取れる様になっていますがその反動か言動と精神が不安定になっています、ホワイトアフリカ各地からは英雄と称えられるほどの相手です。まともに戦うにはリスクが大きすぎます。

彼女のIS、『マンマヴァ』は『打鉄』と『ラファール・リヴァイヴ』を複合し、特殊

兵器を搭載した、第三世代機です。機体本体の防御力は決して高くありません、起動前に一気に叩いて下さい。

以上、作戦の確認を終了します……。無事の帰還を……。』

「ありがとう。フィオナさん」

一夏はフィオナにお礼を言つて、『アクセル・トリック・ニッション・ブースト連続瞬時加速』を使つて陸送部隊がいるであろう地域に向かった。



2時間ほど飛び続けると廃墟が立ち並ぶ地域に辿り着いた。その廃墟の中を何台ものトレーラーが走っていた。

『一夏さん、あれがサミィラが居る陸送部隊です』

「わかった、今から配置について強襲する」

そして一夏は廃墟に隠れ、機会を伺う。

『目標……作戦エリア内』

フィオナの言葉と共に一夏が廃墟から出た瞬間、トレーラーの中からISが出てくる。

『っ!?』『マンマヴァア』、既に起動しています!』

『奇襲か……』

オーブン・チャネルからサミーラの中性的な声が聞こえる。

『何故……。そんな、気付かれていた?』

『無駄な策だな、不意打ちとは狗に相応しい所業だ。容赦はせん、行くぞ』

サミーラのIS『マンマヴァア』はベースは『ラファール・リヴァイヴ』の腕部と脚部、『打鉄』の胸部と非固定浮遊部位^{アンロック・ユニット}を装備し、背部に機械翼が装備され、アサルトライフルとショットガンを手に持っていた。

サミーラは一夏の姿を視認すると、アサルトライフルとショットガンの弾幕を張る。

一夏はそれを避け、両腕の『雪羅』をカノンモードに移行して荷電粒子砲を放つも、サミーラも避ける。

互いに射撃武器を放ち続けるも、ダメージを与えれないし、受けることもなかった。『消えろ消えろ消えろキエロ……』

サミーラの憎悪や敵意が滲み出る声色に連動したのか機械翼から多数のビットが射出され、一夏に襲い掛かる。

「なっ!?!」

一夏はそれに驚きつつも『雪月』を射撃形態で射出、縦横無尽に走らせ小型ビットを

落とす為にありとあらゆる角度からエネルギー弾を放つ。

その後の一夏は両腕の『雪羅』をカノンモードからクローモードに切り替えて、
アクセル・トリック・ニッポン・フースト
 『連続瞬時加速』を使い、サミーラとの距離を詰める。

『速い………!!』

一夏の速度を見てサミーラは驚くも、直ぐにアサルトライフルとショットガンを収納して東洋型実体剣を両腕に展開して迎え撃つ。

「らああああ!!」

『おおおお!!』

怒声を発しながら一夏とサミーラは激突する。

クローと東洋型実体剣がぶつかり、火花を散らす。一夏はふと何かを思いついたように、クローモードの『雪羅』で東洋型実体剣を掴んだ。

『!?!』

「はああああ!!」

武装プラットフォームの先端から青白い閃光が集まる。サミーラは東洋型実体剣を手から離し、離れようとした瞬間に、荷電粒子砲が放たれサミーラに直撃して、そのまま地面に叩き付ける。

——『雪羅』の戦闘経験値が一定以上溜まりました。クローモードを廃し、ブレー

ドモードに移行します。

クローモードだった『雪羅』が変形をして、『カインホクキエツア』や『アルテミス』と同型のブレードを展開した。

「これは……」

——以降『雪羅』を『雪羅式式』と名称します。宜しいですね？我が主一夏？

「はあ!？」

『白式改』から予想外のメッセージが表示されて、一夏は驚く。しかし、その隙をサミィラが見逃すはずも無く、両腕にショットガンを展開して一夏に放つ。本来なら回避は出来ないが、何故か不自然な軌道を描きながら避けた。

——我が主一夏。戦闘中に思考停止は命取りですよ？

「すまない……。じゃなくて！お前は誰なんだ!?!つとお!」

一夏と誰かが会話している間にもサミィラのショットガンとアサルトライフルの弾幕を避け、新たしくなった『雪羅式式』のブレードでショットガンとアサルトライフルを斬り裂く。

——今まで戦った相棒を忘れたのですか!?!我が主一夏!!酷すぎます!」

「つてことは『白式改』なのか!?!」

『何をぐちゃぐちゃと……テロリストの狗ガア!』

既に東洋型実体剣を両腕に展開し終えていたサミーラは、一夏に向かつて『イクニツシヨン・ブースト瞬時加速』を使って急速接近する。

——今は兎も角『マンマヴァ』を排除しましょう。今現在、『セカンドステージ・ワンオフアビリティ第二形態単一仕様能力』のバイパス構築が完成しました。

使用しますか？マイ・マスター我が主一夏

「ああ、早速使うぞ」

——了解。マスターの要請により、『セカンドステージ・ワンオフアビリティ第二形態単一仕様能力』、『しんられつぷう神羅烈風』を発動、エネルギーシールドを前方に展開します。

一夏の前に不可視のエネルギーシールドが四角錘状にエネルギーシールドが展開される。その直後にサミーラが持つ東洋型実体剣が叩き付けられるが、サミーラの方が弾き飛ばされる。

——展開完了。『神羅烈風』使用準備完了です、マイ・マスター我が主一夏

「おう、いくぞー！」

『白式改』に返事をした一夏は、サミーラの正面から『アクセラート・イクニツシヨン・ブースト連続瞬時加速』を超える速度で、サミーラに接近する。

サミーラは両腕の東洋型実体剣を収納し、ショットガンに切り替えて放つ。

一夏はそのまま進み、散弾をエネルギーシールドが阻み、速度を落とさずにサミーラ

と激突する。その直後に大爆発が起き、『マンマヴァ』の装甲を大きく削る。
『がふ……。押されている？織斑一夏、侮れんな……。だが、負けられぬ』

サミーラは機械翼から先程の数の倍以上のビットを射出、自身の周りに展開して、全方位にエネルギー弾を放つ。一夏は『雪羅式式』をシールドモードに切り替えて防ぎきる。

『こちら『アルテミス』、『生命戦闘体No.Δ-11』救援に向かいます。持ちこたえてください』

——9時の方向から高エネルギー反応！我が主一夏、回避してください！
マイ・マスター

オープン・チャネルから美緒の声が聞こえた瞬間、荷電粒子砲が一夏に向けて放たれる。一夏はそれを避けて、サミーラと荷電粒子砲が放たれた方向に機械翼の荷電粒子砲を放つ。

サミーラは避けきれずに左腕部に掠って装甲が削り落ちる、もう一方は恐らく避けられた可能性がある為、警戒を怠らずに『雪羅式式』のブレードでサミーラの脚部装甲を削る。その直後に『ツヌグイ』が接近し、一夏の背部、脚部、腕部にエネルギー弾を当てる。

「ぐうう!!」

——背部、腕部、脚部共に機体損傷20%。問題ありません

『白式改』からのメッセージでは問題はないと言っているが、一夏自身には撃たれた衝撃が体中に走った為、サミーラの東洋型実体剣の大振りの一撃を食らい、近くにあつた廃墟に突つ込む。

『足掻くな、運命を受け容れる』

1対2の有利になつた為かサミーラは強気の発言をしながら、ショットガンの弾雨で廃墟に攻撃をする。だが一夏はその発言を聞き流しながらも次の一手を考える。

『白式改』……。『神羅烈風』は使えるか？

——はい、現状残り2回は使えます

「なら展開の準備をしてくれ……。合図と共につかうぞ」

——解りました。我が主一夏

そして一夏は廃墟の中から『雪羅式』と機械翼の荷電粒子砲を放ち、廃墟から出る。美緒とサミーラは避け、美緒は荷電粒子砲をサミーラはショットガンを一夏に放ち、一夏はスライドするように避けた。

「今だ！ 『白式改』！」

——了解！ 我が主一夏！

一夏の前に四角錐状のエネルギーシールドが展開された直後に、一夏は『連続瞬時加速』を超えた速度を出し、サミーラに突撃をする。

美緒とサミーラは一夏を止めるべく荷電粒子砲とショットガンを放つも、一夏は前方のエネルギーシールドと『雪羅式』の『零落白夜』のシールドで守る。

そして一夏はサミーラに突進を当て、大爆発と共に装甲を更に大きく削る。

『神ヨ……どうして……。正義ハソレナノニ……スマナイ、ミンナ……』

サミーラがオープン・チャネルで何か呟く中、一夏は止めとばかりに『雪羅式』をシールドモードからブレードモードに切り替えてサミーラを斬った。

『終ワリカ……。或いは貴様も……。同じ為に……。か』

サミーラがそう呟きISが維持できなくなり粒子となつて消えた。一夏は慌ててサミーラが地面に叩き付けられない様に動こうとした瞬間、一夏の背後から細長く青白い閃光が走り、サミーラの胸に穴が開いて、サミーラの口から鮮血が吐き出された。

「目標の撃破と抹殺を確認……。ISコアを回収します」

一夏が振り向くと美緒が『グングニル』を展開して既に撃ち放った状態でサミーラを見下ろしていた。

「美緒……どうして」

「邪魔です。そこを退きなさい、織斑一夏」

美緒はそう言つて、『グングニル』から『月光零式』に切り替えて一夏に突撃する。

一夏も美緒に向かって突撃をし、互いのブレードが触れ、スパークが発生する。

「どきなさい、さもなければ排除します」

「させるかよ！俺は美緒お前を倒して連れ帰る！」

一夏は美緒にそう言い、2度目の美緒との戦闘を開始した。

対砂塵の毒蛇後

（廃墟地帯）

今、この地域一帯に青白いスパークと青白い閃光がありとあらゆる処でほぼ同時に発生していた。

美緒と一夏がその機体と自身の持つ能力をフルに使っている為だ。互いのブレードで打ち合い、スパークが発生する直前に離れ、荷電粒子砲を撃ち拮抗し、『雪月』と『ツヌグイ』が飛び交いながら紅い閃光と純白の閃光が交差する。

——我が主一夏！マイ・マスター！ナノマシンによる自己修復を行ってはいませんが機体損傷率50%を超えています。回避重視で戦術を組み立ててください、何度も受けられません！気をつけて！

『白式改』からの警告が一夏の耳に届くが一夏はそれを無視、超音速での戦闘を続ける。一夏と美緒の戦闘の余波で廃墟は全て崩れ落ち、既に荒地を残すのみとなり、徐々にだが一夏と美緒の被弾率も上がる。

——機体損傷80%突破!!危険です！直ぐに離脱してください我が主一夏！マイ・マスター！
「まだだ！まだいけるだろ！お前なら！」

一夏は『白式改』の退避警告を反論しつつも美緒と鏑迫り合いをする。

「おおおお!!」

一夏が美緒を押し切ろうとした瞬間、青白い光が一夏を焼かんと迫り、一夏は離れた。

「お姉様。時間の掛け過ぎですよ?」

「ごめん、白昼夢」

「そういうわけでお遊びは終わりですよ……織斑一夏」

白昼夢はそういうと、『スキュラ』と腰部にある収束荷電粒子砲『スキュラII』を一夏に向けて放つ、一夏は『スキュラ』と『スキュラII』を避け。美緒と白昼夢に『雪羅式』と機械翼の荷電粒子砲を放ち、その直後に『雪羅式』をブレードモードに戻し脚部のブレードを展開して美緒と白昼夢(さだめ)に突撃する。

2人は荷電粒子砲を避け、美緒は『ツヌグイ』を全基、白昼夢(さだめ)は『アクティブクロークII』に収納されている『レイダー』を18基全てを射出。その直後に美緒は両腕に『月光零式』、白昼夢は『月光』を両腕に展開し、左右から挟撃を仕掛ける。

放たれるエネルギーの弾幕を一夏は避け、『雪月』を全基射出。『ツヌグイ』と『レイダー』に対抗しようとするも、その圧倒的な数の暴力によって『雪月』は一気に数を減らし、『白式改』の装甲と一夏自身にダメージが更に蓄積されていく。

——我が主一夏!もう機体が限界です!今すぐ離脱してください!!

「くそっ！ここのままでか……！」

「逃がしませんよ織斑一夏」

白昼夢は『レイダー』で一夏を取り囲み、あらゆる角度から一斉発射を行う。その中の一つが『絶対防衛』を貫き、一夏の右目の瞳と瞼を焼いた。

「つ!!がああああ!!」

——マイ・マスター
我が主一夏!?!バイタルに乱れが……。仕方ありません、『白式改』のコントロールをこちらに移して離脱します。

一夏が右目を両腕で目を押さえ苦しみもがいているにも関わらず、反転して離脱していくこうとする。

だが白昼夢と美緒が逃すはずも無く、美緒の『ツヌグイ』と『グングニル』、『八叉鴉』^{ヤタガラス}。白昼夢の『レイダー』と『オクスタンガトリング』、『スキュラ』、『スキュラII』。で追撃をかけるが、一夏は不自然な軌道でそれらを全て避けきり、作戦領域を離脱した。



『レクイエム』艦内は今蜂の巣を叩いた様に騒がしくなっている、その理由は簡単だ。

——織斑一夏の負傷、及び『白式改』の大破

現在一夏は『レクイエム』艦内の集中治療室に入れられ、治療中だ。

集中治療室の前に美紗緒、言峰、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラがいるが、全員悲しげな眼差しで一夏を見ている。

「言峰さん、一夏さんの容態と『白式改』の修理状況は？」

「はい、既に治療は終わっておりますが、右目の治療は不可能かと……。例え『白式改』の生体再生をもつてしても」

言峰の言葉を聞いて、全員が歯を食いしばり、強くこぶしを握った。

「わかった、『白式改』の修理状況は？」

「損傷が激しく、向こう一週間は戦闘は不可能と」

「そう……。次の任務は？」

「はい……。次の「待て、美紗緒」」

美紗緒と言峰の会話を箒が遮る。

「どうしたの？箒さん」

「次の任務は私に行かせてくれないか？」

「……理由を聞いてもいい？」

箒が言葉を発しようとした瞬間、『レクイエム』に衝撃が走った。それと同時に艦内にサイレンが響き渡る。

『総員第一種戦闘配置に着け！IS搭乗者は各カタパルトで出撃！繰り返し……』
美紗緒達は頷いて集中治療室^Cから出た。



紅い月が出ている暗闇の中に一夏は居た。その空間は以前、一夏が白騎士の女性、白いワンピースの少女と出会ったあの場所とは違い、そこには何も無いと言つてもよかつた。

「……は……一体」

「ほう……あの子以外にここにくるとは……童^{わっば}よ、随分と愛されておるようじゃの」

一夏が振り返ると、そこには十二単を着た女性が微笑んで一夏を見つめていた。

「貴女は？」

「我かえ？我は童^{わっば}がよく知る子の元となった者じゃよ」

「俺がよく知る……？」

「我はあの子であり、あの子は我じゃ」

「……よくわからないな」

一夏の答えに女性はふつと笑みを零すと真剣な眼差しで一夏を見つめる。

「して童よ、童はあの子を救いたいか？」

「救う……？美緒のことか!？」

「うぬ……あの子は今虜囚となり、繰られておるのは知っているな？」

一夏は頷くと、女性との間に青い半透明のモニターが現れる。

「これは……？」

「原初の戒めのでた？じゃ、持っていくが良い」

その女性が言うのと、そのモニターは光の玉となって、『白式改』に吸い込まれていった。

「我が出来るのはここまでじゃ」

その女性は泡となって消えた。

その直後に暗闇が晴れて紅い月が青白い光を放つ月となり、満天の星空とも思える夜天と草原が広がり、一夏の目の前に以前あった白いワンピースの少女と同じか或いはそれよりも小さい女の子が2人居た。

「貴方は」

「何を望みますか？」

「俺の望みは……家族や仲間を守って助ける力が欲しい」

「その為に」

「世界から異端者、災厄と呼ばれる覚悟がありますか？」

「ああ、ある！」

一夏は真剣な眼差しで見つめる、2人の少女は一夏に悲しみが籠った笑顔を見せる。

「……………ごめんなさい」

「本当は貴方に頼むつもりはありませんでしたけれど……………」

「世界がそれを良しとしなかった」

「だからこそ……………貴方に頼むしかなかった」

「お願いです！」

「私たちの相棒を」

「私たちの主を」

「救ってください！」

2人の少女の言葉に一夏がこくりと頷くと世界は歪み始め、一夏は2人の少女に背を向けると世界は崩壊した。



「ああもうっ！敵が多すぎよ！」

鈴音はそう言いつつも『龍砲』を8基全てを射出、近付いてきた戦闘機に穴を開けて

爆散させ、別の方向からのミサイル郡を展開した『干将・莫耶』を投擲して切り裂き、連鎖的に爆発させる。

その直後に別の方向から鈴音はラファール・リヴァイヴの攻撃を受け、少し吹き飛ばされるもすぐに立て直す。

「つたいわね！」

鈴音はそう言つて小型連弾式収束荷電粒子砲『天砲』を撃つも、攻撃を仕掛けたISはすぐに避けた。

「第二世代機で避けた!?!このおー！」

『天砲』から腕部にある『月光零式』に切り替えて鈴音は『瞬間加速』を使い。急接近するがまた別の今度は2方向から攻撃されるも、今度は避ける。

「ラファール・リヴァイヴ3機……まずいわね」

鈴音がそう呟くと同時に、本来のラファール・リヴァイヴなら、搭載されていない武装である大型レーザーライフルが3機に展開される。鈴音は直ぐに『瞬間加速』で3機から距離を取る、その直後に鈴音が居た場所に極太のレーザーが通過した。

そして鈴音は『龍砲』8基射出し、更に『干将・莫耶』を展開して3機に投擲する。

だが、3機のラファール・リヴァイヴはそれらを全て大型レーザーライフルで撃ち落した。

「なっ！」

鈴音は直ぐに『龍砲』が繋がっていた武装プラットフォームを大型レールカノンに変形させ、鈴音の前方にいるラファール・リヴァイヴに向けて放つ。がだそれすらもラファール・リヴァイヴは簡単に避け、3方向から同時に大型レーザーライフルからレーザーを鈴音に向けて放つ。

鈴音も避けるも、その目の前に何時の間にか近接武装を展開しているラファール・リヴァイヴがいた。

「しまあぐう！」

——バリヤー貫通、ダメージ72。シールドエネルギー残量480。実体ダメージ、レベル軽微

「(通常のラファール・リヴァイヴよりも性能がかなり高い……!どうすれば……)」

ラファール・リヴァイヴによる近接攻撃を受け、鈴音は海面ギリギリまで落とされる。鈴音が体勢を立て直そうとするが、直ぐに追撃のレーザーが放たれるが、鈴音は直ぐに回避するも、海面に当たり、水飛沫が起こり、鈴音の視界が遮られる。

だがハイパーセンサーによってラファール・リヴァイヴの位置は見えている為、近くにいるラファール・リヴァイヴに向かう為に『イグニッション・ブースト瞬時加速』を使って急接近するも、他の2機からレーザーを放たれる。

鈴音はレーザーを避けるがすぐ目の前に『灰色の鱗殻』グレート・スケールを展開したラファール・リヴァイヴが居た。

「(やられる……!)」

鈴音は咄嗟に目を瞑ってしまった。本来なら戦場で目を瞑ることは自殺行為だ、だが来るべき衝撃は来なかった。その代わりに爆発音が聞こえ、鈴音が目を開けると目の前のラファール・リヴァイヴの『灰色鱗殻』グレート・スケールが煙を上げて壊されていた。

そして鈴音はハイパー・センサーに新たなISの反応が出たのに気づき、その方向を見るとそこには居るはずのない人物が居た。

「危機一髪……つてところか?」

その人物は鈴音を見て微笑んだ。

「一夏あつ!」

そう、一夏がそこにいた。片目を閉じたままだがそこに存在していた。

残酷なる災厄、沈黙の西風戦の幕開け

鈴音を助けた一夏はそのままラファール・リヴァイヴを蹴り、鈴音から距離をとらせる。

その直後に『雪月』を全基展開して、残る2機のラファール・リヴァイヴに向かわせると、一夏は『雪羅式』をカノンモードにして前方のラファール・リヴァイヴに向けて荷電粒子砲を放つ。

だが、一夏が放った荷電粒子砲は今までのと違い、その収束速度、弾速がかなり速くなっており。ラファール・リヴァイヴは避ける事も出来ずにそのまま直撃し、吹き飛ばされる。

『白式改』は先程の戦闘で損傷が激しく、動かせないはずなのだがそれも今は中破程度にまで修復されていた。

「一夏っ！ あんたどうしてここに!?!」

鈴音はここが戦場だと言うのに一夏の元に行き、一夏の身体をあちこち触る。

その様子の鈴音に一夏は苦笑を漏らすと真剣な表情になる。

「鈴。ここは俺に任せて『レクイエム』に戻って補給を受けてきてくれ」

「私ならこのままでも、十分戦えるわよ！」

「仮にそうだとしても、その武装だけじゃかえって危ない。だから俺を信じてここは任せてくれないか……？頼むよ、鈴」

一夏はそう言つて鈴音の頭を撫でる。一瞬鈴音は驚くも、少し眼を細めてから一夏から少し離れる。

「一夏……。絶対戻ってくるよね？」

「当たり前だろ？だからさ、待つててくれよ」

鈴音は不安そうな顔をするが、一夏の目を見てこくりと頷いてその場から離脱をした。

そして一夏はその場から急上昇をする。

「さてと……。そろそろ始めるか」

——宜しかったのですか？風様がいれば確実にでしたが

「まだ平気だ、俺とユキアネサでいけるさ」

——我が主マイ・マスター一夏がそう仰るのであれば私には異存はありません……。ですがユキ

アネサとは？

ユキアネサと呼ばれた人格の質問に答えようとした瞬間に、3機のラファール・リヴァイヴからレーザーが放たれるも、直ぐに避ける。

「つとお……。ああ、『白式改』のコア人格の名前だよ。『白式改』って言い辛いからな」
 ——有難う御座います。マイ・マスター我が主一夏。コア人格の名称を確立出来ました

一夏とユキアネサは会話を終えると、直ぐに『雪月』を全基戻して3機のラファール・リヴァイヴを見る。だが、その3機のラファール・リヴァイヴに異変が起きる。

「なんだ!? あれは!」

——マイ・マスター我が主一夏! 敵ISから高エネルギー反応! それに伴い装甲内部の温度が急上昇しています!

ラファール・リヴァイヴがぐにやりと溶け、その色がネイビーカラーから全てを飲み込むような黒に変わり、操縦者だった少女を包み込んで球体状になった。

それは脈動を幾度かした後、急に姿を変え、一夏が見たことのある姿になつていく。

「あれは……。『雪片』、『アルテミス』、『カインフィードバックヴオンデイン・II』の真似事! ふざけやがって!! ユキアネサ!!」

——はい、我が主一夏。ヘレスイ・アビリティ『異端仕様』起動します

エネルギーで出来た鎖が空間を歪めて出現し、『雪片』、『アルテミス』、『カインフィードバックヴオンデイン・II』のコピーの両腕、両脚、腹部、首を何重にも縛り、動けなくすると。全方位を蔽い尽くすほどの様々な形のエネルギーで出来た刀身が空間を歪

めながら出現する。

「消えろ……全て!!」

カタストロフエー・ングラオザーム

『残酷なる災厄』発動!

一夏の声を合図にエネルギーで出来た刀身達は音速にも勝る速度で『雪片』、『アルテミス』、『カインフィードバックヴオンデイン・II』エレバスに迫り、回避行動が無意味と思えるほどの刀身による弾幕によって3機の姿が見えなくなる。

そして弾幕が晴れると、3機のコピーは既にいなく、代わりに落ちていくラファール・リヴァイヴの操縦者達の姿があつたが、直ぐに別のラファール・リヴァイヴ2機に回収されていった。それを見届けた一夏は『連続瞬時加速』アクセレート・イグニッション・フーストを使い、その場を離れた。



一方『レクイエム』は防戦に追い込まれていた。

「7時の方向に敵戦闘機数30!及び2時の方向に敵戦闘機数30接近中!距離800!」

「面舵30!その後前方に『グングニール』、『バリエント』、『ミニッツ』、後方に『グングニールII』、『バリエントIII』を放て!」

千冬の言葉通りに『レクイエム』は動き、艦首に搭載されている大型荷電粒子砲『グングニール』2門から青白い閃光が走り、その直後に艦首艦側に搭載されている大型デュアルハイレーザ『ミニッツ』4門から赤い閃光が撃ち出され、その後に散布型ミサイルポッド『バリエント』から無数のミサイルが放たれ、『グングニール』、『ミニッツ』で落としきれなかった戦闘機を撃ち落す。

艦側に搭載されている大型レールキャノン『グングニールⅡ』4門から絶え間なく弾丸が撃たれ、船尾側に設置されている散布型分裂ミサイルポッド『バリエントⅢ』から無数のミサイルが放たれて、更に途中で分裂し、敵戦闘機を全て撃ち落す。

「新たに3時、9時、12時の方向にISの反応有り！これは……『アルテミス』！『サイレント・ゼフィルス』！『カインフィードバックヴオンティン・^{エレバス}Ⅱ』！距離9000！」

索敵を担当している人物からの報告にブリッジの緊張感がかなり上がる。

「オルコット、ボーデヴィツヒ、デュノア、千条院、凰、篠ノ之を各方面に向かわせる！通信を開け！『迅雷壱式』、『迅雷貳式』を6機ずつを呼び戻せ！急げ！」

「了解！」

「『神龍』が着艦許可を求めています！武装の大半を破壊された模様！」

「急いで着艦させて補給と修理を受けさせろ！フィオナ！織斑の現在位置は！」

「はい、現在4時の方向の敵艦隊を……一瞬で殲滅!? 圧倒的です……!」

「よし、そのまま織斑を『アルテミス』に向かわせろ! オルコットと篠ノ之を『サイレント・ゼフィルス』、ボーデヴィツヒ、デユノア、千条院を『カインフィードバックヴオン・デイン・II』^{エレバス}に向かわせろ!」

「了解!」

「(全員無事で帰って来い……)」

千冬はただそう願うばかりであった。



セシリアと箒はフィオナを通して、千冬に言われた通りに『サイレント・ゼフィルス』が居るであろう方向に進んでいた。

「『サイレント・ゼフィルス』……今日こそは!」

「セシリア、少し落ち着いたらどうなんだ? そのやる気は良いとは思うが……」

「元とはいえ、私の『ブルー・ティアーズ』のデータを使った試作2号機を奪ったその罪を償わせるだけですわ!」

箒の言葉にセシリアはそう言い返すと、『瞬時加速』^{イグニッションブースト}を使って一気に速度を上げた。

そのセシリアを見た筈は以前の自分を見ているようで少し苦い表情になるも、すぐにそのことを頭から消し去り、セシリアと同様に『イグニッション・ブースト瞬時加速』を使って、セシリアの後を追う。

暫くすると、セシリアのハイパーセンサーに『サイレント・ゼファイルス』の反応が現れる。

「いましたわ！食らいなさい！」

セシリアの右腕に『スターライトmkⅢ』を発展強化したライフル『スターライトmkⅣ』を展開し、超遠距離狙撃を行う為に構え、その銃口から極太の青白いレーザーを『サイレント・ゼファイルス』に向かって放った。

対沈黙の西風、青の進化

セシリアが放った極太のレーザーは『サイレント・ゼフィールズ』を捉えていたが、直ぐに気づいたエムはそれを横に緊急回避することで直撃を免れた。それを予測していたセシリアは表情一つ変えずに12基の『ブルー・ティアーズ』を射出し、向かわせる。その速度は元セシリアの専用機『ブルー・ティアーズ』の追加パッケージ『ストライク・ガンナー』の最高速度と同等である。

『箒さん！』『ブルー・ティアーズ』と私で牽制をしますわ！』

『わかった、では……いくぞ！』

プライベート・チャネルでセシリアと箒は話をした直後に箒は『瞬間加速』イグニッション・ブーストを使って素早く『サイレント・ゼフィールズ』に接近する。だがそれはエムも予測していたことであり、直ぐに『スターブレイカー』でBTレーザーを放つ。

箒はそれをほんの少しスライドすることで避けて、再度『瞬間加速』イグニッション・ブーストで接近するも、偏向射撃によってBTレーザーが曲がり、背後から箒を貫こうとするが、セシリアの『ブルー・ティアーズ』によってそれは防がれる。

その間にも箒は『雨月』と『空裂』を振り、帯状のエネルギーとエネルギー弾の弾幕

を張りながらも、『サイレント・ゼフィールズ』に近づく。

セシリアが放った『ブルー・ティアーズ』は、箒を守りつつも、放ったBTレーザーはエムに避けられるが偏向射撃フレキシブルによって少しではあるが『サイレント・ゼフィールズ』の装甲を削る。

セシリア自身も『スターライトmkIV』を構えてエムを狙い、偏向射撃フレキシブルを利用してからフェイントを掛けるが、どれも決定打にはなりえなかった。

そんなセシリアと箒を嘲笑うかの様にエムは正確な射撃、圧倒的な連射速度そして何よりBT兵器の特徴である偏向射撃フレキシブルで箒を近づけない様にしながらも、セシリアにも偏向射撃を利用した奇襲をしかける。

1対2でもあるのにも関わらず好転しない現状をセシリアは苦虫を噛み潰したかのような表情になる。

「(第四世代機を2機相手にしながらも、引けをとらない技量……流石ですわ)」

セシリアはそう考えながらもBTレーザーをエムに向けて連射し、偏向射撃フレキシブルでエネルギーの檻を作りその動きを止める。

「(私が未熟故に……あの時も……。そして今も……!)」

セシリアが今でも悔いている事、それは美緒を『服従コード』によって連れ去られたことだった。

「(だから……私は護る為の力が欲しかった……!だから……『ブルー・フォンタナ』。私に力を!仲間を護れる力を私に貸して下さいませ!)」

——操縦者の劇的な感情の発露を確認、自己進化を開始及び操縦者の願う武装を開発完了。コアの人格を発現及び第二形態移行の条件を満たしました。
セカンド・シフト
 第二形態移行します。

『ブルー・フォンタナ』と『ブルー・ティアーズ』が水色の光に包まれて閃光を放ち、箒とエムは動きを止める。2人が見ると『ブルー・フォンタナ』の形状が変わっていた。

今まで両腕部、両脚部、胸部と腰部の一部分しか発現していなかった装甲が頭部を除く全てに発現し、『半全身装甲』ハイフス・キーンとなつている。両腕部と両脚部の形状は変わっていないが、胸部と腰部には重厚な装甲がつけられており、胸部と腹部には6つの発射口が出現していた。

背部にある非固定浮遊部位はなくなり、『ブルー・ティアーズ』が接続されているプラットフォームは直接背部の装甲に取り付けられ、本来接続されている『ブルー・ティアーズ』がある部分には現在蒼いエネルギーフィンが出ている。

『ブルー・ティアーズ』自体の形状も変わっており、一つであった発射口が二つに増えていた。

そして『スターライトmkIV』はその大きさ故に両手持ちだったが二周り小さくなつ

ており、尚且つもう片方の腕にも同じ物が出現していた。

「(これが……新しい『ブルー・フォンタナ』の力! いきますわよ!)」

新しくなった『ブルー・フォンタナ』にセシリアの表情は歓喜と自信に溢れていた。それを裏付ける様にセシリアは両手に持った新『スターライトmkⅣ』を構えて放つ。

旧『スターライトmkⅣ』と同じく極太のBTレーザーを撃ち出すが、その発射間隔とリロード時間は短く、更に弾速が速く連射が利くものだった。

更に新しくなった『ブルー・ティーズ』もその性能は上がっており、2つになった発射口で同時に2発のBTレーザーを放つことが出来る事に加え、その特徴でもある偏向射撃は一度曲がるだけでなく、BTレーザー自体を拡散したり、再度曲げたりすることが出来るようになっていた。

エムは予想外の『第二形態移行』^{セカンド・シフト}に少し驚くも、直ぐに不敵な笑みを浮かべ、シールド・ビットを駆使してセシリアの放つBTレーザーと箒のレーザーを防ぐ、だが箒の斬撃は『スターブレイカー』を銃剣に変えて防がなければいけなかったので徐々にエムは防戦一方となっていく。

「(そうか……セシリアの『ブルー・フォンタナ』は『第二形態移行』^{セカンド・シフト}を果したか……。ならば! 私達も負けてはいられないな! 『紅椿』!)」

箒の呼びかけに応える様に『紅椿』の両肩部ユニットと両脚部の踵部分の装甲が音を

立ててスライドし、両肩部ユニットのその形は鎌やじりをつがえたクロスボウであった。両脚部の方は実在した短剣ソードブレイカーと同じ形をしていた。

「なんだ、これは……?」

『戦闘経験値が一定量に達しました。新装備を構築完了しました。出力可変型ブラスタ―ライフル『穿千』及び出力可変脚部強襲型ブラスタ―ブレードライフル『穿津』。』

『穿千』は最大射程に優れた一点突破型の射撃装備で――』

突然現れたパネルに、情報が表示されていくも箒はウインドウを消す。だが、箒には2つの武器の使い方がなぜか理解出来た。

一夏達との特訓で自在ワンオフ・アビリティに単一仕様能力を自在に発現させることが出来るようになった箒は、『絢爛舞踏』を発動させてエムに突撃する。

今まで以上に『雨月』と『空裂』を振り、隙を突く様に脚撃を繰り出し、エムが避ける。だが追撃には新しく構築された『穿津』の真紅の閃光が『サイレント・ゼフィールス』の脚部装甲を抉る。

エムは後退するがその背後にセシリアがいて、胸部と腹部からは新『スターライトmkⅣ』や新『ブルー・ティアーズ』と同じBTレーザ―。蒼いエネルギーフィンからは『銀シルバリオ・ゴスベルの福音』の『銀シルバールの鐘』と同じ形をしたBTレーザ―弾を放ち、『サイレント・ゼフィールス』の装甲を大きく削り取る。

そこで完全な不利と判断したエムは残ったシールド・ビットを盾に後退の瞬時加速を使い離脱を図ろうとする。

だが、セシリアと箒は見逃すはずもなく、2人は『瞬時加速』イグニッションブーストを使って追いかけるが、突然2人の目の前にシールド・ビットが現れ、自爆をした。

「きゃあつー！」

「ぐっ！」

シールド・ビットによる失速、爆発による衝撃、超音速飛行からの急停止。それらすべてに阻まれたセシリアと箒は、エムを取り逃した。

だが、2人はエムを取り逃したことを悔いる余裕はなかった。

何故ならば『レクイエム』に戻ろうとした2人が振り返ると、その目線の遥か先に巨大な大蛇がいたのだから。

対無からの帰還、憎悪の進化

セシリアと箒が『サイレント・ゼフィルス』と戦い始める丁度同じ頃に、ラウラ、シャルロット、美紗緒は、『カインフィードバックヴォンデイン・II』^{エレバス}と既に戦闘を開始していたが3人にとっては最悪の状況だった。その理由は白昼夢^{さだめ}が既に三鬼神ユニットのうちの一つである『アマテラスユニット』を起動している状態であったからだ。

その姿は『アマテラスユニット』を起動させた『カインホクキエツア』と姿はほぼ同一ではあるものの、その機動性、火力、防御力は『カインホクキエツア』を遥かに上回る物だった。

美紗緒は『月光式』を展開して、斬りかかる。だが、白昼夢^{さだめ}は『月光』を展開せず、美紗緒の腕を掴んでスパイクが付いた爪先で美紗緒の腹部を蹴り抜く、咄嗟に美紗緒はその脚撃を避けるが僅かに掠り、その部分の腹部から血肉がほんの少し飛び散る。

美紗緒の顔が苦痛に歪むと同時に、白昼夢の表情が狂喜に歪む。その2人の間にワイヤーブレードが割り込み、強制的に距離を開けた。

その隙を逃さない様に『セレスティアル・ヴァーミリオン』の『サンライズ』と『ガッツ』の『思兼神』^{おもひかね}が白昼夢^{さだめ}に殺到するも、後退しながら『レイダー』を全基射出し

て、迎撃に向かわせる。

それに合わせる様に美紗緒は電気式蛇腹剣『大蛇』を展開して白昼夢の両腕を拘束して高圧電流を流すが、白昼夢には効いていないようだった。

ラウラは2基の折り畳み式大型リニアキャノン『ドンナー・シユラーク』、シャルロットは突撃銃にアンダーバレルを装着した『オアシス』と『オアシス』のEN版である『デザート』を展開して白昼夢に放った。

だが、2人の放った銃撃は白昼夢に届くことはなかった。何故ならば『大蛇』を掴み、美紗緒を盾として使ったからだ。2人の銃撃を受けた美紗緒のシールドエネルギーは著しく減少する。

そして白昼夢は、自身を中心として高速回転を始める。それに引つ張られる様に美紗緒も回転を始め、外周に位置する美紗緒には多大な遠心力の負荷を掛ける。

ラウラとシャルロットは無防備な白昼夢に向けて『ドンナー・シユラーク』と『オアシス』、『デザート』を放とうとした瞬間に、白昼夢は美紗緒をラウラに向けて遠心力を利用して速度で投げつける。『P I C』で急停止を掛けるがそれでも勢いを殺しきれずにシャルロットと激突してしまう。

「シャルロット！美紗緒！」

「余所見をしている余裕があるのですか？『遺伝子強化試験体』？」

ラウラが激突したシャルロットと美紗緒を一瞬見た隙に、『月光』を両腕に展開した白昼夢は、ラウラの懐に入り込んでいた。それに気づいたラウラは直ぐに前腕部に装備されている『モントジツヒエル』と手の甲にある『モントシャイン』を両腕に展開して応戦する。

だが、人間離れをした斬撃速度によつて、ラウラは追い詰められる。『視る』や『察知』するだけであるのなら、ラウラの『境界の瞳』は引けを取らないところか同等だ。

しかし『視て』、『察知』をするにしても、それに対応するのは生身の体だ、限界というものがある。だが、『生命戦闘体』の素体、『遺伝子改造素体』は卵子と精子の段階から強化と言う名の遺伝子操作を施され、産まれた時から人外の戦闘能力を持っている。

その生身からの性能差を見せ付けると共に白昼夢は笑みを浮かべ、更に斬撃の速度を上げる。

「くっ……い」

ラウラは白昼夢の笑みを見て、頭に血が上る。だがラウラは直ぐに冷静にならねばと頭が上がった血を沈める。感情的に動く時に待っているのは死のみだと、感じていたからだ。

徐々にだが白昼夢の斬撃速度に追いつけなくなるが、突然白昼夢が横に吹き飛ばされた。ラウラは白昼夢を見ると、美紗緒が白昼夢の両腕を掴んでいた。

「やらせはしないっ！」

「墜ちろー！」

美紗緒と白昼夢は纏れ合うが、海面ぎりぎりのところで別れ、互いに『月光式』、『月光』を展開。『瞬時加速』を使いながら互いに剣戟を繰り出す。ラウラは美紗緒を援護するべく再度『ドンナー・シユラーク』、近距離用射撃として腕部に搭載している『アイス・ツアプフェン』を構える。

その時にシャルロットも戻ってきて、『オクスタンガトリング』を展開、『サンライズ』を全基射出し、美紗緒に援護射撃を開始する。その時丁度、美紗緒と鏝迫り合いをしていた為、白昼夢は後退する。

『ドンナー・シユラーク』、『アイス・ツアプフェン』、『オクスタンガトリング』の弾丸を避けれたが『サンライズ』が至近距離でエネルギー弾を放った為、白昼夢は左腕を盾にして防ぐ。だが、白昼夢は反撃とばかりに『レイダー』を全基射出、その後5mを超える巨大な大砲とも呼べる『アマテラスユニット』でしか使えない武装、陽電子砲『エーレンベルグ』を呼び出した。

呼び出した直後から既に発射準備は終わっており、その視線の先には美紗緒が居た。

「(あれは……『エーレンベルグ』!? 撃たせない!)」

美紗緒は『思兼神』を全基射出、斬撃形態、射撃形態が4基ずつだが『サンライズ』と

合わせても16基しかなく、『レイダー』より2基少ない。『エーレンベルグ』の的にならないよう美紗緒は無作為アトランダムの機動を行うが、最終目的は自身だと白昼夢さだめは理解している為、焦らずに狙おうとするが、そこにラウラとシャルロットが妨害をする為、2人に『エーレンベルグ』を向ける。

それを見た美紗緒は焦る。

「(不味い……。あれを2人に放たれたら……)」

それを想像しただけでも美紗緒の体が震えそうになるが、無理矢理押さえつける。

「(そうはさせない……。私の命に代えても……!)」

——操縦者の劇的な感情の発露を確認、自己進化……エラー。操縦者の望む武装の構築完了。戦闘経験値が不足している為、操縦者に負荷を掛けることで第二形態移行可能。強制的に第二形態移行します。

『カグツチ』から黒炎と蒼炎のような光が溢れ出し、徐々に美紗緒の眼から光が消え、とある感情が増幅されていく。

白昼夢さだめが2人に対して『エーレンベルグ』を放とうとした瞬間、何かによつて『エーレンベルグ』が破壊される。

「何っ!?!」

白昼夢さだめは先程の余裕の笑みが消え、驚愕の表情でその何かを見る。何かを覆っていた2

色の炎が唐突に消えた、それは美紗緒だった……。

だが、普段の美紗緒を知る人ならばその姿を見た瞬間、驚愕するであろう……。何故ならばその表情は『憎しみ』しか表していなかったからだ。

美紗緒の専用機である『カグツチ』の面影が残るのは両腕部、両脚部、非固定浮遊部位のみで他は全て変わっていた。胸部、腹部、腰部にあつたISスーツが消え、胸部と横の腹部に装甲が取り付けられ、それ以外の腹部、鼠蹊部、太腿の半ばまで素肌を晒しているが、流石に股間部には申し訳程度ではあるが装甲が取り付けられていた。

両肩部には青白く丸いがその頂点に青い何かの射出口が搭載された装甲が装着されている。頭部にはギアレシーバーしかなかったがヘッドギアも新たに搭載されていた。

「……『シユタインズガンナー』」

美紗緒の眩きと共に両肩部の射出口が開き、エネルギーで出来たクリスタルが8つ現れ、白昼夢を取り囲み、その直後にクリスタルの先端から青白い閃光が放たれる。白昼夢はそれを避けるが、その避けた先にラウラは『ドンナー・シユラーク』を展開していた。

「食らえっ!」

ラウラは『カインフィードバックヴオンデイン・II』の右脚部に『ドンナー・シユラーク』の砲弾を当てる。右脚部に当たり、高度がおちるが、直ぐに『P I C』で

体勢を立て直すも、目の前にはシャルロットがいて、パイルバンカー『インプロージョン』を構えていた。

「はあああつー！」

体勢を立て直したばかりの白昼夢も直ぐに回避することは難しかったらしく、『インプロージョン』の射出をまともに受け、胸部の装甲を大きく抉った。

これ以上の戦闘は不利と悟ったのか、白昼夢（さだめ）は辺りに閃光を起こし、3人の目を一時的に潰してから戦闘空域から離脱した。

ラウラとシャルロットの視力が戻るのと同時に、美紗緒のISが解かれ、海へと落下を始める。だが、シャルロットが美紗緒を抱きとめる。

「……気絶してるみたいだね」

「とりあえず『レクイエム』に戻るとしよう」

「そうだね……って！ラウラ！あれを見て！」

シャルロットが指差す方をラウラが見ると、その先に大蛇が居たのだった。

対月の女神、災厄の大蛇

5人がそれぞれの戦いをしている中、一夏と美緒も戦いを始めていた。だが、今までの一夏と美緒の戦闘では最も激しかった。

『雪月』と『ツヌグイ』が絶え間なく飛び交い、互いの荷電粒子砲が辺り一面を薙ぎ払い、そして一夏と美緒の剣戟で迸る青白いスパークが途絶えることが無くその破壊音や着弾音が響いていた。

一夏が敵軍の戦艦に着艦すると、味方でもあるにも拘らずに、美緒は『グングニル』でその戦艦ごと薙ぎ払おうと撃つ。だが、一夏はそれをスライドする様に避けると追いかける様にもう片方の『グングニル』の荷電粒子砲を放つ。

それさえも一夏は避け、『連続瞬時加速』アクセレート・イグニッション・ブーストで縦横無尽に動き、美緒に襲い掛かる。美緒も一夏の動きを見るや否や同じ様に『連続瞬時加速』アクセレート・イグニッション・ブーストを使い、極超音速化しての接近戦を繰り広げる。

その途中にある全ての戦闘機、戦艦、補給艦は一夏や美緒の荷電粒子砲、『月光零式』と『雪羅』のブレードモード、『雪月』と『ツヌグイ』によって破壊され、蹂躪されていく。

美緒が脚撃用の『月光』を展開すると、一夏も脚撃用のエネルギー刃を展開して、より激しさを増す。互いに脚撃を放ち、その反動を利用して2人は距離をとり、『雪月』と『ツヌグイ』を収納して、海面スレスレでの近距離戦に突入する。

互いに超小型核融合炉を搭載している為に、エネルギーが底を尽くことが無く。2人の体力と精神力が持つ限り、戦い続けることが出来る。

そして2人は弧を描く機動を取って、交差する瞬間に剣戟を放つと、青白いスパークと共に海面が数m蒸発、その直後にほぼ同じ場所でまた交差をすると更に数mの範囲で海面が蒸発する。

一夏が海面を蹴り上げ上昇すると、美緒も海面を蹴り上げて後を追い、美緒と一夏で双螺旋を描きながらも『月光零式』と『雪羅』のブレードモードで斬り合う。高度3000フィートに到達すると、二人は脚撃を繰り出し、離れる。

美緒は左腕の『月光零式』を『グングニル』AMモードに切り替えてグレネードを放ちながら、一夏に接近する。それに対する一夏は、グレネードを避け、左腕の『雪羅』をブレードモードからカノンモードに切り替えて、機械翼と共に荷電粒子砲を放つ。

荷電粒子砲を受けたグレネードが爆発するが美緒は然程気にせず、『グングニル』をENモードに切り替えて荷電粒子砲を放つ。その荷電粒子砲を放ちながら一夏に接近する。

美緒が放った荷電粒子砲を避けた一夏は、近付いてきた美緒をエネルギーブレードで薙ぎ払う。だが、美緒はそれを避け、薙ぎ払った事で隙が出来た一夏に荷電粒子砲を叩き込む。

本来1人であった一夏ならば、そのまま荷電粒子砲を受けていたが、ユキアネサのおかげでシールドエネルギーを消費しながらも無傷で受けきった。それに驚き、一瞬の隙が出来た美緒に対してお返しとばかりに荷電粒子砲を美緒に放つ。

美緒は冷静に『アイギス』を展開して荷電粒子砲を受けるも、照射時間が無制限なので、『アイギス』をほんの少し傾けて受け流すした。本来ならば跳ね返すのだが、照射時間が無制限な為に、『アイギス』で反射することが出来なかった。

だが、受け流したことによって、一夏も照射をする必要がなくなつた為。荷電粒子砲の照射を止めて、カノンモードからブレードモードに移行させて美緒に斬りかかる。

『アイギス』を収納して、『月光零式』を展開してから『連続瞬時加速(アクセレート・イグニッション・ブースト)』で、一夏との間合いを詰める。そして2人とも先程と同じ様に斬り合を始め。

衝突しては離れ、また衝突しては離れる。幾重にも斬り結び、脚撃を放ち、その度に青白いスパークが発生し、衝突しあう金属音が鳴り響く。

美緒を援護するかのように何機か、一夏に向かってミサイルが放たれるも、それをユ

キアネサが感知して『雪月』を射出。ミサイルを遊撃、爆散させ、その際にミサイルを放った戦闘機を破壊する。

そして一夏と美緒が鏝迫り合いをしている時に事態は動いた。

「ユキアネサ！使うぞ！」

———はい、我が主一夏！『異端仕様』起動！

一夏の足元から8つのエネルギー体の鎖が伸び、美緒を拘束して上昇する。それを追いかける様に刀剣で出来た8つの蛇が出現して螺旋を描き、そこに一つの刀剣で出来た巨大な紅い眼を持ち、黒い大蛇（オロチ）が産まれた。

「千魂冥烙！祖は全てを飲み込み、切り裂く顎となれ！」

———『残酷なる災厄』発動！

巨大な大蛇は美緒を飲み込もうとその巨体に見合う顎を開く。だが、その直後に美緒はエネルギー体の鎖を引き千切り、すぐに離れると、美緒の居た場所が大蛇に飲み込まれた。

だが、そこに美緒がいないと悟ると、直ぐに大蛇は美緒を睨み。その巨体では想像も出来ない俊敏な動きで美緒に迫る。

美緒は試しにと『月光零式』から『グングニル』に切り替えて荷電粒子砲を放つが、大蛇に当たった瞬間。荷電粒子砲が消える、美緒はそれに驚くが、直ぐにその場から離れる

とコンマ一秒の差で大蛇オロチが通り抜けた。

背筋に嫌な汗が流れるのを感じた美緒だったが、それを気にする余裕はなく、『連続瞬時加速アクセルト、イグニッションブースト』で接近してきた一夏のブレードを『月光零式』で受け止めるも、直ぐに大蛇オロチが迫り、弾き飛ばされる。追撃とばかりに大蛇オロチは顎あごを広げ、その口内から無数の刀剣が吐き出される。

美緒はそれをスライドするように横に移動して避けるが、追尾機能があるのかその刀剣群は角度を変えて美緒に迫る。挟撃するように大蛇オロチと刀剣群が襲ってくるが、美緒は前進することで避けも、一夏がブレードを構えて迫ってきていた。

美緒と一夏はそれで鏢迫り合いになり、斬り結ぶが、刀剣群と大蛇オロチの接近をハイパーセンサーで感じ取り、一夏を弾き飛ばして回避する。『白式改』から『雪月』が射出され、刀剣群、大蛇オロチ、『白式改夏』、『雪月』で美緒を追い詰める。

だが、美緒もそれで負けるはずもなく、その持ち前の人外の判断能力、反射神経、戦略眼、思考速度で一重には避け、反撃を当てていく。一夏も引けを感じさせずに、広範囲の大蛇オロチでの刀剣射出、その刀剣群での追撃、『雪月』での誘導射撃、『白式改』の荷電粒子砲やブレードでの追加攻撃、その全てを持つて美緒と渡り歩く。

「……？了解。帰還します。我が主マスタ」

美緒はそう言うのと閃光弾を放って、一夏の眼を潰してから『連続瞬時加速アクセルト、イグニッションブースト』で

離脱した。

一夏は眼が慣れてきて、美緒が居た場所を見つめてその巨大な大蛇オロチと共に佇んで居たのだった。

ほんの僅かな休息、そして新たな戦場

レクイエム艦橋

6人はそれぞれの戦闘を終え、レクイエムの艦橋に戻ったわけなのだが……、そこで一悶着が起きる。それは一夏が右目に眼帯をしていたからだ。

その眼帯は白い帯と円形の縁で、被う部分は鮮血の様に紅く、右上部から左下部に架けて黒い線があつた。それにまず反応したのは箒だ。

「いつ、一夏！その眼帯はどうしたのだ!？」

「ああ、これか？これは『白式改』の新しい待機状態の一部なんだつて。そうだろ？ユキアネサ」

——はい、その通りです。我が主一夏マイマスタ

一夏の衝撃的な事実とその直後に聞こえた声に、一夏を除いた艦橋に居る全員が驚き、絶句する。それはそうだ、今現在のIS全ては待機状態は変えることが出来ないこと知られているからだ。だが、一夏のIS『白式改』はその常識を打ち破り、衝撃の真実を知らしめているのだから。

そして一夏のようにコア人格を発現させ、会話を成立させるほどに成長進化させている操縦

者もいない。よって一夏は誰も到達していない未開の段階を進んでいるのだ。

だが、ユキアネサの事を知らない5人は一夏に聞こうと更に近づこうとするが、千冬によって止められる。

「お前らは落ち着け、さて織斑とユキアネサとやら。いくつか質問をするから隠さずに答える……いいいな？」

「わかりました」

——了解です。千冬様

「まずは、どうやって新しい待機状態になったか……。わかるか？」

「正直に言うとなんにはわかりません。『白式改』を解除したら既にこうなっていました」

——それは私がしました。我が主一夏への外見的、精神的負担を和らげる為です。
マイ・マスター

傷跡がある右目を晒して生活すると、眼帯をして隠しながら生活すのでは、その精神的負担が55・265%の差が出ることが統計で証明しています。よって私は眼帯に変えることでその負担を減らす選択をしました。

「(本当の理由ではないんだけどな。けど、こればかりは本当の事を言うわけにもいかないからなあ)」

ユキアネサが事前に考えていた嘘の答えで誤魔化すが、一夏は表情的には顔色を変えてはいないがその心の中では真実を話せないが為に、後悔の念で渦巻く。

「ふむ……まあいい、次だ。あの戦闘時に出てきた剣の大群と大蛇はなんだ？」
 「それは……答えることはできない」

——我が主一夏と同意見です。千冬様

一夏とユキアネサの回答拒否を聞き、千冬は静かに怒気を放つ。

「どういうことだ？ 私は隠さずに言えと言ったはずだ」

「それでも答えることは出来ない」

——尋問されても、我が主一夏と私は話しません

千冬は真つ直ぐ一夏を見るが、その内心では驚いていた。あまり隠し事をしない一夏が、真つ直ぐ自分を見つめてそれを隠そうとしていているからだ。

人間誰しも隠し事はある、だからこそ唯一の肉親である自分には打ち明けると思っていた、だが、それは良い意味で裏切られた。弟の成長をこれほど喜ばしいものはなかった……、ただのブラコンではあるが。

「そうか……。なら、今回は目を瞑ろう。だが、次はないと思え」

「わかりました」

——了解です

一夏とユキアネサが返事をする、千冬は6人に休むように言つて、艦橋を出た。

千冬との話の後、一夏は自分の部屋に戻る。戦艦の為、私物は多くは置けないがそれでも少量の私物が置いてあった。

「ユキアネサ。外すぞ」

——わかりました……。どうぞ

一夏はユキアネサの了解を取ると、眼帯を外した。その眼帯の下からは本来ならば皮膚が爛れているはずなのだが、その下にあったのは爛れた皮膚ではなく、上脛から下脛にかけて一筋の傷跡があり。

一夏が脛を開けると眼球がある部分には、雪の様に白いコアがあった。千冬や皆に隠していた理由はこれだった。

「ユキアネサ。原初の戒めのデータの解析は終わったのか？」

——はい。これを反転して再構成させる事で解除データにはなると思います、私では不可能ですね……。申し訳ございません、我が主一夏

「いや、そこまでやってくれただけでも助かるよ。ユキアネサ」

——勿体無きお言葉です。我が主一夏

一夏は再度、眼帯を着け、タッチパネル式のモニターを開く。

『何か御用ですか？一夏様』

一夏が通信を繋げたのは言峰だった。

「今何処にいますか？」

『今は天道様といますが』

「今から送るデータをみてください」

一夏が言峰にデータを送ると、言峰が息を呑むのがわかった。

『……一夏様……。これを何処で？』

「詳しくは言えませんが、ユキアネサだとこれを反転させればいいそうです」

『……解りました。早速作業に入ります』

言峰はそう言って通信を切った、直後に一夏のドアがノックをされる。それに一夏が返事をする、ドアを開けて入ってきたのは、弾と蘭だった、そして2人は眼帯をした

一夏を見て驚く。

「い、一夏!?!その眼帯どうしたんだ!?!」

「ああ、これか？前の戦闘の時にな」

一夏は気にしていないように言う。だが、蘭はそれが信じられないように思えた。

「で、でもISには『絶対防御』って保護機能があるんですよね!?!それなのに如何して

……」

『絶対防衛』を貫通する攻撃があるってことだけだろ？それに、俺は後悔も悔いも恨みもない。これは俺の実力不足で受けた傷だ」

弾と蘭はこの短期間での一夏の変わり様に驚いていた。外見的にもそうだが、何よりも一夏の考え方がここまで変わってるとは思わなかったからだ。

「ところで、弾と蘭は飯まだ食べてないのか？食べてないなら一緒に食おうぜ」

一夏は戸惑う2人の手を握って部屋を出た。



全員にユキアネサが知られてから1週間後、一夏は現在今現在単独で、イギリスに向かっていた。

『作戦を確認します。イギリスの首都ロンドンで、敵最新鋭IS部隊と交戦している、味方の支援に向かいます。』

敵ISは4機、IS操縦者はいずれも実力は上位ですが、特に警戒すべきは、イタリア代表のIS『テンペスタII』です。

『テンペスタII』の公式戦は、完璧です。

連戦連勝の無敗を貫き、その操縦者であるアルフォンシーナ・バルトリ自身も柔軟な

思考の持ち主で、不利な状況でも奇抜な戦術を取ることでも有名です。

複数のISを相手にする、極めて危険な任務です、これまでで、最も過酷な戦闘になることは間違いありません。

以上、作戦の確認を終了します、死なないで……』

一夏はモニターを切ると、『連続瞬間加速』を使い、速度を一気に上げて向かった。

ロンドンでの戦い、月下の再会

一夏が、イギリスの首都ロンドンの上空に着いた時には、4機のISしかいなかった。その4機は一夏を見た瞬間、ミサイルを放ってきた。

『味方機、反応ありません！全滅……そんな、4対1よ……作戦放棄を提案します、すぐに離脱して！』

フィオナが離脱するように言うが、一夏は『雪羅』のブレードモードを展開して、迫りくるミサイルをすべて斬り裂き、『イクニッション・ブースト瞬時加速』で4機に迫る。

「作戦、続行する。敵も無傷ではないはずだ！」

一夏の接近に対して、4機のISは散開することによって、一夏を取り囲む。その上で十字砲火を一夏に浴びせようとするが、『白式改』の加速力を生かしてその十字砲火を避け、無反動急旋回をした直後に、カノンモードに切り替えて荷電粒子砲を放ち、荷電粒子砲は避けられる。

「フィオナさん！敵ISの情報を！」

『わかりました。イタリア代表IS『テンペスタII』を除くISの情報を送ります。』

まずはメキシコ代表第三世代型IS『フェニル』は近中距離型のISです。

特に注意すべき武装は、『ウルフファング』と呼ばれる鉤爪型の近距離武装です。効果としては触れたISにコンピュータウイルスを感染させ、一時的に機能不全を起こさせる物です。

次はギリシャ代表第三世代型IS『アテネ』は『フェンリル』よりも近距離に特化したISです。

特に注意すべき武装は、近距離用の散布型ミサイル『ミスティ』と高電磁砲『ライラック』です。

最後にロシア代表IS『霧纏ミスティアス・レイデーの淑女』は特殊型のISです。

特に注意すべき武装は、水のナノマシンを使用した特殊攻撃です。その攻撃範囲は未知数で、どのぐらいの威力を持つのかも不明です。

よって、『テンペスタ』IIの次に注意するISでもあります。以上が敵ISに関する情報です』

「わかりました。それとですが、戦闘における建築物の被害は度外視でいいんですか？」
フィオナとの交信をしている間にも、一夏は『雪月』を射出して、4機のISに牽制射撃を行いつつも、荷電粒子砲で距離を開ける。

『はい、イギリス首脳部も、それについてはどんなに被害がでも良いので敵ISの撃破、及び撤退させて欲しいとのことですよ。』

住民の避難は完了しているので人命については考慮しなくてもいいようですね」

「了解。それでは戦闘に集中するので、通信を切ります」

『わかりました……。死なないで下さいね』

フィオナはそう言うと、通信を切る。そして一夏は、『雪羅』をブレードモードに切り替えて、『連続瞬時加速』アクセル・イグニッション・ブーストを使って『フェンリル』の懐に入り込む。

『フェンリル』の搭乗者は表情では驚いているものの、『ウルフフアング』を展開して、一夏に殴りかかるが、『雪羅』のブレードモードで『ウルフフアング』を弾き、その繋ぎ目を切断する。

その直後に、『アテネ』は一夏に対して『ミステイ』を放った。それを一夏は『フェンリル』の両腕を掴んで、盾にすることで自身へのダメージを減らす。

『ミステイ』を受けた『フェンリル』のシールド・エネルギーは、一気に50%以下にまで激減し、一夏は止めに、機械翼の荷電粒子砲を零距离で放つ。避けることも出来ずに荷電粒子砲を受けた『フェンリル』は、そのままシールド・エネルギーが0になり、ISが解除される。

『フェンリル』の搭乗者を近くの公園跡地に寝かせてから、その場を離れる。その間に3機は攻撃しようとするが、『雪月』によって牽制されて攻撃が出来ずに居た。

そして一夏は、『雪月』を収納してから『連続瞬時加速』アクセル・イグニッション・ブーストを使って、3機の射程

内にあえて飛び込む。『アテネ』は『ミステイ』と『ライラック』を放ち、『テンペスタⅡ』はその両肩に搭載されている8連装ミサイルポッドの発射口を全て開けてから、ミサイルを発射し、『ミステリアス・レイディ』は4門のガトリングガンを放つ。

「ユキアネサ！」

——はい、我が主一夏！ 『神羅烈風』（イェス・マイ・マスタ）を発動、エネルギーシールドを前方に展開します。

一夏の目の前に不可視のシールドが張られ、それにミサイルや銃弾が当たり、煙幕が起きる。その直後にその煙幕を突き破って、極超音速下で一夏は『テンペスタⅡ』に突進する。

『テンペスタⅡ』の搭乗者が気づいた頃には既に遅く、『白式改』と『テンペスタⅡ』が衝突することで、『テンペスタⅡ』のシールド・エネルギーが削られ、追加攻撃の大爆発で更に削られて残存エネルギーが20%以下になり。しかも、衝突と大爆発の衝撃で『テンペスタⅡ』は大きく吹き飛ばされる。

一夏は『テンペスタⅡ』を吹き飛ばした直後に、無反動急旋回で『アテネ』に振り返り、『雪月』を射出して、機械翼と『雪羅』をカノンモードに切り替えて荷電粒子砲を放つ。『アテネ』は『雪月』を避ける事はできたが、機械翼の荷電粒子砲が直撃し、大きくシールド・エネルギーを減らす。

『ミステリアス・レイディ』の搭乗者である更識楯無は、『白式改』の周りに水のナノマシンを集めて、湿度を高めた直後に自身の特徴でもある特殊攻撃『清き情熱』クリア・パッションを発動。一夏を爆風で飲み込むが、その直後に荷電粒子砲が放たれ、ナノマシンで構成した水のヴェールで荷電粒子砲を逸らすものの、一夏の接近を許してしまう。

『雪羅』をカノンモードからブレードモードに切り替えて、シールド・エネルギーを削ろうとする。楯無は、水のヴェールで守りながら蒼流旋そうりゅうせんを形成、横に薙ぎ払うが、一夏はそれをブレードで受け止め、機械翼の荷電粒子砲を放つ。

楯無は水のヴェールでそれを逸らすとするが、ほぼ零距离から放たれた荷電粒子砲を逸らすことができず、水のヴェールは突き破られ、シールド・エネルギーが削られる。

一夏が楯無に止めを刺そうとするが、戦線に復帰した『テンペスタⅡ』と『アテナ』に阻止され、『雪月』で『アテナ』と『ミステリアス・レイディ』の足止めをさせ、自身は『テンペスタⅡ』と相対する。

「貴様が織斑一夏か……。男風情がいい気なものだ……。古臭い、折れろ」

オーブン・チャネルで『テンペスタⅡ』の操縦者からそう言われるが、一夏は特に気にした様子もなく、『連続瞬時加速』アクセルート・イグニッション・ブーストを使い、『テンペスタⅡ』の懐に飛び込んで、ブレードを突き刺す。それによって、残り僅かだったシールド・エネルギーの残量が0となり、『テンペスタⅡ』は機能を停止、解除される。

「織斑一夏……。唯一の男性IS操縦者と言うのは伊達ではなかったか……」

『テンペスタⅡ』の操縦者アルフォンシーナは、そう言つて気を失つた。一夏はアルフォンシーナを抱え、近くの民家の前に横たえてから、残つた2機『アテナ』、『ミステリアス・レイディ』と相對する。

楯無は表情は変わらずに一夏を見るが、『アテナ』の操縦者は一夏をまるで化け物を見るように見て、恐怖していた。

「どうなつてる……?! 4対1なんだぞ?! それをこうまで覆すか?!」

『アテナ』の操縦者は喚きながらも、その手に突撃銃を展開して放つ。一夏はそれをスライドするように横に移動することで避けた。

「ユキアネサー！」

——はい、我が主一夏！ 『神羅烈風』を発動、エネルギーシールドを前方に展開します。

そしてまた、一夏の前に不可視のエネルギーシールドが展開され、その姿が掻き消える。その直後に『アテナ』と楯無は回避しようとするが既に遅く、『アテナ』が突進を受け、大爆発に巻き込まれシールド・エネルギーが0になる。

「化け物め……」

『アテナ』の操縦者がそう呟くと同時に、ISが解除された。一夏は先の2機と同じく抱

え、地面に横たえると楯無と向き合う。

「織斑くん。噂は聞いてるわよ？かなり強くなったみたいね」

「それは光栄ですよ、元I S学園生徒会長の耳にはいるとなれば……ね」

「皮肉なものね……。当時はまだ素人の域に居た織斑くんが、この戦争で国家代表と同等か或いはそれ以上に強くなっているんだもの」

「ああ、でもその代わりに俺は今大切な人を奪われたままだ。その人を取り戻す為に、仲間を守る為に俺は力をつけた」

「あらそうなの？お姉さんも入ってるのかな？」

「答えは否ですよ更識先輩」

「残念♪でも織斑くん退いてはくれないかな？」

「当然、退くわけがないですよ。ロシア代表更識楯無さん？」

「なら……。織斑くんを倒すわね」

「それは不可能です。更識先輩」

一夏の言葉を聞いて、楯無は睨む。

「なぜなら……」

言葉を発している最中に、一夏の姿が掻き消える。直ぐに楯無が退避しようとするが、一夏に腕をつかまれた。

「既に俺の術中に嵌っているからだ！ユキアネサ！」

——はい、我が主一夏！『異端仕様』起動！

以前の美緒の時と同様に、一夏の足元から8つのエネルギー体の鎖が伸び、楯無を拘束して上昇する。それを追いかける様に刀剣で出来た8つの蛇が出現して螺旋を描き、そこに一つの刀剣で出来た巨大な紅い眼を持ち、黒い大蛇オロチが産まれる。

「千魂冥烙！祖は全てを飲み込み、切り裂く顎あぎととなれ！」

——『残酷なる災厄』発動！

巨大な大蛇（オロチ）は顎（あぎと）を開け、楯無を飲み込む。飲み込まれた楯無は、その顎内あぎとにある無数の刀剣によって切り刻まれ、シールド・エネルギーを一気に減らししていく。そしてシールド・エネルギーが0になると大蛇オロチが消え、ISが解除された状態の楯無が出てきて、楯無を今までの3機と同じ様に地面に横たえ、フィオナに通信を開く。

「敵IS殲滅、作戦成功だ」

『了解しました。直ちに帰還してください』

フィオナとの通信が終わると、一夏はロンドンから離れた。



ロンドンから飛び立って数時間が経過し、既に夜となった上空を一夏は少し遅めに飛んでいた。

「もう完成はしてるんだよな？ ユキアネサ」

—— はい、そのデータも既に私に搭載されているので、後は叩き込むのみです。

マイ・マスター
我が主一夏

何かの確認をする一夏とユキアネサに一筋の閃光が放たれた。

—— !? 我が主一夏！ 10時の方向から荷電粒子の反応あり！ 避けてください！

ユキアネサの警告を受けた一夏は、直ぐに回避行動をとる。すると、一夏が居た場所に荷電粒子砲が通り過ぎていく。

そして荷電粒子砲の弾道の元を辿ると、そこには美緒がいた。

—— 我が主一夏！

「わかってる……ユキアネサはアレの準備を」

イエス・マイ・マスター
—— はい、我が主一夏！

一夏はユキアネサに何かの準備をする様に言うと、『連続瞬間加速』で美緒に近づいた。

月下で開放される御魂と身体

一夏と美緒の戦闘は始まった当初から苛烈を極めていた。接敵から『残酷なる災厄』を展開、大蛇を呼び出し1週間前とほぼ同じ状況を作り出してた。迫りくる刀剣郡と大蛇を避け、『ツヌグイ』を射出、刀剣郡を薙ぎ払い大蛇に向かわせるも、その圧倒的な質量には歯が立たなかった。

美緒は舌打ちをすると、一夏に向かって荷電粒子砲を放つ。一夏はそれを避け、『雪月』を射出、美緒を取り囲む様に走らせる。

「ユキアネサ！アレの起動までどれぐらい掛かる！」

——残り時間60秒！そのまま持ち堪えて下さい！我が主一夏！

『異端仕様』の多重起動と『第二形態単一仕様能力』の並行起動はできるか!?

——可能です！その代わり起動までの時間が25秒伸びます！

「なら使わずにユキアネサ！」

——了解！『異端仕様』後続多重起動します！

一夏の足元から56匹の蛇が現れ、それらが8匹ずつ螺旋状に交わり、7匹の大蛇が現れる。その大蛇達が混ざり合い、刀剣で出来た八岐大蛇が現れた。

『KILLIAAAAAAAAAA!!』

それは産まれたことによる歓喜の声なのかは定かではないが咆哮を上げ、八岐大蛇は美緒を睨み、その八つの首を伸ばし美緒に襲い掛かる。

その速度は大蛇の倍以上で、不意を突かれた美緒は吹き飛ばされる。

——『神羅烈風』を起動！前方にエネルギーシールドを展開します！

一夏の前に不可視のエネルギーシールドが張られ、美緒が八岐大蛇の首を全て避けきつた直後に合わせて突撃する。一夏の突撃に気づいた美緒は、それを避けてすれ違い様に『月光零式』で一夏の横腹を斬り付ける。

「ぐっ！まだまだあー！」

斬られた横腹から鮮血が噴出すが、一夏はそれを無視し、八岐大蛇を繰り、逃げ場を無くすように徐々に追い込む。だが、美緒も逸れに気付かない筈も無く、八岐大蛇に対して一夏が見たこともない武装で八岐大蛇の首を消滅させた。

——我が主一夏！あれは陽電子砲です！絶対に当たらないで下さい！

ユキアネサの警告を聞いた一夏は、八岐大蛇の消滅させられた首を、直ぐに再構築して全ての首で美緒を囲う。だが、美緒は『アルテミス』が搭載している武装の中でも最高の攻撃力を誇る陽電子砲『ソドム』、そして同じ陽電子砲を搭載したビット『ナハト』を8基射出して、八岐大蛇の首を消滅させる為に放つ。

しかし、八岐大蛇ヤマタノオロチに学習能力があるのか、陽電子砲ポジトロンを避け、美緒に喰らい付こうと迫る。喰らおうと迫りくる八岐大蛇ヤマタノオロチに対して美緒は、『ソドム』をほぼ零距离で放ち、消滅させるが直ぐに一夏によって再構築され、再び牙を向く。

八岐大蛇を繰り、自身が突撃する瞬間を見極めていた一夏は、美緒が作ってしまった隙を見逃さずに突撃する。美緒が気づいた時には既に遅く、一夏の突進とその直後の大爆発も受け、装甲が大きく削れ、その後には体勢を立て直そうとするが、直ぐに八岐大蛇ヤマタノオロチに飲み込まれ、その口内で無数の斬撃を受ける。

美緒が八岐大蛇に飲み込まれたのを確認した一夏は、『雪羅』の左腕をシールドモード、右腕をブレードモードにして様子を伺う。

——我が主マイ・マスター一夏。アレの起動完了しました。『雪羅式』のブレードを叩き込めば完了です

「ああ、ありがとう。ユキアネサ」

一夏は改めて『雪羅』のブレードを構えると美緒を飲み込んだ八岐大蛇ヤマタノオロチの首が消滅する。出てきた『アルテミス』の装甲は罅割れ、紫電が走り、服、ソックス、ブーツは破け素肌が露出しているが全身血塗れで息も上がっていた。

そして一夏は『連続瞬時加速』を使って美緒に迫り、その心臓に近い部分に『雪羅』のブレードを刺した。

「がふうっ!？」

美緒の口から鮮血が吐き出され、『白式改』の装甲を紅く染める。

「認識……解除……『服従コード』による……束縛から解放……『生命戦闘体』No. A
——11は……一時的……機能……停止……自己修復……ナノマシン……最大稼動……
します」

美緒の口からその言葉が漏れると、ISが解除され、美緒は気を失った。落ちようとした美緒を一夏は受け止めた、その直後。

——我が主一夏! 6時と8時の方向から高エネルギー反応!! 回避してください!

ユキアネサの警告が突然聞こえ、一夏がその場から離れると二つのエネルギー弾が通り過ぎた。それを放った元を辿ると、『エーレンベルグ』を構えた白昼夢と『スターブレイカー』を構えたエムがいた。

「何のまねだ?」

「お姉様を返しなさい。織斑一夏」

「織斑一夏。ここで死んでもらうぞ!」

一夏の問いかけに白昼夢とエムが答えた直後に白昼夢は『瞬間加速』で一夏に接近し、『月光』を展開。一夏を斬ろうとするがそこに、八岐大蛇が割り込み、白昼夢は後退する。

だが、一夏にとつては八岐大蛇ヤマタノオロチの割り込みは有難かつた。今現在美緒を抱えている一夏は『雪羅』を封じられているも同然で、使える武装が機械翼の荷電粒子砲と『雪月』しかなかったからだ。

「一夏!!無事なの!?!」

そこに鈴音、シャルロット、ラウラが応援に駆けつけると。一夏の腕の中にいる美緒を見つけて驚く。

「丁度良かった!鈴!美緒を頼む!」

一夏は鈴音に美緒を預けて3人に背を向け、『連続瞬時加速アクセラート・インニツション・ブースト』を使つて一夏と白昼夢さだめは激突する。エムは白昼夢さだめの援護をせずに鈴音達を狙おうとするが、八岐大蛇ヤマタノオロチによつて阻まれる。

『一夏あつ!どういふことか説明しなさいよ!』

「話は後だ!今は美緒を『レクイエム』に!」

一夏はそう言つて八岐大蛇ヤマタノオロチでエムを弾き飛ばし、白昼夢さだめの両腕を掴んで鈴音達から距離をとつた。

そして白昼夢さだめは一夏の腕を振り払い、狂つた様に急に噛み始めた。

「お姉様の恐怖に染まつたあの表情!織斑一夏。貴方に助けを求めても絶対に来ないあの絶望に満ちた声!ふふつ……。貴方にも聴かせてあげたかつたわ!」

白昼夢の言葉を聞き、一夏は嫌な予感しかしなかった。

「ふふふつ……。だから返してちょうだい。またあの豚共に、お姉さまを犯させるんだから」

白昼夢（さだめ）の言葉に一夏はキレた。

「ユキアネサ!!」

——了解しました。我が主一夏! 『残酷なる災厄』最大稼動!

一夏とユキアネサの言葉と共に八岐大蛇の体が更に大きくなり、その眼の光はより紅く鋭くなっていった。そして一夏の頭の中にとある言葉浮かび上がり、それを唱える。

「神世七代! 神によりて作られし世界! 全ては偽り! 全ては虚像! 終末は来たれり……

今全ての破壊を!」

——来たれ! 『機械仕掛けの神禍津日神』!!

一夏の背後から八岐大蛇よりも巨大な拳が空間を歪めて出現、その拳は白昼夢とエムに振り下ろされる。2人は回避しようとするが、その拳はあまりにも大きく、避けることができずにその拳によって海面に叩き付けられ、海の奥深くまで押し込まれる。

それを確認した一夏は、離脱をしたのだった。

少女の悲しみ、新たなる戦い

夏が『レクイエム』に戻った時には既に夜が明けていた。着替えを済ませて艦橋に行こうと思い、ロツカールームから出ようとした時、ドアが開かれる。

「え？み…………お…………？」

「一夏あつ!!!」

一夏が固まっていると、美緒は抱き付く。その声は嗚咽が殆どで聞き取れなかった、だが一夏は美緒を抱きしめてから頭を撫でる。

暫くすると、嗚咽は止み、2人でロツカールームにあるベンチに座る。

「落ち着いたか？」

「うん…………」

美緒と一夏はただ黙っていたが、美緒が口を開いて、ゆっくりと話し始めた。

「私が『服従コード』で繰られてる時のね…………、最初の任務が…………。『亡国機業』幹部会

の…………、性欲処理だった…………」

一夏は無言で美緒の肩を抱くが、美緒は声を震わせながら続ける。

「繰られてる時でも…………、意識はあつてね…………。気持ち悪くてしょうがなかった…………、あ

の……無数の手と……。」「これ以上は言わなくていい！」い……一夏？」
言葉を遮られた美緒は、一夏に拒絶されたと思い、悲しい表情かおをする。

「あ……、大きな声を出してすまない。だけどな美緒。例えばどんな事が美緒の身に起こったとしても、少なくとも俺は美緒、お前の傍にいるぞ絶対にな」

一夏はそう言つて、美緒を抱きしめる。それに美緒は驚くが、ぼろぼろと涙が零れ落ちる、そのまま一夏はぽんぽんと美緒の背中を優しく叩く。

美緒は一夏にしがみついて先程よりも大きな嗚咽がロッカールームに響き渡る。一夏はそれを黙つて聴いていた。



美緒を取り戻してから一ヶ月が経つた。その間には特に戦闘も無く、穏やかに過ごさせてはいたが緊急招集された。

「千冬姉、何かあつたのか？」

一夏の問いかけに、千冬は答えず、全員居る事を確認する。

「よし、全員揃つたな。まずはこれを見てくれ」

千冬がそう言うと、モニターが現れ、それを見た美緒、美紗緒、一夏以外が驚く。

「何なのよ!?あの数は!!」

それを見た鈴音が声を上げた、それも当然であり。モニターには無数の戦闘機や現在起動している日本、フランス、イギリス、中国、『亡国機業』「ファントム・タスク」以外の研究用に保管されていたISコアも含め、ISが全機起動しているからだ。

「どうやら世^{「ファントム・タスク」}界は日本を先に潰した方が良いと考えたみたいだね」

そのモニターを見ていた美緒はそう眩き、心底楽しそうに言った。

「なら……、私達がその迷惑を潰してあげる。そうだよな?一夏?」

「そうだな……、だけど油断は出来ないな。何か裏があるかもしれないからな、そこは警戒していこう」

「なら決まったな。千条院姉と織斑は前方、オルコットと篠ノ之は後方、千条院妹と凰は右方、デュノアとボーデヴィツヒは左方に着け。いいな?」

千冬がそういうと、全員が「了解っ!」と答えて、艦橋を出た。



一夏と美緒は同じ艦首カタパルトに居て、2人は既にISを展開し終えてフィオナの説明を聞いていた。

『作戦を確認をします。太平洋上から、こちらに向かう世界連合軍の排除を行います。戦闘機、戦艦、ISの数は未知数です。ですので連合軍の総戦力と考えてください。作戦目標は連合軍の撤退及び壊滅です……。この戦闘が終われば戦争も終結するでしょう。』

それと未確認ですが、日本政府から代表候補生が1人、増援に来ると情報がありました。留意してください。

以上作戦の確認を終了します……。死なないで』

フィオナの説明が終わると、ハッチが開く。

「それじゃ、私から行くね……。千条院美緒、『アルテミス』出るよ！」

美緒が、言うと同時にカタパルトから出る。

「織斑一夏、ユキアネサと『白式改』出るぞ！」

美緒と同様に、一夏はカタパルトを出る。そして、先に出ていた美緒と合流する。

「それじゃあ、一夏。『異端仕様』^{ヘレスイ・アベリテイ}をお願い、私は突入して蹴散らすよ」

「ああ、頼んだぞ。美緒」

—— 気を付けて下さいね。美緒様

美緒はコクリと頷くと『連続瞬時加速』^{アクセルト・イグニッション・ブースト}を使って突入、その直後に幾つかの閃

光が走ると共に爆炎が起こる。美緒が『異端仕様』^{ヘレスイ・アベリテイ}を知っているのは、一夏が美緒に

だけ話していたからだ。

右目の眼帯のことも話しており、美緒は自分のせいだと落ち込んでいたが、一夏の説得によって、今では以前のように明るくなった。

「いくぞ！ユキアネサ！」

イエス・マイ・マスター

「はい、我が主一夏！『異端仕様』起動！」

カタストロフエーグラオザーム

『残酷なる災厄』最大稼動！

「神代七代！神によりて作られし世界！全ては偽り！全ては虚像！終末は来たれり……今全ての破壊を！」

——来たれ！『機械仕掛けの神禍津日神』！！

デウス・エクス・マキナがついのかみ

空間を歪めて巨大な拳が出現、その拳が振り下ろされると範囲内の多数の戦闘機が爆散、若しくは上から押されて海面に叩き付けられ、海面と上からの圧力で戦艦と機体が押し折れ、粉碎される。

「一夏！合わせて！」

「わかった！ユキアネサ！」

——了解！『雪羅式式』、機械翼の荷電粒子砲を拡散に設定！どうぞ！

美緒は両腕の『グングニール』を真横に伸ばし、『シャッテン』を拡散荷電粒子砲に設定して放ち、自身を中心に縦横無尽の回転運動を開始する。それによって範囲内の戦闘機は爆破、海面は蒸発し、ISは大きくシールド・エネルギーが削られる。

一夏は機械翼の拡散荷電粒子砲を前方に、『雪羅』の拡散荷電粒子砲を斜め後ろに放ち、その状態で『連続アクセレート・イクニッション・ブースト瞬時加速』を使い、機械翼の荷電粒子砲で前方の戦闘機を殲滅、その直後に『雪羅』の拡散荷電粒子砲をビームブレードに見立てて、擦れ違いで戦闘機、戦艦、ISを薙ぎ払いながら、出鱈目な軌道を描く。

だが、それでも少なからず一夏と美緒の猛攻を掻い潜った戦闘機やISがいたが。『雪月』、『ツヌグイ』によって足止めをされ、美緒と一夏によって殲滅された。

『敵戦力前方40%、右方60%、左方65%、後方74%激滅！そのまま殲滅を続けてください！それとですが増援の日本代表候補生が到着しました！』

『あ、あの……日本代表候補生の……更識簪です……到着が遅れて……申し訳ございません……』

「話は後だ！箒、鈴、シャル状況を教えてくれ！」

『私達の方はもうじき終わる！』

『そうですわ！だからこちらは気にしないで下さいませ！』

『私達の方もじき終わるわよ、シャルロット達はどうかなのよ？』

『うん、僕達の方も終わるよ。だから一夏達の方に増援お願い』

『わ、わかりました……。そちらに向かいます、位置データを送ってください』

美緒が位置データを送ると、数分で、増援の簪が到着する。簪が展開しているISは、

何処となく『打鉄』に似ていたが、どうやら違うようだ。

重厚な『打鉄』に対して簪が装着しているのは見た感じからして防御型というよりも機動型であり、何処となくだが『白式』に似ていた。

「早速で悪いけど、美緒は中央、俺は右翼、更識さんは左翼で『一夏さん。美緒様！そちらに高速で接近する機影を確認しました！』なっ?!」

一夏が話している途中でフィオナの通信により途切れる。

『機影は2……これは!? 9時の方向『サイレント・ゼファイルス』、3時の方向『カインフィードバックヴオンデイン・^{エレバス}Ⅱ』です!』

フィオナの報告内容を聞いた一夏と美緒は絶句し、簪はその内容がとてつもなく不味い、と感じ取っていた。

「不味い状況だな……。美緒、どうする?」

『サイレント・ゼファイルス』と『カインフィードバックヴオンデイン・^{エレバス}Ⅱ』だけならどうにかなるね、私が『カインフィードバックヴオンデイン・^{エレバス}Ⅱ』を受け持つよ」

「なら、俺が『サイレント・ゼファイルス』か?」

「それが妥当かな……。更識さんの実力もわからないし、これ以上の敵の侵攻を許すわけにもいかないからね」

「え、えつと……。『サイレント・ゼファイルス』と『カインフィードバックヴオンデイン・

エレバス
II つて?」

今まで黙っていた簪が疑問を口に出し、美緒と一夏が説明していなかったことを思い出す。

『サイレント・ゼフィルス』はイギリスのBT兵器搭載試作第二号機で、現在『亡国機業』に奪取された機体だ」

『カインフィードバックヴオンデイン・II』は千条院家が開発したISで、元私の専用機体『カインホクキエツア』の予備機だったのを『亡国機業』が奪取。その後改修と発展させた機体だよ」

『一夏さん、美緒様! 残りの距離後5000! 急いでください!』

フィオナのせつつく様な通信を聞いて、2人は表情をより引き締める。

「兎に角、『サイレント・ゼフィルス』と『カインフィードバックヴオンデイン・II』の事は俺達に任せてくれ。更識さんは戦闘機とかの相手を頼む」

一夏はそう言って、『雪月』を収納して『サイレント・ゼフィルス』の方向に飛んでいった。

「何かあったら私か一夏に連絡してね?」

美緒はそう言うと、『シャッテン』を収納すると、『連続瞬時加速』を使って『カインフィードバックヴオンデイン・II』の方向に飛んでいったのだった。

因縁の終わり、亡霊の最後

一夏が『サイレント・ゼフィルス』がいる方向に向かっていていると、既にエムがそこに佇んでいた。

そして一夏はエムと相対する。

「遅くなつたみたいだな」

「何、誤差範囲内だ。織斑一夏」

「だけど遅くなつちまつたんだ。何か詫びを入れないとな」

「ほう……。朴念仁と聞いていたが、どうやら間違いだつたみたいだな」

一夏とエムは軽口を叩き合うが、その目は互いに敵意と殺意を撒き散らしていた。

「ならば、遅くなつた詫びとしてお前の命を貰おうか」

エムはそう言つて、『スターブレイカー』を一夏に向ける。

「はっ！冗談は程々にしとけよ。さあ……。始めようか！」

一夏が言い終わると同時にエムはB Tレーザーを放ち、その場から後退の瞬間イグニッションブリスト『瞬時加速』で離脱、その直後にビットを6基射出して一夏に向けてビットからもB Tレーザーを放つ。

一夏自身も直後のBTLレーザーを回避、『雪月』を射出し、ビットを落とす為に向かわせ、ビットから放たれたBTLレーザーを避け、『連続瞬時加速』アクセレート・イクニッション・ブーストを使用しながら『雪羅』をカノンモードに移行し、エムの懐に入ろうとするが、『スターブレイカー』からのBTLレーザーが偏向射撃フレキシブルによって屈折、背後から一夏を狙うも、それを容易く一夏は避ける。

そして『白式改』の無尽蔵のエネルギーを利用した荷電粒子砲の連射を行う。エムはそれを避けるが拡散しているにもかかわらず高密度の荷電粒子砲の弾雨と『雪月』の牽制により、荷電粒子砲がエムの右肩を直撃する直前に『絶対防御』が発動、大きくシルド・エネルギーを削り取る。

荷電粒子砲が直撃したことによって、エムは大きく左方に弾き飛ばされる。体勢を立て直そうとするが、一夏がエムの頭を持ち、腹部に荷電粒子砲を零距离で放つ。

それはシルドを容易く貫き、『絶対防御』を発動、更にシルド・エネルギーを削り取り、エネルギー残量が0となる。ISが解除されたエムの素顔を見た瞬間、一夏の沸点を超えた。

「やってくれたなあ!!」フアントム・タスク『亡国機業』!!!!

一夏はエムの頭部をそのまま握り潰し、エムだったものを投げ捨てる。

「ユキアネサ!!」フアントム・タスク『亡国機業』の本拠地の座標データを表示しろ!!」

——了解しました！我が主一夏！
マイ・マスター

以前、美緒から貰ったデータの中に『亡国機業』の本拠地に関するデータが入ったことを思い出した一夏はその中から座標データを呼び出し、見る。

その後、美緒に通信を繋げる。

「美緒!!聞こえるか!?!」

『何?!こっちは忙しいから後にして!』

「今から『亡国機業』本拠地を殲滅する!」
フアントム・タスク

『……本気なの?一夏』

「ああ!だから許可をくれ!」

『………許可をします。だから………死なないで』

「ああ!行つて来る!」

一夏は通信を切り、『連続瞬時加速』を使って『亡国機業』の本拠地に向かった。
アクセレート・イグニッション・ブースト
フアントム・タスク



一夏が『亡国機業』の本拠地を視て最初に思ったのは堅牢な不落城塞だ。城壁と思われ壁には対IS用の重火器、レーザー砲、ミサイルポッド等が設置されていた。

「いくぞー・ユキアネサー！」

——はい、我が主一夏！『異端仕様』起動！

一夏の足元から32本の鎖が伸び、それに追従する形で64つの蛇が出現。螺旋状に絡まることで8つの大蛇オロチが生まれ、一夏に従う様に佇む。

「千魂冥烙！祖は全てを飲み込み、切り裂く顎あぎととなれ！」

——『残酷なる災厄』</rt></rb></rp></r></rp></rt>>カタストロフィー・グ
ラオザーム</rt></rp></r></rp></rt>>『発動！』

一夏が言葉を発し終わると、大蛇オロチ達は城壁を取り囲み、刀剣郡をその顎あぎとから放ち、城壁を破壊し始める。そして一夏は破壊し始めたことを確認して、城塞に乗り込んだ。

入り口付近には何もなかったが、少し奥に進むと武装した人達が一夏の前に現れる。その人たちは、一夏に向けてミサイル、ロケット、対IS用バズーカ砲を放つが、その直後に予め展開していた『雪月』によって打ち抜かれて爆散し、連鎖爆発を起こして武装していた人達を薙ぎ払った。

——我が主一夏！10時の方向に多数の生命反応を確認！逃走しようとしています！

「最短距離で進むぞー！ユキアネサー！」

——了解しました！我が主一夏！機械翼収束荷電粒子砲発射準備完了！

高圧縮された荷電粒子が更に収束されて放たれ、進路上の壁を全て焼き尽くして新たな通路を作る。その通路の上に、何人か腰を抜かせてへたり込んでいる集団を見つけた一夏は、『瞬時加速』でその集団に近づく。

「撃て！撃ち殺せ!!」

その集団のうちの1人がそう言って叫ぶと、それに追従する様に何人かが言うのと、武装した集団が対IS用の兵器を持って一夏に放つ。

「邪魔だああああ!!!」

一夏は叫びながら『雪月』を全基射出して、武装と共に集団を斬り裂き撃ち抜く。『雪羅』のブレードモードを展開し、擦れ違い様に先程と同様に斬り裂き、へたり込んでいる集団の前に立つ。

「ひいつー!」

「答える……お前らか？美緒を傷つけたのは」

一夏はそう言ってエネルギーブレードを一番近くにいた中年男性に突きつける。

「なっ何のことだ!?!」

「一ヶ月前ぐらいから女の子が此処に居ただろう？嘘をついてもすぐにわかるからな？」

「……あ、ああ確かに居たな……それがどうしたんだ？」

「そこに居る全員が美緒を辱めたんだな？」

一夏の言葉には殺気、怒気が滲み出ており、それが集団に伝わり、全員が頷くと、一夏は突然嗤い始めた。

「くはははははっ！……。そうか、ユキアネサ！」

——了解しました！『異端仕様』発動！

ヘレスイ・アヒリテイー

一夏の周りからエネルギーの鎖が無数に伸び、へたり込んでいた集団の四肢を拘束して持ち上げる。それに驚いた集団は、騒ぎ立てるが一夏の一眼みで静まり返る。

「千魂冥烙！処刑の時間だ……極上の苦しみを味あわせてやるよ！」

一夏が言い終わると同時に8匹の大蛇オロチが内部に侵入、顎アキトから刀剣郡を射出して拘束された者達の四肢をミリ単位でゆっくりと斬り落としていく。絶叫が辺りに響き渡り、血の臭いが広がっていく。

「痛えか？痛えだろお!?だがそれだけじゃ終わらせねえ！」

一夏はそう言って『雪月』で斬り落す、その部分はエネルギー刃によって焼かれ、激痛と共に止血をする。そして『雪羅』をブレードモードに切り替え、腹部を切り裂く、だがそれもまた焼かれて止血の役割を果すが、切れた部分に手を入れ、臓物を引きずり出し踏み潰した。

むわつと血の臭いが更に広がり、一夏と臓物を引きずり出された男以外の全員が嘔吐

をするが、一夏は気にせず胃と食道を引き千切る、それによってその男は失血により死んだ。

そして一夏は周りを見ると、全員気絶していた。それを詰らなさそうに舌打ちをして、残った集団を大蛇《オロチ》に飲み込ませて瞬間的に細切れにし、絶命させた。

その後、一夏は『亡国機業』の本拠地を完全に破壊し、この時を持って『亡国機業』は完全に壊滅したのだった。

無からの帰還の終わり、黒幕

一夏とエムが戦い始めようとした頃、美緒と既に『アマテラスユニット』を起動していた白昼夢も戦い始めようとしていた。

「あらお姉様、さあ帰りましょう?」

「私が帰ると思ってるの? 白昼夢」

互いに敵意と憎しみそして殺気を叩き付け合いながら睨み合いが続く。

「そう……なら死んでもらいます。お姉様!」

白昼夢はそう言うのと、『月光』を展開して『連続瞬時加速』を使って、美緒に接近する。美緒も『月光零式』を展開して同じく『連続瞬時加速』を使って白昼夢に近づく。

そして互いの間合いに入った瞬間、『月光』と『月光零式』を打ち付け合い、離れる。その直後に2人は急降下をし、海面スレスレで並走をしながら白昼夢は『オクスタングトリングII』と『フレアII』を放つ。

美緒は少し体を動かしながら、全弾を避け、『グングニル』AMモードを展開してグレネード弾を白昼夢に向けて放つ。白昼夢もそれを避けるが、着弾後の爆風によって体が

ぶれるが、すぐに海面を蹴って上昇し、腹部の荷電粒子砲『スキュラ』と腰部の収束荷電粒子砲『スキュラII』を放つ。

美緒はそれを横にスライドする事で避け、両腕に陽電子砲『ソドム』を展開、白昼夢に放つ。白昼夢はそれを避けようとするが、左腕の『月光』の先端部分が触れ、破壊される。

「やっつけてくれましたわね！お姉様あああつ!!」

白昼夢の怒りと共にその目に『Return of the primordial System Start』と表示され、一気に美緒の懐に飛び込もうとする。だが、美緒はそれを『月光零式』を展開しながらいなすと、美緒の目にも『Return of the primordial System Start』と表示されて、2人は極超音速下に入りながらも、白昼夢は『エーレンベルグ』、美緒は『ソドム』を撃ち合う。陽電子砲が直撃した海面はその場所を中心に数百メートルが干上がり、戦闘機や戦艦は跡形もなく消滅する。そして互いに陽電子砲の使用限界が近付くと、それらを収納し、『月光』と『月光零式』で斬り合い、互いに切り傷を作る。

その時、通信が入る。

『美緒!!聞こえるか!?!』

通信を入れてきたのは一夏だった。だが、今美緒は白昼夢と戦闘中であり、美緒は一

夏を怒鳴り付ける。

「何?! こつちは忙しいから後にして!」

『今から『亡国機業』ファントム・タスク本拠地を殲滅する!』

「……本気なの? 一夏」

『ああ! だから許可をくれ!』

「……………許可をします。だから……死なないで」

『ああ! 行って来る!』

そう言うと、一夏は通信を切った。

「(一夏……、がんばれ)」

美緒は心の中でそう応援すると、白昼夢さだめに突撃をする。白昼夢さだめも、美緒に突撃をしなから、左腕に『オクスタンガトリングⅡ』を出現させて放つ。

美緒はそれを瞬時に右にスライドして避け、懐に入ると右腕で『オクスタンガトリングⅡ』を弾き飛ばし、そのまま右腕を返す様に、白昼夢さだめの左腕を切断した。

「ちいっ!」

「貰った!」

美緒と白昼夢さだめは元から痛覚を切っているので、切断されていても気にせず戦闘を行える。

白昼夢との戦いの後から数時間、美緒はその場から動かずにいた。

未だにダメージが多少残っている為に回復を図っていたのだが、それは『アルテミス』のアラートで終わりを告げた。

——警告！9時の方向から未確認機体接近！

美緒が振り返ると、そこには1機のISがいた。そのISを見た美緒は、苦虫を噛み潰した様な表情をする。

「……スコール」

「久しぶりと言うべきかしら？△——」

「どうやって……『終焉』を奪取したんだか……」

「あら？挨拶は無視なのね？まあいいわ、簡単なことよ？単独で奪取したんだから」

「単独!?訓練された人間でも不可能なほどのセキュリティを高めたのに!」

「ふふ♪そうねだけど訓練されてはいるけど人間ではなかったら?」

美緒はスコールの言葉を聞いて解った否、解ってしまった。

『生命戦闘体』……!?!」

「その通り、私は90年前に創られた、初期の『生命戦闘体』No.Ω—0そして、

『亡国機業』の創始者。もつとも、『亡国機業』フアントム・タスクは既に滅んだけど」

スコールは既に興味が無い様に言うが、美緒は驚きの顔をした後に、憎しみと殺気を溢れ出す。

「でもそのおかげで私の計画は失敗したわ。だから今、私自身が動き出した」

「計画……?」

「今となつてはどうでもいいわ、さあ? 始めましょう?」

スコールはそう言つて、腰部についでいた大剣『月光壺式』を抜いて、その刀身にエネルギーを帯びさせる。そして美緒も、両腕に『月光零式』を展開して睨み合う。

その時、スコールに荷電粒子砲が放たれ、美緒との距離が更に広がる。

「美緒!! 無事か!」

そう言つて現れたのが一夏であつた。一夏の姿を見たスコールは嗤つた。

「くくつあははははは! これで役者が揃つたと言うわけね! さあ……逝きましょう!」

一夏、美緒、スコールは其々が『連続瞬時加速』アクセルト・イグニッション・ブーストを使い、激突し、最後の戦いが始まつたのだつた。

それがのちに別れを強制するとも知らずに。

終焉との対決、少女の最後

一夏、美緒、スコールが戦い始めて既に2時間が経っていた。

陽電子砲、荷電粒子砲が飛び交い、一夏と美緒の『雪月』、『ツヌグイ』、『シャッテン』、『ナハト』は既にスコールによって全て破壊されており。残った武装で戦っている一夏と美緒は不利に陥っていた。それを嘲笑うかのように、スコールは背部に搭載されている、2門の3連装砲をハイレーザーの『エクスエムII』で一夏を狙うが、一夏は『雪羅』をシールドモードに切り替えて防ぐ。

美緒は『連続瞬時加速』アクセレート・イクニッション・ブーストを使って、スコールの懐に飛び込んで斬り裂こうとするが、肩部に搭載されている大型ガトリング砲『エレバス』によって弾幕が張られ、思うように近付けない。それでも美緒は被弾覚悟で懐に飛び込み、スコールの腹部に『月光零式』を突き刺した、と思ったが既にスコールの姿は無く、ハイパーセンサーを使って探すとスコールは、美緒がいる地点から20kmも離れた地点に居る事が解った。

直ぐに一夏と美緒は『連続瞬時加速』アクセレート・イクニッション・ブーストを使い、スコールに接近する。が、スコールは両前腕部に搭載されている3連装式高熱線砲『フレイム』、背部に搭載されている3連装式荷電粒子砲『グレイムII』に切り替えて、一夏と美緒に対して弾幕を張る。

「美緒！先に突撃する！ユキアネサー！」

——『しんられつふう神羅烈風』を起動！前方にエネルギーシールドを展開します！

一夏の前に不可視のエネルギーシールドが展開され、突撃する。美緒は一夏を援護する様に荷電粒子砲をスコールに向けて放つが、スコールはそれを容易く避け、一夏に『フレイム』、『エクスエムⅡ』、『エレバス』を放つ。

エネルギーシールドは、3種の攻撃を受けるが最初は無傷だったものの、徐々にスコールに近付くにつれて輝が入る。そして一夏がスコールの目前に到達した瞬間、エネルギーシールドが砕け、その場で大爆発が起き、スコールと一夏にダメージを与える。

美緒はそれを好機だと捉えて『アクセラレイト・イグニッション・ブースト連続瞬時加速』を使い、接近しようとするが、爆煙の中から美緒に向かって荷電粒子砲が放たれる。美緒はそれを避け、荷電粒子砲で爆煙が晴れると、スコールは一夏の首を掴んでいた。一夏は首を掴んでいる腕を、『雪羅』のブレードモードで斬り落とそうとするがスコールはそれを読んでいたかのように、一夏を海面へと投げる。

美緒は『アクセラレイト・イグニッション・ブースト連続瞬時加速』で間合いを詰め、スコールは『月光壺式』で切り払おうとするが、美緒は直前でスコールの背後に回り、左足のスラストに切り込みを入れるものの、すぐにスコールの姿が消え、前方20kmの地点から反応が出る。その直後に陽電子砲ボットロンが放たれ、美緒がそれを避けると、目の前にスコールがいて『月光壺式』で

腹部と左前腕部を斬られ、海面へと蹴り飛ばされる。

美緒と入れ替わりに一夏がスコールへと迫り、エネルギーブレードと『月光壺式』で切り結ぶ。だが、スコールは『エレバス』を一夏に向けて零距离で放つ、それを一夏は後退の『イグニッション・ブースト瞬時加速』で回避に成功し、『アクセルート・イグニッション・ブースト連続瞬時加速』で近付いてきた美緒に合わせる様に左からエネルギーブレードでスコールを攻め、美緒は右側からスコールを攻めるが、スコールは『月光壺式』を逆手に持ち、一夏と美緒を纏めて弾き飛ばす。

弾き飛ばされた2人は、互いに交差する機動を取り、スコールに接近、スコールも『ロレイ』、『ロンレイII』、『エレバス』で弾幕を張り、連携を崩そうとするが、スコールと同族の『アマテラス生命戦闘体』である美緒、既に人間としては規格外で異端者の一夏には意味を成さない。弾幕を張ることに意味がないと判断したスコールは、『月光壺式』を構えてその超加速を利用しての音速衝撃波で一夏と美緒の体勢を崩し、前腕部の3連装式荷電粒子砲『グレイム』で追撃を掛け、一夏と美緒の距離を離す。

『言峰……。聞こえる?』

『はい、聞こえておりますよ。美緒様』

『あの子達は順調に育ってる?』

美緒は言峰と通信をしつつも、スコールの猛攻を避け、自身も荷電粒子砲と『ソドム』を放ち、『アクセルート・イグニッション・ブースト連続瞬時加速』でスコールに接近する。

『はい……。順調に育っております』

『そう……。なら良かった』

美緒は他人から見れば痛々しいと感じるほどの哀しい笑顔を浮かべる。

『後の事は手筈通りに頼んだよ』

『……。本当に実行されるのですか？』

『うん、だってもうこれしかないからね……。本当はもつと生きて居たかったけど……』

状況的に不可能だからね』

『解りました。美緒様』

『不甲斐無い当主でごめんね』

『いえ、美緒様は十分すぎるほどに出来た当主で御座いました』

『ふふ♪そう言ってくれて嬉しいよ……。今まで有難う』

美緒はそう言つて、言峰との通信を切る。

「さあ『アルテミス』！ 私達の最後！ 華々しく飾ろう！」

———ワンオフ・アビリティ 単一仕様能力 『武神降臨』ぶしんこうりん 起動！

『アルテミス』から金と銀の粒子が溢れ、『連続瞬時加速』アクセレート・イグニッション・ブーストを使用していないにも

拘らずそれ以上の速度を出し、スコールに迫る。突然の美緒の出現にスコールは驚き、

『月光壺式』を振るうが、美緒はそれを避け『月光零式』を展開、スコールの左前腕と腹

部を切り付ける。

それによつて『終焉』の左前腕部と腹部の装甲がほんの少し抉れるが、背後から一夏が荷電粒子砲を叩き込み、スコールの体勢を崩す。体勢を立て直す為にスコールはあの超加速を使い、一夏と美緒から離れるが何時の間にか美緒が目の前に居て海面へと蹴り飛ばす。

——『武神降臨』使用限界まで後5分

「(なら5分後にタイマーをセット! 『武神降臨』終了と同時に起動!)」

——了解しました。

『アルテミス』からの報告を聞いた美緒はそう指示をして、スコールと再度激突する。一夏は美緒の様子がおかしい事に気付くも、スコールを倒すことが最優先だと判断して、荷電粒子砲を放った。

一夏が美緒の様子がおかしいと感じたのも無理はなかった、何故ならば『アルテミス』に搭載している超小型核融合炉が臨界点を超え、内部で融解が始まり、その影響を自身で受けているからだ。それでも美緒はスコールに『月光零式』で切り結び、脚撃用の『月光』でダメージを徐々に与えていく。

——『武神降臨』使用限界まで後2分

『アルテミス』の報告を聞いた美緒は心の中でニヤリと笑い、わざと大振りの攻撃を仕掛

ける。それを隙だと判断したスコールは、『月光壺式』で美緒の腹部を貫いた。
「がはっ!!」

美緒は腹部を刺された事により、大量の吐血をする。

「美緒?! 貴様あああつ!!」

一夏はそれを見て激情に身を任せてスコールに突撃しようとするが、そんな一夏に
プライベート・チャンネル
『個人間秘匿通信』が入る。

「ねえ……。聞こえる?」

『美緒?! 今助けるからな!!』

『ううん、このまま聴いて?』

美緒はそう言いつつも、スコールの両腕をしつかりと握り締め逃がさないようにする。
る。

『私はね……。普通の生活に憧れてた……。一夏が居て、箒ちゃんが居て、鈴ちゃんが居て、友達や皆と一緒に学校生活を送る日々をね……。』

スコールは『グレイムII』で美緒を離そうとするが、自身と距離がかなり近い為、発射できずに居た。

『IS学園に入って……。そこに一夏が居たことには吃驚したけど、そこでも新しい友達が増えて嬉しかった。この時間がずっと続けば良いのにも思ったよ。』

でもね、この戦争が終わればまた、あの日々が帰ってくるとも思ったけど……。そうも行かないみたいだね』

——『武神降臨』使用限界まで後1分

『アルテミス』は報告と共に、この通信を世界に繋げる。本来ならばそれは出来ないはずだったが、何故この時何故出来たのかは数年後の未来でもわからなかった。

『ねえ、一夏……。私はずっと……。一夏の事好きだよ……。でも、私のことは忘れて幸せになつてね』

『おい……。何を言ってるんだ？美緒!!やめろ！今すぐやめるんだ!!』

『一夏、箒ちゃん、鈴ちゃん、セシリイ、シャルロットちゃん、ラウラ、美紗緒、千冬お姉ちゃん、束お姉ちゃん……。皆、ありがとう!』

美緒はそう言つて笑顔になると同時に『アルテミス』が放つ光と共に何も残さずに消えた。

少女の悲願、次世代移行

「嘘……だろ……？」

一夏は未だに収まらない閃光を見ながらそう呟いた。

「ユキアネサ!!美緒の!美緒の生存確認を!!」

——…:KIA^{戦死}です。我が主一夏^{マイ・マスター}

ユキアネサの報告を聞いた一夏は声もなく泣いた、ただ泣いていた。一夏の脳裏には美緒との思い出が再生される。

美緒と遊んでいた頃、美緒や友と馬鹿騒ぎした時等を思い出し、涙を流した。だが、閃光が収まると、一夏は目を見開く。

「くっ……やつてくれたわね……あの小娘……」

そう、まだスコールは生きていた。だが、それは無傷や無事と言うほどには程遠かった。

背部の武装は全て溶け落ち、全体的に装甲は所々碎け、衝撃によるものなのか吹き飛んでいる箇所もあった。さらに右腕、左足の装甲が消えており、右足は膝まで装甲が無くなっていった。

「だけどこれで……ん？」

悪態を吐いていたスコールだが、一夏が何やらおかしい事に気付き、視線を向ける。

「……さねえ、許さねえ許さねえ許さねえ許さねえ許さねえ許さねえ許さねえ!!許せるわけがねえよなあああ!!!」

呪詛を吐く一夏は殺気、敵意、憎しみ、怒気様々な負の感情を剥き出しにしてスコールを睨む。同様の感情が向けられる事があり、慣れていたスコールにゾクリと悪寒が走り、それに驚愕する。

「(私がこの程度の殺気に悪寒!?ふざけないで!!!)」

スコールが一夏に『ロンレイ』を放とうとした瞬間、『白式改』から眩い閃光が放たれ、スコールの目を潰した。



そこは月が照らす夜の草原だった、満天とも言える星空が辺りを照らしているなか、一夏は当てもなく歩き始める。

そして暫くすると、湖があり、そこに行くと一人の少女が一夏を見ていた。

「待ってたよ……一夏」

「美緒……」

その少女は死んだはずの美緒であった。

だがその姿は少し薄れており、実体感も薄れていた。

「ここに來たつてことは一夏は泣いてるんだね」

美緒はそつと一夏の頬に手を添える。だが、美緒が触れた頬には感触がなく、実体が完全にはないのだと一夏は強く感じた。

「美緒……、俺は」

「いけないで、あれは私が望んだことだから」

「俺はお前を守れなかった!!」

一夏怒鳴り、美緒を抱きしめようとするが、触れることが出来ずに、拳を握り締めた。俺にもつと力があれば……美緒、お前を守ることが出来たのに……!!」

一夏は崩れ落ちて拳を地面に叩き付ける。その目から涙が零れ、拳と地面を濡らす。「死なせることもなかった!!ちくしょう!!」

「一夏……私の方を向いて?」

一夏は美緒に言われ、顔を上げると、美緒は一夏の視線に合わせる様にしゃがむ。

「私からの最後のプレゼントを受け取って?」

「美緒……?」

「私の想いが一夏の力になるから……」

美緒は一夏に唇を合わせる、その時一夏は美緒の唇に感触がある様な気がした。そして一夏と美緒の唇を中心に閃光が走り始める。

「だからお願い……スコールを……倒して……『生命戦闘体』^{アマテラス}の呪縛をここで解き放つて……」

美緒の言葉が終わると、閃光は全てを覆い、一夏を現実の世界へと戻した。その際に一夏は美緒の言葉をうつすらと聴いた。

『一夏……ずっと愛してるから……だから幸せにね』



スコールが閃光に目を晦ませている間に、『白式改』が放った閃光は光の柱となっていた。

スコールは『フレイム』をその柱に放つ、だが、高熱線砲は柱に当たると弾かれる。予想外の事にスコールは驚くも今度は『ロンレイ』、『ロンレイII』を放つが、それも『フレイム』同様に弾かれる。

そしてスコールは最終手段だと思い、胸部の装甲を開き、ガンマ線レーザー砲『ジェ

ネシス』を放とうと構える。だが、構えた直後に光の柱に異変が起こる。

光の柱は急速にその形を変え、球体状になり、『白式改』が放った閃光よりも強い光量の閃光が放たれると共に、轟音が鳴り響いた。



一夏が目を開けると、そこは先程いた世界ではなく、現実の世界だった。

——『ヒューチャー・ジェネレーションズ次世代移行』が完了しました。以降分裂したコア人格が覚醒します。

ユキアネサの音声ではない声が聞こえ、一夏は自身を見ると、『白式改』の面影は殆どなく。全く新しい機体と思えるほどに様変わりしていた。

『アルテミス』とほぼ同型のアームガード、『カインホクキエツア』と同型と思えるほどに酷似した胴部と肩部の装甲、だが、その肩部の装甲には2段構造になっている謎の装置、細身でありながら強固そうなレッグアーマー、『白式改』とほぼ同じ機械翼、腰部には追加ブースターが左右にあり、口元から頬まで伸び、骨導から頭頂部とほぼ同じ高さまで伸びた、ギアレシーバーと顔面上部を覆い隠すヘッドギアとバイザーが装着されていた。

——以降『白式改』から『ホワイト・グリント白い閃光』に名称が変更されます。

『白い閃光』……」

「か！我が主一夏！」

「ユキアネサ！」

「漸く返事をしていただきましたね!? 我が主一夏！突然体から光が出たと思つたら、我が主一夏からは何も返事が来ないし！心配したんですからね!」

ユキアネサからの怒涛の文句を一夏は黙って聴いていると、もう二度と聞けないと思つていた声が聞こえた。

「ユキアネサ、そこまでしておかないと一夏が困るよ？」

「えええ!? 誰ですか!? 貴女は!!」

「美緒!? 美緒なのか!」

「嘘です! だって美緒様は先程『アルテミス』の自爆によつて……」

「正確に言うくと、オリジナルの記憶と人格をコピーしただけなんだけどね。」

まあ何で私が発現したのかというところ『白式改』が『次世代移行』をしたか

らなんだよね。

それで一夏? 私に新しい名前をつけてくれるよね? 名無しのままじゃ不便だ

よ?

それと、『白い閃光』の武装データとか見る?

慌てふためく一夏とユキアネサを無視した、もう一つのコア人格は、早く自身に名前をつけてくれとせがむ。だが、一夏は直ぐに答える。

「美緒……それしか俺には思いつかねえよ。それとこいつの事は何故か解るんだ、だから大丈夫だ」

——わかりました、名称を『美緒』に決定します。主マスター

「美緒、その主マスター っつてのはやめてくれないか？美緒が言うのと、俺があいつらみたいでいやだ」

——最初はしょうがないよ。けどもう主マスター っつて呼ばないよだからこれからも宜しくね？

「ああ、宜しく頼む！」

——もう！我が主マイ・マスター一夏！それに美緒も！2人で良い雰囲気を作らないでください！

ユキアネサが注意をすると一夏と美緒は互いに笑い、そして直ぐに思考を切り替える。

「決着をつけるぞ……ユキアネサ、美緒」

——もちろんです！我が主マイ・マスター一夏！

——オリジナルの悲願！ここで達成させてもらおうよ！

一夏は新しい大型ビームブレード『月光零式改』を両腕に展開して、スコールに接近。スコールもまた、『月光壺式』を二振り持ち、一夏に接近し、両者は激突した。

終焉の終わり、手紙

激突した一夏とスコールは互いに離れ、一夏は3連装式超高熱線砲『グレイズ』、スコールは『フレイム』を構えて極超音速下に突入しながらも熱線砲、を互いに撃ち合う。『短距離加速』を使い、一夏はスコールの背後に回り『無反動急旋回』をし、そのまま超高熱線砲を放つ。

だが、スコールは横に『短距離加速』をして避け、『無反動急旋回』をすると左腕の『口ンレイ』で一夏を狙うが、『連続瞬時加速』を使って姿を掻き消す。姿を消した一夏をハイパーセンサーで探すが、いたるところに反応が出て、スコールを混乱させる。左に気配を感じたスコールは、『ロンレイ』をその方向に放つ。だが、そこには一夏はいなかった、外したと思つた瞬間、スコールの右肩に衝撃が走り、吹き飛ばされる。

——一夏！『ツヌグイ』借りるよ！

「わかった！」

美緒の言葉に一夏が答えると、『白い閃光』から30基のビット『ツヌグイ』が射出され、6基の『ツヌグイ』が斬撃形態になり先行する様に速度を速め、残り24基の『ツヌグイ』は一夏の近くにいなながら荷電粒子砲を放つ。スコールはそれらを避けるが、後

退が出来ずに一夏の接近を許してしまう。

『月光零式改』と脚撃用の大型ビームブレード『月光零式』を展開した一夏は、スコールに接近してまずは左脚で蹴りを放つ。スコールは右腕の『月光零式』で止めようとするが、一夏は当たる直前に左脚部のブースターを噴かせ、威力を上げる。

スコールの右腕には『月光零式』が握られていたが、角度が違い、『月光零式』には当たらずにそのまま右腕を脚撃で斬り取り、血が噴出す。スコールは舌打ちをすると、左腕の『ロンレイ』を構えるが、美緒が繰る『ツヌグイ』によって左腕の武装が貫かれ、そのまま爆散し、左腕に大ダメージを受ける。

——我が主マイ・マスター一夏！美緒！『アサルト・アーマー』使用します！

ユキアネサの宣言と共に美緒は『ツヌグイ』を機械翼に収納、一夏は更にスコールに近付き、両腕を掴む。それと同時に一夏の周りに白い粒子が集まり、徐々にその粒子が光を放ち始める。

スコールは危険だと判断して一夏の拘束を振りほどこうとするが、体中が傷だらけでかなりの大ダメージを負っている為、振りほどくことが出来なかった。そして球体状に光が集まり、急速にその球体がぶれるが、一夏が手を離すと轟音、閃光と共に大爆発を起す。

この時、一夏はバイザーによって視覚保護を受けていた為、『アサルト・アーマー』の

光量によって一定時間、目が見えなくなると言うことはなかった。そして『アサルト・アーマー』が起こした光が収まると、『終焉』の装甲は背部以外なくなり、スコールの四肢も、一夏の脚撃によるものを除けば吹き飛んでいた。

「がふつがはつ……潮時のようね……」

「ああ、終わりだなスコール」

「こんな様になるとは思わなかったわ……だけど覚えておきなさい」

スコールが何かを言おうとした時『終焉』の残った装甲から紫電が走る。

「貴方が起こしたこの結果で……人類が壊死するのだと……い！」

「ならば俺……いや、俺達が見届けよう、お前を倒した俺の義務だ」

一夏の言葉を聞いて、スコールは呆気にとられるが可笑しそうに笑う。

「ふふふ……。なら、見届けなさい！織斑一夏!!この世界の未来に答えがあるのか！」

スコールはそう言つて、力尽きたように海へと落ち、それと同時に光が発し、消滅した。



スコールとの対決から3時間後に一夏は『レクイエム』に戻った。そこで待っていた

のは千冬、箒、鈴音、美紗緒、簪、セシリア、シャルロット、ラウラだった。

だが、千冬以外の皆の表情は暗く、一夏に何か聞きたそうであった。

「皆どうしたんだ？こんなところで」

「織斑、その姿はどうした？」

千冬は皆が聞き辛いことはあえて聞かずに、まず一夏の姿が変わったことを聞いた。

「それも含めて全て話すから他の場所に行かないか？」

「ならブリーフィングルームに行くとしよう。そこなら大丈夫だろう」

千冬の意見にその場の全員が賛成し、ブリーフィングルームに向かう。

そして、全員がブリーフィングルームに入り、腰を掛けると、千冬が口を開いた。

「それでは織斑、あのISはなんだ？『白式改』はどうした？」

「ああ、あれは機体名『白い閃光』ホワイト・グリント、『白式改』が『次世代移行』ヒューチャー・ジェネレーションズをした姿だ」

一夏の言葉に全員が疑問に思う。『次世代移行』ヒューチャー・ジェネレーションズなど聞いたことがないからだ。

皆が驚く中、一夏は言葉を続ける。

『次世代移行』ヒューチャー・ジェネレーションズをする条件は、コアの人格が覚醒していること、『第三形態移行』サード・シフトを

していることらしい。詳しい事は俺よりもユキアネサの方が知ってるから、ユキアネサ

に聞いてくれ」

「わかった。なら、ユキアネサ。詳細の説明をしろ」

——はい、最低条件となるのは我が主一夏が先程説明したとおりです。次に説明することこそが、『次世代移行』ヒューチャー・ジェネレーションズの絶対条件です。

一つ、コアが二つ搭載されている事。

一つ、二つのコアは分裂した物であること。

一つ、多数のI/Sを撃破すること。

一つ、『次世代移行』ヒューチャー・ジェネレーションズをするのは第四世代機から。

以上が『次世代移行』ヒューチャー・ジェネレーションズをする絶対条件です

「そうか、わかった」

ユキアネサの説明を聞いた千冬は、少し考え込む仕草をする。その間にユキアネサ、美緒は一夏に『プライベート・チャンネル』を繋げる。

——よくも短時間で、あんな嘘を考え付く物だね？ユキアネサ

——当然です！我が主一夏に余計な負担を強いる必要性が、全くありませんから

『まあ、今回美緒が出るわけにはいかないからな。この後に聞かれるし』

——ごめんね？一夏

『気にすることはないぞ？な？ユキアネサ』

——ええ、だからこれからも宜しくお願いしますね？美緒

「なら、次の質問だ。いいな？織斑」

「ああ、次の質問するのは美緒に関することだろ？」

千冬の質問の意図に気付いていた一夏は、聞き返し、千冬を驚かせる。だが、それと同時に他の全員の表情が暗くなる。

「皆が知っている通り、美緒は死んだ。俺や皆を生かす為に」

一夏の言葉にシャルロット、鈴音はぐすつと涙ぐむ。

「詳しい事はわからないけど、後悔が無い様に見えたなそれが見えるほどの笑顔で……な」

暗かった雰囲気更に暗くなり、泣き出す者は居なかったが、すすり泣く音が増えた。それを聞いた一夏は、ブリーフィングルームを出る。

ブリーフィングルームの扉の近くで言峰が幾つかの封筒を持って待っていた。

「一夏様、これを」

言峰は、一夏に白い封筒を渡す。受け取った一夏は、言峰を見る。

「これは？」

「美緒様からの……、といえはお分かりになりますでしょうか？」

「!!有難う御座います！」

一夏は受け取った封筒を大事に抱えながら自室へと戻った。

「これで良かったので御座いますね……美緒様」

言峰の呟きは誰にも聞こえなかった。



自室に戻った一夏は、鍵を閉めて封筒から一通の手紙を取り出し、読む。

『一夏へ』

この手紙を読んでもって事は、私がおうこの世に居ないって事だね？

私の予想が正しければ、私の記憶と人格をコピーしたコア人格が覚醒してる筈だから、仲良くね？

さてと、前書きはこの位にして、本題に入るよ。

一夏は私の死に責任を感じてると思うけど、前から私は死ぬつもりだった。理由は言わないけど、私の夢が関係してるのは確かだよ。

だからってコア人格に聞いても駄目だよ？乙女の秘密なんだからね？

まあ、元々教えるつもりもないからコア人格の記憶にも移してないけどね。

多分私が死ぬ直前に言ったと思うけど、私を忘れて幸せに生きてね？

じゃないと恨んで枕元に化けて出てくるからね♪

長くなるといけないからここまでにしておくね。

それじゃ、一夏さよなら………愛してるよ

貴方を愛する美緒より』

手紙を読み終えた一夏の目からポタツポタツと涙が落ちる。

——ユキアネサ

——わかってますよ。美緒

美緒とユキアネサが互いを呼ぶと、一夏からは何も聞こえなくなる。泣き出した一夏を氣遣って、通信をシャットダウンしたのだろう、一夏にとってそれは有難かった。

そして一夏は泣いた。今まで溜めてきた物を吐き出すようにただ泣き叫んだ。



この日から3日後、世界はICHN陣営に和平を申し込み、戦争は終結した。全ての人々はこの戦争を『第三次世界大戦』『IS戦争』と呼んだ。

大戦エピソード

最悪の戦争は終わり、荒廃した世界が残った。

IS戦争……。世界の欺瞞に満ちた安定は、失われつつあった……。

私はそれを日本のチャンスだと考えていた……。

そして、この戦乱から織斑一夏の名は、ブリュンヒルデに匹敵するIS戦力に認知されるようになる。

彼女は責めるだろうが私は後悔していない。脇役とはいえあの男の物語の目撃者となれたのだから……。

彼女達はあの男に休息を求め、私はそれを了承した。

甘かった……。と言えばそれまでだが、都合の良い恐怖は世界の常であるというのに……。

彼女達は責めるだろうが私は後悔していない。あの男は間違いなく英雄だった……。

これ以上はやめておこうそれは私が語る物語ではない……。それに相応しい語り部がいるのだから……。

当時内閣

総理大臣

彼は……護るべき人達と故郷の為に戦い続けてる。

本当に強い人……。昔もそして今も。

勝手な理由で、沢山の人が亡くなつて。

彼が居なければまだ続いたのかもしれない。

世界が彼を求めていたのかもしれない。

闘う事で生きるのなら、受け入れなければいけない。

それは解っているのだけれど、私たちを護ってくれている。

やつぱり、すごいな……。

ねえ……。聞こえる？ ありがとう！

とある少女の手記を一部抜粋

エンディング

それから……

和平から幾日が経ったある日、一夏は千冬と一緒に居た。

「どう言う事だ一夏！」

「もう変えるつもりはないよ。千冬姉」

一夏は千冬にそう言うのと背を向ける。一夏は千冬に日本を出ると言ったのだ、それを千冬は止めさせようと説得をするが、一夏は一向にその意思はないと伝える。

それでも一夏を千冬は止めようとする。

「行くな！一夏!!」

「悪いな……千冬姉」

一夏はそう言つて、『ホワイト・プリン白い閃光』を纏い、浮かび上がる。

「ユキアネサ、座標は？」

——はい、こちらです

千冬からは見えないが、一夏の目にはその座標が見えていた。

「必ず戻ってくるから、待っていてくれよ千冬姉」

「一夏……」

「じゃあ、行つて来る」

『白い閃光』の肩の背部側下部の装甲が、横にスライドして上部の装甲に接続され、三角形のカバーハッチが開き、ブースターノズルが迫り出し。腰部にある追加ブースターのカバーハッチが開き、背部のブースターが点火すると、腰部の追加ブースターにも点火し、徐々に高度と速度が上がる。

そして、一定の高度と速度になった瞬間、辺りに轟音を響かせ、超音速飛行に移り衝撃波を起こしながら日本を離れた。

のちに一夏は両陣営から『英雄』と呼ばれる事になる。

旧ICHN陣営からは『白き英雄』、アメリカ等の敵対していた国からは『災厄の英雄』もしくは『異端の英雄』と呼ばれ、『プリュンヒルデ』よりも有名になる。

同時刻に一人の少女が織斑一夏と共に行方不明になるが、それはまた別のお話。



あれから5年後、一夏は違法IS研究所にいた。終戦してからも、こういった違法なIS研究が数多くある為、一夏はそれを潰して行つた。

「こちら『白い閃光』、直ちに投降せよ。さもなければ実力で排除する」
「なっ?! 『災厄の英雄』だ?!? だが! ここに勝てるわけがない!」

一夏の警告に叫んでいた男性の背後から、巨大とも言える大型のレーザーカノンを持った、『ラファール・リヴアイヴ』が現れ、一夏に狙いを定め、白い粒子を纏ったレーザーが収束する。

「火力だけでは何もできん、遅すぎるこれは……落ちろ!」

一夏は言い始める直前に『月光零式改』を展開、そして言い終わる直前にレーザーカノンと『ラファール・リヴアイヴ』を両断する。

その後に、一夏は『アサルト・アーマー』を使って、その違法研究所を消滅させた。

『こちら『白い閃光』、任務を終えた。帰還する』

『了解よ。早く戻ってきて』

一夏の報告に戻って来る様に言った女性は、一夏の妻であった。

『ああ、すぐに戻る』

一夏はそう言って、ブースターを噴かした。



更に15年後、一夏は懐かしのとある場所に戻ってきていた。

「懐かしいな」

——本当に懐かしいね、一夏

15年前からの相棒のコア人格、美緒が一夏の眩きに答える。

——この場所で私達が出会ったんですよね？マイ・マスタ我が主一夏

「そうだな、ユキアネサ」

そして一夏に話しかけたのも15年前からの相棒のコア人格、ユキアネサだった。一夏達の後ろから人影が3人近づいてくる。その内の2人は、15か16ぐらいの少年と少女で、もう一人は一夏より背は低いものの、かなりの黒髪美人であった。

「父さん、僕達が通うのはここ？」

「ああ、6年前に復校した『IS学園』だ」

そう言つて、一夏は15年前に解散していたIS学園を見る。その校舎は昔と全く変わりがなく、懐かしさを誘う。

だが、少年は不安げな顔をする。

「けど父さん。僕にIS適正があるわけないって」

少年が言うのも無理はない、今現在もISは一夏を除いた男性は皆動かすことができないのだから。

だが、一夏はそれを否定する。

「いや、夏音かのんお前なら動かせるはずだ」

「何処からそんな自信がでてくるのさ……父さん」

「あはは……まあ、お父さんの自信は兎も角、私はここに通うんだよね？」

一夏と夏音かのんと呼ばれた少年の会話に入り込んだのは母親に似た黒髪を持った少女だった。

「鈴夏すずか、お父さんの自信は兎も角ってなあ……」

一夏は落ち込んだ様子で言うが、大して気にしてなさそうに言い、IS学園内に入る。すると、偶然にも、『ラファール・リヴァイヴ』が運搬されている最中であった。それを見て閃いた様に、『ラファール・リヴァイヴ』を運搬させている車を止める。

「何か御用ですか？」

「ああ、今運搬してるのは、『ラファール・リヴァイヴ』だろ？それをこいつに触れさせて欲しいんだ」

一夏の言葉に少し疑問を持つが、そこは『白き英雄』と呼ばれる一夏が頼むのだからすぐに許可を出した。

「さあ夏音かのん、触れてみる」

「う、うん……」

一夏の言葉に夏音かのんは頷いて触れる。すると、夏音かのんの頭に甲高い金属音が響き、膨大な情報インフォメーションが意識に入り込み、夏音かのんはI・Sアイ・エスを装着装着した。

一夏とその妻の黒髪美人以外の全員が驚く中、一夏はこう言った。

「おめでとう夏音かのん、今日からお前は史上二人目の男性I・Sアイ・エス装着者だ」

夏音かのんの耳には、父親である一夏の言葉がこびり付く様に残った。



とある地下研究所に、生体ポッドが一つあった。その中にまるで胎児の様に、丸くなつた少女がいた。

アラート警報と共に、生体ポッドに満ちていた液体が抜かれる。それと同時に丸くなつていた少女は自然とその中に立つ様に、姿勢を直し、完全に液体が抜かれるのと同時に生体ポッドのガラス部分を砕いて外に出た。

「認識……認識……各部異常は見られず……『生命戦闘体』No. Δ-111X 起動を確認……」

言い終えると同時に少女の目が開く。その目は右目が銀、左目が蒼ブルーの虹彩異色症オッドアイだつた。

その少女は誰もいないのにこりと笑顔を作る。

「やっと会えるんだね……お父様」

少女はそう呟くと歩いて生体ポッドがあつた部屋を出た。